岩波文庫

2663—2666

日常生活に於ける精神病理

フロイド著
丸井清泰譯

岩波書店

岩波文庫

2663—2666

日常生活に於ける精神病理

フロイド著
丸井清泰譯

岩波書店

譯者序文

フロイド教授（Sigmund Freud, 1856—1939）の『日常生活に於ける精神病理』（Zur Psychopathologie des Alltagslebens）は最初一九〇四年に公にされてから一九二四年に至る迄の二十年間に版を重ねる事十回に及び、ついで全集第四卷に收められたものであり、同教授の著書中最も弘布されたものと考へられてゐる。尙ほ文明國を以て自ら任じ人も許す國々に於て、本書の飜譯書を見ざるところは稀である。卽ち本書は今まで露語、波蘭語、英語、和蘭語、西班牙語、佛語、匈牙利語等に飜譯され、我國にはアルスの精神分析大系第四卷拙譯『日常生活の異常心理』及び大槻憲二氏譯『日常生活の精神分析』の二書があつた。この度フロイド教授の逝去が機縁となり、この偉大なる神經症學者、思索家、心理學者の學勳を記念すべく岩波書店出版部よりの申出でにより拙譯『日常生活に於ける精神病理』が岩波文庫の一篇として上梓される事になり、有益なるフロイドの此の著が更に廣い範圍に讀者を見出し得るに至つた事は我國學界、讀書界の爲に誠に幸と云はねばならない。

フロイド教授は本著において日常生活におこる種々の精神病理學的現象、すなはち種々の失錯

作業（Fehlleistungen）を精神分析學的研究の對象とし、一般に何等の意味もなく單に偶然に起るものとされてゐたこれら現象が、一定の明らかなる動機殊に無意識的動機によつて限定されるものなる事を明らかにし、心理學的定命論を益〻確固たる根柢の上においたのである。同教授は尙ほ本著に於て私共の失錯作業に際して作用する心的機制は、夢の形成、神經症、精神神經症の症狀形成の際に働く機制と密接なる關係があり、精神神經症や精神病に見られる精神病理學的機制は、輕度には正常人の生活にも證明せられる事を明らかにし、以て精神健康狀態と神經・精神病の領域との間に存する「ギャップ」は、一般に考へられたそれよりも遙かに狹いものである事を明らかにしたのである。

讀者は本書に蒐集されて居る多數の分析例を讀まれ、自分並びに人々が無意味、偶然の事と考へる一定の現象、何の氣なしに行ふ行爲行動に思はぬ動機——殊に場合によつては非常に內密なる不快なる又恐しい原因動機が潛んでゐる事がある事を知り、戰慄を禁じ得ないものがあるであらう。然しながら又一面に於て讀者は本書を繙く事によつて、自己及び他人を一層よく知るに至り、人間性について今迄よりも遙かに廣く深い理解に達する機會を與へられるであらう。若し夫れ人の現はす失錯作業の意味、特に極めて微妙なる症候行爲の意味をよく分析理解し得るに至つたならば、フロイド教授が本著に於て述べてゐるやうに、東洋の傳說に動物の言葉さへも聞く事

が出來たと云はれてゐるソロモン王のやうになつた氣が、自らして來るであらう。特に精神分析を習得實施せんとする人には、本著は『夢判斷』と共に一讀再讀せねばならぬ寶典であると云はねばならぬのであつて、讀者は本著を讀む間に、知らず識らず精神分析の技術の一端を領得し、精神分析の要領の一部を會得し得る事は必然である。

終りに原著の佛文より成れる箇所の飜譯に際しては醫學博士早坂長一郎氏に負ふところ大であつた。此處に記して同氏に對し深厚なる謝意を表する次第である。尙ほ本書の上梓に際し、原稿の整理、字句の修正、並に校正に對して援助の勞を吝まざりし余が內助者茂子に對し此處に深甚なる敬意を表するものである。

昭和十五年六月

東北帝大醫學部　精神病學教室に於て　譯　者　識

目次

日常生活に於ける精神病理

今や外氣は妖怪に滿ち滿ちて
何人もこれを避くるに由なし。
（ファウスト）

第一章　固有名の忘却

西紀一八九八年度の精神病學神經病學月報誌上に、私は『忘却の心的機制』なる題下に一小論文を公にしたが、私は此處に今一度その內容を述べこれからの論述の出發點にしよう。該論文に於て私は私の自己觀察から得た意義ある一例に就いて固有名の一時的忘却の場合を精神分析にかけ、この日常起り勝ちであり、實際上あまり重要でない心的官能――記憶――の罷業の箇々の出來事はこの現象に對する一般の評價を遙かに超越する說明を許すものであるといふ結論に到達したのであつた。

心理學者に對して「私共が確かに知つてゐる筈の固有名が思ひ泛ばない事が屢〻であるのは、一體どうなるのか」とたづねるならば、彼等は確かに固有名といふものは他の記憶の內容よりも忘却され易いものであると答へるだけに滿足してゐるに違ひない。彼等は固有名の忘れられ易い事に就いてのまことしやかな理由を色々とあげるであらうが、しかもこの過程の他の限定條件を假定しないであらう。

私がこの固有名の一時的忘却の現象を詳細に硏究する發端となつたものは或る一定の特徵の觀

察であり、これは凡ての場合に見られるものではないが、一定の場合には十分明らかに認識し得るものである。かくの如き場合には單にその名が忘却されるだけではなく、あやまり追想されるのである。忘れられた名を思ひ出さうと努力しつつある人に他の名——代償名——が意識にあらはれ、而かもこれは本當の名でない事が直ぐに判るのであるが、それでも非常に頑强に繰返してあらはれ來るのである。求められる名の再生過程は謂はば移動され、他の本當でない代償名に向つて進んだ事になる譯である。其處で私の假定はこの移動が出鱈目に起るものではなく、合法的合理的な道程を保つて起るものであるといふ事にあるのである。換言すれば私は代償名と求められる名との間には探し出す事の出來る關係がある事を假定するものであつて、私はこの關係を實際に證明する事に成功し「名の忘却」の成行を明らかにしたいと思ふのである。

西紀一八九八年に私が分析のために選んだ實例は Orvieto の大寺院に於て『窮極の物』("Letzte Dinge")（譯者註—四窮極物、死、世界の審判、天國、地獄）といふ大壁畫を創作した名畫家の名であつて、私はこれを思ひ出さうとして、どうしても思ひ出す事が出來なかつたのであつた。求められたる名即ちシニョレリ Signorelli の代りに他の二人の畫家の名ボッティチェリ Botticelli 及びボルトラフィオ Boltraffio ——が私の腦裏に泛び、而かも私の判斷は卽座に且つ斷然本當の名でないとしてこれを斥けたのであつた。又如何なる影響により、如何なる聯想の徑路を經て再生が斯くシニョレリよ

りボッティチェリ及びボルトラフィオに移動したかを調べて見たところ次のやうな結果になつた。

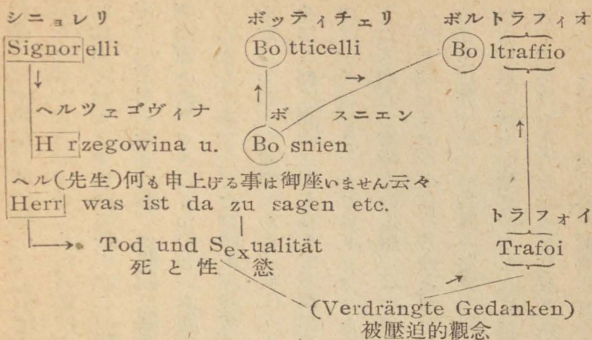
(a)シニョレリなる名が忘れられた理由は、この名そのものが親しみの薄いものであつたと云ふ事にも、又この名が持つ關係の心理學的特徴にも求むる事が出來なかつた。忘れられた名は私にとつては代償名の一つなるボッティチェリと同じ程度に親しみの深いものであり、他の一つの代償名なるボルトラフィオとは比較にならぬほど親しみの深いものであつたのであつてボルトラフィオに就いては、私は彼がマイランド Mail nd 學派(ミラン派)に屬してゐるといふこと以外に何も知らなかつたのである。この名の忘却の起つた事情も私にとつては大した事とは思はれず、ただ次に述べるやうな事があつただけの事である。私は或る外國人と一緒にダルマチエン Dalmatien のラグザ Ragusa といふ處からヘルツェゴヴィナ Herzegowina の或る停車場に向つて車に乘つて行きつつあつた。そして私共は伊太利旅行の事を話し合つて居り、私は道伴れに向つてオルヴィエトーに行つた事があつたかどうか、其處で×××筆の有名な壁畫を見たかどうかとたづねたのであつた。

(b)この名の忘却は私がこの對話の直ぐ前の話題を思ひ出した時に初めて理解され、新らしく起つた話の題目がその直前の話題によつて障礙された爲に起つた事が認識されたのである。私が道伴れに對してオルヴィエトーに行つた事があつたかと尋ねた少し前に私共はボスニエン Bosnien

及びヘルツェゴヴィナに住んでゐる土耳其人の風俗について話し合つてゐた。私はこれらの土耳其人にまじつて醫術を開業してゐる同僚から聞いたことを物語つた。それはこれら土耳其人が醫師に對して絶對の信用をおき、運命に對する完全なる服從を示すのを例とするといふ事であつた。醫師が彼等に向つて、患者は最早だめであると告げねばならぬやうになつた場合に、彼等は『先生何も申上げる事はありません(Herr, was ist da zu sagen?)私は患者が助かるものなら先生が彼を助けて下さるに違ひないと思つてゐます』と答へるといふ事であつた。――これらの文章の中に初めてシニョレリとボッティチェリ及びボルトラフィオの三語間の聯想列中に挿入され得る言葉や名即ちボスニエン、ヘルツェゴヴィナ、ヘル Bosnien, Herzegowina, Herr 等が見出されるのである。

(c)私はボスニエンに住んでゐる土耳其人の風習に關する觀念の流れの爲に次に起つて來る一つの觀念が妨げられたものと考へる。何となれば、私はその觀念の流れが未だ終らない前に私の注意をこの觀念の流れから撤回したからである。つまり私は自分の記憶の中にある第一の珍聞と近い關係にあつた第二の珍聞を語らうとした事を想ひ起すのである。これらの土耳其人は、性慾の滿足を他の凡てのもの以上に價値づけ、性的障礙のある場合には一種の絶望に陷り、而かもこの絶望は彼等が生命の危險に瀕した場合の「あきらめ」に比すべきものがあるのである。私の同僚

の扱つた一患者は彼に向つて『先生それ（性慾の滿足）が駄目になれば人生は價値がないでせう』と云つたと云ふ事である。私はこの特異なる事を話す事を抑壓したのである。何故なれば私は見知らぬ人との對談に於て、この題目に觸れたくなかつたからである。そればかりではなく、私は注意を『死と性慾』の問題に關聯する考慮の續行から他に外らせたのであつた。當時私は數週間前トラフォイ Trafoi といふ處でのほんの暫くの滯在の間に得た或る通知の影響をまだ受けてゐたのであつた。それは私が非常に骨折つて治療をした或る患者が不治の性的障礙の結果自殺を敢てしたとの通知である。私はヘルツェゴヴィナへの今囘の旅行には、この悲しむべき出來事及びこれに關聯してゐる凡ての事が意識的には追想されなかつた事を知つてゐる。然しながらトラフォイ Trafoi とボルトラフィオ Boltraffio との一致は私が注意を故意に他に轉じようとしたにも拘らず當時この追想が私の頭の中に活動してゐた事を假定せしめるのである。

(d)私はシニョレリなる名の忘却を、最早偶然の出來事と解する事が出來ないのである。私はこの過程に於て一つの動機の影響を認めざるを得ないのである。それは（土耳古人の風俗云々に關する）私の話を中斷させ、これに關聯してゐる考へであつてトラフォイに於ける出來事の通知にまで進む筈であつた考へを意識されないやうにした動機であつたのである。卽ち私は或る事を忘却せんと欲し、或る事を壓迫したのであつた。勿論私はオルヴィエトーの名畫家の名とは別の何

かを忘れようと欲した譯であつたが、この別のものは名畫家の名との間に自ら聯想的結合を作り、そのために私の意志行爲はその目標をとりちがへ、私がこの別のものを故意に忘れようと欲したに拘らず、一方の方を意志に反して忘れるやうな結果を生じたのである。追想に對する忌避は、一方の內容に向つてゐたにかかはらず、追想不能は他の一つの事に於てあらはれたのである。追想する事に對する忌避と追想の不能とが、同じ內容に關する場合は、これよりも簡單な場合であらうと思はれる。かく解釋して見ると代償名は私にとつて最早以前ほど不當不合理なものには見えて來ないのである。これらの代償名は(妥協形成の形式に從つて)私が忘れようと欲したもの、及び思ひ出さうと欲したものを共に思ひ出させ、或る何かを忘れようとする私の企圖が完全に成就されたのではなく、さりとて又全然失敗に終つたのでもない事を私に示すものである。

(e)求められた名と壓迫された題目（死と性慾等の題目であつてその中に Bosnien, Herzegowina, Trafoi 等の名が含まれてゐる）との間に聯絡のつくられる有様は非常に奇異である。ここに挿入した圖形は一八九八年の論説にあげたものを今一度出したものであるが、この聯絡を一目瞭然に示さうとしたものである。

Signorelli なる名は、この場合二片に分解され一方の綴りは（elli）代償名の一つ―― Botticelli ――にそのままの形であらはれてゐる。他の一方の綴りなる Signor は、Herr といふ語への飜譯（譯者註 Signor なる伊太利語の獨譯は Herr である）によつて壓迫された題目中に含まれてゐる名との間に多數の樣々なる關係を生じたのであるが、その爲にこれは再生されない事になつたのである。これの代償は移動が意味や綴りの聽覺上の句切りを無視し『Herzegowina u. Bosnien』なる名の結合に沿うて行はれた事を示唆する有様に於て起つたのである。だからして名はこの過程に於ては判じ繪に變化さるべき一文章の中の書かれた繪と類似の取扱ひを受けた事になるのである。シニョレリなる名の代りにかくの如き徑路を經て代償名を作つた全機轉の進行に就いては、意識には何等の通知も與へられなかつたのであつた。シニョレリなる名を含んでゐる題目と時間的に之に先行した壓迫されたる題目との間の關係及び同じ綴り――といふよりも寧ろ同じ文字の連續と云ふべきものかも知れぬ――が代償名の中に表はれてゐるといふ事實以上の關係は、差當り見出すことが

出來ないやうに見えるのである。記憶の再生及び忘却の條件は心理學者によつて、一定の關係及び素質に求められてゐるやうであるが、これらの條件は上記の說明と矛盾するものでない事を述べるのも餘計な事ではあるまい。私共はただ「名の忘却」を惹起する要素としてすでに以前から認められてゐたものに、さらに一つの動機を一定の場合に向つて附け加へ、尙ほ記憶錯誤の機制を明らかにしたに過ぎないのである。かの素質なるものは、私共の場合に於ても壓迫された要素が求められる名を聯想によつて支配し、この名を壓迫に拉し去る事が出來るやうになるために缺くべからざるものである。好都合なる再生條件を具備してゐる他の名では、この事は恐らく起らなかつたであらう。兎も角も、壓迫されてゐる要素は、絕えず何處かで別の有樣に現はれようと努力して居り、好都合なる條件がこれを迎へる場合にのみこの結果が達せられる事はありさうな事である。他の場合には壓迫が何等の官能障礙或は症候――と云つても差支へない――なしに成就されるのである。

記憶錯誤を伴ふ「名の忘却」に對する條件は次の如く總括する事が出來るのである。

(1)名が持つて居る忘却され易い素質（傾向）。

(2)直前に起つた抑壓の過程。

(3)その名と以前に抑壓された要素との間に外聯合のつくられる可能性。

そしてこの最初の條件には、多分あまり高い價値をつけなくてもよいであらう。何故なれば聯想に對する要求が大きくない場合には、この條件は大多數の場合に滿たされさうに思はれるからである。處で他の一つのもつと深い問題は斯くの如き外的の聯想が實際に被壓迫的要素をして求むる名の再生を妨げさせるに十分な條件となり得るか、それとももつと深い關係が兩方の題目の間に存することが必要なのではないかといふことである。皮相な觀察をする人はこの後の方の要求を斥け、全然異種の內容のものであつても、時間的接觸さへあれば十分であると考へるであらう。然しながら深く立ち入つて研究して見ると外的聯想によつて結ばれた二つの要素――壓迫されたる要素と新らしい要素――が尙ほ內容上の關係を持つてゐることを見出すことが益〻多くなつて來るのであつて、シニョレリの實例に於てもこの關係は發見されるのである。

私共がシニョレリの實例の分析に於て得たる認識の價値は、勿論私共がこの場合を定型的の出來事として說明しようとするか、或は箇々の出來事として說明しようとするかによつて、ちがつて來る譯である。さて、私は記憶錯誤を伴ふ「名の忘却」が非常に屢〻シニョレリの場合に明らかにされたと同じ有樣に於て起ることを主張しようと思ふ。私はこの現象を私の觀察し得た殆んど凡ての場合に於て、前述のやうに壓迫作用に原因するものと說明することが出來たのである。

尙ほ私共の分析が定型的のものである事を示すために、他の一つの觀點を主張しなければならな

い。私は記憶錯誤を伴ふ固有名忘却の場合と代償名の出て來なかつた場合とは、原則的には區別の出來ないものであると信ずるのである。この代償名は一定數の場合には自發的に出て來るものであり、他の場合には注意の緊張によつてその現出を强ふる事が出來るのである。そして斯くして泛び出た代償名は、被壓迫的要素並びに求められる名に對しては自發的に出現した代償名と、同じ關係を示すのである。代償名が意識される事に向つては、二つの要素が決定的の意義を持つやうである、その一つは注意の努力であり、他は心的材料に固着せる內的條件である。私は兩方の要素の間に必要とせられる外的聯合の作られる事の難易は、後者に求むべきものであると考へる。斯くして記憶錯誤のない名の忘却の場合の可なり多數が、代償名形成を伴ふ場合に加はるのである。而して代償名形成の起る場合には、シニョレリの例に見られた機制が適用されるのである。然しながら、私は固有名忘却の凡ての場合が、皆同じ群に屬せしめ得るものであるといふやうな主張を大膽にもしようとは企てないであらう。私はもつと簡單な有様に起る名の忘却の場合もあることを疑はない。私共は「固有名の單純なる忘却の外に壓迫作用に原因する忘却も起り得る」と、云つておけば此の間の消息を十分注意深く言ひ現はしたことになるであらう。

第二章　外國語の忘却

私共の自國語中日常用ひられる語彙は正常的官能の範圍內に於ては、忘却されることはないが、外國語の語彙に於てはこれと趣を異にすることは私共の知つてゐることである。この種の言葉の忘却の傾向は凡ての品詞に關して存し、私共の疲勞の程度の如何によつて第一度の官能障礙は外國語の語彙を使ひこなす吾人の能力が平等に行かないことに現はれるものである。この忘却は一定數の場合に於ては『シニョレリ Signorelli』の實例が私共に示したと同じ機制(メカニズム)に從つて起るものである。私はその實證としてただ一つだが然し價値ある特徵を備へてゐる分析例を述べようと思ふ。この分析は羅典語の引用句の中の名詞でない語の忘却の場合のそれであつて、私はこの小さな出來事の分析を手廣く且つ一目瞭然的に述べようと思ふ。昨夏の事、矢張り休暇旅行の途中、私は大學教育を受けた一青年と、舊交を溫めたが、この青年が私の心理學上の著述の二、三を知つてゐる事が間もなく判つたのであつた。私共は——どういふ風に話が其處へ進んで行つたものかは判らぬが——私共兩人が屬してゐる民族の社會的立場に就いて話し合つてゐた。そして名譽慾に燃えてゐるこの靑年は殘念がつて彼の世代の人々は、彼の口吻に依ると萎縮にまで運命づけ

られて居り、彼等の才能を發揮する事が出來ず、彼等の必要なことを滿足することが出來ないといふ事を、ながながと述べ立てたのであつた。彼はその感傷的に進行して行つた話を有名なるヴエルギリウス（譯者註、羅馬の詩人ヴエルギリウス）の詩句を以て結んだ。この詞句では、不幸なディド Dido は彼女のアイネイアス Aeneas に對する復讐を後裔に轉移したのであつた。否な彼はこの詩句を以て話を結んだといふよりも、結ばうと欲したと云ふべきであつた。何故ならば彼はエキゾリアーレ Exoriare ……と云つたがこの引用文を實際にあらはす事が出來なかつたからである。そして追想の明らかなる缺陷を、言葉を置き換へる事によつて覆はんとつとめたのであつた。卽ち彼はエキゾリアーレ、エックス、ノストリス、オッシブス、ウルトール Exoriar (e) ex nostris ossibus ultor! と云つたが、つひに彼は苛立つて『どうかそんな馬鹿にしたやうなお顏をして私の困惑を慰みものにせず、私をお助け下さい。この詩句には何かが缺けてゐます。どう云へば完全になるのでせうか』と云つたのであつた。

私は『諾』と答へ、ここの詩句が正しく響くやうに次の如く引用した。エキゾリアーレ、アリクィス、ノストリス、エックス、オッシブス、ウルトール Exoriar (e) aliquis nostris ex ossibus ultor!（我々の後裔から誰か仇をとつて吳れる人が出るだらう）。

『こんな言葉を忘れるといふのは餘りにも馬鹿らしい事です。ところで私共は理由なしには何

物をも忘れるものではないといふ事をあなたから聞いてゐる。私がこの不定代名詞なるアリクィス aliquis を忘れる事になつた譯を知りたいものです』と彼は云つた。

私はこの挑戰を喜んで買つて出た。何故ならば私は私の蒐集材料に一つの追加を望んだからであつた。其處で私は云ひました。『それは直ぐに判るでせう。あなたが特別の企圖なしにあなたの注意を忘れられた言葉に向けた後に、あなたに思ひ泛ぶ事を凡て正直に何の批評も加へないで話して下さい』*

*これは隱れたる觀念要素を意識に導入する爲めの一般の方法である。私の「夢判斷」（第七版第七一頁）と比較せよ。

『はい今私はこの言葉を次のやうにア a とリクィス liquis に分けるといふ滑稽な思ひ付きに達しました。』

『それはどういふ譯ですか？』『私にはわかりません』『それからどういふ事が思ひ泛びますか？』

『かういふ風に續きます。レリクィエン Reliquien（遺骸）――リクィダチオン Liquidation（清算）――フリュッシヒカイト Flüssigkeit（液）――フルイド Fluid（液狀の）――もう何かお判りになりましたか？』

『いや、まだそれどころでありません。どうぞ續けて下さい』

彼は皮肉な笑ひを示しながら語り續けた。『私はトリエント Tri nt のシモン Simon のことを考へます。私は二年前に彼の遺物をトリエントの敎會堂で見ました。私は今も相變らず猶太人に對して提起される「血の求刑」(Blutbeschuldigung)(譯者註、嚴しい非難)及びクラインパウル Kleinpaul の書の事を考へます。クラインパウルはこれら凡ての所謂犧牲の中にキリストの降世、謂はば救世主の再版を見出さうとしてゐるのです』

『この「思ひ付き」はあなたに羅典語の言葉が思ひ出せなくなる前に、私共が話し合つてゐた題目と無關係ではないやうですね』

『さうです、つぎに私は此の頃讀んだ伊太利語の雜誌に出てゐた或る記事のことを考へます。私はその記事の標題が「セント・アウグスチヌス D. hl. Augustinus は女を何と云つたか」となつてゐたやうに信じます。どうでせうか?』

『私は待つてゐるのですよ』(どうぞ續けて下さい)

『今私共の題目とは確かに全然無關係なことが出て來ました』

『そんな批評めいた事は云はないやうにして下さい』

『はい判つて居ります、私は先週旅行中に出逢つた立派な老人を思ひ出します。彼は實際「變り者」(Original)でした。彼は大きい肉食鳥のやうに見えました。あなたが名を御存じになり

たければ云ひますが彼はベネディクト Benedikt といふ人です』

『おやおや聖人や教父の名の大變な竝列ですね。聖シモン、聖アウグスチヌス、聖ベネディクツス等ですね。オリギネス Origines といふ名の教父もあつた樣に私は思ひます。ところでこの三つの名はクラインパウルのパウル Paul 同樣に、聖名ですね』

『今私に聖ジャヌアリウス Januarius 及び彼の「血の奇蹟」が思ひ泛びました。私は、考へが機械的に進んで行くやうな氣がします』

『そのままにしてお置きなさい。聖ジャヌアリウス及び聖アウグスチヌスは兩方共に暦に關係があります。あなたは「血の奇蹟」に就いて私に話して吳れませんか？』

『話しませう。ネアーペル Neapel の或る寺院には長頸の壜に聖ジャヌアリウスの血液が保存されてゐます。この血は一定の祭日には奇蹟によつて再び液體になります、人民はこの奇蹟に重きをおき、例へば佛蘭西軍による占領の時のやうに、この奇蹟の起り方が遲れると非常に亢奮します。その時の總大將――それはガリバルヂー Garibaldi であつたと思ひますが私は間違つてゐるか知らん？――が僧正をわきの方につれて行き、外にならんでゐる兵士に非常によくわかるやうな手眞似で、奇蹟が早く起つて吳れればよいといふ希望を僧正に表示した處が、奇蹟は實際に起つたと云ふ事です。』

『さあその先きを云つて下さい。何故あなたは云ひ淀むのですか？』

『今實は私に或る事が思ひ泛びました。……然しそれはあまり內密な話だし……又何の關係もないやうだし、それを云ふ必要もないやうに私は思ふのです』

『關係をつけて行くのは私の役ですよ。私は勿論あなたが不快を感ずる事を話すやうに强制は致しません。その代りあなたはどういふわけで aliquis といふ言葉を忘れたかを私から訊く事は出來ませんよ。』

『ほんたうですか？　あなたはさう信じて居られますか？　私は今突然或る婦人の事を思ひ出しました。その婦人からは我々兩人にとつて非常に不快な通知が來さうなのです』

『彼女に月經が來潮しなかつたといふ通知でせう？』

『どうしてあなたにそれがおわかりになるのでせう？』

『それは何も難かしい事ではないのです、あなたはそれを知るための準備を十分に私にさせて吳れました。あなたは曆の聖者の事を考へ、一定の日に於ける血液の液化の事を考へ、その事が起らない場合に起る混亂の狀態を考へ、その奇蹟を起させねば已まぬといふ威嚇その他を考へられました、……あなたは聖ジャヌアリウスの奇蹟を婦人の月經への見事な諷示に用ひたのです。』

『ちつとも識らずにですね。そしてあなたはこの不安なる期待のために私が aliquis なる言

葉を再生し得なかつたものとお考へですか？』

『それは疑ひの餘地のない事のやうに思はれます。然しながらあなたが a —— liquis といふ風にこの語を分解した事及びあなたの Reliquien, Liquidation; Flüssigkeit 等の聯想について思ひ出して見て下さい、私はあなたが Reliquien（遺骸）といふ語から出發して話し出した——子供ながらに殉敎した——聖シモンをも關係の中に織り込みませうか？』

『どうぞもう止して下さい。私がこんな考へを持つたとしてもそれをあまり大袈裟にお取り上げにならないやう願ひます。その代り私はその婦人が伊太利婦人であつてそれと一緒にネアーペル Neapel にも行つたことを白狀致します。然し凡ては偶然の事ではないのでせうか？』

『これら凡ての關係を偶然の事と假定する事によつて說明し得るかどうかはあなたの御判斷に委す外ありません。併しあなたが分析しようと思はれる凡ての類似の場合にあなたはいつもこれと同じやうな驚くべき偶然に導かれるであらう事を申上げておきます』

＊この一小分析は文獻の上に於て大なる注意を喚起し活潑な論議を惹起した。エー・ブロイレル E. Bleuler はこの分析に於て精神分析的解釋の信憑するに足る事を數學的に會得しようと試み、これが數千の論難されざる所謂醫學的「認識」よりも高い蓋然性價値を有する事、及びこの分析が特に論議の對象になつたのは、人々が科學上未だ心理學的蓋然性を考慮に入れる事に慣れてゐないからであるとの結論に到達した。（Das autistisch-undisziplinierte Denken in der

Medizin und sein Überwindung. Berlin, 1919.)

私はこの小分析例――この分析を自分にさせて呉れたその時の道連れに對してお禮を云はなくてはならない――が價値あるものと見るべき二三の理由を持つてゐる。先づこの例は外では得難い一つの源泉から得られたのである。私は本書に掲げる心的官能障礙の實例を大多數の場合、私の自己觀察から持つて來る外はないのである。神經症患者が提供して呉れる遙かに豐富な材料を私は此處では用ふることを避けようと努めてゐる。それは私が當該現象が神經症の結果であり、そのあらはれであるといふ抗議を持ち出されることを恐れねばならぬからである。從つて精神健康なる未知の人が斯くの如き研究の對象になつて呉れる事は私の目的に向つて特別の價値ある譯である。今一つ別の關係に於て、この分析が私に意義深いといふのは、これが代償追想を伴はざる言葉の忘却の一つの場合を明らかにし、私が初めから立ててゐた命題即ち誤まれる代償追想が起つて來ると否とは、本質的の差違をなすものでないといふ事を確證するものであるからである。

＊一層精密に觀察して見ると代償追想の點に關してシニョレリの分析とアリクィスのそれとの間に存する「コントラスト」は顯著なものでなくなるやうに見える。卽ち後者の場合にも、忘却は代理形成を伴つて居る樣に見えるのである。私が後に私の道伴れに向ひ、忘れた言葉を思ひ出さうと努力した時に、何かがその代りに思ひ泛ばなかつたかと問うたところ、彼は最初 ab といふ字を詩句の中に入れ nostris ab ossibus（多分 a―）quis の聯絡なき部分であらう）にしようか知らと考へたこと、及びその次に ex oriare といふ言葉が、特に明瞭に又頑强に思ひ泛んで來た事を告げた。疑ひ

深い彼は更にこれが詩句の最初の言葉であるためであらうと附け加へた。私はついで exoriare といふ字からの聯想に注意をして與れと乞うたところ、彼は Exorz smus（厄祓）といふ語を私に告げた。これによつて私は、exor are なる語が追想に於て强調されたことは、元來代理形成の價値を持つてゐたからであるといふ事を、非常によく考へる事が出來たのである。この代理形成は「聖者の名よりの厄祓」なる聯想を經て出來たものであらう。何れにしても、これは大きい價値をおく必要のない微細點である。これに反しピー・ウイルソン P. wilson (The imperceptible Obvious. Rivista de Psiquitria, Lima, Januar 1922) は exoriare なる語の强調は非常に高い說明的價値を持つてゐる、それは Exorzismus（厄祓）は流產によつていやな子供を片附けてしまふといふ被壓迫的觀念の最良の象徵的代理であるからだと切言してゐる。私は分析の結合力を傷つけないとの修正を感謝を以て受け入れようと思ふ。——さて或る種の代償追想の出現は、壓迫作用が原動力となつて起る故意の忘却の際には常に起るものであり、又吾人を欺く一つの特有なる徵候であるやうに思はれるのである。この代理形成は本物でない代償名が思ひ泛ばない場合でも、忘却されたものに近い關係にあるものが强調される事によつて、成立つであらう。例へばシニョレリの場合に於ては、畫家の名が私に判らないでゐた間は、一列の壁畫の視的追想及び或る畫の一隅につけられて居た彼の自畫像の視的追想が、非常に明瞭であつたのである。兎も角も平生私にあらはれる視的追想に比して遙かに强いものであつたのである。また一八九八年の論文に述べた他の一つの場合では、或る他所の都市に於ていやな訪問をしようとした時に、町名をどうしても思ひ出すことが出來ず、而かも家の番號は皮肉にも非常にあきらかに思ひ出されたのであつた。——私には一體平生數字の記憶が非常に困難であつたのに。

「アリクィス」の實例の主なる價値は、シニョレリの場合とは別な點にあるのである。シニョレリの例では名の再生は、その直前に始められ而かも中止された考慮の影響によつて障礙された

のである。併しこの考慮の内容は、シニョレリなる名を含んでゐる新らしい題目との間に明らかな關係を持つて居らず、壓迫された題目と忘却された名を含む題目との間には單に時間的の接觸關係があるだけであり、この關係は兩者を外的聯想によつて結合*させるに十分であつたのである。

*私はシニョレリの場合に於ける兩方の觀念界の間に内的關係がないと云ふ見解を十分なる確信を以て固守しようとは思はないのである。「死と性的生活」についての被壓迫的觀念を注意深く追究して行くと吾人はオルヴィエトーの壁畫の題目と近く接觸する觀念にぶつかるのである。

これに反して「アリクィス」の例では直前に意識的考慮を占有すべき筈であつたに拘らず意識されず、而かも障礙を惹起した様に思はれる獨立的な被壓迫的題目は、何も認められないのである。追想の障礙はこの場合にはぶつかつた題目の内部から起り來つたのである。即ち引用句中に現はれて居る願望觀念に對する一つの抗議が無意識的に起り來つたのである。私共は事の經過を次の様に組み立てなければならないのである。話し手は彼の民族が權利をせばめられてゐることを悲しみ、ディドと同じやうに次の世代の人々が壓迫者に對する復讐を引き受けるであらう事を豫言したのである。かくて彼は子孫を得たいといふ願望を述べた事になるのである。ところがこの瞬間彼に反對の考へが侵入して來たのである。『お前は、實際にそれほど熱心に子孫の出來ることを希望するのか？　それはほんたうではあるまい。お前が子女を期待せねばならぬやうな通

知をお前の知つてゐる或る方面から、今受取つたら、お前はどんな困惑の狀態に陷るであらう？否な否な！　復讐のためには子孫がほしくても差當り子女があつてはならない』そしてこの抗議はここにその效力を發揮したのである。卽ちこの抗議はシニョレリの例に於けると同樣に、觀念要素の內の一つと、被壓迫的願望の一要素との間に外的聯想を作り、これによつて效力を發生するに至つたのである。而かもこの場合には非常に强引なる有樣に於て、人工的な不自然な聯想の徑路を經て外聯合が作られたのである。それからシニョレリの例との間の第二の本質的なる一致は抗議が被壓迫的源泉から來て居り、注意の轉向を惹起せしめるやうな思想から出發してゐる點にあるのである。名の忘却の以上二例に於ける異同及び內的類似に就いて述ぶべき事は、これだけである。私共は忘却の第二の機制卽ち考慮の障礙が壓迫されて居るものから生ずる內的抗議に基く事を知つた譯である。私共は益〻容易に理解し得るやうになるであらうこの種の過程には、今後の說明の經過中に於て繰返し出くはすことであらう。

第三章　名及び「言葉の配置」の忘却

上述外國語の文章の一部の忘却に就いての經驗からして、國語に於ける言葉の配置の忘却は、本質的に異なる說明を必要とするや否やといふ好奇心が活潑に起つて來るのである。私共が諳記してゐる公式或は詩を不正確に――或は多少これを變化し、或は脫漏のある狀態に於て――想起し得る場合私共は別にこれを不思議に思はないのが常である。併しながら私共が續きの儘で憶えた事を一樣に忘れないで、その內の箇々の部分を引きちぎつて忘れるやうであるから、斯のやうな有樣に起つた想起の障礙の箇々の實例を分析的に硏究することは、骨折り甲斐あることのやうに思はれる。

私よりも年下の或る同僚が私と對話をしてゐて、國語の詩の忘却は外國語の「言葉の配置」の中の箇々の要素の忘却と、類似の動機によつて起るものであらうと云つたが、この同僚は私の頼みによつて同時に硏究對象になつて吳れることになつた。

私は如何なる詩で實驗しようかと彼に尋ね、彼は“Die Braut von Korinth”(「コリントの花嫁」)を選び出した。彼はこの詩が非常に好きであり、少なくとも詩の段每にこれを諳誦し得る

ものと信じてゐた。然るに想起の初めに際し、彼には顯著な不確實さがあらはれた。彼は‘Von Korinthus nach Athen gezogen’（コリンツスからアテンに進んで行つた）と云ふのか、それとも‘Nach Korinthus von Athen gezogen’（コリンツスの方へアテンから進んで行つた）と云ふのであつたかと私に訊ね、私も一瞬の間ためらつたが、詩の標題が“Die Braut von Korinth”（コリントからの花嫁）であるから、若者が何の道を進んで行つたかは疑ひの餘地がないと云つた。ついで第一段の想起は、滑かに、少なくとも著しい誤なしに進行した。第二段の第一行を終つた後同僚は暫時さがして居るやうであつたが、間もなく續けて次のやうに朗吟した。

Aber wird er auch willkommen scheinen,

Jetzt' wo jeder Tag was Neues bringt?

Denn er ist noch Heide mit den Seinen

Und sie sind Christen und……getaucht.

（さりながら日々に新奇な事の起つて來る今も、彼は歡迎せられるであらう？　何故なら彼は彼の家族と共々に異教徒であり、彼女等はキリスト教徒であり……洗禮を受けてゐるのだから）

私は已に前から變だと思ひながら傾聽してゐたが、最後の行が終つてから、私共はここに何か

間違ひが起つたといふ事に意見が一致した。然しながらこれを訂正することが出來なかつたので、私共は圖書室に行きゲーテの詩を取つて見て、この段の第二行目が全然別な文句になつて居り、これが同僚の記憶から謂はば投げ出されてしまひ、外見上全然別のものによつて被はれてゐた事が判つた。そして本當の文句は次のものであつた。

"Aber wird er auch willkommen scheinen,
wenn er teuer nicht die Gunst erkauft"
（さりながら彼は歡迎される喜びに輝き得るであらうか。彼が寵愛（好意）をかち得ることに大きい努力を拂はなかつたのに）

"erkauft"（購ふ）に對して"getauft"（洗禮を受ける）が韻を踏まれてゐた。そして私にとつては Heide（異教徒）Christen（キリスト教徒）及び getauft 等の字配りが本文の想起に際して、彼を助成する事のあまりにも少なかつたことが不思議であつた。私は同僚に對して『あなたは非常によく知つて居ると云はれた詩の中でその行を斯くも完全に落してしまつた理由を說明出來ますか、又あなたは如何なる關係からこの代償が起つたかといふ事について、何か見當がつきますか』と訊ねた。

彼は說明する事を明らかに好まなかつたが、それでも說明を與ふることが出來た。

『" Jetzt, wo jeder Tag was Neues bringt "(日々に新奇な事の起つて來る今日)なる行が出て來た事は私に判ります。私はこの言葉を近頃私の營業に關して用ひたに相違ありません。私の營業の發展に就いては、私はあなたの御存じの通り現在非常に滿足してゐます。併しこの文章がどうして此處に出て來たでせう。私には一つの關係が判りさうです。' wenn er teuer nicht die Gunst erkauft '(好意を得ることに大なる努力を拂はなかつたのに)なる行は明らかに私にとつて愉快ではありませんでした。それは一度失敗したが、今私のよくなつた物質上の境遇に於て、もう一度播き直しをしようと目論んでゐる求婚問題と關係があります。私はあなたにこれ以上云ふ事は出來ません。然しながら一種の打算が、以前も今囘と同樣にこの求婚問題を決定した事を、思ひ出す事はたしかに不愉快です』と彼は說明した。

私はそれ以上詳しい事情を知らなくてもその事は判つたやうな氣がした。併しながら私は更に問うた。『一體あなたは何故にあなたの私的境遇を " Braut von Korinth " の本文の中に混入する事になつたのでせう? 多分あなたの場合にもこの詩の中にあらはれてゐるやうな信仰の差別があるのでせうね?』

(Keimt ein Glaube neu,
wird oft Lieb' und Treu

wie ein böses Unkraut ausgerauft.)

（新らしき信仰の芽が萠ゆる時愛と操は屢〻悪き雑草の如く毟り取られる。）

私は正しくは云ひ當てなかつた。併し私の問ひは圖星をさしたものと見え、この男を急に慧眼にした事は注意すべき事であつた。彼は今まで氣附かなかつた事も答へる事が出來るやうになつた。彼は困つた様な、そして又不服なやうな眼附を以て私を見つめた。そして詩のあとの方の箇所を呟き誦した。

„Sieh sie an genau!*

Morgen ist sie grau

＊同僚は但しこの詩のよい箇所をその文句に於ても又その用ひ方から云つても、多少變化させたのであつた。幽靈少女は彼女の婚約の夫に對して次のやうに云つたのであつた。

Meine Kette hab ich dir gegeben
Deine Locke nehm ich mit mir fort.
Sieh sie an genau
Morgen bist du grau!
Und nur braun erscheinst du wieder dort.

（妾の鎖はあなたに差上げました。
あなたの髪の毛を妾は貰つて行きます。

それをよくよく御覽なさい、
明日は汝は白髮（老人）になり、
褐色となつてあの世に現はれるでせう。）

そして同僚は彼女（彼が求婚せんとしてゐる）が自分よりも少しく年上である事を附け加へ語つたのであつた。彼をこれ以上苦しめないやうに私は質問を打切つた。これだけ判れば十分であつた。併しながら記憶に關する大した事でもない失錯作業の原因を突き止めようとしたこの努力が、斯くも緣の遠い、而も極祕の、そして苦しい感情を帶びてゐる被分析者の事柄を搔き廻はす事になつたのは、たしかに意外であつたのである。

有名なる詩文の一節の忘却の他の例を私はツェー・ゲー・ユング C. G. Jung * の論文から彼の言葉のままに此處に引用しよう。『或る人が有名なる詩 Ein Fichtenbaum steht einsam usw ;'（一本の松の樹がさびしく立つてゐる云々）を諳誦しようとした。'Ihn schläfert'（「彼は睡くなつて來た」）の行まで行くと、彼はつかへてどうしても先へ進む事が出來ず 'mit weisser Decke' を彼は全然忘れてしまつたのであつた。斯のやうな有名な詩の句を忘れると云ふのは不思議な事だと思はれたので、私は彼をして 'mit weisser Decke'（白布を以て）といふ言葉に就いて彼に思ひ泛ぶ事を再生せしめた處が、次のやうな聯想列があらはれた。「白布に就いて

はTotentuch——卽ち——屍體を覆ふ亞麻布——を考へます——（間）——今私は一人の近しい友人を想ひ出します——彼の兄弟は最近急死しました——その人は心臟痲痺で死んだといふ事です——その人も亦非常に肥滿してゐました——私の友人も肥滿してゐます、そして私は彼も同じやうな事になるのではないかと考へました——彼は多分運動不足なんです——私は彼の兄弟の人の死んだ事を聞きました時私共の家族も同樣に肥胖症の傾向を持つて居り、私の祖父が心臟痲痺で死んだものですから、私もさうなるのではないかと急に不安になりました。私は餘りに肥滿してゐまして此の頃脫脂療法をはじめました」と彼は云つた。この男は卽ち自分と白い亞麻布に被はれた松の木とを同一視したのである』とユングは云つてゐるのである。

* C. G. Jung : Über die Psychologie der Dementia praecox.（早發性癡呆症の心理に就いて）1907, Seit 64.

ブダペストにゐる私の友人エス・フェレンチ S. Ferenczi のお蔭で得られた言葉の配置の忘却の例を次にあげるが、これは今迄の例とは異なり、詩人の作つた文章ではなく、自分の作つた話に關するものである。この實例は全然通常でない場合を私共に提供するものかも知れない。それは忘却が私共の理性に奉仕し、理性が瞬間的に起る慾情に屈服し、敗れようとする危險が起つて來る時に、理性のお役に立つといふ場合を示すやうに思はれるのである。卽ち失錯作業が有用なる官能をする事になるのである。後に私共が迷ひから醒めた時に、私共は前に罷業——卽ち忘

却心的無力として現はれる外なかつたかの內的傾向を正當なる心の動きと考へ又無理のない事と考へ得るのである。

『ある會合に於て 'Tout comprendre c'est tout pardonner' (凡てを理解する事は凡てを赦す事である) といふ言葉が出た。私はそれに對して云つた。この文章は最初の部分だけで十分である。das 'Pardonnieren' (赦す) といふ事は不遜である。神や宗教家に委しておけと。その場に居合はせた一人の男がその通りだと云つた。この事は私を向う見ずにした。そして——多分この自分に好感を持つてくれる批評者の善意を確かめるために——私は近頃自分にもつとよい事が思ひついたと云つた。然しながら私がそれを話さうとした時、それが私に思ひ泛ばなかつた。私は直ぐに會合の席から退き、自分の隱蔽想起を書きつけた。先づ第一に、かの求むる思ひ付きが出來た時の證人であつた友人の名とブダペストの街の名とが出て來た。次に他の友人マックス Max の名があらはれた。Max を私共はマキシ Maxi と呼んでゐた。これが私をマキシム Maxime (格言) なる言葉に導き、これが冒頭に說明した場合と同樣に——當時或る有名なる Maxime (格言) の變化したものであつたと云ふ追想に導いた。不思議にもその次には私に格言ではなく次の事が思ひ泛んだ。卽ち 'Gott schuf den Menschen nach seinem Bilde' (神は自分に像どつて人間を創造した) 及びその變化したる文體 'der Mensch schuf Gott

nach den seinigen'（人間は自分の像に從つて神を造つた）ついで直ちに求めてゐたものへの追想が泛んで來た。私の友はその時アンドラッシイ Andrassy 街に於て、私に'NichtsMenschiches ist mir fremd'（私には人間らしい事は、皆判つて居る）と云ひ、それに對して私は――精神分析學上の經驗を諷示して――あなたは一歩進んで、あなたに動物性の事は何一つとして未知ではない（…… dass dir nichts Tierisches fremd ist）と云ふ事を白狀せねばならぬだらうと云つたのであつた』

『然しながら、私はたうとう求むるものを追想し得た後も、これをその時に居合はせた人々の中で物語る事が出來なかつた。友人の若い夫人であつて、私が無意識界の動物性について說明した事のあつたその婦人も、列席者の中にゐたのであつた。そして私は、彼女には斯くの如き好ましからぬ認識を持ち得るまでの素養がまだ出來てゐなかつた事を知らねばならなかつた。卽ち忘却によつて彼女に起るべき一聯の不快なる問題及び無駄な論議が節約されたのであつて、かくする事が、正にこの一時的忘却の動機であつたに違ひないのである。』

『求むる文章に於ては人間の動物性が指示されて居り、一方隱蔽想起（Deckeinfall）に於ては、神性が人間のつくつたものに墮されるやうな文章があらはれて居ることは興味あることである。卽ち權利の減少（capitis diminutio（公權喪失）は兩方に共通である。全體の事は明らか

に對話によつて呼びさまされた理解と容赦に關する考への繼續であつたのである。』

『この場合に於て求められるものが、斯くも速かにあらはれた事は、私が檢閲を受けてゐた交友仲間から誰もゐない室に退いた事によるのであらうと思はれる。』

私は、それ以來「言葉の配置」の忘却或は再生の誤りの場合に就いて多數の分析を行ひ、これら研究の一致せる結果からして“aliquis”及び“Braut von Korinth”の例に於て證明された心的機制が殆ど普遍的な通用を有するものだと云ふ假定に傾くやうになつたのである。これらの場合の分析は前述のものと同樣に常に極く內密のものであり、被分析者に對して苦痛を感ぜしむる事柄に關係して居るから、これらの分析例を發表することは、大多數の場合あまり心持のよい事ではないのである。從つて私は斯くの如き實例の數をこれ以上ふやさうとは思はない。材料は變つてゐても忘却された事及び歪められたる事は、無意識的なる考慮內容と或る聯想の道に於て關係づけられて居り、この考慮內容よりして忘却なる結果があらはれる事は、これら凡ての場合に共通である。

私は再び「名の忘却」に向つて論述を進めようと思ふ。この「名の忘却」に就いては、私共は今迄は未だ一々の症例に就き、また動機についても徹底的に觀察し盡さなかつたのである。私はこの種の失錯作業を私自身に於て折々觀察し得るから、この種の實例には不自由を感じないので

ある。私が今でも惱む輕い偏頭痛の豫告として數時間前に「名の忘却」が起るのが例になつてゐる。そしてこの偏頭痛が頂點に達した時にも私が仕事を止めなければならぬ程にはならないが、それでも私には凡ての固有名が出て來なくなること屢〻である。其處で私の場合の如き例は、私共の分析的努力に對する原則的抗議の發端となる恐れがあるのである。斯くの如き觀察からして、健忘特に「名の忘却」の原因が大腦の血行障礙及び全般的官能障礙にあり、從つて斯くの如き現象に對しては、心理學的の說明を努力することが不必要であると結論すべきであらうか？　私は決してさうは思はないのである。さういふ風に考へる事は、凡ての場合に、一樣に起る或る過程の機制と、變り易く且つ必ずしも必要でない補助的の事とを混同する事にならう。詳細に論ずる代りに私はこの抗議を除去するための一つの譬喩を擧げようと思ふ。

私が非常に無分別にも夜中大都會の人通りなき邊りを散步し、泥坊に襲はれて時計と財布を掠奪されたと假定し、最寄りの巡査駐在所に行き「私がこれこれの街路に行つてゐて、其處で寂寞と暗黑が私から時計と財布を奪ひ去つた」と訴へたと假定せよ。私はこの言葉で正しくない事は云つてゐないにしても、私はこの訴への文句からして私の頭腦が本當でないと考へられる危險があるのである。狀態を正しく述べるためには「場所の寂寞なる事をよい事にして、又暗黑の保證の下に、何人だか判らぬ惡漢が、私から貴重品を奪つた」と云はなければならないのである。さ

て「名の忘却」の際の狀態はこれと同樣である。疲勞、血行障礙及び中毒に促がされ、不明なる精神力が私の記憶に屬してゐる固有名を意の儘に用ふる能力を奪つたのである。この同じ力は、他の場合に於ては完全なる健康狀態及び作業能力を有する狀態に於ても記憶の同じ障礙を生ぜしめ得るのである。

私が自身に觀察した「名の忘却」の場合を分析して見ると、忘れられた名は殆ど常に私自身に近い關係を持つて居り、而かも强力であつて時には苦惱の感を私に惹起する題目に關係を持つてゐる事を見出すのである。チューリヒ Zürich 學派(ブロイレル Bleuler・ユング Jung・リクリン Riklin)の便利にして推稱するに足る云ひならはしに從つて、私はこれを次のやうな形式に現はす事が出來る。卽ち「忘却された名は私の個人的複合體(persönlichen Komplex)に觸れた」と。人名と私との關係は思ひもよらぬものであり、多くは表面的なる聯想(言葉に二重の意味があつたり或は類音・同音である事)に依つて媒介されるものである。これは一般的に側面關係(Seitenbeziehung)と稱する事が出來る二三の簡單なる例は、その本態を最もよく明らかにするであらう。

(1)或る患者が私にリヴィエラ Riviera にある療養所に紹介して吳れと願つた。私はゼノア Genua に近く一つの場所を知つて居り、且つ其處に開業してゐる獨逸人の醫者の名も記憶して

ゐた。然しながら場所そのものの名は、——確かにそれを知つてゐると信じてゐながら——云ふ事が出來なかつた。私は仕方なく患者を待たせておき、私の家庭の女共の處に行きゼノア Genua の近くで Z 醫師が小さい病院を持つて居り、某々婦人が永い間治療を受けた場所は何と云つたつけねと訊ねた。「勿論貴方はこの名をお忘れになる譯ですよ、それはネルヴィ Nervi と云ふんです、」といふ返辭であつた。勿論 Nerven (神經) と私とは大關係があるのだ。

(2)或人が近くの避暑地の事を語り、そこに二つの有名な旅館の外に第三の旅館があり、この旅館には彼にとつて或る思ひ出が結びついて居ると云ひ、且つその旅館の名は直ぐにも云ふ事が出來ると云つた。私はそんな旅館はないと云ひ、私は七囘もそこに避暑した事があり、その場所に就いては彼よりもよく知つてゐる筈だと主張した。私の抗議に刺戟されて、この男はその名を云つてしまつた。この旅館はホッホワルトナー Hochwartner と云ふのであつた。其處で私は勿論屈服せねばならなかつたし、又私が七夏の永い間私が否認したこの旅館の直ぐ近くに住んでゐた事を白狀せねばならなかつた。この場合、私は何故名と事實とを忘れたのであらうか、私はこの名が餘りに明らかに私と同じ專門のウォーンの同僚の名に似た音を持つて居り、矢張り私の「職業複合體」(professionellen Komplex) に觸れるものであつたからだと思ふ。

(3)又或る時ライヘンハル Reichenh II 停車場で乘車券を買はうとした時、私が度々通過した

事があり、平生私が非常によく知つてゐる次の大停車場の名がどうしても思ひ付かなかつた。私は時間表を熱心に探さねばならなかつた。その名はローゼンハイム Rosenheim と云ふのであつた。其處で如何なる聯想によつてこの名が出て來なかつたかといふ事が直ぐに私に判つた。その一時間前に私は姉妹をライヘンハルの直ぐ近くにある彼女の住居に訪ねた。彼女の名はローザ Rosa と云ふのであつた。卽ち矢張りローゼンハイム Rosenheim (Rosa の家 (Heim)) である。私の家族複合體 (Familienkomplex) がこの名を自分から奪つたのであつた。

(4) 家族複合體が掠奪性の作用を有する事は、多數の實例に於て追究する事が出來る。

或る日私の婦人患者某の弟なる一靑年が私の診察を受けに來た。私は彼には何度も逢つた事があり、常に彼を姓でなく名で呼んでゐた。ところで私が彼の訪問に就いて話さうとした時、私は別に珍しくもない彼の名を忘れ、どうしても想ひ出す事が出來なかつた。私はついで街に出て看板を見てあるき、その名が最初にぶつかつた時に、その名を認識したのであつた。分析の結果は、私がこの訪問者と自分の弟とを「自分の弟は同じやうな場合にこの訪問者と同じやうな態度行動を取つたであらうか、それとも反對の行動を取りはしなかつたらうか?」といふ壓迫されたる問題を中心にして對比させた事が明らかになつた。よその家庭と自分の家庭に關する考への間に出來たこの外的結合は、雙方の家庭に於て母が同じアマリア Amalia といふ名を持つてゐたとい

ふ偶然の事によつて可能にされたのであつた。ついで私は私に理由が判らずに出て來た二箇の代償名ダニエル Daniel 及びフランツ Franz をも理解するに至つた。この二つの名はアマリア Amalia と同樣にシルレルの「盜賊（ロイベル）」の中に出て來る名であり、これら凡てにウォーンの徒步旅行家ダニエル・スピッツェル Daniel Spitzer の洒落が關聯してゐるのであつた。

(5) 又或る時私は自分の青年時代に一定の關係ある一患者の名を思ひ出すことが出來なかつた。この求むる名が發見される迄には分析は長い迂路を通過するを必要とした。患者は失明しはしないかといふ不安を述べてゐた。これが銃丸の爲に盲目となつた或る青年についての記憶を呼び起したのであつた。それから又私はピストル自殺をした他の青年の事を思ひ出した。この後者の青年は私がはじめに述べた患者とは親類ではなかつたけれども、同じ名を持つてゐた。併し私はこの二人の青年の場合からの不安の期待が私自身の家庭の或人へ轉移した事を意識し得るに至つて、はじめてこの名を見出す事が出來たのであつた。

かくして「自己關係」(Eigenbeziehung) の不斷の流れが私の考慮を通して流れて居り、この流れは平生は私に判らずに居るのであるが、上記の如き「名の忘却」に依つて私に判るのである。恰も私が他人のどんな事でもを聞く時には、これを自分の事と比較する事を强ひられる樣な觀があり、私の個人的複合體が他人の事を知る際に、いつも活潑になるかの觀があるのである。

これは決して私の個人的特性ではあり得ず、却つて私共が一般に自分以外の事柄を理解する方法への一つの暗示を含むものに相違ないのである。私は他の人々に於ても私と同様であらう事を假定する根據、理由を有するのである。

この種の實例の最も優秀なるものをレーデラー Lederer と云ふ人が自分の經驗として、私に告げた。彼は、ヴェニス Venedig へ新婚旅行をしてゐたとき彼の一面識ある紳士と出會ひ、この人を自分の新妻に紹介せねばならない事になつた。然しながら彼はこの人の名を忘れた爲、差當りわけの判らぬつぶやきを以て間に合はせる外なかつた。その後彼がこの人に二度目に出逢つた時――それはヴェニスでは避け得ない事である――彼はこの人をわきの方へ連れて行き、名を忘れて困つたから云つて呉れと云つた。その人の答へは人間性についての優れた認識を示すものであつた。彼は答へた。「あなたが私の名を心に留めなかつたのは無理のない事です、私はあなたと同じくレーデラー Lederer と云ふものです」と。――一體に人と云ふものは他人に自分自身と同じ名を見出した場合に、淡い不快感を禁じ得ないものである。私は近頃私の診察時間にエス・フロイド S.Freud といふ一紳士が私に自己紹介をした時に、この感じを非常に明らかに感じた。(但し私は私の批判者の一人が、この點に關して私とは正反對の態度を取ると確言した事を此處に書き添へておかう)

(6)ユングの報告して居る次の實例に於ても、私共は自己關係の有效なる事を認めるのである。『Yなる男が或る婦人を愛してゐたが、求愛に成功せず、この婦人はXなる男と結婚した。さてY君はX君を既に永い間知つて居り、二人の間には職業上の關係があつたに拘らずX君の名を忘れ、彼と通信しようと欲する時、度々他人から彼の名を聞かなければならなかつた』この例に於ける忘却の動機は、自己關係の限定の下に立つて居る前の諸例よりも明らかである。この場合には忘却はY君が自分の幸福なる戀敵に對する嫌厭の感の直接の結果であるやうに見えるのである。彼はX君の事は何事も知りたくなかつたのである。ユングの言葉を借りて云へば『彼の事は考へる事さへしてはならなかつた』のである。

* Dementia pr ecox, S. 52.

(7)『名の忘却』の動機はより微妙なものであり、その名の所有者に對する「美化された」憎惡心に存する事があるのである。ブダペストのK孃は私に次のやうな事を書いて寄越した。『私は小さな學説を立てました。それは畫才ある人は音樂に對して何等の觀念を持たないものであり、又その逆が眞であると云ふ事です。近頃私は或る人と此事に關して話し合ひ、次のやうに云ひました。「私の觀察は今迄はいつもあたつてゐましたが、或る人だけは例外です」と。ところが私がこの人の名を思ひ出さうとした時に、私はどうしても思ひ出す事が出來ず、而かも其の人が私

の最も親しい知人の一人である事を知つてゐました。數日後に偶然人がその名を呼んでゐるのを聞きました時、私は勿論直ぐにその話が私の學說の破壞者に關係して居る事を知りました。私が無意識的に彼に對して抱いた憎惡心が平生非常によく知つてゐる、彼の名を忘却せしめる事に於てあらはれたのでありました』と。

(8)フェレンチーの報告した次の例に於ては、自己關係が少しちがつた道程を經て「名の忘却」に導いたのであつた。この分析例はボッティチェリ Botticelli ボルトラフィオ Boltraffio からシニョレリ Signorelli に達したのと同樣に、代償性の思ひ付きの說明によつて特に興味深いものとなるのである。

『精神分析のことを多少聞いてゐた或る婦人に、精神病醫ユングの名がどうしても思ひ泛ばなかつた。』

『その代りに次の思ひ付きが起つた。Kl.（一つの名）——ウィルデ Wilde ——ニーチェ Nietzsche ——ハウプトマン Hauptmann』

『私は彼女に名を告げず、一々の思ひ付きに就いて自由聯想をするやうにと要求した』

『Kl. に就いて彼女は直ちに Kl. 夫人の事、それから彼女が氣取り屋のおしやれな人ではあるが、年齡にしては大層美しく見える事を考へ「あの奧さんは年をとらない」と云つた。ウィルデ

とニーチェに共通な上位概念として彼女は「精神病」と云つた。それから彼女は嘲けるやうに「彼等フロイド派の連中は、彼等自身が狂氣になるまで精神病の原因を探すんだ」と云ひ、ついで「私はウィルデやニーチェは厭だ。私は彼等を理解する事が出來ない。私は彼等兩人共に同性愛的の人であつたと聞いて居る。ウィルデは若い人達(junge Leute)と交際した」と云つた。(彼女はこの文章に於て既に正しい名——勿論匈牙利語ではあつたが——を話したのであつたが、相變らず求むる名を思ひ出すことが出來なかつた)

ハウプトマンに就いては彼女にハルベ Halbe(半分)と Jugend(青年)とが思ひ付き、ついで私が彼女の注意を Jugend といふ語に導いた時に、彼女は Jung なる名を探し求めてゐた事を知るに至つた』

『三十九歳にて夫を失ひ、再び結婚し得る望みを持たないこの婦人は、勿論 Jugend(青年)とか年齢とかを想ひ起させる凡ての記憶、追想から逃避すべき十分なる理由を持つてゐたのである。この例に於て、求むる名に對して隱蔽想起が純然たる内容上の聯想に基いて生じ、類音聯想が缺如して居た事が注意に値する』

(9)尚此處に非常にデリケートな動機に出發してゐる「名の忘却」の他の一例がある。これは本人自らが分析したものである。

『私が哲學の試驗を副科目として受けた時、試驗官からエピクルス Epikurs の學說に就いて訊ねられ、尙ほ幾世紀か後にエピクルスの學說を取り入れた學者は誰かときかれた。私はピエルガッサンディ Pierre Gassendi だと答へた。この名は私が丁度二日前に「カフェー」でエピクルスの後繼者として呼ばれてゐるのを聞いたものであつた。どうして私がそれを知つてゐるかといふ試驗官の驚いての質問に對し、私は以前からガッサンディに興味を感じてゐたといふ大膽な答をした。これが爲に、私は優等で卒業したが殘念ながら私にはその後、このガッサンディなる名を忘却する頑固な傾向が出來た。私があらゆる努力を拂つても、この名を記憶し得ないのは私の惡かつたといふ良心に原因するものと信ぜられるのである。私は勿論この名をその當時も知つて居らねばならぬ事もなかつたのであつた』

この人が試驗のこの挿話の追想に對して持つ、この强い嫌厭の感を正しく評價するためには、彼が博士の學位を非常に高く評價して居り、この代償(學位)が非常に多數の他のものに相當する(即ち何ものにも替へ難い)ものと考へて居た事を知らねばならないのである。

(10)私は此處に或る都市名忘却の一例を挿入しよう。これは今まで擧げた例ほど單純ではないが、此の種の硏究に親しむ人々には信憑するに足り、又價値あるものと思はれるものである。この例では伊太利の或る都市の名が或る女の名に發音が非常によく似て居た爲に記憶されなかつたので

あつた。この女の名には此處には十分詳細に發表されて居ない様々な感傷的追想がまつはつてゐたのであつた。ブダペストのフェレンチーはこの忘却の例を自ら觀察し、この場合を夢或は神經症的觀念を分析すると同じやうに取扱つたのであるが、これは確かに尤もな事である。

『今日私は親しくしてゐる或る家庭に行つてゐた。そして北部伊太利の都市の事が話題にのぼつた。その時或人がこれらの都市には墺太利の感化が今も見られると云つた。或る人がこれらの都市の名の一二を云ひ、私も一つを擧げようと思つた。私はこの都市で二日間を非常に愉快に過した事を知つてるに拘らず、その都市の名はどうしても思ひ付かなかつた。この事は忘却に關するフロイドの學說によく合致しない事である。——求むる都市名の代りに、次の思ひ付きがあはれて來た。卽ちカプア Capua —— Brescia —— Der Löwe von Brescia（ブレスチアの獅子）等であつた』

『この獅子は大理石像の形で目の當り見るやうに自分の前に立つてゐた。併し私はこの獅子はブレスチアの自由記念碑の上にある獅子（私はこの記念碑は繪で見ただけであつた）と云ふよりも、寧ろ私がルチェルン Luzern で見たチュイルリアン Tuilerien（巴里王宮）で殪れた瑞西衞兵の記念碑上で見たものに似てゐることに氣がついた。そしてこの記念碑の微細畫複寫版は、私の本箱の上に立てられてあるのであつた。つひに求むる名は私に思ひ付いた。それはヴェロー

ナ Verona であつたのである。』

『私は又直ぐに何人がこの忘却の原因になつたかといふことをも知つた。それはこの家の以前の召使の女に外ならなかつた。彼女はヴェロニカ Veronika といふ名で匈牙利語ではヴェローナ Verona といふのであつた。彼女の醜惡なる面貌及び嗄れた金切聲及び堪へ難いあつかましさ——彼女は永い間この家に勤めてゐたのでこのあつかましさが當り前の事と思つてゐた——は非常に私の氣に觸つてゐた。尙ほ彼女がその頃この家の子供を取扱ふ時の暴君的態度は私には堪へ切れなかつた。そこで私には代償的思ひ付きが何を意味したかと云ふ事も判つたのである』

『カプアに就いては、私は直ちに Caput mortuum (髑髏) を聯想した。私はヴェロニカの頭を度々髑髏に比較して考へた。匈牙利語なるカプチ Kap zi (慾深か) は、確かにまたこの移動の一原因となつたのであつた。勿論私はカプアとヴェローナを地理學上の概念として、又同じリズムを有する伊太利語として互に結合せしめる一層直接的なる聯想の道をも見出すのである。』

『同樣の事がブレスチアに就いても適用される。然しながら此處にも込み入つた觀念聯合の脇道があるのである』

『私の彼女に對する反感は當時非常にはげしいものであつて、私はヴェロニカを實際胸糞の惡い奴だと思ひ、又實際あんな女にも愛の生活があり、あんな女でも人から愛される事が出來るの

かといふ驚きを何度か發表した事があつたのである。「彼女と接吻すれば嘔氣を催すに違ひない」と私は云ひ云ひした。而も彼女は確かに、夙くより戰死した瑞西衞兵の觀念と關係づけらるべきものであつた。』

『ブレスチアは少なくとも此處匈牙利の國では獅子と一緒にしては呼ばれず、屢〻他の一野獸と一緒にして呼ばれる。この國で最も嫌はれてゐる名は北部伊太利に於けると同樣にハイナウ Haynau 將軍のそれである。この名は無造作にヘェーネ Hyäne von Brescia（ブレスチアの印度狼）と呼ばれてゐるのである。憎まれてゐる暴君ハイナウから聯想の絲はブレスチアを經てヴェローナの町に導かれ、他の聯想の絲は嗄れ聲の墓掘動物（Totengräbertier）――ヴェロニカを呪ふ言葉の觀念――この考への絲は墓碑の考への思ひ泛ぶ事をも限定する――を經て髑髏及び私の無意識界に依つてひどく罵倒されて居るヴェロニカの不快なる機官に迄進むのである。このヴェロニカは匈牙利と伊太利の自由戰爭の後の墺太利の將軍の樣にこの家にじやじやばつてゐたのであつた。』

『ルチェルンに就いてはヴェロニカが主人達と一緒に近くにある湖（フィアワルドステッテルゼー Vierwaldstättersee）のそばで過した夏に就いての考へが聯想される。「瑞西衞兵」（Schweizer Garde）に關しては、彼女が子供等のみならず家庭の大人達を壓制し、女衞兵（Garde

Dame）の役目をする事に滿足を感じてゐたと云ふ追想が關聯して居るのである。』

『私はヴェロニカに對する私の反感は――意識的には――夙くに克服された事である事を强調するものである。彼女はその後――彼女に好都合な事だが――彼女の外觀と態度を改めた。從つて私は彼女に對して正しい親しみを以て對する事が出來た。――勿論さう云ふ機會は滅多にはなかつたが――私の無意識界は然しながらいつもの樣に一層頑强にこれらの印象に固着した。私の無意識界は遲れ馳せであり、又物事を根に持つ性質のものであつた』

『チュイルリアンは、一層年とつた佛國婦人たる第二の人物を諷示してゐるやうに思はれる。この婦人はこの家の婦人連を多數の機會に於て實際に守護してゐた。そして大人からも子供からも尊敬され、又多少恐れられてゐた。私は暫しの間佛蘭西語の會話に於て彼女の弟子（エレーヴ élève）になつてゐた。「エレーヴ」なる言葉に就いては、私が嘗てこの家の主人の義兄弟を北ボヘミアに訪ねてゐた頃、その地方の住民が同地にある林科大學の學生（Eleven）の事を獅子（Löwen）と綽名してゐたのを大笑ひした事を思ひ出すのである。この愉快なる追想もまた「ヘエーネ」（印度狼）（譯者註、Hyäne には「殘忍刻薄なる女」の意味もある）よりして獅子（Löwen）への轉移に關與して居るものと思はれるのである』

(11) 次の例もまた現在或人を支配して居る自己複合體（Eigenkomplex）が隨分懸け離れた處に

於て「名の忘却」を惹起する事を示すものである。

『六箇月前にシチリエン Sizilien（シシリー島）に一緒に旅行した老若二人の男が當時の愉快にして意義深かつた日の事どもを語り合つた。「ゼリヌント Selinunt への遠足に行く前に一泊した場所は何といふ處でしたでせう、カラタフィニ Calatafini ぢやなかつたかしら?」と若い方のが尋ねた。年とつた方のがこれを否定して「確かさうではなかつたでせう。私も其處に泊つた時の事は細大洩らさず記憶してゐるけれども、矢張りその名を忘れました。私は他人が或る名を忘れたのを見ると、直ぐにその忘却が傳染する性分です。一緒になつてその名を思ひ出さうぢやありませんか? ところで私にはカルタニセッタ Caltanisetta といふ名以外のものは思ひ泛びません、而もそれは確かに當つてゐません」と云つた。「いえ、その名はヴェー W といふ文字で始まつて居るか、或はその名の中にヴェー W といふ字が入つてゐます」と若い方が云つた。年とつた方は「伊太利語にはヴェー W といふ字はありませんよ」と注意した。「私も勿論フワウ V といふつもりでした、私の國語で習慣になつてゐるものだからヴェー W と云つたに過ぎなかつたのです」と若い方が云つた。年とつた方はフワウ V なる字が含まれてゐたといふ事に反對して「私はシシリアの地名を澤山忘れてしまつたものと見えます。」さあ試して見ませう。例へば昔エンナ Enna と云つた高い場所は何と云つたつけな?――ああ私は思ひ出しました。

カストロジョヴァンニ Castrogiovanni と云ふんです」と云つた。次の瞬間に若い方の人が又忘れられた名を見出した。

彼はカステルヴェトラノ Castelvetrano と呼び、自分が曩に主張したやうにフワウ V と云ふ字がその中に證明された事を喜んだ。老人の方は尙ほ暫くの間は、確かにさうだといふ感じがしなかつたが結局この名を承認した。そして彼は何故にこの名が彼に忘れられたかと云ふ事の詳細なる說明を與へねばならなかつた。彼は考へた。『確かにこの名の後半なる vetrano がヴェテラン Veteran（老兵）を想起せしめるからだ。私は自分の年老い行く事を考へる事を好まず、その事を考へさせられる時には奇妙な風に反應する事を知つてゐる。例へば私は近頃年齡に不似合な目立つた服裝をしてゐる私の尊敬して居る友人に向ひ、彼が「靑年時代を夙く過して仕舞つてゐる」と云ふ事に就いて訓誡を與へた。何故ならばこの男は、以前私に散々お世辭を云ひ「自分は最早若い人ではない」と云つたことがあつたからである。私に於てカステルヴェトラノなる名の後半に對して抵抗があつたから、この名の前半がカルタニセッタなる代償名になつて現はれた事が判ります』――「そんならカルタニセッタ Caltanisetta なる名そのものは？」と若い方の人が尋ねた。――「それは若い女の愛稱呼として、いつも私にあらはれるものです」と年とつた方が白狀した。

『暫時の後、年とつた方が附け加へた。さう云へば「エンナ Enna に對する名も勿論代償名であつたのです。そして今合理化作用によつて現はれた名カストロジョヴァンニは、忘れられた名カステルヴェトラノが「ヴェテラン」(老兵)卽ち「老」と云ふ事を想起せしめると同樣にジョヴァン Giovane――ユング Jung (若い) を想起せしむるのです」と』

『斯くして年とつた方の人は自分の「名の忘却」の理由を說明したものと信じたのであつた。如何なる動機からして、若い方の人が同じ缺落現象を生じたかといふ事は硏究されずに終つた』

『名の忘却』の動機以外にその心的機制もまた吾人の興味を向けるだけの價値がある。多數の場合に於て、名はそれ自體が斯くの如き動機を呼びさますのではなく、この動機の向ふ或る他の名と同音若くは類音であるといふ點に於て、輕く接觸する事によつて忘れられるものである。吾人は條件の斯くの如き弛緩によつて、この現象が一層起り易くなる事を理解する事が出來る。卽ち次の諸例に於て然りである。

(12)ドクトル　ヒッチマン Dr. Hitschmann の報告例。N氏は書店名キルホーフェル　ランシュブルグ Gillhofer & Ranschburg を或る人に告げようとした。この書店名は平生は彼に非常に云ひ易かつたに拘らず、如何に考へてもランシュブルグといふ名のみしか思ひ泛ばなかつた。この事に輕い不滿を感じた彼は家に歸り、旣に寢てしまつてゐたらしい彼の弟に書店名の前半を

尋ねたほどに、この事が彼に重大な事のやうに思はれたのであつた。弟は躊躇せずにその名を彼に告げた。Z氏には直ちにギルホーフェルに次いでガルホーフ Galhof といふ語が思ひついた。ガルホーフへは彼は數箇月前に魅力ある女と一緒に想ひ出多い散策をしたのであつた。少女は彼に記念のためとて或る品物を贈つた。それには、「樂しかりしガルホーフ散步の時を記念して」と記されてあつた。この「名の忘却」の起る前の或る日、外見上偶然的にこの記念品は抽斗を急に閉づる際にZ氏によつてひどく壞はされたのであつた。この事は症候行爲の意義をよく知つてゐたZ氏につよい罪惡感を感ぜしめたのであつた。彼はこの頃この婦人に對して兩極性の感情狀態にあつたのである。卽ち彼は一面この婦人を愛してはゐたが、彼女の結婚の希望に對しては躊躇の態度を持してゐたのであつた。(Internat. Zeitschr. f. Psychoanalyse, I, 1913.)

(13) ドクトル・ハンス・ザックス Dr. Hans Sachs の報告例。「ゲヌア Genua (伊太利國ゼノア) 及びその近郊の事を話してゐた或る青年はペグリ Pegli といふ場所をも云はうとしたが、彼はこの名を非常に骨折つて考へた擧句、やつとの事で想ひ出す事が出來たのであつた。歸宅の途上、彼は平生非常によく知つてゐるこの名の苦しかつた脫落 (忘却) の事を考へた。そしてその際非常によく似た音を持つて居るペリー Peli なる語を聯想したのであつた。彼は南海島嶼の一つがペリーといふのであり、其處の住民が一二の奇妙な習慣を保存してゐる事を知つてゐた。

彼は或る人類學の書物でこの事を讀み、その際この發表を自分の假說に利用しようと企てた。次いでペリーといふのは、彼が興味と愉快を以て讀んだ或る小說卽ちラウリッヅ・ブルウン Laurids Bruun の「ファン・ツァンテン Van Zanten の最も幸福なる時代」の舞臺になつてゐた事が思ひ泛んだのであつた。——この日、殆ど絕え間なく彼の念頭にあつた考へは、その日の朝彼が自分の大切に考へてゐた婦人から受取つた手紙に關聯してゐた。この手紙は彼が約束してゐた會見をやめねばならなくなるかも知れぬといふ事を彼に氣遣はせたのであつた。不快なる一日を過した後、彼は夕刻もう何時迄もこの不快な考へに苦しんでゐないで彼が行く豫定になつて居り、非常に價値あるものと考へてゐた社交を、出來るだけ愉快に樂しまうといふ決心を以て出掛けたのであつた。ペグリといふ語によつて、彼のこの計畫がひどくおびやかされた理由は明らかである。それはペグリとペリーとが發音の上に於て密接な關係があつたからである。然しながらペリーといふ語が、彼の人類學上の興味から自己關係の意義を得るに至つた爲、この語は獨り「ファン・ツァンテンの最も幸福なる時代」のみならず、彼自身の「最も幸福なる時代」從つて又彼が終日持つた不安と心配をも具體化させた事が判つたのであつた。この簡單なる說明が、婦人からの第二の手紙により、疑惑が轉じて不日逢ひ得ると云ふ嬉しい確實さに變化した後に、初めて出來た事は特異なる事と云ふべきである。

この例によく似たネルヴィなる地名が思ひ出されなかつた實例（例(1)）を思ひ合はす時、私共には一語の二義が、二つの言葉の音の類似によつて如何に置き換へられるかと云ふ事が分るのである。

(14) 一九一五年伊太利との戰端が開かれた時、私は平生容易に思ひ出し得る多數の伊太利地名が、急に自分の記憶から除去された事を觀察する事が出來た。多數の他の獨逸人と同じやうに、私は休暇の一部を伊太利に過すことを習慣にしてゐた。そしてこの多數の「名の忘却」は、以前の贔屓に代つて起つた伊太利に對する無理のない敵愾心の表示である事は疑ひの餘地がなかつた。この直接の動機による「名の忘却」の外に、間接のものも現はれ、これも同じ影響に歸すべきものであつた。私は伊太利以外の地名の忘却の傾向をも示した。そしてこれらの出來事を研究するに當り、それらの地名が敵國の禁ぜられたる名と何かしら遠い音の類似によつて關聯してゐる事を見出したのであつた。例へば私は或る日メーレン M hren（チェッコスロヴァキアの一部）の都市ビザンツ Pisenz の名を思ひ出す事に苦心した。つひにこれが自分に思ひついた時、私は直ぐにこの忘却がオルヴィエトーのパラッツォー　ビザンツィ Palazzo Bisenzi に關係してゐる事を知つた。この「パラッツォー」(宮殿)にはホテル　ベル　アルティ Hotel Belle Arti と云ふホテルがあり私はオルヴィエトーに於ける滯在には此處に泊つたのであつた。勿論最も愉快なる

記憶が變化したる感情的態度の爲に最も強く障碍されたのであつた。

種々雑多なる企圖の爲に「名の忘却」なる失錯作業が起り得る事を一二の實例によつて思ひ起す事は有益な事である。

(15) アー・ヨット・ストルフェル A. J. Storfer の分析例（意圖の忘却を保證する爲の名の忘却）。「バーゼル市の某婦人は、或朝ベルリン生れで彼女の幼友達であり、目下新婚旅行中であつたセルマ・イックス Selma X が旅行の歸途、バーゼルに到着したといふ報知を受けた。伯林の友はバーゼルには一日だけ滯在する筈になつてゐた。それでバーゼルの女は直ちに「ホテル」に急いで行つた。二人が別れる時、午後には今一度會ひ、伯林の女が出立するまで一緒にゐようと約したのであつた。——午後になつてバーゼルの女は會見の事を忘れてしまつた。この忘却の原因は判らないが、この狀態（新婚の幼友達との會合）には、再度の會合を妨げる種々の定型的なる限定があり得るのである。この例に於て面白い事は、この失錯作業の無意識的安全裝置の意味を持つ第二の失錯作業にあるのである。伯林の女と再會すべき筈の時間に、バーゼルの女は或る社交上の集ひに行つてゐた。話はウヰーンのオペラ歌手クルツ Kurz の近頃行はれた結婚のことに及んだ。バーゼルの女はこの結婚を非難した。併し彼女が女歌手の名を云はうとした時に、名(フォルナーメ)（姓氏の前の）が思ひ出せないので大變困つた。（姓が一綴音から成つてゐる場合には、名を一緒に云

ふ事になつて居るのは人の知る所である）バーゼルの女はクルツ歌手の唱ふのを度々聽いた事があり、從つてこの人の名全體は平生彼女に熟知されてゐたから、この記憶の薄弱なる事には一層苛々したのであつた。他の何人かがこの忘れられた名を云はぬ内に話頭は他に轉ぜられた。――同じ日の夕方、このバーゼルの女は午後の仲間と一部分同樣な仲間の人々と一緒になつた。偶然にも再びウヰーンの歌手の結婚談が出て、彼女には、この度は難なくセルマ・クルツ Selma Kurz といふ姓名が出て來たのであつた。直ぐにこれに彼女の感嘆詞が續いた。「嗚呼!! 今私は思ひ出した。私は今日午後わが友セルマとの約束があつたのだ」と。彼女が時計を一瞥したところ時計は友が既に出發した筈の時を示してゐた（Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, II, 1914）

私共にはこの立派な實例をその凡ての關係に於て正しく評價し得るだけに十分な用意が出來てゐないであらう。次の例はもつと簡單であつて、これでは名前ではなくて、外國語の一つの言葉が、その時に存した動機からして忘却されたのであつた。（私共は同じ過程が固有名、名（姓氏の前の）外國語の單語或は言葉の配置（文句）等の何れに於ても、現はれる事を已に認めたのである）この場合に於ては、一靑年が彼に望ましき、ある行爲への動機を見出すためにゴルド Gold（金）に對する英語（gold ……それは獨逸語の字と同じものである）を忘れたのであつた。

(16)ドクトル　ハンス　ザックス Dr. Hans Sachs の分析例。「或る青年が同じ下宿で自分に氣に入つた英國婦人を知つた。彼が彼女と知合ひになつた最初の晩、彼が可なりよく操り得る彼女の國語で話して居て、金 Gold と云ふ字に當る英語を用ひようとした時、非常に骨折つたに拘らずこの語が思ひ泛ばなかつた。これに反し彼には佛語のオール or 羅典語のアウルム Aurum 希臘語のクリソス Chrysos 等の代償語が頑强に迫つて來た。彼はこれらの言葉が自分の求むる語との間に何等の類似點をも持つてゐない事を確かに知りながらも、これを斥けるに骨が折れたのであつた。終に彼は自分を理解せしめる爲に、婦人が手に嵌めてゐた金の指輪に觸れる外なかつた。彼は永い間かかつて探した金と云ふ字の英語が獨逸語と同じ發音を有し、gold である事を婦人から聞かされて恥ぢ入つたのであつた。斯く忘却のお蔭で手を觸れる事が出來た事は戀人同志が熱心に用ひ、且つ他の機會にも可能な把握慾或は接觸慾の自由な滿足を許したのみか、求婚の見込みを表明する事を可能にした點に於て大きな價値があつた譯である。婦人の無意識界はそれが話相手に對して特に同情的な態度を持して居る場合には、無難な假面の背後に隱れて居る忘却の愛慾的な企圖を推量するであらう。彼女が接觸を受け容れ、その接觸の動機を嘉納する有樣は、男女兩方の側に無意識的ではあるが、丁度今始まつた「いちやつき」が成功するや否やの見込みを付けるのに非常に意義深い手段方法となるのである。

(17)私はヨット・シュテルケ J. Stärke によつて尙ほ一つの固有名忘却並に其の想起の興味ある觀察を報告しよう。この觀察は名の忘却と同時に「コリントの花嫁」(Braut von Korinth)の例に於けると同樣に、或る詩の言葉の配置の誤りを伴つてゐた。

老法律家であつて又言語學者なるツェット Z 氏は或る會合の席上に於て彼が大學生時代獨逸にゐた頃一人の大學生を知つて居り、この大學生は非常に馬鹿であり、その人の馬鹿さ加減に就いては彼は多數の逸話を知つてゐるといふ事を話した。併し彼はこの大學生の名を思ひ出す事が出來ず、この名がヴェー W といふ字で始まつてゐたと信ずると云つたが、後にはこれを取消した。彼はこの馬鹿な大學生が後に酒屋になつた事を思ひ出した。次いで彼はこの大學生の馬鹿さ加減に就いての逸話を語り、今一度その人の名を思ひ出せないのを不審がり、「彼が何度教へてやつても羅典語をどうすれば大學生の腦裏にしみ込ませる事が出來るのかが判らない程の馬鹿者であつた」と語つた。一瞬間の後にツェット Z 氏は求むる名が……マン man を以て終つて居た事を思ひ出した。其處で私共はマン man を以て終る他の名が思ひ泛ぶかと尋ねたところ、彼はエルドマン Erdmann と云つた。——「それは一體何人ですか?」と尋ねたところ、彼は「それは矢張りその當時の大學生であつた」と答へた。——彼の娘は併し大學教授の中にエルドマンといふ人があると云つた。詳しい說明をきいて見るとこのエルドマン教授は近頃ツェット Z 氏が

送つた論文を短縮した形で自分の編輯してゐる雜誌に掲載させ、その上その論文を掲載する事に多少不同意であつた事やツェットＺ氏がこの事を可なり不快に感じてゐた事が判つて來た。（尙ほ私は後になつてからツェットＺ氏が往年現在エルドマン教授が講義してゐると同じ科の教授になるべき望みがあつた事、從つてこの點からもエルドマンといふ名は多分彼の急所を突くものであつたらうといふ事を聞く事が出來た）

この時急に彼にこの馬鹿な大學生の名が思ひ泛んだ。それはリンデマン Lindemann !! と云ふのであつた。彼は旣にこの名がマン man で以て終つて居る事を前に思ひ出したのであつたからリンデ Linde は一層永く壓迫された儘になつてゐた譯である。この「リンデ」に就いて何か彼に思ひ泛ばないかと尋ねたところ、彼は最初の間は全然何も思ひつかないと云つたが、それにしても何か思ひ泛びさうなものだがと私が問ひつめたのに對して、彼は上方を眺め、手で空中に身振りしながら「さあ、リンデ（菩提樹）……は立派な木ですね」と云つた。その際彼にはそれ以上思ひ泛ばなかつた。人々は默し、各自は讀書やその他の仕事を續けたが、終に數分時の後ツェットＺ氏は夢見るやうな調子で次の詩句を口ずさんだ。

Steht er mit festen
Gefügigen Knochen

Auf der Erde,
So reicht er nicht auf,
Nur mit der Linde
Oder der Rebe
Sich zu vergleichen

（堅くして而かもしなやかなる骨もて地上に立つてゐるが、
彼は菩提樹若しくは葡萄の樹に比肩する事が出來ない）

私は大喜びで叫び聲を發した。「其處にエルドマンがあらはれてゐます」『「地上に立つかの男卽ちエルドマン Erdemann 或はエルドマン Erdmann は「リンデ」（菩提樹）（リンデマン Lindemann）或は「レーベ」（葡萄の樹）（Weinhändler 酒屋）と自らを比較するに十分ではない」と云ふのだ。換言すれば「かのリンデマン……後に酒屋になつた馬鹿な大學生は旣に馬鹿者であつた。併しエルドマンは一層の大馬鹿者であり、このリンデマンとさへ比較されない」と云ふ譯でせう』と私が云つた。——無意識界に斯くの如き嘲笑或は罵詈の言辭が保持されてゐる事は通常の事である。だから私は「名の忘却」の主なる原因は最早見出されたものと思つたので

あつた。

私は上に引用された行は何の詩から來て居るかと尋ねた。ツェットZ氏はそれがゲーテの詩であると云ひその詩は

Edel sei der Mensch
Hilfreich und gut!
（氣高かれ人よ!! 仁慈にして善良なれ!!）

に始まり、尙ほその先きの方に

Und hebt er sich aufwärts,
So spielen mit ihm die Winde.
（そして彼は高く聳え立つて居り、
爲に風は彼に戯れ遊ぶ）

と云ふ處があると信ずると彼は云つた。

次の日、私はゲーテのこの詩を探し出した。そしてこの例が最初考へたよりも一層面白く、そして又複雜なものである事が判つたのである。

(a)引用された初めの方の行は次のやうになつて居る。（上記のものと比較せよ）

Steht er mit festen
Markigen Knochen
（彼は堅くして强き骨
を以て立つて居るが……と）

だからして Gefügigen Knochen（しなやかなる骨）は可なり異様な聯結である。併し私は
これに就いては深く立ち入らうとは思はない。

(b) この節の次の行は左記のやうになつてゐる。

Auf der wohlbegründeten
Dauernden Erde,
Reicht er nicht auf,
Nur mit der Eiche
Oder der Rebe
Sich zu Vergleichen.
（彼は堅き骨もて
能くかためられ、永久に變らぬ

大地の上に立てども、
ただ槲の木或は葡萄の木に
自分を比するに足らず）

即ち全詩の中にLinde（菩提樹）といふ字は全然出てゐないのである!! Eiche（槲）をLinde（菩提樹）を以て置き換へたのはエルデ Erde ——リンデ Linde ——レーベ Rebe（大地——菩提樹——葡萄の樹）なる洒落（ひつかけ言葉）を可能にする爲に（彼の無意識界に）起つたに過ぎないのである。

(c)この詩は,Grenzen der Menschheit'（人間性の限界）と云ふ題で神の萬能と人間の微力との對照を含んで居るものである。最初の處が、

Edel sei der Mensch,

Hilfreich und gut!

となつて居る詩は二三頁先の處にある別の詩である。この詩の題はDas Göttliche'（神性）といふのであり、矢張り神と人間に就いての考へを含んで居るものである。この點に關しては深く立ち入つて研究した譯ではなかつたから、私は矢張り「生と死」「現生涯と永劫」及び「自分の弱い生命と將來の死」に關する考へがこの例の成立に際して一定の役を演じたと云ふ事を高々推察

し得るに過ぎない。*

＊この例は De invloed ons onbewuste in ons dagelijks he l ven, Amsterdam 1916 なる標題の下に出て居る本書の和蘭版から取られたものである。獨逸語では Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, Iv, 1916, S. 43. に印刷されて居る。

是等の諸例中或るものに於ては「名の忘却」を説明するために微妙纖細なあらゆる精神分析上の技術が要求されるのである。斯くの如き研究についてこれ以上の事を知りたいと希望する人には私はイー・ジョーンズ E. Jones（ロンドン）の報告を紹介する。この報告は英文から獨文に翻譯されたものである（精神分析學中央雜誌第二卷（一九一一年）所載「名の忘却の一例に於ける精神分析」）。

(18) フェレンチー Ferenczi は「名の忘却」は又「ヒステリー」症狀として來り得ると云つてゐる。この場合には失錯作業の心的機制から遙かに懸け離れた機制が現はれるのである。兩者の區別が如何に考へらるべきであるかは彼の云ふ處によつて明らかにされるであらう。

『私は今一人の老孃患者を治療中である。この患者は外の事に對しては記憶力が良好であるに拘らず、彼女が始終用ひて居り、從つて熟知してゐる固有名が思ひ泛ばないのである。分析の結果は彼女がこの症狀によつて自分の無智を證據立てようとして居る事が判つたのである。彼女の

この無智の示威的表明は元來彼女に高等教育を授けなかつた兩親に對する非難の現はれに外ならない事が明らかである。尙ほ彼女が示した强迫性の綺麗好き(所謂「主婦精神病」)もまた一定度迄同じ源泉から來て居たのである。卽ち彼女は凡そ次の如く云はうとして居る譯である。「あなた等(兩親)は私を女中に仕立てておしまひになつたのだ」と』

若し私が後に出て來る多數の題目に向つて問題になる凡ての觀點をこの第一の題目の處で說明する氣ならば「名の忘却」の實例をもつと殖し、それに就いての論議をもつと續けて行く事は出來るのだが、私はさうしないで此處に述べた分析の結果を二三の文章に總括しようと思ふ。

「名の忘却」(名の一時的忘却で「度忘れ」(Entfallen)と云つた方がよからう)の心的機制はその瞬間には意識的でない不明な觀念列によつて名の故意の再生が妨げられるのを云ふのである。障礙された名と障礙する複合體との間には最初から關係がある事があり、又時には人工的に見える道程を辿つて表面的な外聯合によりこの關係が作られるものである。

障礙のもとになる複合體の中では自己關係(Eigenbeziehung)(個人的・家族的・職業的)が最も有效なものである。

意義多樣な爲に二三の觀念領域(複合體)に關聯し屬して居る名は、一つの觀念列と關係(聯絡)しようとする際に一層强力な別の複合體に對する關係の爲に障礙される事屢〻である。

これらの障礙の動機の內で追想による不快感の喚起を避けようとの企圖が最も目立つてゐる。

吾人は大體に於て「名の忘却」の二つの主要な場合を區別する事が出來る。卽ち名そのものが不快なる事に觸れる場合か、或は名が同じ作用を有する他の事柄に關係を持つ場合である。從つて名はそれ自身の爲、或はその遠近種々なる聯想關係の爲に再生を妨げられる事になるのである。

これらの一般的なる命題を通觀すれば吾人の失錯作業の中で「名の一時の忘却」は最も屢々見られるものである事を理解する事が出來る。

(19) 併し私はこれを以て、この現象の凡ての特徵を書き盡したものとは到底云へないのである。私は尙ほ「名の忘却」は非常に傳染性のものである事を指摘したいのである。對話して居る二人の內一方の人が或名を忘れたと云つただけで、この名を第二の人にも忘れさせるに十分である。併し忘却が感應によつて起つた場合には、忘れられた名が再現する事も容易なものである。嚴密に云へば集團心理學上の現象に屬するこの集合性忘却（Kollektives Vergessen）は未だ精神分析的研究の對象にはなつて居ないのである。唯一の併し特に優秀な實例に於てテオドル・ライク Theodor Reik はこの注意すべき出來事に立派な說明を與へる事が出來た。*

* Üb r koll. ktives Vergessen. Internat. Zeitschr. f. Psychoanalyse, V. 1920. (Auch in Reik: Der eigene nd de· fremde Gott. 1923)

『哲學科の女大學生二名を混へた大學卒業者の小さい集會に於て、或人が基督教の起源が文化史並に宗教科學に課する多數の問題に就いて發言した。この話に加つてゐた若い婦人の一人は、近頃讀んだ英語の小說中に、當時を動かした多數の宗教運動の有樣を面白く書いてあつた事を思ひ出した。彼女はこの小說には基督の全生涯が出產の時から死ぬ時まで敍述されてあつたと附け加へた。併し彼女に小說の名は思ひ泛ばなかつた。（而かもこの書の裝幀及標題の印刷像に對する視的追想は非常に明瞭であつた）座に居た男子の內の三人も、この小說を知つてゐると主張した。而も不思議にも彼等にもこの名は思ひ出せなかつた』この若い婦人のみがこの「名の忘却」を說明するための分析を受けた。この書の標題はベンフール Ben Hur（ルーイス・ウォーレース Lewis Wallace 著）と云ふのであつた。彼女の代償的思ひ付きはエクセホモ Ecce homo ——ホモスム homo sum ——クォヴァーディス quo vadis?（見よ！ まあ何と云ふ人間だらう！——予は人間なり——何處へ行く（聖ペテロの語））等であつた。この少女はこの名が彼女及び凡ての若い女が——若い男の居る處では尙更ら——用ふる事を欲しない言葉（譯者註、Hur は亞剌比亞語であつて、これから來てゐるフリス＝フルディンメム Huris Huldinmem は美・愛嬌・歡樂を司る三女神を云ふ。又フーレ Hure＝娼婦は多分同じ語源から來てゐるものと思はれる）を含んで居た爲に忘れたのである事を自ら理解して居た。この說明は非常に興味ある分析によつて一層深められたのであつた。曾て觸れられた關係に於てはホモ homo の譯語たる Mensch（人間）さへも不名譽なる意味を有す

る事になるのである。そこでライク Reik は次の如く推論したのである。この若い女はかの如何はしい標題を若い男達の前で話す事は彼女が自分の人格にふさはしからず、且つ苦痛な事として拒否してゐる願望を自ら承認する事になるものとしてこの言葉を取扱つたのである。箇言すれば無意識的には彼女は「Ben Hur」を口にする事を性的な申出でをする事と同一視したのであり、從つて彼女の忘却はこの種の無意識的誘惑に對する防衞機轉に相當するのである。吾人はこれに類似の無意識的過程が若い男達の忘却の原因となつたものと假定すべき理由を持つのである。彼等の無意識精神は少女の忘却をその眞の意味に於て理解し、これを……謂はば分析したのである。……男達の忘却は女のこの拒否する態度に對する顧慮を現はして居るのである。……男達は話對手の女が突然に示した記憶薄弱によつて、彼等が無意識的によく理解し得る明らかな「目くばせ」を與へられた事になるのである。

又連續性の「名の忘却」なるものもある。この場合には一聯の名が記憶から除去されるのである。或る一つの忘れられた名を見出さうとして、この名と密接な關係ある名を素早く引捉へようとすると我々の手がかりとして新らしく探されるこの名も逃げて行く事は稀ではないのである。かくして忘却は容易に除き得ない。障礙の存在を證明するかのやうに一つの事より他の事に飛火して行くのである。

第四章　幼兒期記憶及び隱蔽記憶

一八九九年精神病學神經病學月報誌上に發表された第二論說に於て、私は意外なる領域に於て私共の記憶（追想）が偏頗であり、故意によつてなされる性狀ある事を證明し得た。私は人の幼兒期記憶が、屢〻どうでもよい緊要でない事柄を保存し、而も重要にして印象深く感情に滿ちた印象が屢〻—いつもの事ではない事は確かである—成人の記憶に少しの痕跡をも殘してゐないといふ著しい事實から出發した。記憶は與へられた印象の中から選擇をするものであるといふ事は既知の事實であるから、この場合私共は兒童期に於けるこの選擇は知的成熟の後とは全然別個の原則に從つて起るといふ假定に直面してゐるやうな氣がするのである。併し詳細なる研究は、この假定が不必要な餘計な事であることを證明する。重要ならざる幼兒期記憶はその存在を移動過程に負ふものであり、彼等は他の實際に重要なる印象再生の代理形成であり、この印象の追想は精神分析をすれば彼等幼兒期記憶から發現せしめ得るのであるが、この印象の直接の再生は抵抗によつて妨げられてゐることを明らかにしたのである。彼等幼兒期記憶は彼等の存在を彼等自己の內容にではなく、他の壓迫されたる觀念との聯想的關係に負ふのである。從つて彼等は余の命

名に成る隱蔽記憶（Deckerinnerungen）と名づけてよいものである。

上記の論文では私は隱蔽記憶の關係や意義の種々相に輕く觸れただけであつて、決して委曲を盡さなかつたのであつた。あの時私は詳細に分析された實例に於て、隱蔽記憶とそれに隱蔽された內容との時間的關係の特異性を取り立て論じたのであつた。卽ちこの實例では隱蔽記憶の內容は小兒期初年に屬して居り、而もこの隱蔽記憶によつて代表された觀念經驗（これは殆ど無意識的に止まつてゐた）は、當人の一層後の生活時期に屬するものであつた。私はこの種の移動を遡反性或は逆行性隱蔽記憶（rückgreifende oder rückläufige Deckerinnerungen）と名づけた。私共は多分この種の場合よりも屢〻反對の關係に遭遇するであらう。卽ち最近の重要ならざる印象が隱蔽記憶として存續して居り、この印象は直接の再生に對して抵抗ある以前の經驗との聯想によつて、はじめて記憶に取り立てられるのである。これは先取性或は進行性隱蔽記憶（vorgreifende oder vorgeschobene Deckerinnerungen）である。この場合には記憶に干與する主なるものは、時間的關係に於て隱蔽記憶の彼方にあるのである。最後に第三の場合卽ち隱蔽記憶が單に內容上のみならず、又時の連續關係に於て隱蔽記憶によつて隱蔽されてゐる印象とむすび付いてゐる場合も起り得る譯である。之は同時性或は接續性隱蔽記憶（gleichzeitige oder anstossende Deckerinnerungen）である。

私共の記憶の如何に大なる部分が隱蔽記憶の範疇に屬するかといふ事、及び隱蔽記憶が種々なる神經症性考慮過程に於て如何なる役目をなすかといふ事に就いては、私は當時深く立ち入つて評價しなかつたが此處でも又それはしないでおかうと思ふ。ただ間違つた囘想を伴ふ「固有名の忘却」と隱蔽記憶の形成とが同種のものである事を强調する事は必要である。

一寸見ると、兩方の現象の相違點は類似點よりも遙かに顯著である。前者は固有名に關する事であり、後者は現實或は思考の上に於て經驗された完全な印象である。前者は記憶の官能の明らかなる失敗であり、後者は私共に奇妙に見える記憶作業である。前者は一時的の障礙であり、今忘れられた名は以前には百度も正しく再生された事であり、又明日からも同樣であり得るのであるが、後者は缺損を起す事のない永續的の所有物である。何となれば重要ならざる小兒期の記憶は、我々の生涯の永い部分を通じて我々に伴ひ得るからである。この兩方の場合に於て謎は全然別な處にあるやうに見えるのである。我々の科學的好奇心を刺戟するものは前者に於ては忘却であり、後者に於ては保存されてゐる事である。ところで少し深く觀察すると、私共は心的材料及び兩方の現象の持續時間は違つて居るけれども、一致點は遙かに多いのを認めるのである。前者も後者も共に追想の誤りであり、正しく再生さるべき筈のものが記憶によつて再生されず、その代償として他の何かが再生されるのである。「名の忘却」の場合にも代償名の形に於ける記憶の

作用はあるのであり、隱蔽記憶の形成は別の重要なる印象の忘却に基くのである。兩方の場合に於て知的感覺は、或る障礙の干渉が其處にある事を私共に報ずるのである。ただそれが各〻の場合に別な形にあらはれるのである。即ち「名の忘却」の場合には私共は代償名が本當の名でない事を知り、隱蔽記憶では私共はこの記憶を持つてゐることを不思議に思ふのである。從つて精神分析の結果、兩方の場合に於ける代理形成が同じく表面的聯想に依る移動機制によつて起ること が證明されるならば、材料、持續時間及び兩方の現象の覘ひ處の異なること等が却つて私共が或る重要にして普遍的價値ある事實を發見したといふ期待を一層強くする事に役立つのである。この普遍的價値ある事と云ふのは再生作用の休止及び誤謬が私共の想像以上に屢〻或る一方の記憶を促し而かも反對に他の一方の記憶を邪魔する事に努力してゐる偏頗な要素或は傾向の干渉によつて起るものであるといふ事である。

小兒期記憶の問題は非常に重要であり興味深いものと思はれるから在來の觀點以上に出づる一二の考へを此處に附け加へておかう。

一體記憶は小兒期のどれほど早い時期まで達し得るものであらうか? 私はこの問題に關しての一二の研究を知つてゐる。例へばヘンリ V. et C. Henri* 及びポットウィン Potwin** 等のそれである。これらの研究の結果は、被研究者によつて大なる個人的差異があり、或る人は彼等

の最初の記憶を生後第六箇月目に持つて行き他の人は滿六歳どころか滿八歳迄の彼等の生活に就いては何も知らないといふ事になつてゐる。併し小兒期追想の狀態に於けるこの差異は何に關係するか、又この差異に如何なる意義を歸すべきであるか。この問題に向つての材料を集團尋問によつて得る事は明らかに不十分であつて、被尋問者も一緒になつてこの材料を更らに研究する事が必要である。

＊Enpuéte sur les premiers Souvenirs de l'enfance. L' année psycholog'que, III, 1897.

＊＊Study of early memories. Psycholog. Review, 1901.

私共は幼兒期記憶缺損（Infanti e Amnesie）即ち私共の生活の初年に向つての記憶の缺損の事實を餘りに冷淡に考へ、これをば奇妙なる謎と考へることを怠つてゐると思ふ。私共は四歲位の子供が非常に高い知的作業、非常に複雜なる感情の動きを經驗し得る事を忘れてゐる。而も後年の記憶はこれらの心的過程を殆ど全く保存してゐないことを實際不思議な事と思はなくてはならぬ筈である。特にこれらの忘れられた小兒期作業は、本人の發達に際して跡形もなく消失するものではなく、その後の生活に向つて一定の影響を及ぼすものと假定すべき凡ての理由あるに於ておやである。かく非常に有效なものであるに拘らず彼等は忘却されるのである。この事實は私共が今まで認識し得なかつた追想（意識的再生の意味に於ける）の特別なる條件が此處にある事

を指示するものである。この小兒期の忘却は―私共の新らしい認識に從へば―凡ての神經症的症狀形成の根柢をなすものと考へられる記憶缺損の理解の鍵を私共に與ふる可能性あるものである。

保存されてゐる小兒期記憶の內一二のものは私共によく理解されるが、他のものは不思議で譯の判らぬものである。兩方の種類の記憶に就いて一二の誤謬を訂正する事は困難ではない。或る人が保存してゐる記憶を分析的に調査して見ると、私共はそれが正しいといふ保證を與へ得ないものである事を容易に決定し得るのである。追想像の或るものは、確かに間違つて居り、或は不完全であり、或は時間的空間的に移動されてゐる。被研究者が彼等の最初の記憶が大體二歲位から來てゐるといふやうな事を云つてもそれは明らかに當てにはならないのである。間もなくその經驗の歪み及び移動を理解させる動機をも見出す事が出來るやうになり、又この動機は單なる記憶の不正確がこの記憶錯誤の原因ではあり得ない事をも明らかにするのである。後の生活時期から得られた強い力が、小兒期經驗の追想能力を一定の型に嵌めたのであつて、多分この同じ力が一般に小兒期の理解から私共を非常に遠ざけたのである。

人の追想は種々の心的材料に依つて起ることは人の知るところである。或る人は視像に依つて追想する、卽ち彼等の追想は視的特徵を有するのである。他の人々は自ら經驗したことの非常に不完全なる輪廓さへも記憶に再生する事が出來ないのである。私共は斯くの如き人を、シャルコ

ー Charcot の提議に從ひ、視官性の人（Visuels）に對立せしめて聽官性（Auditifs）及び運動性（Moteurs）の人と稱するのである。夢を見る際にはこの區別はなくなり、私共は凡て主として視像に於て夢みるのである。小兒期追想に於てもこの發達はとれて仕舞ひ後年の記憶が視的要素を缺く人々に於ても小兒期の記憶はくつきりした視的追想像として現はれるものである。即ち視的追想は幼兒性追想の型(タイプ)を保存するものである。私では早期の小兒期記憶のみが、視的特徵を有する記憶である。これは正に實物の如く造り上げられた光景であつて正に舞臺に於ける實演に比すべきものである。これら小兒時代の光景にあつてはそれがほんたうのもの、或は間違つてゐるものである事が判る場合でも、いつも自分の子供の時の姿がその輪廓と當時の服裝に於て見出される。これは不思議に思はれる事である。視官性の成人であつても後年の*經驗の追想に於ては最早彼等自身の像を見ないのである。小兒の注意が、彼の經驗に際して外的印象に向けられず、專ら彼自らに向けられるといふことを假定することは、私共の凡ての經驗に一致しない事である。私共が最も早期の小兒期追想であると稱するものは、實際の記憶の痕跡（Erinnerungsspur）ではなく、多數のその後の心的作用の影響を受けて改作されたものと考へられる記憶の痕跡を保有するものと假定せざるを得ないのである。個體の小兒期追想は斯くして一般的に隱蔽記憶の意義を得るやうになり、爲に傳說や神話に記載されてゐる各種族の小兒期記憶との間に著しき類似點

を示すやうになるのである。
　＊私は自分で手に入れた一二の調査の結果を基としてこの事を主張するものである。
　精神分析法によつて一定數の人々の精神を研究した人は、その研究に際し各種の隱蔽記憶の多數の實例を蒐集した。併しこれらの例を報告する事は、前述小兒期記憶と後の生活との關係によつて非常に困難にされるのである。小兒期記憶に隱蔽記憶の價値を持たせる爲めには、屢〻その本人の全生活史を描寫せねばならぬ事がある。次の立派な實例に於ける如く、箇々の小兒期記憶をその關係から拔出して發表し得る場合は非常に稀である。
　二十四歳になる或る男は、彼の五歳の時の記憶として次の像を保存した。彼は或る夏別莊の庭で叔母のそばに小椅子に腰掛けて居り、叔母は彼に文字を教へようと骨折つてゐた。mとnとの區別が難しいので何處で兩方を見別けるかを敎へて吳れと彼は叔母に賴んだ。叔母はmはnよりも一劃だけ、卽ち第三の線だけ多いのだと注意したと云ふのである―この小兒期記憶の確實性には疑ひの餘地はないのである。併しこの小兒期記憶は、後にこれがこの男兒の他の知識欲に對する象徵代表の役目を果すに適當になつたときに、初めてその意義を得るに至つたのであつた。何故なら彼が當時mとnとの區別を知りたかつたと同樣に、彼は後に男兒と女兒との區別を知りたいと骨折つた。そして又この叔母が彼の敎師になる事に同意してゐたらしい。ついで彼はこの區

別が似たものあり、男兒は女兒よりも矢張り一つの物だけ餘計に持つて居る事を見出した、そしてこの認識の際に、彼はこれに對應する小兒の知識慾に就いての記憶を呼び起したのであつた。

今少し後の兒童期よりも實例をあげよう。現在四十歲以上になつて居り、愛の生活に於てひどく制止されてゐる男は九人の同胞の最年長者であつた。一番末の妹が生れた時、彼は十五歲であつたのである。併し彼は母の姙娠してゐる處を一度も見た事がないと主張した。私がそんな事は信ぜられないと云つたところ、彼に次の如き記憶が泛んで來た。十一歲か十二歲の年、或る時彼は母が鏡の前で、急いで上衣の紐を解くところを見たと云ふのであつた。ついで彼は別に追及しないのに母が街路から家に入つて來て、不意に陣痛に襲はれたのであつたと云ふ事を附け加へた。上衣の紐を解く（Aufbinden）は然しながら出產（Entbindung）に對する隱蔽記憶である。この場合の如く言葉の懸橋（Wortbrücken）を用ふる事は他の例に於ても私共は遭遇するであらう。

何の意味もないやうに思はれた小兒記憶が、分析的研究によつて如何なる意義を得るやうになるかといふ事を私は唯一つの實例に於て示さうと思ふ。私が四十三歲の時、私が興味を私の小兒期記憶に向け始めた時、その以前から永い間に時々意識に上つて來たやうに思はれ、且つ相當信ずべき特徵によつて滿三歲以前に起つた事と思はれる光景が泛んで來た。私が駄々を捏ね泣き叫

びながら一つの箱の前に立つてゐる處であつた。この箱の扉を私の二十歳年上の異母兄が開いたまま持つてゐた。其處へ急に美しいすらりとした私の母が街から歸つて來たやうな風で室に入つて來たのである。これらの言葉で私はありありと見えた光景を言ひあらはしたのであるが、この光景にはその外に何等の手がかりもなかつた。兄がこの箱—この光景の最初の說明の時には、これは戶棚（Schrank）と云ふ事になつてゐた—を開かうとしてゐたのか、それとも閉ぢようとしてゐたのか、何故私が泣いたのか、母が來た事がこれと如何なる關係があるか、そんな事は全然判らなかつた。私はこれは兄が私をからかつてゐて、それが母によつて止められたところの記憶であると說明しようとした。記憶に保存されてゐる子供時代の場面に就いての斯くの如き誤解は珍しい事ではない。私共は或る一つの狀態を想ひ起すがこの狀態には中心がないのである。私共は一つの狀態の何の要素に心的重點をおいていいかわからないのである。ところで分析的努力はこの像の意外なる說明に私を導いたのである。私は母の不在に氣がつき、彼女が戶棚か或は箱の中に閉ぢ込められてゐるのではないかといふ疑ひを起し、その爲に兄に箱をあけて吳れとせがんだのであつた。兄が私の賴みを容れ、私は母が箱の中にゐない事が判つてから泣き出したのであつた。これは私の記憶に固執されてゐる要素であつて、其の後間もなく母が現はれ私の心配と憧憬とは靜められたのであつた。併し何故子供が不在の母を箱の中に探さうといふ觀念を抱くやう

になつたのであらうか? 同じ時分に見た夢にはぼんやりだが一家庭女教師の事が出てゐた。この女教師に就いては尙ほ他の記憶も保存されてゐた。例へば彼女が良心的に私が人から貰つた小さな貨幣を彼女に渡す事を常に奬勵してやらせた事などがあり、この事はそれ自體が後に起つて來た事に對する隱蔽記憶の價値を要求するものである。其處で私はこの場合分析作業を容易にしようと思ひ、今では老ひたる母にかの女教師のことを尋ねたところ私は色々の事を知つたのであつた。その中には、悧巧だが不正直なこの人が母の產褥の間に盛んに家內竊盜を働き、異母兄の告訴に依つて裁判に廻されたと云ふ事もあつた。この話は恰も光明に照らされたやうに私の子供の時の光景を理解させた。女教師が不在になつた事は私には大事件であつた。私はこの兄が多分彼女のゐなくなる際に、一役買つてゐる事を知り兄に向つて彼女が何處にゐるかと尋ねた。そして彼は不得要領に、又いつものやうに洒落半分に「彼女は箱の中に入れられてゐるのだ」(eingekastelt) と答へた。この答へを私は子供らしく解したがそれ以上何も知る事が出來なかつたので問ふ事は止めた。その後間もなく母が不在になつた時に私はこの意地悪い兄が、母を女教師と同じやうな目に遭はせたのではないかと邪推し、彼に箱を開けさせた事があつた。私は今や小兒期視像の說明に際して何故に母のほつそりしてゐる事が强調されたかといふ事をも理解する事が出來るのである。產後のほつそりした姿は私の目に立つ事に違ひなかつたのである。私はその

時に生れた妹よりも二年半だけ年長であつた。そして私が滿三歳になつた時に、異母兄と私との同居は終りを告げたのであつた。*

* 「この小兒期の精神生活に興味を持つ人は、この大きい兄に課せられた要求の一層深い限定を容易に覺るであらう。まだ三歳にもならない子供は、最近生れた妹が母の胎内に出來た事を理解したのである。彼はこの家庭の人數の增加には全然不同意であり、母のお腹がまだ外にも子供を持つてゐるかも知れぬと云ふことを心配した。彼にとつては戸棚（Schrank）箱（Kasten）は母胎の象徵である。從つて彼はこの箱の中を見たいと要求し、これを大きい兄に賴んだのである。他の材料からも判つた事であるが、この兄は父の代理者として小さい子供の競爭者になつてゐるのであつた。この兄に對しては彼がゐなくなつた女教師を「箱の中に片附けさせた」といふ根據のある疑ひの外に、他の疑惑、卽ち彼が最近に生れた子供を母の胎内にそつと忍び込ませたのではないかといふ疑惑が向つてゐるのである。箱を開いて見て、それが空虛である事がわかる時の失望の感情は、子供らしい要求の表面的動機から出發してゐる。より深い動機に對しては、この失望の感情は見當違ひの處にあるのである。これに反して外から歸つて來た母のすらりとしてゐる事に就いての非常な滿足は、この深層にある動機からして初めて、完全に理解されるものである。」

第五章　話し損ひ

私共が國語で話す時の常用材料は「忘却」からは保護されてゐるやうであるが、その代りにその使用は「話し損ひ」(Versprechen) として知られてゐる別の障礙を非常に屢々受けるものである。正常人に見られるこの「話し損ひ」は、病的條件の下に起つて來る所謂不全失語症 (Paraphasien) の前階梯であるかの印象を與へるのである。私は此處では除外例的に既に發表されてゐる一研究を批評し得る立場に居るのである。一八九五年メーリンゲル Meringer 及びツェー・マイヱル C. Mayer は「話し損ひ及び讀み損ひ」に就いて一研究を發表したがその觀點は私のそれとは相距ること遠いものである。著者の一人(本文の責任者)は言語學者であり、人が話し損ひをする場合の法則を見出さうとする言語學上の興味から、この研究をなすに至つたのである。彼はこれらの法則からして『一つの言葉、一つの文章の音及び言葉そのものが、非常に特有なる有樣に於て互に結合され連結される場合に於ける一定の心的機制』の存在を推論せんと望んだのである。

著者等は彼等の蒐集したる「話し損ひ」の例を、先づ純敍述的觀點よりして次のやうに分類し

た。

前後轉置（Vertauschungen）

例　Venus von Milo の代りに die Milo von Venus といふが如きもの、

音の前響或は取越（Vorklänge od. Antizipationen）

例　Es war mir auf der Schwest'…auf der Brust so schwer.

音の後響或は後置（Nachklänge od. Postpositionen）

例　Ich fordere Sie auf, auf das Wohl unseres Chefs aufzustossen（anzustossen の代りに）

汚染（Kontaminationen）

例　Er setzt sich einen Kopf auf 及び Er stellt sich auf die Hinterbeine の二文よりして Er stellt sich auf den Hinterkopf が造られ話さるる如き場合。

代用或は代理（Substitutionen）

例　Ich gebe die Präparate in den Briefkasten（Brütkasten の代りに）

以上の主なる種類に尚一二の餘り重要ではない（或は私共の目的に向つては意義のより少ない）範疇が追加されてゐる。この分類においては轉置（Umstellung）歪み（變形）（Entstell-

ung）融合（Verschmelzung）等が語の個々の音、音綴、或は話さうと企てられた文章の凡ての言葉に關して起るかどうかといふ事に就いては何等の區別を立てないのである。

觀察された種々の「話し損ひ」を説明するためにメーリンゲルは語音の心的價値の差を考へた。私共が一語の第一音、一文の最初の語に神經刺戟の分布（Innervation）を與へると興奮過程は後の音や語に向つて起つて行くものである。從つて一つ以上の神經刺戟の分布が同時に起る場合にはこれらはお互に變化を起させるやうに働くのである。心的に他のものよりも強い語音の興奮は前響或は後響を生じ、弱い或は價値の低い神經刺戟分布過程を障礙するのである。其處で何れが一つの言葉の最も價値高き音であるかを決定する事が必要になつて來る譯である。メーリンゲルは次の如く考へたのである。「一つの語の何れの音が最大の强度を有するかを知らうとするには、或る忘れられた言葉例へば或る名を探す場合に於ける自分を觀察して見よ。最初に意識に蘇つて來るものは兎にも角にも忘れられる前に最大の强度を持つてゐた事になる（百六十頁）。價値高き音は卽ち根綴（Wurzelsilbe）の初音（Anlaut）言葉の初音（Wortanlaut）及び語勢の强められた母音」であると。（百六十二頁）

此處に至つて私は抗議を提出せずには居られないのである。名の初音が言葉の最も價値高き要素に屬するかどうかは、兎も角、これが言葉の忘却の場合に、最初に意識に再現すると云ふ事は

確かに當らない。從つてこの法則は用ふる事が出來ないのである。忘れた名を探す場合の事を自ら考へて見ると、私共はその名が或る一定の字で始まつてゐるといふ確信を、比較的屢〻發表するやうに强ひられる。併しこの確信には根據のない場合とある場合とが同じくらゐ屢〻起つて來るのである。それどころか私は大多數の場合誤つた初音が再生されるものと主張したいのである。Signorelli の例に於ても代償名には初音が失はれて居り、又主なる綴りは失はれたのである。却つて價値少ない一對の綴りなる elli が Botticelli といふ代償名に蘇つて來てゐるのである。代償名が忘れられた名の初音を顧慮することの非常に少ないことは次の例でもわかるのである。或る時私に首都をモンテ　カルロ Monte Carlo といふ小さい國の名が思ひ出せなかつた。これに對する代償名は次のものであつた。

ピーモント Piemont, アルバニエン Albanien, モンテヴィデオ Montevideo, コリコ Colico, 間もなくアルバニエンの代りにモンテネグロ Montenegro が現はれ、それから Mont (Mon と發音する) なる綴りが最後のコリコ以外の凡ての代償名に屬して居る事が私に目立つて來た。斯くしてアルベルト Albert 侯の名からして忘れられたモナコ Monaco を見出す事が私に容易にされたのであつた。Colico は忘れられた名の綴順及び韻律(リズム)を模倣して居るのである。

「名の忘却」に向つて證明されたと類似の心的機制が「話し損ひ」の現象にも關係するものと

假定するならば、私共は「話し損ひ」の場合に對しても一層深い根柢を有する判斷に導かれるであらう。「話し損ひ」として現はれ來る話の障礙は、第一にはその話の中にある他の構成分子の影響卽ち前響或は後響、或は私共が話さうと思つてゐる文章、或はその前後の關係の中にある第二の意味であつて私共が話さうと欲する事とはちがつてゐるものの影響によつて起されるのである。—上記メーリンゲル及びマイエルから引用された實例は、凡てこれに屬する—第二には併しこの障礙は Signorelli の場合の過程と同じやうに、言葉、文章或はその前後關係以外にあり、私共が話さうと企てない要素からの影響によつて起り、この要素の興奮に就いては私共は正にこの障礙そのものから知る事になるのである—兩方の種類の「話し損ひ」の生成の有樣に於て、共通なる點は興奮が同時に起ることにあり、差異點は障礙のもとになる要素の位置の差、卽ちそれが文章或はその前後關係の中にあるか外にあるかにあるのである。兩者の差異は「話し損ひ」の症候學から得られる一定の推論に向つて問題になる限りあまり大きいものではない。併し「話し損ひ」の現象に於て發音の相互の影響によつて音や言葉を聯結する機制を推論し、以て言語學者が「話し損ひ」の研究から引出さうとした結論をなし得る望みは前者の場合卽ち文章或はその前後關係の內部にある要素によつて起る場合だけにある事は明らかである。當該文章或はその前後關係の外部に存する影響に依つて起る「話し損ひ」の場合には障礙のもとになる要素を知る事が

とりわけ必要である。そしてこの場合には又この障礙の機制が言語形成に關して假定すべき法則を我々に暗示して吳れるのではないかといふ問題が起つて來るであらう。

私共はメーリンゲル及びマイエルが「複雜なる心的影響」による言語障礙の可能性卽ち言葉、文章或は話の連續の外部にある要素に依つて言語障礙の起り得る事を看過したものと主張してはならない。彼等の云ふ音の心的價値の不同の學說は、嚴密に云へば發音障礙の說明及び前響後響の說明にのみ十分である事を認めざるを得なかつたのである。言葉の障礙が音の障礙に還元され得ない場合、例へば言葉の代用及び汚染等の場合に於ては、彼等も躊躇せずに「話し損ひ」の原因を話さうと企てられたる關係以外に求め、此事を立派な實例によつて證明してゐるのである。私は次の箇所を引用しよう。(六十二頁)『ルー Ru. といふ人は內心では尾籠な話 (Schweinereen) だと考へる事柄に就いて物語つてゐた。併し彼は稍々穩當な形 (言ひ表はし方) を探してそして話しはじめた。

Dann aber sind Tatsachen zum Vorschwein gekommen……と彼は云つたのであつた。マイエルと私とは其の場に居合はせた。そして Ru. は Schweinereien を考へた事を確言した。この考へられた言葉が本來ならば Vorschein なる語があらはれるべき筈の處に現はれ、突然有效になつた事は言葉の類似といふ事で十分に說明される』(譯者註、Dann……zum Vorschein gekommen 併しついで事實があらはれた……。)

（七十三頁）代償の場合に於ては汚染の場合と同様―或は多分一層高度に―浮動性或は浮浪性の言語像が大役を演ずる。これらは意識の閾下にしても效果を及ぼす程の近さに存するため話される觀念群の類似によつて容易に引き寄せられ、以て脱線を惹起し、或は言葉の進行を妨害するのである。この「浮動性」或は「浮浪性」言語像は既述の如く、直前に起つた言語過程の落伍者（後響）である事屢〻である。

（九十七頁）『脱線は―若しも類似の言葉が話される運命を持たないで、而も識閾下で近くにある場合には―類似によつても可能である。これは代償の場合にさうである。―そこで私は他人がこの事を追試される場合には私のこの方則を確かにして呉れる事を希望する。然しながらさうするには、その人は他人が話す時にその話し手が考へた凡ての事を明らかにする事が必要である。此處に面白い例がある。級長のリ Li. と云ふ人が、私共と一緒にゐた時に Die Frau würde mir Furcht einlagen と云つた。私は呆れた。Lが理解出來なかつたからである。私はその人に ein/agen は einjagen の誤まりではないかと云つた。（譯者註、Die Frau würde mir Furcht einjagen＝その婦人は私を恐れさせるであらう）ところが彼は直ぐに自分が Ich wäre nicht in der Lage（＝私は……が出來ないであらう）等を考へてゐたからだと答へた。

『他の一例を擧げて見よう。私は R. v. Schid といふ人に、彼の病馬がどういふ經過をとつ

てゐるかと尋ねた。彼は答へて Ja, das draut…… dauert vielleicht noch einen Monat（はい多分もう一箇月位續くでせう）と云つた。一箇のrを有する draut は私には理解が出來なかつた。dauert の r がこのやうに作用する事は不可能の事と考へられたからである。私はだから R. v. Schid. にその點に就き注意を促したところ、彼は Das ist eine traurige Geschichte（＝それは悲しい出來事だ）と考へたからだと説明した。即ち話し手は二つの答へを考へたので、この二つがごつちやになつたのであつた。』

識閾下に存し、而も話されない浮浪性の言語像を顧慮すること、及び話し手が考へた凡ての事を知れといふ提唱が私共の「精神分析」に於ける事情に非常に近い事は明らかな事である。私共は無意識的の材料を而かも同じ道を通つて探すのであるが、唯だ私共は障礙を釀す要素を見出すまでは混み入つた聯想列を經、長い道程を跡にしなければならないだけの事である。

私はメーリンゲルの例が證據を與へる今一つの興味ある狀態を少しく説明しよう。この學者の認識によると、話さうと企てられた文章中の一つの言葉と、他の話さうと思はれない言葉との間に何等か類似があつてその爲に後者が歪み（變形）、混合形成、妥協形成（汚染）等を引起し、以て意識中に割込んで來るといふのである。即ち次のやうになるといふのである。

lagen, dauert, Vorschein.

jagen, traurig, …schwein.

さて私は『夢判斷』*といふ論文に於て潛在性夢想からして所謂顯在性の夢の內容が生ずる際に、凝縮作用が如何なる役割を演ずるかを述べておいた。無意識的材料の二つの要素の間に、事物の類似或は言葉の觀念の類似があれば、これが、第三の要素卽ち混合觀念或は妥協觀念をつくるきつかけとなるのである。そしてこの混合或は妥協觀念は、夢の內容に於て上記兩方の構成分子を代表し、又この根源から出來てゐる關係上屢〻多數の矛盾してゐる限定を具備してゐるのである。「話し損ひ」の場合に於ける代理形成および汚染の形成は、從つて夢の組立ての場合にもつとも活潑な役割をする凝縮作業（Verdichtungsarbeit）の始まりである。

＊Die T aumdeutung Leipzig und Wien, 1900, 7. Aufl. 1922.

廣い範圍に讀ませる目的で書かれた小論文（一九〇〇年八月二十三日發行の Neue Freie Presse 所載)『如何にして人は話し損ふか？』に於てメーリンゲルは言葉の置き換への一定の場合、特に私共が一つの言葉を意味の上では全然反對なる言葉によつて置き換へるやうな場合に向つて、特別なる實際的意義を要求した。彼は述べてゐる。「私共は近頃墺太利衆議院議長が議事を開いた時の樣子を今も尙ほ記憶してゐる。諸君!! 一定數の諸君の出席がありますから議事を閉ぢます!! （…geschlossen!）と彼が云ひ、滿場の哄笑に逢つてはじめて彼は氣づいてその誤りを訂

正したのである。この場合に於ては議長は餘り良い結果を期待し得ない會議を早く閉ぢ得る立場にゐたいと希望したといふ事に說明すべきであらうと思はれる。然しながらこれは屢〻見る現象であり、副觀念（Nebengedanke）が少なくとも一部分現はれ、その結果 eröffnet（開會）の代りに geschlossen（閉會）が出て來たのであつて、卽ち話さうとした事の反對が現はれた譯である。私は多數の觀察によつて、私共が對になつてゐる言葉を非常に屢〻互に置き換へる事を知り得た。これらの對照語は私共の言語意識に於て聯合を示し、非常に近接して存在して居り、容易に誤り呼び出されるものである」と。

對照語との置き換への凡ての場合に於て、この議長の例に於けるやうに單純に「話し損ひ」が、話す人の心の中に話される文章に對して起つて來る抗議の結果起るものと考へる事は出來ないのである。alliquis の實例の分析に於て私共は類似の心的機制を見出したのであるが、あの場合には內的矛盾は對照語による代償には依らずして一つの言葉の忘却によつて現はれたのであつた。併し私共はこの兩方の例の間の懸隔を小さくするために alliquis なる語は schliessen と eröffnen の場合のやうに類似の對照を生ずる事が元來不可能の事であり、尙ほ eröffnen と云ふやうな語は私共の語彙の中でも常に用ひられる要素であつて忘れられる事の出來ないものだといふ事を述べておかう。

メーリンゲル及びマイエルの後の方の諸例は、話し損ひは同じ文章の中にある前響及び後響を生ずる音及び語に依つても起り、又話さうと企てられる文章の外にある語であつて、その興奮が平生ならば現はれなかつた筈のものの作用に依つても起る事を示してゐる。さうすれば私共は先づ第一に「話し損ひ」に二種類を判然と區別し得るかどうかといふ事及び如何にして一方の種類の例を他の種類の例より區別し得るかを知りたいのである。此處で私共は言語發達の法則に就いての廣汎なる研究（民族心理學第一卷第一部三七一頁、一九〇〇年發行）に於て、「話し損ひ」の現象をも論じてゐるヴント Wundt の說をも心にとめる事が必要である。ヴントの云ふところによると、これらの現象及び他のこれに近い現象に必ず存在するものは一定の心的影響である。「そこには先づ積極的條件として、話されたる音によつて刺戟され、促された音及び言葉の聯想の制止されない流れがあり、消極的條件として、この流れを制止する意志及び此處に矢張り意志作用として活動する注意力の消失若くは弛緩が之を助けるのである。かの聯想の働きが將に現はれようとする音が取越される事により或は前に出た音が再生され或は又習慣的に用ひられてゐる音が他のものの間に割込んで來る事により、或は最後に話された音との間に聯想上の關係ある全然別の言葉が此處に來り作用すると云ふ風にあらはれるかどうかと云ふ事―これら凡ての事は起る聯想の方向及び兎も角も活動範圍の差違を示すに過ぎないものであつて聯想の一般性の差違で

はないのである。又或る場合には私共が、一定の障礙を如何なる形のものに歸すべきであるかと云ふ事、或は私共が一層大なる權利を以てこの障礙を原因の合併の原則による二三動機の協同に歸せなければならぬのではないかと云ふ事は疑はしくなる事がある。（三八〇頁並に三八一頁）

私はヴントのこの言は正しく且つ非常教訓的であると考へる。私共は多分ヴントよりも一層斷乎として「話し損ひ」の積極的促進的要素―即ち聯想の止め度なき流れ―及び消極的補助的要素―即ち注意力の制止作用の弛緩―が常に共働し、從つて兩方の要素が色々の程度に於てこの過程を限定する事になるものと强調してよいであらう。注意の制止作用の弛緩すると共に―もつと確かに云へばこの弛緩に依つて―聯想の止め度なき流れが活動する事になるのである。

私自身が蒐集した「話し損ひ」の例の中にはヴントの所謂「音の接觸作用」（Kontaktwirkung der Laute）だけで「話し損ひ」が起つたものは一つもなかつた。殆ど規則的に私はこれに加ふるに企圖されたる話の外部にあつて之を邪魔をする影響を發見した。そしてこの邪魔をするものは箇々の無意識的觀念であつて「話し損ひ」によつて表面に現はれ、或は又深い分析によつて初めて意識に持ち出され得るものであるか、或は全體の話に反對する一層一般的な心的動機であつたのである。

(1)私は林檎を嚙む時に醜く顏をしかめた娘に對して次の文章を引用しようとした。

Der Affe（アッフェ） gar possi rlich ist.
Zumal wenn er vom Apfel（アッペル） frisst.
（猿は林檎を食ふ時に殊に可笑しいものだ）

然しながら私はデル　アッペ Der Apfe ……を以て始めた。これは Affe と Apfel との汚染（妥協形成）であるやうに思はれ、又或は準備された Apfel の取越と解する事も出來るのである。然しながら一層精細なる事情は次の様である。私はこの引用文を既に一度云つたのであつた。そして第一回の時には云ひ損ひはしなかつたのであつた。私は娘が他の事に氣を取られて居て私の云つた事に傾聽しなかつた爲、必要に迫られて今一度云つた時にこの「話し損ひ」をしたのであつた。この反復及びそれと關聯してこの文章から早く放免されようとする焦慮を私はこの話し損ひの動機と考へるのであつて、この言語障礙は凝縮作業のあらはれである。

(2)私の娘がシュレージンゲル夫人 Schresinger に手紙を書くと云つた。その夫人は Schlesinger と言ふ人であつた。この「話し損ひ」は多分發音を樂にしようとする傾向と關係があるのである。何故ならば l は r の發音を繰返した後には云ひ難いものであるからである。然しながら私はこの「話し損ひ」が私がその數分間前に娘に Affe の事を Apfe と云つたから起つたのである事を附け加へねばならない。一體「話し損ひ」は「名の忘却」と同樣に、非常に傳染性のもの

である。メーリンゲル及びマイエルもこの特徴を認めて居る。この心的傳染性の原因は云ふ事は出來ない。

(3) Ich klappe zusamm n wie ein Tassenmescher（タッセンメッシャー）… Taschenmesser（タッシエンメッサー）（私は「ポケットナイフ」のやうに疊まれる）と一人の婦人患者が治療時間の初めに音を入れ換へて云つた。この場合にも矢張り Wiener（ウヰーナー） Wciber（ワイベル） Wäscherinnen（ウエッシエリンネン） waschen（ワッシエン） weisse（ワイセ） Wäsche（ウエッシエ）（ウヰーンの女の洗濯女が白い洗濯物を洗ふ）― Fischflosse（フイッシユフロッセ）（鰭）及びこれに類似の檢査用語と同様に、發音の困難といふ事が彼女に話し損ひの云ひ譯になり得るのである。「話し損ひ」があつたと注意されて彼女は速かに「はい、それは先生が今日はエルンシト Ernscht とおつしやつたからです」と答へた。私は實際その日が休暇前の最終時間に當つて居たので Heute wird es also Ernst（エルンスト）（「今日は眞面目にやりませう」）と云ふ言葉で彼女を迎へたのであつた。そして冗談に Ernst（エルンスト）といふ語をエルンシト Ernscht と云ふ風に長くしたのであつた。その治療時間の間彼女は度々「話し損ひ」をした。そして私は終に彼女が單に眞似をして居るだけではなくて彼女の無意識界に「名」としてのエルンスト Ernst なる言葉*にこだはる特別の理由がある事を認めたのであつた。

*彼女は卽ち妊娠及び避妊に關する無意識觀念の影響を受けてゐる事が判つた。彼女が無意識的に云つた Zusammen-geklappt wie ein Taschenmesser なる言葉によつて彼女は母胎内に在る子供の姿態を敍述しようとしたのであつ

た。私の話しかけた言葉の中の Ernst なる語は彼女に避姙藥を賣る店として廣告して居るウヰーンのケルトナー街にある有名な店鋪の名を思ひ起させたのであつた。

(4) Ich bin so verschnupft, ich kann nicht durch die Ase(アーゼ) natm(ナートメン) n —— Nase(ナーゼ) atmen(アートメン)

(私はひどく風邪を引きまして鼻で呼吸が出來ません)といふ言葉が、別の時に同じ患者から出て來た。彼女は直ぐにどうしてこの話し損ひが起つたかといふ事を知つた。彼女は云つた「私は毎日ハーゼナウエル Hasenauerstrasse で電車に乘ります。今日早朝電車を待つて居る間に若し私が佛蘭西人であつたら Asenauer と發音するであらうといふ事が思ひ泛びました。何故ならフランス人はいつも初音のHを拔きにして發音しますから」と云つた。それから彼女は自分の知つてゐる佛蘭西人に關する記憶を色々と語り出で、彼女の想ひ出は永い廻り路を經て彼女が十四歲の少女としてクールメルカーとパカルデ Kurmärker und Picarde といふ小演劇に於て Picarde の役割を演じ、その際片言交りの獨逸語を話したといふ事に到達した。彼女の寄寓して居る家に、巴里から一人の客が到着したといふ偶然の出來事が多數の記憶を呼びさましたのであつた。だからして音の置換は全然知らぬ關係からの無意識的觀念による障礙の結果であつたのである。

(5)別の一婦人患者の「話し損ひ」の機制はこれと類似してゐる。永く忘れられてゐた子供の時の記憶を呼び起してゐる内に彼女の記憶は出て來なくなつた。他人の無遠慮な好色の手が彼女の身體の何の部分を掴んだかといふ事は彼女に思ひ出せなかつた。彼女はその直ぐあとで友人を訪問し夏の住居に就いて友と話し合つてゐた。mといふ土地にある彼女の家がどう云ふ場所にあるのかと尋ねられて彼女は Berglehne（緩傾斜の山腹）といふ代りに Berglende【山の腰（Lende)】と答へたと云ふ。

(6)私は他の一人の婦人患者に對して治療時間が終つた後に、「叔父さんはどうお暮しですか?」と尋ねた。彼女は Ich weiss nicht, ich sehe ihn jetzt nur in fagranti（私は存じません。私は此の頃叔父とは in flagranti に逢ふだけですから）と答へた。翌日彼女は云つた「私はあなたに馬鹿なお答へをして恥かしうございました。あなたは私がいつも外國語を取り違へる無教育な人間だとお思ひになつたでせう。私は en passant（折々）と云はうと思つて居て in flagranti と云つたのでした」と。その時は私共は彼女が何處からこの間違つた他國語を持つて來たのか判らなかつた。併しその同じ會見時間中に前日の題目の繼續として彼女は一つの想ひ出を語つた。その想ひ出の中では das Ertapptwerden in flagranti（現行犯中に捕はれる）といふ事が主な役割を演じてゐたのであつた。前述の「話し損ひ」は當時まだ意識されてゐなかつ

た追想を取越してゐたのであつた。

(7)他の婦人患者に對して私は分析の一定の箇所に於て、丁度その時私共が論じてゐた事の起つた當時、彼女が自分の家庭を恥かしがり、彼女の父に對して私共にはまだ判つてゐない何かの非難をした事があるのではないかといふ推測を話した。彼女はその事は思ひ出さず、尙ほそんな事はありさうにない事だと說明した。併し彼女は自分の家庭の話を續け Man muss ihnen das eine lassen: Es sind doch besondere Menschen, sie haben alle Geiz —— ich wollte sagen Geist (私共は彼等に一事を許さねばならぬ。彼等は特別の人間である。彼等は凡て貪慾(Geiz)を持つてゐる—私は彼等が精神(Geist)を持つてゐるんだからと云はうと思つたのでしたと云つた。「話し損ひ」の場合に私共が阻止しようと思つた考へが却つて押通して現はれる事は屢〻見る事である。(メーリンゲルの zum Vorschwein gekommen の例と比較せよ)。兩者の差はメーリンゲルの例では、本人は意識してゐる何かを阻止しようとしたのであり、私の患者は阻止されたものを知らず、又何を阻止したかを知らなかつた點にあるのである。

(8)次の「話し損ひ」の例も故意の阻止に原因するものである。私は或る時ドロミーテン Dolomiten (白雲石山脈(特に墺國チロールの)」に於て女流漫遊者の服裝をした二婦人に出會つた。私は彼等と少しの距離の間同行した。私共は漫遊者の生活の愉快な事、苦勞な事を話し合つた。

婦人の一人はこの種の日暮しには幾多の不愉快な事のある事を是認した。彼女は「太陽に照らされて終日歩き、襯衣（シャツ）や肌衣が全部汗に濡れた時には實際氣持が悪い」と云つた。その文章に於て彼女は一度一寸云ひ澱んだ。次いで彼女は語をつぎ Wenn man aber dann nach Hose kommt und sich umkleiden kann……（併し私共がホーゼ Hose へ歸つて着物を着換へる事が出來る時には……）と云つた。私はこの「話し損ひ」を說明するための取調べを必要としないであらう。この婦人は明らかに凡てを數へ立て Bluse（襯衣）Hemd（肌衣）及び Hose（ズボン）と云はうと企てたのであつた。然しこの第三番目の洗濯物を名づける事を彼女は品位を保つために抑壓したのであつた、そして內容の上からは全然無關係なるその次の文章に、この抑壓された言葉は類似の言葉 nach Hause（ハウゼ）（家へ）の畸形として彼女の意志に反してあらはれたのであつた。

(9)「敷物をお買ひになるならマットホイズ狹路 Matthäusgasse のカウフマン Kaufmann の處にお出でなさい、私はあなたを御紹介してあげてもよろしいです」と或る婦人が私に云つた。「さうするとマットホイズですね……私はカウフマンでと云はうと思つたのでした」と私は繰返した。私が一つの名の代りに他の名を繰返した事は「ぼんやり」の結果であるかの觀がある。實際又この婦人の話は私を「ぼんやり」の狀態に導いたのである。何故なら彼女の話は私の注意を敷物よりも遥かに大切な他の事に導いたのである。卽ちマットホイズ狹路には私の妻が許婚の時

分に住んでゐた家がある。この家の入口は他の狹路に向いてゐた。そして私はその狹路の名を忘れてしまひ、この名は廻り道を通つて初めて意識的にせねばならぬものである事に氣づいたのであつた。從つて私が引つかかつたマットホイズなる名は私にとつては忘れられた名の代償名であつたのである。この名は代償としてはカウフマンよりも適當なものであつた。何故ならマットホイズは專ら人名として用ひられるものであり（譯者註、Kaufmann は人名としても用ひられ、一方に「商人」を意味する字である）、カウフマンはさうではないのである。そして忘れられた街路の名は矢張り人名から來たラデツキー Radetzky と云ふのであつたからである。

(10) 次の例は後述「考へ違ひ」の條にも入れ得るものであるが、言葉の代償の起る根源となる音の關係が特に明瞭であるから茲に擧げておかう。或る婦人患者が彼女の夢を私に話した。「或る子供が蛇の咬傷によつて自殺しようと決心し、これを實行した」といふのである。彼女は子供が痙攣を起してもだえる有様を目擊したと云ふのであつた。彼女はこの夢と晝間起つた出來事との聯絡を見出さねばならぬ事になつた。彼女は直ぐにその前晩蛇の咬傷の應急手當に就いての通俗講演を聽いた事を思ひ出した。大人と子供が同時に咬まれた場合には、先づ子供の傷を治療すべきであると云ふのであつた。尙ほ彼女は講演者の云つた治療法をも記憶してゐると云ふ事であつた。彼は又咬まれた蛇の、種類も大關係があると云つたさうである。此處で私は彼女の言を遮つて尋

ねた。「此の地方には有毒なものは少なく又如何なる種類のものが恐るべきであるといふやうなことを云はなかつたか？」と。すると彼女は答へて「はい、彼はクラッペルシュランゲ Klapperschlange（響尾蛇）の事を取り立てて云ひました」と云つた。私が大笑ひしたので彼女は何かを云つた事に氣付いた。併し彼女は名を訂正しないで自分の云つた事を撤回した「さう、さう、間違つた事それは私共の方にはゐないのです、彼はヴィペル Viper（蝮蛇）と云つたのでした。何故私は Klapperschlange と云つたのでせうか？」と彼女は云つた。私は彼女の夢の背後に隱れてゐる觀念の干渉を推察した。蛇の咬傷による自殺は美しいクレオパトラ Kleopatra への諷刺以外のものではあり得ないのである。兩方の言葉の著しい音の類似、同じ順序に列んでゐる字 Kl…p…r の一致、及び a に强音のある事の一致は見逃がす事が出來なかつた。Klapperschlange 及び Kleopatra なる名の間にこの立派な關係があるために彼女の判斷は瞬間的に制限され、彼女が講演者がウヰーンの聽衆に向つて響尾蛇の咬傷の治療を指示したと主張するに躊躇しなかつたのである。彼女は私と同樣この種の蛇が故國の動物誌に屬してゐない事を知つてゐたのである。私共は彼女が Klapperschlange を何の躊躇もなく埃及に持つて行つた事を決して無理だとは思はないのである。何故なら私共には歐羅巴以外の凡ての事、卽ち異國のものを凡てごつちやにしてしまふ癖があるのである。そして私共自身も響尾蛇といふものが新世界にのみゐる動

物である事を主張する前に一寸考へねばならなかつた程である。

分析を進めて行く内に他の確實にする諸點があらはれた。この夢を見た人は前日にはじめて彼女の住居の近くに建てられてあるストラッセル Strasser（彫像家）のアントニウス群像を視たのであつた。これが夢の第二の原因をなしたのであつた。（第一原因は蛇の咬傷に就いての講演である）彼女の夢の續きに於て、彼女は一人の子供を彼女の腕に抱いてゆすぶつてゐた。その光景に關して彼女にグレッチェン Gretchen が思ひ泛んだ。聯想を續ける內に彼女はアリアとメッサリナ（Arria und Messalina）を追想した。斯く多數の演劇の名が思ひ泛んだ事は夢を見た人が以前にひそかに女優の職業に憧憬を持つた事を推察せしめたのであつた。夢の初めの部分卽ち「一人の子供が蛇の咬傷によつて自殺しようと決心した」と云ふ事は實際は彼女がいつかは有名な女優にならうと企てた事を意味して居るのである。最後に Messalina なる名から考慮の道が枝分れし、この道は夢の本質的內容に進むのであつた。最近に起つた一定の出來事は、彼女の唯一人の弟がアリアン人でない女と不釣合なる結婚（Mesalliance）をするかも知れぬといふ不安を彼女に呼びさましたのであつた。

(11) 全然無害な或は多分動機が十分に明らかにされてゐない實例を私は此處に述べようと思ふ。それは心的機制の明らかなるものを認めしめるからである。

伊太利を旅行中であつた獨逸人が、旅行鞄の破損したのを縛る皮紐を必要とした。辭書を見ると Riemen（皮紐）に對する伊太利語はコレッジア coreggia となつてゐた。この言葉はコレッジョ Correggio といふ畫家を思ひ起させるものであるから記憶は容易だと彼は考へたのであつた。ついで彼は或る店に入つてウナ リベラ "una ribera"（一本の「リベラ」）を要求した。

彼は自分の記憶にある獨逸語を伊太利語に代へる事が出來なかつたらしい。併し彼の努力は全然の失敗には終らなかつた。彼は或る畫家の名に固着せねばならぬ事は知つてゐた。其處で彼は伊太利語と似た音を持つた畫家の名を思ひ出さないで、獨逸語のリーメン Riemen に近いかの畫家（譯者註、Ribera スペインの畫家）の名を思ひ出したのであつた。この例は勿論「名の忘却」の場合に出してもよかつた譯であるが、又この「話し損ひ」の場合にも出してよい例である。

私がこの書の第一版のために「話し損ひ」の經驗を蒐集した時には、私は自分の觀察し得る凡ての例――その中には餘り印象の深くないものもあつた――を分析したのであつた。その後多數の人々が「話し損ひ」を集めてこれを分析する興味ある努力を拂つた結果一層豐富な材料から選り好みをなし得る位置に私をおいて呉れたのである。

(12) 或る青年が彼の妹に向つて「私は今ではDの家の人達とは全然絶交してゐる。私は最早彼等と挨拶しない」と云つた。妹は答へた。Überhaupt eine saubere Lippschaft と。彼女は

Sippschaft（血統）と云はうとしたのであつた（Überhaupt eine saubere Sippsch ft!!兎も角ももつとよい血統のもの）併し彼女はこの「話し損ひ」に於て、尙ほ二つの事柄をつめて云つたのであつた。それは彼女の兄がその家の娘と「いちやつき」を始めた事があつた事及びその娘が近頃許されない戀愛關係リーブシャフト（Liebschaft）に夢中になつて居るといふ噂のあつた事であつた。

(13)或る靑年が街上で一婦人に次の言葉で話しかけた。“Wenn Sie gestatten, mein Fräulein, möchte ich Sie begleit-digen”彼は明らかに彼女と一緖に步き（ベグライテン begleiten）たいと考へたのであつた。併し彼女にこの申込みをする事が、彼女を侮辱する（ベライディゲン beleidigen）事になりはしないかと氣遣つたのであつた。この互に矛盾する二つの感情が一つの言葉（begleit-digen）として「話し損ひ」にあらはれて來たのであつた。これは此の靑年の本來の企圖が非常に純なるものでなく、又この申込みをする事がこの婦人に向つて自ら卑下するものと考へたに違ひない事を示してゐるのである。併し彼がこの事を彼女に隱さうと努めてゐるに拘らず、彼の無意識精神はいたづらにも彼の本心を裏切り、その結果彼は「一體あなたは私をどう思つていらつしやるのですか？　あまり人を馬鹿にしないで頂戴」といふ世間並みの答へを婦人から取り越してゐる事になるのである（オー　ランク O. Rank の報告）

シュテケル Stekel が「無意識的告白」なる題下に一九〇四年一月四日の「ベルリーネル・ターゲブラット」に載せた論說から一定數の例を引用しよう。

(14)「次の例は私の無意識觀念の不快なる部分を暴露するものである。勿論私は醫師としての立場から決して金儲けといふ事は考へず、いつも患者の利益のみを眼目にしてゐる事を先づ以て申し述べておかう。さて私は重病後の囘復期にある患者に醫療を加へに行つてゐた。私共は苦しい日夜を共に過したのであつた。私は彼女がよくなつた事を喜び、彼女にアブバチア Abbazia（譯者註、南米の靜養地）に於ける滯在の愉快であつた事を述べ次の結辭を用ひた。Wenn Sie, was ich hoffe, das Bett bald nicht verlassen werden ――（私が希望するやうに間もなくあなたがお床拂ひが出來なかつたら――）これはこの富裕なる患者を尙ほも永く治療してゐたいといふ無意識界の利己的動機から出てゐるのであつた。これは私の覺醒時の意識が全然知らず、私が怒つて斥ける筈の願望から出たものである。」

(15)他の一例（シュテケル）「私の妻は或る佛蘭西婦人を家庭教師として午後來て貰ふ事にし、條件についての話がきまつた後に彼女の證明書（性格、行爲、資格等の）を取つておかうとした。佛蘭西婦人はつぎの理由から證明書を自分で持つてゐたいと云つた。Je cherche encore pour les aprés-midis, pardon, pour les avant-midis（「私、午後も……あら御免なさい、午前の

分を搜したうございます」）。彼女は明らかに外を物色してもつとよい條件の家を搜し當てようと企てたのであつた。そして彼女はこの企てを實行したのであつた。」

(16)（シュテケル博士）「私はある婦人にお説教をする事になつた。そして彼女の夫——その人に賴まれてこのお説教をした譯だが——は戸の外に立ち聞きをしてゐた。明らかな感動を與へたこのお説教の後で私は ‛Küss‛ die Hand, gnädiger Herr! (「左樣なら御主人さん」) と云つた。識者には私が主人に向つて話しかけた事、從つて彼に賴まれてお説教をした事が暴露された譯である。」

(17)シュテケル博士は自分の事に就いて次のやうに報告してゐる。彼は或る時トリエストから來てゐる二人の患者を治療してゐたが、彼はこの二人をいつも取違へて挨拶した。「ペロニーさんお早う」とアスコリと云ふ人に云ひ、「アスコリさんお早う」とペロニーといふ人に云つた。最初の間は彼はこの取り違へには深い理由はなく、兩人の間に多數の共通點ある事で說明しようとしてゐた。併し彼は「名の取違へ」はこの場合一種の法螺である事を容易に確かめ得た。卽ち彼は之によつて自分の治療してゐる伊太利人患者の何れもに自分の治療を受けるためにウヰーンに來てゐるトリエストの人は唯一人でない事を知らしめる事が出來たのである。

(18)シュテケル博士は或る混亂してゐる總會の席上で「議事日程第四項に進行しよう（シュライ

テン schreiten)」といふ處をシュトライテン streiten (闘ふ) しようと云つた。(Wir streiten (schreiten) nun zu Punkt 4 der Tagesordnung.

(19) 或る大學教授は彼の就任演説において「私は非常に優秀な先行者諸君の功績を述ぶるに適任ゲアイグネット (geeignet) ではない」と云ふべき處を「……を述ぶる事を好まないニヒト ゲナイヒト (nicht geneigt)」と云つた。

(20) シュテケル博士はバセドー氏病者だと思つてゐる或る婦人患者に向ひ「あなたは妹さんよりも頭だけ (um einen Kopf) 大きくいらつしやる」と云ふ處を「……クロップだけ (um einen Kropf) 大きくいらつしやる」と云つた。(譯者註、Kropf は甲状腺腫でありバセドー氏病の場合にも見られるものである。)

(21) シュテケル博士報告。或る人が二人の友人の間の關係を述べようとした。その内の一人は猶太人らしいと云はれてゐた。彼は「二人はカストール Kastor と ポルラック Pollak のやうに一緒に住んでゐた」と云つたのであつた。(譯者註、カストールとポルルツクス Kastor und Pollux は雙生兒を意味し Pollak は波蘭人の事を蔑んで云ふ時の呼稱である。) これは決して洒落ではなかつたのである。話した人は自分の「話し損ひ」した事を氣付かずシュテケルに注意されて初めて知つたのであつた。

(22) 時々「話し損ひ」は詳細なる特徴描寫の代りになる事がある。家庭の主權を握つてゐる若い婦人が彼女の病夫の事を語り、彼女の夫が自分に適當な食餌の事を醫師に尋ねに行つて來た處、

醫師は食物には關係はない、「彼は私（婦人自身の事）の欲するものは何を飲食してもよい」(Er kann essen und trinken, was ich will) と云つたさうです、と云つた（譯者註、彼女は即ち…was er will と云ふべき處を…was ich will と「話し損ひ」をして、自分の嚊天下を思はず表明した譯である）

テオドル・ライク Th. Reik (Intern. Zeitschr. f. Psychoanalyse, III, 1915) に據る次の二例は「話し損ひ」の特に起り易い狀態から由來してゐる。それはこの狀態では云つてよい事よりも抑壓されなければならぬ事が多いからである。

(23) 或る男が近頃夫をなくした婦人に向つてお悔みを云ひ、それから次の言葉を附け加へた。“Sie werden Trost finden, indem Sie sich völlig ihren Kindern” widwen（ウイドウエン）（譯者註、この男は…ihren Kindern widmen 即ちあなたは子供に專心なさる事によつて慰められなさるでせうと云ふ處を話し損ひ、widmen の代りに widwen と云つたのである）。抑壓された觀念は別種の慰藉を指示してゐる。卽ち「若くて美しい未亡人 (Witwe) は間もなく新らしい性の喜びを享受するであらう」との觀念である。

(24) この同じ男は或る夜會で、同じ婦人と復活祭のために伯林でなされる大仕掛けの準備に就いて語り合つてゐた。そして彼は「あなたは今日ウェルトハイム（譯者註、伯林の大百貨店）の窓飾を御覽になりましたか？ すつかり拔衣紋になつて居ましたよ (… Sie ist ganz dekolletiert（デコレッティールト）)」と彼女に尋ねた（譯者註、彼は dekoriert（飾られてゐる）と云ふべき處に dekolletiert を用ひた譯である） 彼は美しい婦人のデコレッタージュ Dekolletage（婦人

の頸、胸、肩を現はした裝飾）に就いての彼の驚歎をあからさまに云ひあらはす事が出來なかつた。そこで彼が商店の飾窓（Warenauslage）の裝飾（Dekoration）を「デコレッタージュ」に變へる事によつて、禁ぜられた觀念が表面にあらはれたのであつた。この場合飾窓（Auslage）といふ語は無意識的に二重の意味に用ひられて居るのである。

ハンス・ザックス博士が詳細に說明しようと試みた觀察にも、これと同じ條件があてはまるのである。

(25)「或る婦人が彼女も私も共に知つてゐる或る男の事を物語り、彼女が最近にこの男を見た時には彼はいつものやうに立派な服裝をして居り、特に彼は非常に立派な茶褐色の短靴を履いてゐたと云つた。一體何處で彼に逢つたかと尋ねた處、彼女は次のやうに話した。「彼は私の家の扉（ドアー）の前に立つて呼鈴（ベル）を鳴らしました。そして私は降した捲き上げ日覆の隙間から彼を見ました。併し私は扉を開きもせず、又人のゐるやうな氣配を見せませんでした。それは私が既に町に歸つて來てゐる事を知らせたくなかつたからです」と。私は耳をすましながら聽いてゐて、彼女が何か私に祕してゐる事があると考へた。そして彼女が獨りだけで家にゐたのではないといふこと及び訪問者に逢ふやうにお化粧をしてゐなかつたために、扉（ドアー）を開かなかつた事が本當らしいと考へた。そして私は少々諷刺的に尋ねた。「さうするとあなたは閉めてあつた日除けを通して彼の Haus-

schuhe·(上靴)—Halbschuhe（短靴）を賞美する事がお出來になつたのですね？」と。Hausschuhe といふ言葉には、話す事を禁ぜられた彼女の不斷着（Hauskleid）に關する觀念があらはれてゐる。Halb（半分）なる言葉は一面に於てこれに「あなたは私に半分しか本當の事をおつしやらず、あなたが裸で（半分だけ着物を着て）いらつしやつた事を祕していらつしやいますね？」といふ禁ぜられた答への核心が含まれてゐたために、避けようとされたものである。この「話し損ひ」は私どもがその直前にこの男の結婚生活、彼の家庭上の幸福、（häu.liches Glück）に就いて話してゐた事によつて促がされたのであつて、之も一部彼の人物への移動を限定したのである。最後に私はこの紳士が上靴を穿いて街路に立つた時の立派な姿に對する「嫉み」も手傳つてゐる事を告白せねばならない。私は近頃自分でも茶褐色の短靴を買つたが、それは決して「非常に立派な」ものではなかつたのである。」

現今のやうな戰時には多數の「話し損ひ」が生ずるが、それを理解する事はあまり難くはない。

(26)「どの軍隊にあなたの令息がおいでですか？」と一人の婦人が他人から尋ねられ Bei den 42er Mördern と答へた（譯者註、彼女は Bei den 42er Mörsern（第四十二臼砲隊）と答へる筈であつたが Mörser の代りに Mörder（虐殺隊）と「話し損ひ」をした譯である）

(27) ヘンリック・ハイマン Henrik Haiman 少尉は戰場よりの通信に於て「私は偵察勤務の電話手の代理を勤める事になつたために暫くの間は好きな書物を讀むことが出來なくなるでせう。

砲兵陣地の電送試驗に對して私は Kontrolle richtig, Ruhe（「コントロール」よし休め）と反應した、服務律に從へば Kontrolle richtig, Schluss（「コントロール」よし終り）と云ふべきであつた。私のこの脫線は讀書の出來ない事に就いての怒りによつて說明される」と述べた(Intern. Zeitschr. f. Psychoanalyse, IV. 1916/17.)

(28) 一特務曹長は兵員に對して自分等の宛名を正確に家の方に知らせておけ、(Gespeckstücke Gepäckstücke 小包）が紛失するやうな事のないやうにと教へた。（譯者註、この特務曹長が何故に話し損つて Gespeckstücke と云つたかは譯者にはよく判らない。併し「ハム」や「ベーコン」の脂身を Speck, Speckseite などと云ふから不自由な戰地にあつて喰意地の張つてゐた彼が「スペツク」の事を空想してゐた爲に兵員に敎へる際に口をすべらせて Gepäck を Gespeck と云つたのではあるまいかと思はれる）

(29) 次にあげる特に立派な、そして悲慘な背景に依つて意義深い例をエル・チェスチェル L. Czeszer 博士が私に話して吳れた。彼は戰時、中立國たる瑞西に滯在中この觀察をなし、之を詳細に分析したのであつた。私は彼の書簡を餘り省略しないで次に記述しよう。

「私はO市のM・N教授が過ぐる夏の學期にやつた「感覺の心理」についての講演中に陷つた「話し損ひ」の一例を述べます。前以て申上げておきますが、この講演は大學の講堂に於て佛國捕虜及び聯合國贔屓の佛蘭西系瑞西人たる大學生の大群集を聽衆として開かれました。O市では佛蘭西に於けると同樣にボッシュ boche なる言葉が廣く又專ら獨逸人の稱呼として用ひられます。然しながら公開の發表や講義等に於ては、高官、大學教授及びその他責任ある位置に居る人

人は中立を保つためにこの悪い言葉は避けるやうに努めてゐます。さてN教授は感情の實際的意義を說き、それ自體としては面白くもない筋肉勞働でもこれに快感を附與し、これを一層强烈なものにさせるために目的を意識して感情を利用する事の例を引用しようとしてゐました。

勿論佛蘭西語で彼は丁度その頃當地の新聞紙が獨逸の新聞紙から飜刻して載せた獨逸の學校教師の話を物語つたのでした。この學校教師は生徒を庭園で働かせ、且つ一層精を出して働くやうに生徒を煽てる目的で、土塊ではなく佛蘭西人の腦天を叩きつける心算になつてやれと生徒に要求した。此の話を述べる際Nは勿論獨逸人の事を云ふ時にアラマン Allemand と云ひボッシュ boche とは云はなかつたのでした。併し彼がその點に來た時に、彼は學校教師の言葉を次のやうに述べました。Imaginez vous, qu'en chaque moche vous ecrasez lecrane d'un Français.（諸君、諸君はその一塊一塊のモッシュ moche でフランス人の腦天を打ち碎くつもりになつて呉れ給へ）卽ち彼はモット motte（土塊）といふ處を moche と云つたのでした。

此處に私共はこの正しい學者が話の初めから平素の口癖を出さぬやう、又多分誘惑に陷らぬやう、殊にも瑞西聯邦の命令によつて堅く禁ぜられてゐる言葉を大學講堂の教壇から發する事のないやうに注意してゐるのを明らかに見るではありませんか！ 然るに彼が幸ひにも最後に instit-

iteur allemard（獨逸教師）と正しく云ひ、ひそかに呼吸をつきながら危險のない結末に急いでゐる瞬間に、今まで骨折つて抑壓してゐた言葉が motte といふ言葉との類音に固着し――この不幸な事が起つたのでした。外交上の失策に對する不安、使ひ慣れて居り且つ凡ての人から待設けられてゐる言葉を用ふる事の被壓迫的愉快及び腹からの共和論者及び民主論者の言論自由束縛に對する不滿足がこの實例を正しく述べようとする主要意圖に干渉したのです。この干渉する傾向は、講演者には判つて居り、彼は「話し損ひ」の前にこの傾向を考へた事は疑ひのない事であります。

N教授は彼の「話し損ひ」に氣付かなかつた。少なくとも私共が多くの場合に自働的にするやうに訂正しなかつたのでした。これに反してこの「話し損ひ」は、大部分佛蘭西人から成つてゐた聽衆からは滿足を以て受け入れられ、宛然故意の洒落と同じ效果をもたらしたのでした。併し私は一見惡意のないこの出來事に對して實際の內的興奮を感じました。何故かならば私は見易い道理からしてこの教授に精神分析法に從つて起り來る問題を提げてぶつかつて行く事は思ひ止まらねばならなかつたからでした。併し私にとつてはこの「話し損ひ」は、失錯行爲の限定及び「話し損ひ」と洒落との間の深い類似と關係に關するあなたの學說に向つての決定的な證據になりました。」

(30) 次の「話し損ひ」も亦戰時の悲慘な印象の下に起つた。故國に歸つた墺太利のT中尉が語つたものである。

「數箇月續いた私の伊太利に於ける捕虜生活の間、私共二百人の將校は或る手狹まな山莊に收容されてゐました。この期間に私共の仲間の一人が流行性感冒で死にました。この出來事によつて起された印象は勿論深刻なものでした。何故なれば私共が當時存した境遇、醫療の缺如、私共の當時のどうにも仕樣のない生活狀態に於ては、惡疫の蔓延は火を見るよりも明らかだと考へさせたからでした。私共は死骸を或る穴藏に納めたのでした。或る晩私が一友人と家の周圍を巡視しました時、私共二人は死骸を見たいといふ希望を表明しました。先になつて歩いてゐた私が穴藏に入りました時、ひどく私を驚かせる光景があらはれました。何故なれば意外にも棺は入口に非常に近い處におかれてあり、私は瞬く蠟燭の火によつて明滅する顏をそんなに近い處に見ようとは思はなかつたからでした。この印象深き光景を腦裏に描きながら私共は巡囘を續けました。滿月の光を浴びてゐる庭園、明るく照らされてゐる芝生及びその背景をなしてゐる輕やかな夜霧の見える場所に來た時に、私はこれに關聯した觀念を小妖魔が似合ひの松の木の並んでゐる下のあたりで輪舞をしてゐるやうだ、と言ひ現はしました。

翌日の午後私共はこの死んだ友を葬りました。私共の收容所の近くの小さな場所にある墓場迄

の道は私共にとつて同じやうに苦しく且つ侮蔑を感ぜしむるものでした。大聲で騷ぐ若者共、嘲笑し、愚弄するあたりの住民、無作法な叫ぶ人々は、この出來事をよい事にして露骨に彼等の好奇心と憎悪心とを混へた感情を現はしました。この武裝解除の狀態に於てさへ怒らずには居られないといふ感じと私共に對して示された無禮に對する嫌厭の感は晩になる迄私を怒らせたのでした。前日と同じ時間に同じ人を伴つて、私共は今度も同じやうに砂利道を通つて家の周圍を歩きました。穴藏の格子戶！——その背後に死骸がおかれてあつた——の前を通りました時に、私は死骸を見た時の印象を追想しました。再び同じ滿月の光を浴びた庭園の見える場所に私は立ち止まり、同伴者に向つて Wir könnten uns hier ins Grab —— Gras setzen und eine Serenade sinken! と云ひました（譯者註、「私共は此處で墓—草原に坐し夜曲をうたつても（singen）よい」といふべき處を sinken（沈む）と彼は「言ひ損ひ」をした譯である）二度目の「話し損ひ」の處で私ははじめて氣がつきました。最初の時は私は誤りの意味を意識せずに訂正したのでした。そこで私は考へて ins Grab—sinken（墓場に入る）とならべて見ました。電光の如くに次の像が次々に起つて來ました。月光を浴びて踊り浮動してゐる小妖魔、納棺された戰友、呼びさまされた印象、埋葬の際の箇々の光景、受けた不快と悲哀の感、發生した惡疫についての箇々の對話の記憶、二三將校の恐怖の表示等であつた。後に私はその日が父の命日であつた事に氣がつきました。これは平生日附の記憶の非常に惡い自分としては不思議に思はれる事でした。

後になつてつらつら考へてみて私に兩夜共に外的條件が一致してゐた事、卽ちほぼ同時刻である事、月明、場所と同件者を同じくした事が明らかになりました。私は流行性感冒の蔓延の恐れがあると云はれた時に感じた不快を思ひ出しました。併し同時に恐怖にとらはれてはならぬと云ふ內的禁壓をした事も思ひ出しました。「私共も死ぬかも知れぬ」（Wir könnten ins Grab sinken）といふ言葉の列べ方の意味も其後私に意識され、又私はそれについての確信をも得ました。唯最初に起つたGrabよりGrasへの訂正ははつきり判らずして起つたが、これが二番目の「話し損ひ」（singenよりsinkenへの）を引起し、抑壓された複合體に窮極の作用を保障したのでありました。

私は當時私に近い關係ある家族の一人が度々病氣したり、或は一度は死にさへしたといふ心配な夢に惱みました。私は捕虜になる一寸前に、流行性感冒がこの人の鄕里に於て猖獗を極めて居ると云ふ報告を受取り、私の非常な心配を彼女に云ひ送りました。それ以來私は音信不通で居りました。數箇月後に私は彼女が上記の出來事のあつた時から二週間前に流行病の犧牲になつたと云ふ報告を受けました。」

(31)次に述べる「話し損ひ」の例は、醫者には避け難い苦しい精神軋轢の一つを電光の如く照らし出すものである。死にさうに衰弱して居る一人の男——併しその人の診斷はまだ確定してゐない

――が彼の難問題の解決を待つべくウォーンに來て、今は知名の醫師になつて居る彼の青年時代の友に治を乞ひ、醫師は不承不承彼の治療を引受けたのであつた。患者は或る病院に入る事になり、醫師は Hera 療養所に入院を勸めた。患者はそれは特別の目的に向つてのみの病院（産院）であらうと云つて異議を申立てた。いえいえと醫師は急込んで云つた。In der „Hera" kann man jeden Patienten unbringen（ウムブリンゲン）…… unterbringen（ウンテルブリンゲン） meine ich（「ヘラ」療養所ではどんな患者でも殺す……入院させることが出來ると私は考へる）と。次いで彼は自分の「話し損ひ」の解釋に對して激しく抗爭した、そして「あなたはまさか私があなたに敵意を持つてるとは信ぜられないでせう」と云つた。十五分間位後に醫師は患者の看護を引受けて、彼を連れて出て行く看護婦に對して「自分は今は何も見出さないし今後も見出すであらうとは思はない。併し兎も角も大量の「モルヒネ」を與へませう。さうすれば安息が來る（…Aber wenn es so sein soile, bin ich für eine tüchtige Dosis Morphium und dann ist Ruhe)」と云つた。これによつて醫師は最早施すべき術がないときまつた場合には、藥で惱みを短くするやうな條件を患者に與へた事が判るのである。卽ち醫師は實際に友人を殺す役目を引受けた譯であつた。

(32) 證人の云ふ處によると廿年も前に起つた事だと云ふ事だが次に述べるものは特に有益な「話し損ひ」の實例として捨て難いものである。『或る婦人が嘗て會合の席上で――彼女の話振りか

ら彼女の言葉が興奮の狀態に於て又色々の祕密な感情の壓力の下に出て來たものである事が讀めましたが――「勿論女と云ふものは男の氣に入る爲には美しくなくてはならない。その點では男の方は遙かにいいですね。男は五本の眞直な手脚（……fünf geraden Glieder……）さへあればそれでよいのですから！』と云つた。この例は凝縮或は汚染による「話し損ひ」のかくれた機制への深い洞察を私共に與へるものである。此處に意味の似通つた二つの成句が融合して居る事を假定し得るのである。

we n er seine vier geraden Glieder hat

wenn er seine fünf Sinne beisammen hat

（彼が四本の眞直ぐな手脚を持ち

彼が五官を皆持つて居るならば）

併し又 gerade（眞直ぐ）なる要素は、次の二つの語句に共通なものである。

wenn er nur seine geraden Glieder hat

alle fünf gerade sein lassen.

（彼が眞直ぐな手脚を持つてゐさへすれば

五本凡てを眞直ぐであらしめるだらう）

geraden Glieder の文章の中に先づ一つの數字を加へ、ついで單なる四本（vier）の代りに意味深長な五本（fünf）と云ふ字を入れる爲に fünf Sinnen の句及び gerade fünf の句が共働したものと假定して差支へないのである。併しこの融合は「話し損ひ」としてあらはれた形に於て善良なる意味を持つてゐなかつたならば、又婦人の口からは勿論露骨に云へないやうな野鄙な眞理の意味を持つてゐなかつたならば確かに起らなかつたであらう。――最後に私共はこの婦人の話は、その文句から云へば面白い「話し損ひ」であると同時に、優秀なる洒落を意味し得る事を指摘しなくてはならない。唯彼女がこの語を意識的の企圖を以て話したか、それとも無意識的企圖を以て話したかと云ふ事は問題になるのであるが、この場合に於ける話し手の態度は勿論意識的企圖を否定し洒落を除外するのである。

「話し損ひ」はオットー・ランクの報告例に於ける様に、非常に洒落に近接する事がある。この場合には「話し損ひ」の發頭人が自らこれを洒落として笑ひ出したのであつた。

(33) 小娘のやうな外觀を保存しようと心をくだいてゐる妻から、度々性交をいやいやながら許されてゐる若い結婚したばかりの男が、彼及び彼の妻を非常に面白がらせた次の話を私にしてきかせた。或る晩、彼が妻の節慾命令を終に蹂躙してしまつた後、朝になつて夫婦の寢室で顏を剃り、その際――今迄も便宜上何度もした事だが――まだ睡眠中の妻の夜の小箱の上にあつた白粉刷毛

を使用した。皮膚の色光澤を極端に氣にするこの婦人は、彼にこの事をして呉れるなと幾度か斷つてゐた。だから今や彼女は彼に對して怒つて叫び出した。Du puderst mich ja schon wieder mit deiner Quaste!（あなたは又あなたの刷毛で私にお白粉をおつけになりましたね！）と。彼女は Du puderst dich schon wieder mit meiner Quaste!（あなたは又私の刷毛で白粉をおつけになりましたね！）と云はうとしたのであつたが、夫君が笑ひ出したので彼女は自分の「話し損ひ」に初めて氣がつき終に一緒に笑ひ出してしまつたのであつた。pudern はウヰーンの人には誰にも判つて居る性交の云ひ廻しであり、刷毛（Quaste）は男根の象徴である事は疑ひの餘地がないのである。（Internat. Zeitschr. f. Psychoanalyse, I, 1913）

(34) 洒落に企圖がある事については私共は次に述べるアー・ヨット・ストルフェル A. J. Storfer の例に於ても考へる事が出來るであらう。

明らかに精神性の原因から起る病氣に惱んで居るB婦人は度々精神分析醫Xに相談して見てはどうかと忠告され、その都度「精神分析療法は正しいものではない。醫師は何事でも不當に性的の事に持つて行くんだから」と云つてこの忠告を斥けてゐた。終に彼女はこの忠告を容れる事になつて尋ねた。「ぢやあこのX博士は何時オルディネーレン ordinären するのですか？」と。

（譯者註、彼女は ordinieren（治療する）と云ふべき處を ordinären と云つたのであつて ordinär は野卑、鄙俗等を意味する語である。）

洒落と「話し損ひ」との類似は「話し損ひ」が屢〻云ひ縮めに外ならないと云ふ事にもあらはれて居る。

(35)或る若い娘が學校退學後時代の風潮を斟酌して醫學の研究に入つたが一二學期の後に彼女は醫學を化學に取りかへたのであつた。數年後に於て彼女はこの變節に關して次のやうに語つた。

「私は一體解剖をする事は恐れなかつたのですが、或る時死體の指から爪を引抜かなければならなくなつた時に全……化學に對する興味（die Lust an der ganzen—Chemie）を失つてしまつたのです」と。（譯者註、彼女は Anatomie（解剖學）と云ふべき處に Chemie（化學）と云つた譯であり、この場合の Chemie は解剖學と化學とをつめたものであり、結局彼女は何れにも興味を持つてゐない事を示すのである）

(36)私は此處に說明に何等の技巧をも必要としない話し損ひの他の例を列べよう。

「教授は解剖學に於て內臟學中非常に難しい部分とされて居る鼻腔の說明を骨折つてやつてゐた。教授が聽衆に對して彼の說明が判つたかと尋ねたところ凡ての人が「はい判りました」と答へた。それに對してこの名うての驕傲な教授は次のやうに云つた。私はさうは信じない。何故なら鼻腔を理解してゐる人はウヰーンのやうな大都會でさへ一指——失禮私は一方の手の指（卽ち五指）のつもりでした——を以て數へ得るのみなのだから」と。

(37)同じ解剖學者は別の時に「女性生殖器に於ては多數の Versuchungen（誘惑）——失禮 Versuche（實驗）あるに拘らず……」と云つた。

(38)ウォーンのアルフ・ロビトセック Alf. Robitsek 博士は古代フランス學者によつて注意された「話し損ひ」の二例を私に指示して呉れた。私は未飜譯(佛文)のまま此處にあらはさう。ブラントーム Brantôme (一五二七—一六一四年)著「麗人傳」第一話「私は絶世の美人であつて且つ社交に長けた一婦人をよく知つてゐるが、この人に就いてかういふ話がある。嘗て彼女が朝廷に出仕してゐる一人の社交に上手な紳士と內亂の事で色々戰爭の話をしてゐた時「私は王樣がその國の橋を悉く切り落させた(rompre tous les ponts)といふ事を承つて居ります」といふつもりだつたのを、「王樣がその國の C…… (姦婦の夫?)を皆切り殺させた(rompre tous les c…… (cocu?)」と云つてしまつた。蓋し彼女は夫と同衾して來たばかりであつたか、或は彼女の戀人のことが頭にあつた時とて、この言葉(C……)をまだそのまま口に含んでゐたものと想像するに難くはない。そして又この紳士はこの言葉によつて彼女を愛するやうになつた」

「更に私の知つてゐる今一人の婦人は、彼女よりも身分の高い婦人との會話の中に、その人の美しさを讃めちぎつた擧句にかう云つた。「いいえ奥樣、私が唯今申上げましたことは決して adulterer (姦通)ではございません」と。彼女は「決して adulater (おべつか)ではございません」といふつもりであつた。何となれば彼女は直ぐに「私が姦通の事を考へてゐたと思召せ」と取り繕つたから」

(39) 勿論「話し損ひ」による性的二義の成立の一層近代的な例もある。F夫人は或る語學講習の第一時間目の事について次の如く語つた。「それはそれは面白いんですよ。先生は小綺麗な英國人です。先生は第一時間目に直ぐに Blume (花) と云ふべきところを Bluse (女の襯衣) といふ事によつて私にむしろ個人教授をしたがつてゐる事を暗示しました」と(ストルフェル)

私が神經症の症狀を解消し除去するに用ひてゐる精神療法の實施に際して、偶然に出て來る話や「思ひ付き」からして隱れようと努力してゐながらも、種々の有樣に於て思はずも現はれる考慮內容を嗅ぎつける任務を課せられる事は非常に屢〻である。この場合私が最も確かな、而かも一面非常に奇異なる實例において證明し得るやうに「話し損ひ」は最も價値ある役目をなすものである。例へば患者は彼等の叔母の事を「話し損ひ」とは氣付かずに絕えず「私の母」と呼び、或は彼等の夫をば兄と云ふのである。斯くして彼等は彼等の感情生活に於て同じ「タイプ」の人の再現を意味するこれらの人々を、互に同一視し同列においてゐる事を認めしめるのである。二十歲になる靑年が私に向つて「私は先生に御治療願つたN・Nの父です。――失禮、私は兄弟だと云はうと思つたのです。彼は私よりも四つ年上です」と。私はこの「話し損ひ」によつて彼が兄弟と同樣に父の缺點のために病氣してゐる事、彼も兄弟同樣に治癒を必要とするが、最も必要とするものは父であると云はうとしてゐる事を理解し得るのである。又他の場合には異樣にひび

く言葉の配列や無理があるやうに見える云ひあらはし方などがあり、之等は別の動機から出發して居る患者の話に被壓迫的觀念が關與してゐる事を十分に暴露するものである。

だから「話し損ひ」の中に包括され得る粗大並に微妙なる話の障礙に於て、私は音の接觸作用の影響ではなく、云はうとする以外の觀念の影響が「話し損ひ」の成生に對して決定的のものであり、又これが出來た「話し損ひ」の理解に十分であるのを見るのである。勿論私は語音が相互に作用し變化を及ぼし合ふ事の法則に疑義を挾まうとは思はない。併し私はこれらの法則が單獨で話の正しい運びを障礙するに十分有效であるとは思はないのである。私が詳細に研究し洞察し得た場合に於ては、これらの法則は單に豫め形成せられた機制にすぎないものであり、この機制をば遠くに存する心的動機が便宜上利用するだけの事である。而もこの心的動機は語音の關係の勢力範圍とは沒交渉である。實際に於て代償語(Substitution)の多數の場合に於ては、「話し損ひ」に際し、斯くの如き語音の法則は全然認められない。私はこの點に於てはヴントと全然一致した意見を持つものである。ヴントは矢張り「話し損ひ」の條件は複雜なものであり、語音の接觸作用をはるかに超越したものであると論じて居るのである。

私はヴントの所謂「一層遠くにある心的影響」は確實に存する事と考へるが、一面に於て速度を早められた談話であつて注意が他に外れて居る樣な場合に於ては「話し損ひ」の條件はメーリ

ソゲル及びマイエルの法則で十分である事を認めるに何の差支へもないと考へるのである。併しこの二人の學者によつて蒐集された實例の一部に於ては一層複雜なる解決が出來さうである。私は前に擧げた場合を例にとつてみよう。

Es war mir auf der Schwest …… Brust so schwer.

（私は大變胸が塞がつてゐた）

この場合に Schwe が前響（Vorklang）として同じ價値を持つ Bru を押除けて先に出たと云ふ風に、さう簡單に考へられるだらうか。Schwe なる音が、その外に特別の關係によつてこの「出しやばり」を可能にされた事は否定する事が出來ないのである。そしてこの關係は Schwester（姉妹）—— Bruder 兄弟なる聯想、及び恐らく別の思想圏内に入る Brust der Schwester（姉妹の乳房）なる聯想以外のものではあり得ないのである。この舞臺の背後に居る見えない援助者が、平生は無害な Schwe に力を與へ、その結果「話し損ひ」となつてあらはれたのである。

他の「話し損ひ」に對して卑猥なる言葉及び意味への類似が障礙を起させるものである事が假定されるのである。不作法な人々が非常に好む言葉や句の歪みは無害な、何でもない機會に際して禁ぜられて居る事を思ひ起させる事を目的として居るのである。而もこの遊戲は非常に屢々行

はれるものであり、從つてこれが故意にではなく、或は又意志に逆つて實行されたとしても不思議はない譯である。アイシャイスワイブヘン Eischeissweibchenを アイワイスシャイブヘン Eiweissscheibchen（蛋白質切片）の代りに（譯者註、Wiepchen は小さい女或は細君を意味する）、アポポスフリッツ Apopos Fritz をアプロポス Apropos の代りに、（譯者註、Apropos は多分 a propos の事で「序でに云へば」とか「時に」とか云ふ意味を持つてゐる。Fritz 男の名である。Apopos Fritz が何を諷示するかは譯者には判らない。唯 poro に「お尻」の意味がある事を述べるに止めよう）ロークスカピテール Lokuskapitäl をロータスカピテール Lotus kapitäl の代りに（譯者註、Fotuskapitäは Lotus（蓮）の花を柱頭に飾りつけた柱である。Lokuskapitäl はよくは判らないが Lokus には局部の意味があり、陰部か何かの隱し言葉ではないか、又柱は男根を象徴するものではあるまいかと思はれる）用ひるが如きはこれである。多分又聖マグダレナのアラビュステルバクセ Alabüsterbachse（アラバステルビュクセ Alabasterbüchse 石膏箱の代り）der hl. Magdalena（譯者註、聖マグダレナは基督に救はれた娼婦であり、基督が磔になつてから基督の傷に香油を塗りつけ、後に自分の髪の毛でそれを拭つたと云ふ話がある。Alabasterbüchse は多分その香油を入れた匣の事であらう（Alabaster は羅典語では香油を入れる瓶のやうなものを意味する事になつてゐる）處で「話し損ひ」の結果出來た Alabüsterbachse は何を諷示するものかは譯者には全然理解出來ないのを遺憾とする。强ひて「こじつけ」て見るならば Büste には胸の意味があり、女の乳房でも暗示するものではあるまいか。）などもこの範疇に屬するものである。*

＊私の婦人患者の一人に症狀としての「話し損ひ」が非常に永く續いた。この「話し損ひ」は ruinieren（破壞する）なる言葉を urinieren（小便する）なる言葉によつて置き換へる小兒の惡戯に原因して居る事が判る迄存續したのであつた。—「話し損ひ」の技巧によつて、野鄙な許されない言葉を自由に用ひようとするこの誘惑には『アブラハムの所謂「過度代償の傾向」（überkompensierende Tendenz）を有する失錯作業に就いての觀察』（Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse VIII 1922）も關聯して居る。固有名の最初の綴音を吃音によつて二度繰返す輕い傾向を持つた一婦人はプロタゴラス Protagoras なる名をプロトラゴラス Protragoras に變化した。その少し前彼女はアレキサンデル

Alexandre の代りに A—alexandros と云つた。問診の結果は彼女が子供の時に最初の綴音 A. 及び Po を繰返す惡習を養つた事がある事が判つたのであつた。この兒戯から子供の吃音がはじまる事は稀ではないのである。Protagoras なる名に於て彼女は最初の綴音中の r を落して Po—Potagoras と發音する危險を感じたがこれに對する防禦として彼女はこの r を痙攣性に固執し、今一つの r を第二の綴音に挿入したのであつた。これと似た有樣に於て彼女は他の場合に Parterre（土間）及び Kondolenz（弔慰）なる語を Partrerre 及び Kodolenz に變化した。それは彼女の聯想に於て手近にある Pater（Vater）（父）及び Kondom（サック）なる言葉から逃避するためであつた。アブラハムの他の一患者は Angina（扁桃腺炎）といふ語の代りにいつも Angora といふ傾向ある事を自供した。これは恐らく Angina の代りに Vagina（膣）と云はうとする誘惑を恐れるためである。從つてこれら「話し損ひ」は歪みを起させる傾向そのものよりも防衞傾向の方が優勢である事によつて成立するのである。そしてアブラハムはこの過程と强迫性神經症の症状形成との類似を注意して居るが之は尤もな事である。

Ich fordere Sie auf, auf das Wohl unseres Chefs aufzustossen

（譯者註、auf'zustossen は anzustossen の「話し損ひ」であり、話し手は「諸君、私共の上役の健康を祝して乾杯しませう」と云はうとしての「云ひ誤り」である、そして aufstossen は「嘔吐を催す」「むかつく」等の意味を持つ語である）は故意の戯詩の後響としての故意ならぬ戯詩に外ならないものである。若しも私が上役であつて、自分の御祝に祝賀演説者がこの「云ひ誤り」をしたとするならば、私は羅馬人が凱旋した皇帝の兵士をして、皇帝に對する内的抗議を諷刺歌によつて聲高くあらはさしめた故智に思ひ及ぶのである。——メーリンゲルは自分自身の事をかう語つてゐる。彼は或集會に於て最年長者としての親しみをあらはす尊稱 Senexl 或は altes Senexl を以て呼びかけられてゐた或人に向つて Prost, Senex

altesl と云つた。彼はこの「云ひ誤り」に驚愕したといふ事である。Altesl が alter Esel（老いたる馬鹿者）なる罵詈の言葉に非常に近い音を持つて居る事を想ひ起す時、私共は彼の感情を理解する事が出來るであらう。年齢に對する畏敬——幼時に引戻して云へば父に對する畏敬——の毀損に對して大なる內的懲罰が課せられたのである。

私は讀者諸君が何物によつても證明する事の出來ないこれらの說明と、私自身が蒐集した分析によつて說明した諸例との價値の差を忽諸に附せざらん事を希望する。併し私が靜かに外見上單純に見える「話し損ひ」の例も、話さうと企圖された關係の外にある半ば抑壓された觀念による障礙に歸し得ると云ふ期待に靜かに固着する時、メーリンゲルの注意に値する言が私をその方へ誘惑するのである。この學者は何人でも自分が「話し損ひ」をした事を承認する事を欲せない事は注意すべき事であり、非常に聰明にして正直なる人々であつても彼等が「話し損ひ」をしたと告げられる時に、侮辱されたやうに感ずるものだと云つて居る。私はこの主張をメーリンゲルが「何人でも」と云ふ字によつて云ひあらはして居る程に普遍的のものであるとは思はないのである。併しあなたは「話し損ひ」をされましたよと人から云はれた時に起る、明らかに羞恥の性質を持つ痕跡的の感情は、それだけの意義を持つて居るものである。この痕跡的感情は、私共が忘れられた名を思ひ出し得ない時の憤懣及び外見上無價値な記憶の保存される事に對する驚歎と同

等に取扱ふべきものであつて、いつもこの障礙の成立に一つの動機が參加して居る事を指示するものである。

名を捩ぢ歪める事は、これが故意に起る場合には侮辱に相當し、故意ならずして現はれる多數の場合に於ても、同じ意味を持つものと見てよからう。マイエルの報告に依ると、嘗て或る人がフロイド Freud の代りにフロイデル Freuder と云ひ誤り——何故なら彼はその後間もなくブロイエル Breuer なる名を出して居るから（三十八頁）——別の時に Freuer —— Breudsche Methode（フロイエル——ブロイド氏法）と云つたと云ふ（二十八頁）。從つてかの男は同じ專門の人ではあつたが、この方法に特に熱心ではなかつたのである。確かに外に說明のしやうのない名の歪みの一例を私は後に「書き損ひ」の條下に報告しよう。*

*貴族は彼等が掛つて居る醫師の名を特に屢〻歪める。之によつて彼等は醫師を鄭重に遇するに拘らず心中これを輕視して居る事を推論せしめる——私は當時トロントに居たイー・ジョーンズ博士の書いた本書と同じ題目の英文論說（The Psychopathologyof Everyday Life. American Journal of Psychology, Oct. 1911）から「名の忘却」に就いての一二の適切なる記述を此處に引用しよう。「他人が自分の名を忘れた事を見出した場合——特にこの人が自分の名を覺えて居る事を希望し、或は期待してゐた場合——に起る怒りを禁じ得る人は少ない。彼等は熟慮せずして直ちに次の樣に考へる。「若しも自分がこの人に一層深い印象を殘してゐたならばこの人は自分の名を忘れるやうな事はなかつたであらう。何故ならば名と云ふものは人格の本質的要素をなすものであるから」と。一方に於て高貴な人から思ひ掛けなく

自分の名でもつて話しかけられた場合程氣持のよく感ぜられる事は少ない。人を遇する技術に於て名人であつたナポレオンは、一八一四の不幸な行軍の際に、この方向に於ける彼の記憶の驚歎すべき實驗を提供した。彼はグラオンネ Graonne附近の都市に居た時、其處の市長ド・ビュッシー De Bussyを約二十年前或る聯隊に於て知つてゐた事を思ひ出した。その結果感激したド・ビュッシトが限りなく獻身的に彼のお役を勤めたのであつた。それと同じわけで或る人の名を忘れたかの如き態度を取る事程その人を侮辱するによい手段はないのである。これによつてその人が名を覺えるだけの骨折りさへも必要としない程無關係であると云ふ事を表示する事になるのである。この技巧は文學上にも一定の役割を演じて居る。例へばツルゲネフの「煙」(Rauch)の中の或る箇所に次の事が書かれて居る。「あなたにはバーデンがまだ面白うございますか――リトヴィノフさん」(Sie finden Baden noch immer amüsant, Herr—Litvinov) ラトミロフはいつもリトヴィノフの名を考へ出さねばならないかのやうに躊躇しつつ云ふのを例とした。彼は挨拶の際に帽子を取る時の傲慢な態度と共に之によつてリトヴィノフの自尊心を傷つけようと欲したのであつた。同じ著者は「父と子」(Väter und Söhne) の中の他の箇所で次のやうに書いて居る。「知事はキルサノフ Kirsanov 及びバザロフ Bazarov を舞踏會に招待した。そして數分時の後に又招待の言葉を繰返した。その際彼は彼等を兄弟と見做したらしくキサロフ Kisarov と發音した。この場合已に一度招待の辭を述べてあつたことを忘れた事、名を間違へた事、及び二人の青年を區別し得なかつた事等は正に怒らせる要素の連續を意味して居る譯である。名を歪める事は「名の忘却」と同じ意義を持つものであり、忘却への第一歩である。」

これらの諸例に於ては、障礙を起す要素としてその瞬間話者の意圖に合致しないものとして押し除けておかれねばならぬ筈の批評が干渉して障礙の原因的要素をなすのである。

逆に代償名の出現、知らぬ名を思ひ出す事、名を云ひ損ひする事によつて他人と同一視する事

等は、その瞬間に於て何等かの理由の下に背景に止まるべき筈のものの承認を意味するのである。この種の經驗の一つをフェレンチーは彼の學校時代から取つて物語つてゐる。

『中學一年生の時、私は私の生涯に於て初めて公衆の前（卽ち全級生徒の前で）一つの詩を朗讀しなければならなくなつた。私は十分に準備してゐた。而も朗讀しはじめると直ぐに笑ひの一齊射擊によつて邪魔されて吃驚した。敎授は次いでこの奇妙な歡迎の理由を說明した。卽ち私は詩の標題「遠方から」(Aus der Ferne) は正しく云つたが、作者の名としては實際の詩人の名を云はず、自分自身の名を云つたのであつた。詩人の名はアレキサンデル　サンドール　ペテフィー Alexander (Sándor) Petöfi であつて私自身と同じ名（姓氏の前の）をもつて居る事がこの取違へを促したのであつた。併し元來の原因は確かに私が當時內心の希望からこの有名な詩豪と自分とを同一視した事にあつたのである。私は意識的にも彼に對して崇拜に近い愛と尊敬とを持つてゐた。勿論この失錯作業の背後には厭な功名心（功名複合體）(Ambitionskomplex) が隱れてゐたのである』

名を取り違へる事によつて起つた類似の同一視現象が或る若い醫師によつて私に報告された。この醫師はおづおづと非常に敬虔な態度で有名なヴィルヒョウ Virchow に向ひ「私はヴィルヒョウ博士でございます」と云つた。敎授は驚いて彼に向ひ「おやおや、あなたもヴィルヒョウ

と仰しやるのですか」と尋ねたと云ふ事である。私はこの若い野心家がどういふ風にこの「云ひ損ひ」を辯解したか、即ち教授の偉大なる名と列べては彼自身は消失してしまふ程小さくなつたからだと云ふ術つた言譯を彼が見出したか、それとも彼が何時かは自分もヴォルヒョウのやうな偉人になり度いと思つて居るのであるから、樞密顧問官閣下も自分を輕々しく取扱つて呉れない事を希望したからだと云ふだけの勇氣を持つたかどうかは私は知らない。兎も角もこの兩方の考への内の一方――或は多分兩方が同時に働いてこの若い男を自己紹介に際して混亂せしめたものと思はれる。

非常に個人的な動機から私は次の例にも類似の説明が應用され得るかどうかと云ふ事は未決定のままに置かねばならない。一九〇七年アムステルダムに於ける國際總會に於て、私の「ヒステリー」學説が活潑なる論議の對象となつた。私に對する最も强硬な反對者の一人は、私を罵詈する際に度々「話し損ひ」をし彼は自らを私の立場におき、私の名に於て話をすると云つた調子であつたと云ふ事である。例へば彼は「ブロイヱルとフロイド」と云つて居るつもりで「誰でもが知つて居るやうにブロイヱルと私が證明した云々」と云つたのである。この反對者の名は私の名との間に少しも音の類似を示さないのである。私共はこの例及び多數の他の「話し損ひ」の場合に於ける名の取違への例を根據として「話し損ひ」は類音による助力はなくとも隱れたる内容上

の關係の支持があればあらはれ得る事を教へられるのである。

他の一層意義深い場合に於ては自己批判、自己の發表に對する內的抗議は「話し損ひ」のみならず云はうとした事に對する正反對の事を代償として要求する。この場合私共は斷言の文句が如何にしてその斷言の意圖を無效にし、又如何にして「話し損ひ」が內的の不正直を暴露させるかを知つて驚くのである。この場合には「話し損ひ」は身振狂言的表現手段となるのであり、勿論屢〻私共が云はうと欲しなかつた事を表白し自己をあばく手段となるのである。例へば婦人との關係に於て所謂正常的な交際を好まない或る男が、婀娜つぽいと云はれてゐる少女の事を話して居て「私との交際中彼女は Koettieren の習慣は既に捨ててしまつてゐた」と云つた。この場合云はんと欲した言葉 Kokettieren (媚態を作る事) に作用してこれを變化させたものは、別の言葉 Koitieren (交接する事) であつた事は疑ひの餘地なき處である。次の例の如きもそれである。『私共に一人の叔父があるが、私共がちつとも訪ねて行かなかつたので、叔父は數箇月來非常に感情を害してゐた。叔父が新居に轉じたのを機會に、私共は久し振りに彼を訪問した。彼は外見上非常に喜んだ。そして別れ際に非常に感慨深げに「これからは私はあなた方には今迄よりももつとたまに (seltener) 逢ひ度いものだ」と云つた』

偶然に惠まれて、話の材料は屢〻祕密暴露の破壞的作用或は諧謔の滑稽的效果を有する「話し

損ひ」の實例を成立せしめる。

次に擧げるライトレル Reitler 博士の觀察報告例の如きがそれである。

「この新らしい綺麗な帽子は勿論あなた御自身でお飾りつけになつたのでせうね？」と一人の婦人が驚歎したやうな語調で他の婦人に云つた。（但し彼女は aufgeputzt（飾りつける）と云ふ處を aufgepatzt と云つたのであつた）彼女は云はうと思つた讃辭を續ける事が出來なかつた、何故ならば心ひそかに持つた批評「帽子の飾りつけ方が横着である（Patzerei）」と云ふ事があまりにも露骨に、この好ましからぬ「話し損ひ」にあらはれ、世間並の讃辭が凡て本當らしくなくなつてしまつたからである。

次の例に於ても批評は稍々穩當ではあるが明確にあらはれて居る。

「或る婦人が知人を訪問した。そしてその人の言葉數の多い迂遠な話に飽きて辛抱しきれなくなつた。終に彼女は辭去すべく立上つた。彼女は玄關 Vorzimmer まで送つて出て來たこの知人から更におしやべりによつて引き止められ、ついで愈々辭去しようとして扉（ドーア）の前に立ち更に傾聽しなければならなかつた。終に彼女は Sind Sie im Vorzimmer zu Hause? なる問ひによつて知人の話を遮つたのであつた。知人の吃驚した顏付によつて彼女は「話し損ひ」した事を知つた。彼女は玄關（Vo zimmer）に於ける長話にあきあきして「あなたは午前（Vormittag）中

はお家にいらつしやいますか」と云ふ問ひによつて話を打ち切らうとしたが午前と云ふ代りに玄關と云ひ損ひを以て玄關に永く立たせられた事の苛立たしさを現はしたのであつた。

マックス・グラフ Max Graf 博士の經驗した次の例は、自己意識への警告に一致してゐる。

新聞雜誌記者協會コンコルディア Conco dia の總會に於て、いつも金に困つてゐる若い協會員が猛烈な反對演說をなし、彼の興奮に於て Vorstands- oder Ausschussmitglieder（理事或は委員）諸君と云ふ代りに Die Herren Vorschussmitglieder（貸付係員諸君）と云つた。處でこの貸付係員は金錢を貸付ける權利を持つて居り、この若い演說者もまた金錢借受けの願書を提出してゐたのであつた。

Vorschwein の例に於て私共は罵詈の言葉を抑壓しようと骨折る時に「話し損ひ」が生じ易いのを見た。この場合に人はこの方法で胸をすかす譯である。

不器用な使用人との交涉に於て、動物學に脫線した寫眞師は大きな皿に一杯入つて居た水を流さうとして、あやまつてその半ばを床の上に撒けた徒弟に對して「人間よ、先づその一部分を掬ひ取りなさい」（Aber Mensch, schöpsen Sie doch zuerst etwas davon ab!）と云つた（譯者註、但し彼は abschöpfen（掬ひ取る）の代りに abschöpsen と云つたのであつて Schöpse は去勢羊、愚人を意味するのである）その後間もなく彼は不注意の爲に大切な寫眞原板十二枚をあやふく壞さうとした女助手に對する長々しいお叱言の經過中に於て Aber sind Sie

dann so hornverbrannt……（一體お前さんはそんなに角を燒かれて居るのか……そんなにお前は慌てて居るのか……）と云つた。

次の例は「話し損ひ」による自己の祕密漏洩の重要な場合を示すものである。これに附隨する一二の事情は精神分析中央雜誌第二年號所載ブリル*の報告をそのまま此處に轉載する事を正當にする。

*Zentralbl f. Psychoanalyse では誤つてこれがイー・ジョーンズの報告と云ふ事になつて居る。

『或る晩私はフリンク Frink 博士と散歩に出かけ、紐育精神分析學會の一二の要件に就いて語り合つた。私共は同業者なるR博士に出逢つた。この人には私は數年來逢つた事もなく、彼の私生活については何も知らなかつた。――私共は久し振りの會合を喜び合ひ、私の申出によつて或「カフェー」に入り二時間に亙る歡談をした。彼は私の事を詳しく知つて居る樣子であつた。通り一遍の挨拶の後に、彼は私の小さい子供の事をきき出し、私に向つては彼が共通の友人から私の事を時々聞いて居ると云ふ事、私の仕事に就いては醫學雜誌で讀んで興味を感じて居たと云つた。私は彼に結婚して居るかと尋ねた處、彼はこれを否定し、「自分の樣なものは結婚する必要がないんだ」と附け加へた。「カフェー」を出る時彼は急に私に向ひ「私はあなたが次の樣な場合にはどうなさるか聞かして吳れ給へ。私は離婚訴訟に共同責任者として捲き込まれて居る一看

ひ、彼がどう云ふ風にして彼女を治療すればよいか教へて呉れと云つた。』

尙ほ看護婦がこの訴訟と醜聞のために非常に興奮し、酒を飲みはじめ非常に神經質になつたと云

dieScheidung.) と云つた。彼は直ぐに訂正して「勿論夫人が離婚をかち得たのです」と云ひ、

は彼を遮つて「夫人が離婚する事が出來たと云ふんでせう」(Sie wollen sagen, sie bekam

て指名し、そして彼が離婚訴訟に勝つたのです。」(…er bekam die Scheidung) と云つた。私

護婦を知つてゐます。或る夫人がその夫に對して離婚の訴訟を提起し、看護婦を共同責任者とし

*亞米利加の法律では、夫婦の内一方が姦通をした事が證據立てられた場合にのみ離婚が宣告される。即ち、離婚は欺かれた方にのみ許可される。

『私はこの「云ひ損ひ」を訂正するや否や、彼にこの「云ひ損ひ」を說明せん事を求めた。併し私は例の呆れた答へを得ただけであつた。彼はどんな人でも「話し損ひ」はするものであり、それは偶然な事であり、その背後には何もないと云つた。私は反駁して「話し損ひ」には凡て根據がなくてはならぬ事、若しも前に彼が結婚してゐないと云つてゐなかつたならば、私は彼自身がこの離婚話の主人公である事を信ぜしめられたであらう。何故なればこの「話し損ひ」は彼ではなく、彼の妻が訴訟に敗れ、彼はアメリカの婚姻法に從つて扶助料を支拂ふ必要なく、紐育市に於て再婚し得ると云ふ希望によつてよく說明されるからだと云つた。彼は頑强に私の推察を斥

けた。併し同時に非常に強い感情的反應、明らかな興奮の徴候、ついで起つた哄笑は益〻私の推測を强からしめたのであつた。科學上の闡明の爲に眞實のことを云つて吳れと私が要求したのに對し彼は答へた。「あなた方が若し虛言を言つて欲しくないならば、あなた方は私の童貞を信じなくてはならない。從つてあなたの精神分析的說明は根本から間違つてゐる」と——尙ほ彼は些細な事を一々注意するやうな人は危險であると附け加へた。急に彼は他人との會見の約束を思ひ出して、辭去した』

『私共兩人（フリンク博士と私）は、併し彼の「話し損ひ」に就いての私の說明が正しい事を確信した。私は證據又は反證を取調べによつて得ようと決心した。——數日後私はR博士の隣人であつて舊友なる某氏を訪ねた。この人は私の說明を完全に肯定した。この訴訟事件は數週間前に起り、看護婦は共同責任者として召喚されて居り——R博士は今ではフロイドの心的機制の正しい事を堅く信じて居る。』

自己裏切りはオットー・ランクの報告して居る次の例に於ても疑ひの餘地はない。

少しの愛國心の持合せもなく、また彼の子供等を自分が餘計な事だと思つてゐるこの感情を持たせない樣に敎育したいと思つて居た或る父親は、彼の子供等が或る愛國的示威運動に參加した事を非難し、息子等が叔父さんもこれに參加した事を引合ひに出したのを斥けて次の樣に云つた。

「お前達はこの叔父さんに見習つてはならないぞ。彼は Idiot（白痴者）なんだから。」父親のこの異常な語調に驚いて居る子供等の顔を見て、彼は自分が「云ひ損ひ」をした事に氣がついた。そして辯解するやうに「私は勿論 Patriot（愛國者）と云はうと思つたんだ」と云つた。

ヨット・シュテルケ（前掲書）の報告してゐる「話し損ひ」は對話の相手方からも自己裏切りとして説明された。そしてこの「話し損ひ」に就いてはシュテルケは適切であり、且つ説明の任務以上に出づる考へを附け加へてゐる。

『或る女齒科醫がいつか妹の二本の臼齒の間の接觸 Kontakt が良いかどうか（卽ち臼齒がその側面を以て互に相接觸し、食物の殘物がその間に止まり得ないやうになつて居るかどうか）を一度診て遣らうと約束した。ところで妹は非常に永く待たせられた苦情を云ひ、冗談に「今姉さんは一人の同僚をよく治療してやつて居り、妹はまだ待たせておくんだ」と云つた。女齒科醫は妹を診察し、實際に小孔を一方の臼齒に發見して云つた。「私はこんなに惡いとは思はなかつた。私はあなたが Kontant（現金）を持つてゐない——Kontakt（接觸）を持つてゐないだけだと考へて居た。」と——妹は笑ひながら叫んだ。「あなたはお金を拂ふ患者よりも遙かに永く私を待たせて置いたのは、あなたの慾深い爲だと云ふ事が判つたでせう？」と。——』

（私は勿論彼等の思ひ付きに私の思ひ付きを加へ、それから結論を引出すべきではないが、こ

の話し損ひの事を聽いた時私の思想の流れは直ぐにこの愛すべき怜悧なる二婦人が未婚者である事、及び若い男と餘り交際しないと云ふ事に向って行つた。そして私は彼女等がもつと金(Kontant)を持つて居たら若い男子等ともつと接觸(Kontakt)の機會を多く持つたであらうと自問自答した)

テオドル・ライク(前掲書)が發表して居る次の「話し損ひ」の例も自己裏切りの價値を持つて居る。

『或る若い娘が、氣に合はない男と婚約せねばならなかつた。この二人の若い人々を接近させる爲に彼等の兩親は會合をなし、この會合には未來の花嫁花婿も參加した。娘は自分に對して非常に慇懃に行動して居る彼女の求婚者に自分に氣のない事を悟らせないだけの自制力を持つてゐた。併し彼女の母親が彼女に對してこの若い男が氣に入つたかどうかと尋ねた時に、彼女は丁寧に次の如く答へた。Gut. Er ist sehr liebenswidrig「結構ですわ、あの方は非常に厭な男です」と。(譯者註、彼女は liebens-firdig(愛すべき親切な)人であると云はうとしたのであつたが、内心の嫌惡感が裏切つて liebens-idrig と「云ひ損ひ」をしたのであつた)』

オットー・ランクが諧謔的「話し損ひ」として記述して居る別の實例もこれに劣らぬ價値あるものである。

『色々のお話をきく事が好きであり、又相當な贈物さへ貰へば不義の求愛に對しても之を辭せ

ないと稱せられてゐる或る既婚の女に向ひ、彼女の寵愛を求むる若い男が、魂膽があつて昔から知られて居る次の話をした。二人の商賣友達の内の一人が、仲間のいささかツンとした細君を物にしようと骨折つて居た。終に彼女は千「グルデン」の贈與金を出せば望みを叶へてやらうと云つた。さて彼女の夫が旅行に出掛けようとする時に、彼の仲間は彼から千「グルデン」を借り、翌日それを彼の妻に返却しておく事を約した。勿論この男はこの金額を友人の妻に對する愛の報酬のやうな顔をして與へるのであつて、結局この妻は歸宅した夫が千「グルデン」の金を出せと要求し、尙ほ云はれる迄金を出さなかつた廉で氣の毒にも叱られた時には惡事がばれたかと思つたと云ふ話である。——若い男がこの話をして誘惑者が彼の仲間に向つて「私はその金を明朝あなたの奥さんにお返ししませう」Ich werde das Geld morgen deiner Frau zurückgeben ツーリュックゲーベンと云ふ處迄行つた時、彼女は意味深長な次の言葉で彼の話を遮つたのであつた。「もしもし、その話ならあなたは以前にお返しになつたのではありませんか（zurückgegeben）いえいえ、失禮、私はお話し（erzählt）下さつたのではありませんか、と云はうと思つたのでした」と。彼女は同じ條件の下に彼に靡いてもよいと云ふ事を直接には云なかつたが、非常に明らかに知らせた事になるのである（Internat. Zeitschsift für Psychoanalyse, I, 1914）』

フワウ・タウスク V. Tausk は「祖先の信仰」なる題下に無難な轉機を取つたこの種自己裏切

りの好例を報告して居る。A君は次の如く語つた。『私の花嫁は基督教徒であり、猶太教に入る事を好まなかつたので、私は結婚する爲には猶太教から基督教に入らねばならなかつた。私には宗旨換へに對して、內的抵抗がないわけではなかつた。併し目的は宗旨換へを辯護するやうに見えた。殊に私は宗教上の確信を持つてゐた譯ではなかつたので、猶太教への外面的所屬を拋棄さへすればそれでよかつたのである。それにも拘らず私はその後不相變猶太教を奉じて居り、私の知人で私が洗禮を受けた事を知つて居る人は少なかつた。この結婚から二人の息子が出來、彼等は基督教の洗禮を受けた。子供等が相當大きくなつた時、彼等が學校に於ける猶太人排斥主義の影響を受け、つまらぬ理由から父に背く樣な事があつてはならぬと云ふ譯で、彼等が猶太人の出である事を教へてやつた。數年前私は當時小學校に行つて居た子供等と一緒にDに於ける避暑地に行き、或る學校教師の家庭に泊り込んだ。或日私共は、平常は非常に親切なこの家の人々とおやつ(午後の中食)に坐つて居た時、宿の女主人は彼女の避暑客が猶太人の出である事を全然知らなかつた爲、猶太人に對する實に鋭い攻擊をやつた。私は息子等に「確信の度胸」の手本を示すために勇敢にユダヤ教の家のものである事を宣言すべきであつた。併し私は一面に於て、斯くの如き白狀に續いていつも起る不快なる論判を恐れた。尙ほ又私は若しも宿の人々が私共の猶太人である事を知つて、私共に對する態度を變ずる樣な事があつたならば、私共は折角見つけた好

い宿泊所を捨てねばならぬ事になり、私も子供等も、さらでだに短い休養期を臺なしにしなければならないかも知れない事を恐れた。私は子供等が永くこの話に加はつて居ては彼等が率直に、無邪氣に、重大な結果を醸す恐れある事實を暴露するかも知れないと考へたので、子供等を庭の方に遣り、仲間から遠ざけようと思つた。そして Geht in den Garten Juden――（お庭へ出なさい、猶太人――）と云ひ、素早く Jungen（若い人たちよ）と訂正した。私はこれで失錯作業によつて私の「確信の度胸」をあらはした事になるのである。他の人々はこの「話し損ひ」に何等の意義をも與へなかつた爲、この「話し損ひ」からは何等重大なる結果は招來されなかつた。併し、私は祖先の信仰は、自分が息子であり、又子息を持つ場合には罰なしにはこれを否定する事が出來ないものであると云ふ教訓を得た」と（Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, IV, 1916）』

「話し損ひ」の次の例は決して無難には濟まなかつた。此の例は裁判官がその訊問の途中に於て、この蒐集のために書きつけて置いて呉れなかつたならば、私は發表しなかつたであらう。

家宅侵入を以て訴へられた憲兵が次の様に云つた。「私はそれ以來此 militärische Diebsstellung（譯者註、militärische Dienststellung（軍務）の「云ひ誤り」であつてDieb は盗賊を意味する）から免ぜられてゐないから現在尙ほ民衆庇護隊に居ります」と。

「話し損ひ」は本人が反對してゐる時に確證を與へる手段として用ひられるならば愉快に作用するものであり、精神分析作業をなす醫師の大いに歡迎する處である。患者の一人に就き、私は一つの夢を判斷する必要に迫られた。その夢には Jauner と云ふ名があらはれたのであつた。夢を見た本人は、この名の人を知つてはゐたが、何故にこの人が夢の關係の中に取り入れられたかと云ふ事は判らなかつた。其處で私が Gauner（無賴漢）と云ふ罵詈の言葉と音が似通つて居る名であるから出て來たのではないかと云ふ推測を患者に敢て告げた處、彼は急に又強くこれに反對した、併しその際患者は「話し損ひ」をし、二度目にこの代償名を用ひる事によつて私の推定を確かめたのであつた。彼の答へは次のものであつた。Das erscheint mir doch zu jewagt（譯者註、gewagt の「云ひ誤り」であつて、彼は「それはあまりにこじつけである」と云はうとして云ひ誤つたのである）私は彼が「話し損ひ」をした事を注意した處、彼は私の判斷を承認するに至つた。

激しい議論の最中に話さうと思ふ事とは反對の事を示す樣な「話し損ひ」が、議論をして居る二人の内の一方に起る場合には、この「話し損ひ」は直ちに彼を相手に對して不利な立場におくのである。何となれば相手方は彼の有利な立場の利用を怠る事は滅多にないからである。

人々は一般に他の失錯作業に對すると同樣「話し損ひ」に對しても私がこの書に於て主張してゐると同じ解釋をして居る事は明らかになつて來るのである。而も彼等は理論に於てはこの解釋

に贊成せず、又彼等は事が自己に關する限り、失錯作業を寛容する事に伴ふ利益を捨てたがらないのである。決定的の瞬間に於ける話の失錯が必然惹起する笑ひと嘲笑とは『「話し損ひ」は舌の誤り（失言）（Lapsus linguae）であり、心理學的には無意義のものである』と云ふ一般に認められて居る考へ方に對する反證を意味するものである。獨逸の宰相ビューロウ侯は一九〇七年十一月彼の獨逸皇帝擁護演說の文句が「話し損ひ」によつて逆になつた時に、この異議申立てによつて彼の立場を救はうとした。

『さて現在卽ちウィルヘルム第二世皇帝の新時代に關しては私は一年前に云つた事を繰返し得るのみである。卽ち吾等の皇帝を取卷いてゐる責任ある一群の補弼の臣（verantwortlicher Ratgeber）の事を云々する事は……（この時聲高く Unverantwortlicher（「無責任なる」だ）と叫ぶものあり）……無責任なる補弼の臣の事を云々する事は不當であり、不正である。失言を陳謝する』（喝采）。

然しながらビューロウ侯の文章は否定詞の重複によつて多少不透明にされた。尙ほ演說者に對する同情、彼の困難なる立場に對する顧慮等は、この「話し損ひ」をそれ以上彼に不利益に利用させる事がない樣にした。處が一箇年後、同じ場所に於て別の人が一層まづい「話し損ひ」をやつた。この人は皇帝に對する腹藏なき表明をして欲しいと提唱しようとした。而もその際悪質な

る「云ひ損ひ」によつて、彼の忠義な胸の中に宿つて居た別の感情を思ひ起させたのであつた。

ラットマン(獨逸國民黨)『吾人は上奏の問題に關しては議會の事務規定の基礎の上に立つて居る。これによつて議會は斯くの如き上奏を皇帝に奉る權能を持つて居るのである。吾人は獨逸國民の統一したる思想と希望は、この場合にも一致した上奏書に到達し得る事を信ずるものである。そして吾人がこの事を君主の感情を十分斟酌するが如き形式に於てなし得るならば、吾人はこの事を rückgratlos(脊骨なしに)になすべきである。(數分間續く嵐の如き喝采)諸君、rückgratlos ではなく rückhaltlos に(腹藏なく)と云ふべきであつたのでした。(喝采)而して斯くの如き腹藏なき上奏を、この國家多難の時局に際して皇帝が御嘉納になる事を私は希望する。』

一九〇八年十一月十二日發行のフォールウェルツ紙 Vorwärts は、この「話し損ひ」の心理學的意義を明らかにする事を怠らなかつた。「反猶太系議員なるラットマンが、質問第二日に於て、嚴肅な熱情を以て彼及び彼の味方の皇帝に對する意見を、脊骨なしにして(rückgratlos に)表明せんと欲すると脫線し告白したが、帝國議會の一議員が思はず本音を吐いて、彼及び多數の議員の君主に對する態度をこれほど適切にあらはした事は未だ嘗てないであらう。各方面から起つた嵐の如き喝采はこの氣の毒な議員のその後の言葉を窒息せしめた。しかも彼は語を强めて rückhaltlos と云はうと思つたのだと吃りながら辯解した」と。

私は「話し損ひ」が、正に氣味惡い豫言の特徴を得た尙ほ一つの例を附加しよう。「W市に於ける成金の內でも最も新らしい成金の一人であり、兎も角も最も富裕であり、年齡に於ても最も若い人である銀行家のXが、短期間續いた競爭の後に×××銀行の最多數の株劵を持つ事になり、その結果注意に値する株主總會に於て、この銀行の年とつた頭取であり、古い部類に屬する財政家が再選されないで、若いXが銀行の頭取になつた事が一九二三年新春の萬國經濟界の注意を喚起した。取締役の一員なるドクトルYがなした舊頭取の送別演說に於ける繰返しての痛い「話し損ひ」が、二三の聽者に氣がついたのであつた。ausscheidenden Präsident（退職される頭取）と云ふべき處に dahinscheidenden Präsident（死なんとする頭取）と云ふ言葉が度々出て來た。――ついで再選にもれたこの舊頭取が、この總會の數日後に死亡すると云ふ事が起つたのであつた。尤も彼は旣に八十歲を超えてゐた（ストルフェル報告）

話す人の祕密漏洩よりも、舞臺の外に居る聽者に悟らせる事を目的とした「話し損ひ」の好例が「ワルレンシュタイン」の「ピッコロミニー」第一幕五場に出て居り、この方法を用ひた詩人（シルレル）が「話し損ひ」の心的機制と意味をよく知つてゐた事を私共に示して居る。前の舞臺に於てはマックス・ピッコロミニーは非常に熱烈に公爵側の味方をして居た。そして彼がワルレンシュタインの令孃を伴つて、陣營に旅行して行く途上に於て知つた平和の喜びに有頂天にな

つてゐた。彼は自分の父及び宮廷よりの使者なるQuestenbergをあとに殘して去つたので彼等は非常に恐慌を來したのである。かくて第五場が次の如く進んで行くのである。

クェステンベルグ。　困つた事だ！　さうなつたのか？　我が友よ、私共はこんな馬鹿馬鹿しい考へを以て彼を去らしめねばならぬのか、呼び戻して卽坐に彼の眼を開かせやうではないか。

オクタヴィオ。　（深い沈思から我に還り）處が彼が既に私の眼を開けて呉れたのだ。おかげで嬉しくない事迄が見える樣になつた。

クェステンベルグ。　我友よ、何ですつて？

オクタヴィオ。　呪ふべきこの旅行よ！

クェステンベルグ。　何故？　それは何の事ですか？

オクタヴィオ。　さあいらつしやい！　私は直ぐにこの不幸な足跡を辿らねばならない。そして私自身の眼で見屆けねばならない――いらつしやい――（彼を連れ行かうとする）

クェステンベルグ。　どうするのですか？　何處へ行くのです？

オクタヴィオ。　（せき立てながら）彼女の處へ（zu ihr）

クェステンベルグ。　……の處へ？（zu――）

オクタヴィオ。　（自ら訂正しつつ）公爵の處へ！　行きませう。云々。

彼の處へ（Zu ihm）の代りに「彼女の處へ（Zu ihr）と云つたこの些細な「話し損ひ」は、廷臣が「ピッコロミニーの父が丸で謎の樣な事ばかり獨り言して居る」と歎いて居る間に、已に父は息子の變節の動機を洞察して居た事を私共に示すのである。

「話し損ひ」の詩的利用の他の例をオットー・ランクがシェークスピアに於て發見して居る。私は精神分析學中央雜誌第一卷第三號によつてランクの發表を引用しよう。

『フロイドが「ワルレンシュタイン」に於て示した「話し損ひ」と同樣に詩人がこの失錯作業の心的機判と意味を熟知し、その理解を聽衆にも前提して居り、詩的に巧みに動機づけられ、技巧的にも非常にうまく用ひられて居る「話し損ひ」の例がシェークスピアの「ヴェニスの商人」の第三幕二場に存在する。父の意志に依つて彼女の婿選びを富籤によつてするやうに强ひられてゐたポルチア Porzia は今まで彼女の好まぬ求愛者を偶然の幸によつて逃れて來た。彼女が最後に實際に愛する求婚者、バッサニオ Bassanio を見出した時、彼女も又わるい籤を引き當てはしないかと恐れた。彼女は彼がたとひ惡い籤を引いても、彼女の愛を得る事は確かだと心をこめて彼に云ひたかつた。併しそれを云ふ事は彼女の神に對する誓によつて妨げられた。この內的葛藤に於て、詩人は彼女をして好きな求愛者に對して次の樣に云はしめて居るのである。

お願ひです待つて下さい。一二日だけ。あなたが籤を引く迄。何故なれば若しあなたが間違つ

た籤をお引きになつたら、私はあなたと交際する事が出來なくなります。だから猶豫して下さい。

何かが私に云ひます（それは戀ではないけれども）私があなたを失ひたくないと云ふ事を……私はあなたを正しい選擇に導く事は出るのですが、さうすると私は神への誓を破る事になります。さうは私はしたくありません。さうすればあなたが私を失ふ事になります。併しさうなりますと、あなたは私が誓を破つた方がよかつたと云ふ樣な罪惡的な希望を抱かせる事になるので御座います。

おお、私を魅惑し私の身を二分したあなたの眼が憎らしい!! 私の半ばはあなたのものです。他の半ばはあなたのものです……私のものだと私は云はうと思つたのでした。併し若しそれが私のものであれば、それはあなたのものです。所詮私の全部があなたのもので御座います。

彼女が既に籤引き以前に於て全然彼のものであり、彼を愛して居る事を實際に默してゐなければならなかつた爲に、それとなく暗示したかつた事を詩人は驚歎すべき心理學明敏さを以て「話し損ひ」によつてあからさまに表現せしめたのであり、この技巧に依つて詩人は籤引の結果に對して持つ戀する者の堪へ難き不確實感、及び同じ氣分を持つ聽衆の緊張をなごやかにする方法を心得て居るのである。「話し損ひ」に對する私共の解釋が、大詩人から味方をして貰ふ價値があ

ると云ふ興味から私はアーネスト・ジョーンズによつて發表された第三の例を引用してもよいと思ふ（精神分析學中央雜誌第一卷十頁）

『オットー・ランクは最近發表の論文に於て、シェークスピアがその曲中の人物ポルチアに「話し損ひ」をさせ、これによつて彼女の祕密の考へを注意深い聽者に判らせた好例を指摘した。私は最も偉大な英國の小說家ジョージ・メレディス George Me edith の傑作「利己主義者」（"The Egoist"）から類似の例を述べようと思ふ。この小說の大體の筋を述べると次のやうである。

周圍の人々からは非常に評判のよい貴族。サー・ウィロウビー・パッターン Sir Willoughby Patterne はミス・コンスタンチア・ダーハム Miss Konstantia Durham と婚約したが、彼女は彼に於て世間に對しては巧みにかくされて居る甚しい利己主義を發見し、彼との結婚を避ける爲にオックスフォード Oxfo d と云ふ海軍大佐と駈落ちしたのであつた。數年後彼はミス・クララ・ミッドルトン Miss Klara Middleton と許婚になつた。さてこの書の大部分はクララ・ミッドルトン孃が彼女の許婚の男に眼立つ同じ特徵を發見した時に、彼女に起り來る精神軋轢の敍述にみたされて居るのである。外的事情と彼女の名譽心は、彼女をその約束に縛り付けたが、一方彼女の約婚の男は彼女には益〻輕蔑すべきものに見えたのであつた。彼女は一方彼の從兄弟

であり祕書であるヴァーノン・ホイットフォード Vernon Whitford ——この男と彼女は最後には結婚するのだが——と仲よくして居た。併しホイットフォードはパッターソンに對する忠義及び他の動機から差控へてゐたのであつた。

或る獨白に於てクララは次のやうに彼女の苦惱を語つてゐる。「或る氣高い紳士が私のやうな者を見て私を助けて下さるのだつたら！ ああ、私は荊棘と藪のこの牢獄から逃れたいものである。私は獨りで私の道をひらいて行く事が出來ないのだ。私は臆病者だ。一つの指圖*（Fingerzeig）が私を變化させるであらうと私は信ずる。一人の仲間の處に私は逃れる事が出來るだらう。血みどろに掻き裂かれ、輕侮と叫び聲に怒號されながら……コンスタンチアは一人の軍人を見つけたが多分彼女は祈願したのであらう。そしてその祈願は聽屆けられたのだ。彼女の行ひは正しくはなかつた。さりながら、おお、私はその爲に如何に彼女を愛する事よ！ 相手の男の名はハリー・オックスフォードである……彼女は躊躇しなかつた。彼女は鎖を斷ち切り、明らさまに他の男に乘り移つた。勇敢なる少女よ、汝は私をどう考へるだらうか？ だつて私には一人のハリー・ホイットフォードが居ないんだもの、私は一人ぼつちだもの！……」

*飜譯者（フロイド）註、私は最初原文にある beckoning of a finger を Fingerzeig と譯せずに leiser Wink（微かなる合圖）と飜譯しようとした。然しながら Finger（指）と云ふ語を抹殺する事は、この文章の心理學的の精緻

を奪ふものである事をさとるに到つた。

彼女がオックスフォードの代りに別の名（ホイットフォード）を用ひた事の突然の認識は、鐵拳の様に彼女を打つた。そして彼女を燃える様に赤くさせた。

兩方の男の名がフォード（ford）で終つて居る事實が兩方の名を取違へる事を容易にした事は明らかであつて、多數の人々はこれがその十分なる原因と見るであらう。併し眞の深い根據は作家によつて明らかに述べられて居る。

別の箇所に同じ「話し損ひ」があらはれて居るがそのあとにすぐ自發的躊躇と急なる話題の轉換が起つて居る。精神分析學及びユングの聯想に就いての研究によつて私共は半ば意識的なる複合體が觸れられる場合にのみこの自發的躊躇、及び話題の急なる變化が起ることを知つて居る。

パッターソンはホイットフォードをかばふ様な調子で云つた。「間違つた警戒だ（大丈夫だ）善良な老ヴァーノンは突飛な事の出來る人間ではないんだ」と。クララは答へた。「だつて若しオックスフォードさんが……ホイットフォードさんが……ゐたら……あなたの白鳥が湖水をこちらの方へ進んで來ますよ。彼等は怒つてゐる時には如何に美しく見える事よ！　私はあなたに何をお尋ねしようと思つて居たのかしら。他の何人かに對する明らさまなる驚歎をまのあたり見せられた男達は勿論落膽させられるものでせうか？」ウィロウビー卿は急にはつとさとつて身を剛張らせた。

尙ほ他の一箇所でクララは別の「話し損ひ」によつてヴァーノン・ホイットフォードと親密にしたいと云ふ祕密の希望をあらはして居る。一人の若者に話しながら彼女は云つて居る。「晩にヴァーノンさんに云つて下さい――晩にホイットフォードさんに云つて下さい云々*」

＊詩人の企圖に從へば意味があり多くは自己暴露と解すべき「話し損ひ」の他の實例が、シェークスピアの「リチャード二世」第二幕第二場及びシルレルの「ドン　カルロス」第二幕第八場エボリー Eboli の「話し損ひ」に存在する。かくの如き目錄を完全にする事は譯のない事である。

此處に述べた「話し損ひ」の解釋は、細目に亘つても證明する事が出來る。私は「話し損ひ」の極く些細な又最も手近にある實例と雖もそれだけの意味を持つて居り、著しい實例と同樣に同じ解釋を許すものである事を度々示す事が出來た。私の意志に全然反し、自分の堅い計畫の下にブダペストへの短期間の遠足を企てた一婦人患者は、私に對して僅か三日間だけ其處へ行つて來るだけだと言ひ譯をしようとしてただ三週間だけ（für drei Wochen）と云ひ損ひをした。かくて彼女は彼女にとつて不適當であると私が考へた團體に三日よりも寧ろ三週間行つて居たいと思つた事を裏切つたのであつた。――或晩私は妻を劇場へ迎へに行つたが妻を連れ戻る事が出來なかつた事を辯解せねばならぬ羽目に陷り、「私は十時十分過ぎに劇場に行つて居たんだがね」と云つた處「あなたは十時前にと云はうと思つたのでせう」と訂正された。勿論私は十時前（vor 10

Uhr）と云はうと思つたのであつた。十時過ぎでは勿論辯解は成立たなかつた。私は劇場の「プログラム」には劇が十時前に終るとかいてあると云はれてゐた。私が劇場に到着した時には、玄關は眞暗になつて居り、劇場はからになつてゐた。演劇はとつくに終つて居り、妻は私を待たなかつたのであつた。私が時計を見た時には十時にまだ五分缺けてゐた。併し私は私の家庭に於て私の立場を一層好都合にするために、十時にまだ十分缺けてゐたと云はうと企てたのであつた。殘念ながらこの「話し損ひ」は、私の企圖をだめにしてしまひ、單に私の不正直を暴露する結果になつた。卽ち「話し損ひ」は私が告白しなければならなかつた以上に私を告白せしめたのであつた。

此處に於て私共は困惑の狀態に於けるロごもり、或は吃音等の樣に箇々の言葉を傷つけないで全體の話の「律動（リズム）」や出具合を害するだけである爲に「話し損ひ」としては記述されない言語障礙について述べよう。併しこの場合も同樣に內的の精神軋轢が言語障礙として表面にあらはれるのである。私は實際陛下に謁を賜るが如き場合、眞劍な戀の口說、陪審官の前に自己の名譽と名聲とを庇護する場合等、簡言すれば所謂吾人の全部が其處にある場合、（吾人が眞劍になつて居る場合）には何人と雖も「話し損ひ」をしないものであると信ずる。作家の作風の批評の際にすら私共は箇々の「話し損ひ」の根源をつきとめる際に缺く事の出來ない說明の原則を持つて行つて

よいのであり、又持つて行く事に慣れて居るのである。明晰にして曖昧ならざる書き方は著者が彼自身とぴつたり一致して居る事を私共に教へるのであり、無理があり、うねうねして居る云ひあらはし方であり、所謂一つ以上の光明に向つて斜視して居る表現の仕方が認められる場合には、私共は十分明らかにされてゐない考へ、煩雑にする考へが其處に存する事を認め、或は著者の自己批評の窒息した聲を聞き出す事が出來るのである。*

*心にあることは
はつきりと現はれる
そしてそれを表はす言葉は
容易に見出される（ボアロー作詩法）

この書が最初發行されて以來外國語を話す友人や同僚は彼等の國語を話す國々に於て觀察し得た「話し損ひ」の實例に注意を向け始めた。果せるかな彼等は失錯作業の法則は言語材料とは無關係である事を見出し、此處に獨逸語を話す人々に於てなされたと同樣の解釋を繰返したのである。私は數へ切れない程多數の實例の中から此處に唯一例を掲げよう。

ヱー・ヱー・ブリル博士（紐育市）は自分の事に就いて次の報告をして居る。「一友人が或る神經病患者の事を敍述し、私が彼を治療し得るかどうかと尋ねた。私は精神分析によつて彼の凡

ての病状を早晩除き得るものと信ずる。それは durable case (永續きのする病例) だから――, curable' case (治癒し得る症例) だからと云はうと思ひながら――と云つた」と (A contribution to the Psychopathology of Everyday Life. Psychotherapy, vol. III, Nr. I, 1909.)

最後に私は一定度迄の努力を辭せず、又精神分析に對して未知でない讀者のために一例を附加しよう。この例から私共は「話し損ひ」の追究が精神の非常な深さに導き得る事を知るのである。

エル・イェーケルス L. Jekels 博士は次の例を報告して居る。「十二月十一日。私は或る懇意な婦人から波蘭語で排戰的に而も傲慢に次の言葉で話しかけられた。「何故私は本日十二本の指があるなどと云つたのでせうか?」と、何う云ふ場合にそんな事を云つたのかと私から尋ねられて彼女は次の様に物語つた。彼女は訪問の目的で娘と一緒に外出の用意をしてゐた。そして寛解狀態にある早發性癡呆症者なる娘に襯衣を着替へよと命じ、娘は隣室で着替へた。娘が再び室に入つて來た時に母親は爪磨きをしてゐた。そこで二人の間に次の様な對話が起つたのであつた。

娘。「それ御覽なさい私の方はもう用意が出來たのにお母さんはまだでせう!」

母。「お前さんは襯衣 (Bluse) 一枚だけぢやないの。私は十二本の爪を持つて居るんだもの」

娘。「何ですつて?」

母。（短氣を起して）「勿論私は十二本の指を持つて居ると云ふのよ。」

この物語を一緒になつて聽いてゐた同僚は、彼女に向つて十二（zwölf）に就いて何か思ひ泛ぶ事はないかと尋ねた處、彼女は同じやうに迅速且つきつぱりと「十二は私にとつては別に意味ある日附（Datum）ではありません」と答へ指（Finger）に就いては少しくためらひながら次の様に聯想を語つた。

「私の夫の家庭に足に六本の指（フインゲル）（波蘭語には趾（ツエーエ）に對する特別の言葉はない）あるものが出來ました。私共に子供が生れました時には指が六本でないかを直ぐに調べました」と。外的事情からその晩には分析は續行されなかつた。

次の朝（十二月十二日）この婦人は私を訪ねて來た。そして見るからに興奮して次の如く物語つた。「私に起つた事をどうぞ考へて下さい。約二十年來私は丁度今日に當る私の夫の年取つた叔父の誕生日を祝つて來ました。そしていつも十一日には手紙をかく事にしてゐました。處が今度はそれを忘れましたので、丁度今電報を打たねばならなかつたのでした」

私及びこの婦人は昨晩同僚が彼女に向つてその誕生日を想起させる非常に好都合な十二と云ふ數について尋ねた時に彼女が「十二は彼女にとつて意義ある日附でないと」云ふ言を以て非常にきつぱりとその問を斥けた事を思ひ出した。

ついで彼女はこの叔父が多大の遺産を遺す望みある金持である事、彼女が常に――特に現在の彼女の非常に逼迫した經濟狀態に於て――この叔父の遺産をあてにしてゐた事を自白した。

從つて數日前知人が彼女が澤山の金を手に入れる事になるだらうと云ふ事を骨牌によつて豫言した時には、この叔父の事、延いては彼の死と云ふ事が直ぐに考へられたと云ふ事であつた。直ちに彼女にはこの叔父が彼女及び子供等が金を獲得し得る唯一の人であると云ふ事が頭腦にひらめいた。又彼女はこの場面に於て瞬間的に嘗てこの叔父の妻が遺言狀を書くやうな場合には、彼女の子供等を考慮に入れる事を約した事を思ひ出した。併し、この叔父の妻は、遺言狀なしに死んで行つたのであつた。それで彼女は叔父の妻がその夫（叔父）にそれに關する委任をしてゐたであらうと考へてゐた。

彼女が自分に豫言をした婦人に向ひ「あなたは人殺しをするやうに私を誘惑しますね」と云つたさうだが、その際には彼女には叔父に對する「死の願望」が非常に強く起つてゐた事は明らかである。

この豫言のあつた日から叔父の誕生日迄の四五日の間彼女は叔父の居住地で發刊されて居る新聞紙上に叔父の死亡に關する記事を探したのであつた。從つて彼の死を非常に強く希望してゐた爲に、差迫つた祝すべき誕生日の事及び誕生の日附が彼女によつて非常に強く壓迫され、その結

果は年來行ひ來つた計畫が忘却されたばかりでなく、同僚の質問に會つてさへもこの事が意識されなかつた事に不思議はない譯である。

「十二本の指」なる「云ひ誤り」に於て、壓迫されてゐた「十二」が表面に現はれて、この失錯作業の限定が部分的に明らかになつたのである。

私が部分的の限定だと考へるのは「指」(Finger)への注意すべき聯想が、私共に尙ほ別の原因動機ある事を思はせるからであつて、この聯想は何故に十二なる數字が十本の指と云ふ樣な無害なる熟語を云ひあやまらせたかを私共に說明するのである。

彼女の思ひ付きには次の樣なものがあつた「私の夫の家庭には足に六本の指あるものが出來ました」六本の趾は一定の異常の徵候であり、從つて六本の指は一人の異常兒であり、十二本の指は二人の異常兒を意味するのである。そして事實上この事はこの場合に適中したのである。

非常に若くて結婚したこの婦人は、常々奇嬌な變つた人物だと云はれてゐた。そして短い結婚生活の後に死亡した彼女の夫の唯一の遺產として、二人の子供を持つてゐた。この子供等は醫師から父系の重い遺傳素質を受けて普通とは變つて居ると度々云はれてゐた。

長女は重い緊張病發作の後に最近家に歸つて來た。その後間もなく思春期にある若い方の娘が重い神經症に罹つたのであつた。

子供等の異狀であると云ふ事がこの場合叔父に對する死の願望と一つになり、この異常に强く壓迫され且つ一層大なる心的價値を有する要素と結びついた處から考へて吾人は異常兒に對する死の願望がこの「話し損ひ」の第二の限定をなして居る事を假定せざるを得ないのである。

十二と云ふ數字が死の希望として重要な意義を持つた事は、この婦人の觀念界に於て叔父の誕生日が死の概念と非常に密接に聯想されて居た事からも明らかであつた。何故なれば彼女の夫は十三日卽ち叔父の誕生日の一日後に死亡したのであつた。その時叔父の妻は、この若い未亡人に向つて「昨日迄も彼は心から親しく我が夫の誕生日を祝福してくれた……それなのに今日ははや！」と云つたのであつた。

尙ほ私はこの婦人が子供等の死を希望すべき實際上の理由を、十分に持つてゐた事を附加へようと思ふ。彼女はこの子供等からは何の喜びも經驗し得ず、唯苦惱と自由の苦しい制限に苦しまねばならず、彼女は子供等の爲に、愛の幸福の全部を抛棄せねばならなかつたのであつた。

この場合にも彼女は一緒に訪問に出かける娘の機嫌を損ねる凡ての原因を避ける事に非常に努力してゐた。實際早發性癡呆症患者に對して斯くする事に何れだけの忍耐と克己とを必要とするか、叉その際如何に多數の怒りの感情を抑壓するを要するかは何人も想像し得る事であらう。

これによつてこの失錯作業の意義は次のやうになるであらう。——叔父は死ね。異常兒等は死

ね。（いはばこの異常家族の總ての者は死ね）そして私は彼等から金を受取るべきである。

この失錯作業は私の見解では稀有なる機構の特徴の二三を具へて居る。

(a)二つの限定要素が一つの要素に凝縮されて存在してゐる。

(b)二つの限定要素の存在は「話し損ひ」が二重になつて居る事に現はれてゐる（十二本の爪、十二本の指）。

(c)十二と云ふ數字の一つの意義卽ち子供の異常をあらはす十二本の指が間接の表現をなして居り、心的異常が身體的異常によつて――換言すれば最高のものが最低のものによつて表現さ*れて居る事は目に立つ事である。

* Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse, I, 1913.

第六章　「讀み損ひ」と「書き損ひ」

「讀み損ひ」及び「書き損ひ」に對しては「話し損ひ」に對すると同じ觀點と考へ方が適用される事はこれら官能が內的に類似して居る以上不思議のない事である。私は此處には注意深く分析された二三の實例を報告するに止め、これら現象の全體を包括して說く事はしないでおかうと思ふ。

(A) 讀み損ひ

(1) 私はカフェーに於てライプチヒ繪入り新聞の或る號を斜めに持ち、頁を繰つてゐた。そして頁一杯にひろがつて居る繪の下の處に「オディスゼエー Odyssee に於ける結婚式」(Hochzeitsfeier in der Odyssee) と書いてあるのを讀んで、注意を喚起され、驚いて頁を眞直ぐにしオストゼー Ostsee (東海、バルト海) 沿岸に於ける結婚式 (Hochzeitsfeier an der Ostsee) と讀み直した。どうして私はこんな馬鹿な讀み誤りをしたのであらうか？　私の考へは直ぐに Ruth 氏の「音樂幻影等に關する實驗的研究」* と云ふ書に導かれた。この書は私が取扱つて居る

心理學上の問題と密接な關係があるので、私が近頃勉强して讀んでゐたものであつた。この學者は「夢の現象の分析と根本原則」なる一書を近い將來に上梓する事を豫告してゐた。丁度「夢判斷」を公表した私が、非常な緊張を以てこの書の出版を待つた事に不思議はなかつたのである。音樂幻影に關するルートの書に於て、私は前の方の內容目次に古代希臘の神話及び傳說は、假睡幻影、音樂幻影、「夢の現象」、及び譫妄狀態にその主なる根源を有する事の詳細なる歸納的證明が書いてあると云ふ豫告を見出した。私は直ぐに本文を繰つて見て彼も亦たオディッソイス Odysseus がナウシカ Nausikaa の前に現はれたるが如き場面が普通の裸體の夢に基く事を知つて居るかどうかを見たのであつた（譯者註、「オディッソイスは希臘ホーメルの敍事詩「オディスゼエー」の主人公であり、この詩はオディッソイスの漂流譚である）私の友人某はゲー・ケルレル G. Keller の「綠のハインリヒ」Grünem Heinrich の美しい箇所を指摘し、この箇所は「オディスゼエー」のこの挿話を故鄕から遠く漂流して居る船乘りの夢を客觀化したものとして說明して居る事を注意して吳れ、又私は裸體の暴露症の夢（Exhibitionstraum）に關係ある事を附加へておいた（夢判斷、第七版一七〇頁）。ルートの書にはその事については何も發見されなかつた。この場合の「讀み損ひ」では自分に創始者としての權利があると云ふ考へが、私を支配したものと思はれるのである。

＊Darmt dt 1898 bei H. L. Schlapp.

(2)或日私は新聞紙上で、徒歩での zu Fuss 歐羅巴旅行と讀むべき處を、樽の中に入つての歐羅巴旅行イム ファス ドゥルヒ オイローパ (im Fass durch Europa) と讀んだが、私はどうしてこの「讀み損ひ」をする事になつたらう。この分析は永い間かかり且つ難かしかつた。直ぐに起つた「思ひ付き」は勿論これがディオゲネスの樽の事であるに違ひない事とそれから自分が最近美術史に於てアレキサンデル時代の美術の事を少し讀んだ事などを指示した。次いでアレキサンデルの有名なる言葉「若し自分がアレキサンデルでなかつたら自分はディオゲネスでありたい」を考へた。又私には箱の中に荷造りされて旅行に出かけたヘルマン・ツァイツング Hermann Zeitung と云ふ人の事が思ひ泛んだ。併しこれ以上には關係はつくれず、又この話が見えた美術史の頁を今一度あけて見ることも出來なかつた。數箇月後に初めてこの捨てておいた謎が急に私に思ひ起され、且つ同時にその解決もついたのであつた。私は或る新聞の標題に、巴里の世界大博覽會を見に行くのに人々が、如何に奇妙なる運搬法 (Sonderbare Arten der Beförderung) を選ぶべきかと云ふ文句が書いてあつた事を思ひ出した。そして其處には又滑稽的に或男が樽に入つて、他の男に巴里迄轉ばさせる計畫を立てて居ると云ふ事が書かれてあつたと信ずる。勿論これらの人々はこの樣な馬鹿氣た事をする事によつて人目を牽く外に何の動機もないのであつた。ヘルマン・ツァイツングは實際斯くの如き變つた運搬法の先鞭をつけた男の名であつたのであ

る。つぎに私が嘗て或る患者を治療したが、その人の新聞紙に對する病的不安は自分の事が新聞紙に印刷され、自分が有名な人として新聞に書き立てられたいと云ふ病的名譽慾に對する反應である事が明らかにされた事が私に思ひ泛んだ。マセドニアのアレキサンデルは確かに今迄住んでゐた人間の內で最も名譽慾の强い人であつた。彼は自分の事蹟を詩歌に詠じて吳れるホーメルを見出し得ない事を嘆いた。併しどうして私は今一人のアレキサンデルが自分の側近に居る事を思ひ及ばなかつたのであらう。又アレキサンデルが自分の弟の名である事をどうして考へることが出來なかつたのであらうか？　私は直ぐに厭なそして壓迫を必要とする考へをこのアレキサンデルに就いて見出し、又この考へを引起した實際の原因動機を見出したのである。私の弟は鐵道の賃率や運送に關する事に就いての物識りであり、高等商業學校に於て敎鞭を取つて居る爲に何時かは「プロフェッソール」の稱號を得る事になつてゐた。私は大學に於て數年來この同じ昇進(Beförderung)を希望して居たが、中々得られなかつた。私共の母は當時彼女の下の方の息子が上の方よりも早く「プロフェッソール」になるのは妙だと云つた事があつた。私がこの「讀み損ひ」の解決を見出し得なかつた頃はさう云ふ狀態にあつた。その後私の弟の方も難かしくなり、彼が「プロフェッソール」になり得るチャンスは私よりも以下にあるやうになつた。併しさうなると急にかの「讀み損ひ」の意味が明らかになつて來た。弟のチャンスが少なくなつた事が恰も

障礙物を除去したかの様に思はれた。私は恰も弟の任命を新聞紙上に讀んで居るかの如き態度を取つたのであつた。そしてその際獨り言を云つたのであつた。「彼が職業としてやつて居る様な馬鹿馬鹿しい事で新聞に出得る（卽ち教授に任命される）とは妙な事だ――」と。その後私はアレキサンデル時代の希臘化した東洋文化藝術に關する箇所を容易に開いて見る事が出來た。そして私は前にさがした時には度々同じところを讀みながら、その都度消極的幻覺（negative Hailuznation）の支配の下にでもあるかの様に、該文章を看過してゐた事を知つて驚いたのである。而かもこの文章は私の忘却の原因を明らかにする何物をも持つてゐなかつた。

書物の中に見出し得ないと云ふ症候が私を誤らせる爲に創造されたものと私は考へるのである。私は私の研究に障礙の横たはつて居た個所卽ちマセドニアのアレキサンデルに就いての或る觀念に於て、私の觀念連結の續きを求むべき筈であつたのである。而も同名の弟のために一層確實に脫線させられる事になつて居たのである。實際又この事は完全に成功したのであつて、私はかの美術史の失はれた箇所を再發見する事に私の努力を傾倒した譯であつた。Beförderung なる言葉の二重の意味（運搬――昇進）はこの場合に於て二つの複合體卽ち新聞記事によつて引起されたあまり重要でない複合體と一層興味のあるものだが不快なものであつて讀み違ひとなつてあらはれた複合體との橋渡しをなしたのである。この例から見てこの「讀み損ひ」のやうな出來事は

之を明らかにする事が必ずしも容易ではなく、時には都合のよい時が來る迄解決を延期せねばならぬ事が判るであらう。併し分析が難かしければ難かしい程一層確實に私共は發見された障礙の根源をなす觀念が私共の意識的考慮からは奇異な正反對なものと判斷されるものである事を期待してよいのである。

(3)或日私はウォーンの近くから一通の手紙を受取つたがそれには私を吃驚させる報告が記されてゐた。私は直ちに妻を呼び、不幸なウォルヘルム・エム Wilhelm M. 夫人が重病に罹り醫師から見放されたと云ふ事に關して妻の同情を求めた。私が悲しみを表はした言葉に何かの間違ひがある樣なひびきがあつたに相違なく、妻は疑ひを抱いて手紙を見せろと要求した。そして彼女の確信としてさうではあるまいと云つた。何故なれば何人と雖も夫人を夫の名で呼ぶ筈なく、特にこの手紙を書いた女の人には夫人の聖名がよく判つて居る筈だからと云つた。私は自分の主張を頑强に云ひ張り、夫人が夫の聖名を書いた名刺を用ふる場合がある事を指摘した。終に私は手紙を手に取らなければならなくなつた。そして私共はその中に實際 „der arme W. M.“ (氣の毒なヴェー・エム氏)とあるばかりか、私は全然 „der arme Dr. W. M.“ (氣の毒なドクトル・ヴェー・エム)を全然見落して居たのであつた。私のこの「讀み損ひ」は悲しい變事を頭から彼の妻に移さうとする、いはば痙攣性の努力を意味する事になるのである。冠詞及び形容詞と名の

間にある稱號はそれが夫人を意味するに相違ないと云ふのに都合が惡かつたからこの稱號は手紙を讀む際に除かれたのであつた。この「讀み損ひ」の動機は私が夫君に對してよりも夫人に對して同情が少なかつたからと云ふ譯ではなく、氣の毒なこの夫の運命は私に近しい關係にある或る別人に對する私の心配を呼びさましたのであつて、その人物は私の知つて居る病氣の條件をこの夫と共通に持つてゐたのであつた。

(4)私が休暇中見知らぬ都市の街路を散歩して居る際屢〻經驗する「讀み損ひ」は腹立たしくも又馬鹿らしいものである。かう云ふ場合に私はどうかして自分に向つて來る底の看板を Antiquitäten (骨董品) と讀むのである。此處に蒐集家の好奇癖、珍しいものを集めようとの慾があはれるのである。

(5)ブロイレル Bleuler は「感動性・推感性・パラノイア」(一九〇六年) と題する意義ある著述一二一頁に於て、次の樣に云つて居る。「私は嘗て讀書をして居て二行下の處に私の名が見える樣な智的感情を持つた。驚いた事には私は其處に Blutkörperchen (血球) と云ふ語を見出しただけであつた。

私が分析した數千例の周邊性並びに中心性視野に於ける「讀み誤り」の中でこれは最も甚しいものであつた。私が自分の名を見るやうに思ふ時には、その誘因になる語は多くは私の名に遙か

によく似て居り、大多數の場合には正に私の名の凡ての文字が近くにあつて、斯くの如き誤謬が起るのが常であつた。併し今云つて居る場合の關係妄想及び錯覺は、非常に容易に說明する事が出來た。私が丁度その時に讀んだものは科學上の論文の一種の惡い書方樣式に就いての論述の終りの部分であつたのであつて、斯くの如き樣式は私自身にも全然ないとは云へない樣に感ぜられたのであつた。」

(6)ハンス・ザックスの報告例。「人々を驚かせる物の傍を彼はその Steifleinenheit で以て通り過ぎる」(譯者註、Steifheit には無骨・剛情等の意味があり Steifleinen は「硬布」ゴム引粗麻布の事である)と云ふ言葉が私に目立つた。そしてよくよく見るとそれは Stilfeinheit(文體の精緻さ)と云ふ語である事が發見された。これは獨逸の大學教授風をあまりひどく發揮する點から私が非常に嫌つてゐる或る歷史家の事を私の尊敬して居る某著述家が非常にほめちぎつて書いてある箇所に於て起つたのであつた。」

(7)ドクトル・マルセル・アイベンシュッツ Dr. Marcell Eibenschütz は精神分析學中央雜誌第一卷第5/6分册に於て彼が言語學をやつてゐた頃に起つた「讀み損ひ」の一例を報告して居る。「私は普魯西(プロシヤ)學術大學出版の「中世に於ける獨逸語聖書」(Deutsche Texte des Mittelalters)の中に發表すべき、中期高地獨逸語の宗教的傳說書「殉教者傳」を後世に傳へる仕事に從事してゐた。今迄まだ出版されてゐなかつたこの仕事に就いては殆ど何も知られて居なかつた。

ただヨット・ハウプトJ. Hauptの「殉敎者に關する中期高地獨逸書に就いて」（ウヰーン學術會議報告一八六九年、第七〇卷、一〇一頁）の一論文あるのみであつた。――ハウプトは彼の仕事をするのに古い手書を基礎にせず、近代卽ち十九世紀に出來た手書原本C（ノイブルヒ修道院Klosterneuburg）の寫本を根據にしたのであつた。この寫本は宮廷圖書室に保存されて居るのである。この寫本の終りの處に次の如き署名がある。

この書は紀元一八五〇年十字架宣揚記念祭の前日起稿、翌年復活祭の前日脫稿、神の御助けにより當時ニウエンブルヒ敎會主宰者なる不肖ハルトマン・クラスナの著す處なり。

さてハウプトは彼の論文に於て、右の署名が手書Cを書いた人から由來して居るものとして、これを發表して居る。そして羅馬字で書かれた年數一八五〇を徹頭徹尾讀み損つて一三五〇年に書かれたものとして居る。而も彼はこの署名を全然正しく寫し書きし、又この署名は論文に於て引用されて居る箇所に於ては全然正しく（卽ち MDCCCL）と印刷されて居るのである。

ハウプトの發表は私に對して困惑の源をなした。先づ第一に學問上の全然若い初學者として、私は全くハウプトの權威の下にあつた。

そして明瞭に正しく印刷されて居る署名を永い間ハウプト同樣に一八五〇と讀まずして一三五〇と讀んでゐた。併し私の用ひた手書Cには署名は跡形もなく、尙ほ十四世紀全體を通じてノイ

ブルヒ修道院にはハルトマンと云ふ僧正は全然住んでゐなかつた事が判つて來た。終に私の眼前の面被が落ちた時は、また凡ての事情を明らかに知る事が出來、尙ほ研究を續けた結果は、私の推論が確かめられたのであつた。度々述べた署名はハウプトの用ひた寫本にのみ存し、それを書いたピー・ハルトマン・ツァイビヒ P. Hartmann Zeibig から來てゐた。この人は（Mähren）のクラスナに生れた人であり、ノイブルヒ修道院に於けるアウグスチーヌス宗派の僧正であり、住職であつて、一八五〇年に該修道院の寺寶保管人として手書Cを書き寫し、彼の寫本の終りの處に古めかしい書き方で自分の名を書いたのであつた。自分の取扱つた仕事に就いてなるべく澤山發表したいと云ふ希望、及び手書Cにも日附をつけたいと云ふ希望がハウプトにあつた處へ、この署名が中古の文體から成つて居り、古い正書法で書かれて居る事が手傳つて、彼に一八五〇年をいつも一三五〇年と讀ませたのであつた」（失錯行爲の動機）。

(8) リヒテンベルグ Lichtenberg の「諸謔的竝びに諷刺的思ひ付き」の中に多分實際の觀念から來たものと思はれ、且つ「讀み損ひ」の全學說を包含する次の記載がある。彼はいつもアンゲノンメン angenommen と讀むべきところをアガメムノン Agamemnon と讀んだ。それほどに彼はホーメルを盛んに讀んだのであつた。卽ち非常に多數の場合に於て讀者の用意が本文を變化し、彼が着眼點を置いて居り、或は彼がとらはれて居る事を本文に讀み込むのである。本文そ

のものは言葉の像に於ける或る類似點を提供する事によつて「讀み損ひ」を迎へるのであつて、この類似を讀者は彼の意味に變化するのである。輕忽にながめる事、特に訂正されない眼を以て眺める事が確かに斯くの如き錯覺の可能性を助長するものであるが、これはこの錯覺に對する缺くべからざる條件ではないのである。

(9)吾人の凡てに對して一定のかたい永續的な先入觀念を作つた戰時（歐洲大戰）は、他の失錯作業よりもとりわけ「讀み損ひ」を起りやすくした。私はその多數を觀察し得たが、殘念ながらその二三しか保存する事が出來なかつた。或日私は夕刊の一つを取り上げて見て大活字で印刷された Der Friede von Görz と云ふ語句を見出した。併しそれは唯だ Die Feinde vor Görz（ゲルツ前面の敵）と云ふのであつた。二人の息子を軍人として戰場に送つて居る人は、斯くの如き「讀み損ひ」に陷り易いものである。別の或人が或關係に於てアルテ ブロートカルテ alte Brotkarte（古い麪包カード）の事が書かれてあると思つてよくよく見ると、彼はアルテ ブロカーテ alte Brokate（錦襴）と取り違へたのであつた。兎に角彼は始終出入りして居た或家で、主婦に麪包の「カード」を與へる事によつて喜ばれてゐたと云ふ事を此處に述べる價値がある。某技師――その人の仕事着は工事中隧道内の濕氣の爲に永持ちしなかつた――が或廣告にシュンドレーデル Schundleder（譯者註、Schund は schinden「皮を剝ぐ」の過去であり、leder は皮である）でつくつた物が推稱されて居るのを讀

んで驚いた。併し商人には正直な者は稀である。處でその廣告に買ふ樣に推稱されてゐたものはゼーフンドレーデル Seehundleder（海豹の皮）であつた。

讀む人の職業或は現在の境遇は又「讀み損ひ」の結果を決定するものである。最近の優秀な硏究に關して同じ專門の同僚と論爭して居た某言語學者はシャハストラテギー Schachstrategie（將棋戰術）と讀む處をシュプラハストラ テギー Sprachstrategie（話し方の戰術）と讀んだ。見知らぬ都市を散歩してゐた男が、治療の關係から丁度便通の起るべき時間に、高い百貨店の建物の二階の大看板にクローゼットハウス Klosetthaus（Klosett ＝ 便所）と云ふ語を讀んで滿足したが、それにしてもこの親切な建物の中へあまり大勢の人が入つて行くのが變だと思つた。次の瞬間にはこの滿足は消失した。看板にかかれてあつた語はコルセットハウス Korsetthau（コルセットを賣る家）と正しく讀まれたからであつた。

(10)第二群の場合では「讀み損ひ」に於ける本文の役割は遙かに大きいのである。本文は讀者の防衞機轉を活潑にさせるもの卽ち彼に苦痛なる報知或は期待を包含し、爲に「讀み損ひ」によつて拒否或は願望成就の意味に於ける訂正を受けるのである。從つてこの場合には勿論本文は訂正を受ける前に——意識がこの最初の讀みに就いては何も知らないとは云つても——先々正しく領取され、判斷されるものと假定せねばなるまい。前の頁に揭げた例(3)はこの種のものである。

著しい現實性を持つてゐる他の例を私は當時イグロー野戰病院に居たエム・アイチンゴン M. Eitingon 博士によつて報告しよう。（Internat. Zeitschrift. f. Psychoanalyse II, 1915）「戰時外傷性神經症で私共の病院に入つて居たX少尉は、或日感動しながら已に夙く戰死した詩人ワルテル・ハイマン*の戰爭の詩と戰場からの手紙の中にかいてあつた一つの詩「出陣者へ」の最後の節の結句を私に誦んで聞かせた。

さりながら何處に書かれてあらうか、余は問はん。
凡ての人の內で余が生きながらへ
他人が余の爲に仆れようとは。
汝等の內何人が仆れようとも、その人は確かに余の爲に死ぬのである。而も余は生き殘るべきであらうか？　何故
生き殘つてはならないのか？（Und ich soll übrig bleiben? warum denn ni ht?）

私が驚いたので彼は氣がつき、困惑の色を見せながら讀み直した。

而も余は生き殘るべきであらうか？　一體何故余が生き殘るべきなのか？（Und ich soll übrig bleiben? warum denn ich?）

* W. Heymann. Kriegsgedichte und Feldpostbriefe. p. 11 : „Den Ausziehenden "

Xの場合に於て私は戰時外傷性神經症の心的材料への一二の分析的洞察を持つ事が出來た。そしてここに仕事多く醫者の少ない戰時野戰病院の不便な狀態で働かねばならぬ始末ではあつたが、原因として高く評價されて居る榴彈爆發以上に些か洞察を進める事が出來た。

この場合にも一見該神經症の重症例と著しく類似して劇しい震顫・不安・泣き易い事・痙攣性であり且つ子供らしい運動興奮を示す憤怒發作の傾向及び僅微の興奮に依つて起る嘔吐の傾向等が見られた。

最後の症候卽ち嘔吐が心因性のものである事、特に第二次的病症利得に役立つて居る事は何人にも起つて來る考へでなくてはならない。病院長が時々來て病室に於て恢復患者の診察をする際、街路に於て知人が「あなたは大層よくおなりでしたね、たしかにもう健全ですね」と云つたりする事は直ちに嘔吐發作を發せしむるに十分であつた。

「健全……再び隊伍に就く……一體何故余が隊伍につくのか?……」と云ふ譯である。」

(11) 「戰時」の「讀み損ひ」の他の例をハンス・ザックス博士が報告してゐる。

或る親しい知人が繰返して私に說明して居た。「若し自分に召集の順番が廻つて來たら、自分は卒業證書によつて證明されて居る專門的素養を利用して內地で相當な任務をさせて貰ひたいと云ふ樣な事を願はずに戰線勤務に就くつもりだ」と。その時期が事實到來した少し前の、或日彼

は極く簡單に別に理由を云はずに專門的素養の證明書を當該官廳に提出しておいたから、間もなく工業方面の仕事を割當てられるだらうと云つた。その翌日私共二人は役所で出逢つた。私は丁度机の前に立つて字を書いて居た。彼は近寄つて來て暫く私の肩越しに見てゐたが、ややあつて云つた。「ああその上の方に書いてあるのはドルックボーゲン Druckbogen（印刷全紙）と云ふ字ですね。私はそれをドリュッケベルゲル ,Drückeberger'（兵役忌避者）と讀みました」と（Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, IV. 1916/17.）

(12) 私は電車に乘つてゐてきやしやで弱々しい體つきをして居た私の幼友達の或者が今では私ならば確かに參つてしまふだらうと思はれるやうな非常に過激な勞働に堪へて居る事を考へてゐた。此の喜ばしからぬ事を考へながら、私は電車の進行中半分の注意を以て或商店の看板の大きい黑字アイゼンコンスチッチオン Eisenkonstitution（鐵のやうに丈夫な體格）を讀んだ。一瞬時の後にこの言葉は店舗の廣告文字としてはふさはしからぬものだと思ひ速かに振向いて急いでその字に一瞥を與へた。そしてそれがアイゼンコンストルクチオン Eisenkonstruktion（鐵の組立）と讀むのが正しい字であつたのを認めた。

(13) 夕刊に兎も角も誤報だと認められた「ロイテル」電報「ヒューズ Hughes が北米合衆國の大統領に選擧された」と云ふのが載つてゐた。そのあとの處に、この選出されたと云ふ人の略歷

が載つて居り、その中で私はヒューズ Hughes が獨逸のボン Bonn 大學を卒業したと云ふ記事を見た。選擧日に先立つ數週間の新聞紙上の論議に於て、この事が少しも說かれてゐなかつた事が私に不思議に思はれて、今一度調べてみた處米國のブラウン Brown 大學と云ふ事が書かれてあるだけであつた。

この「讀み損ひ」の成立に向つては、可なり著しい牽强附會を必要とした。この著しい例は新聞を讀む際の粗忽以外に、私にとつてこの新大統領の中歐諸國に對する同情は單に政治的の理由だけでなく、それ以上に個人的理由からも將來の親善關係の基礎として望ましい事であると思はれた事によつて說明されるのである。

(B) 書き損ひ

(1) 多くは業務上の興味に關する心覺えを單に書きつけてある紙上に、私は九月の正しい日附の間にはさまつて括弧をした「書き損ひ」の日附「木曜日、十月二十日」を見出して驚いた。この取越しを願望のあらはれとして說明する事は困難ではなかつた。私はその數日前に銳氣を囘復して休暇旅行から歸つて來て醫療上の仕事がいくらあつても大丈夫な樣な氣がして居た。併し患者の數はまだ少なかつた。私が歸つた時、私は十月二十日に來ると云ふ或患者の手紙を見た。私が

九月の二十日の日にこれを書き込んだ時、私は多分斯く考へたに違ひない。「何某が旣に來て居るならいいのに、まだ丸一箇月もあるとは困つた事だ」と。そしてこの考へで私は日附を早めたのであつた。この場合には障碍の原因をなす思想は大して不快なものとは云へなかつた。だから私はこの「書き損ひ」を發見すると直ぐその說明を知つたのであつた。これと全く同樣であつて、同じ動機に胚胎して居る「書き損ひ」を私はその次の年の秋にも繰返した。アーネスト・ジョーンズは日附に就いての類似の「書き損ひ」を硏究して大多數の場合にそれが動機あつて起る事を容易に認めた。

(2)私は神經病學精神病學年報へ載せる自分の寄稿文の校正刷を受取つた。私は著者名を特に注意して校正する事を必要とした。それは著者が色々の國民に屬する關係上植字工には最も難かしいものであるからである。二三の妙な音を持つて居る名を私は實際に訂正しなければならなかつた。併し唯一つの名に於ては不思議にも植字工が私の原稿に對して訂正し而もそれは正しかつた。私は Buckrhard と書き、植字工は Burckhard なる事をさとつたのであつた。私は小兒痲痺の發生に對する出產の影響に就いての或る產科醫の論文を價値あるものとして稱讚し、又その著者に對しては何も云ふ事はなかつたのであつた。併し彼と同じ名を持つヴォーンの或る著術家が私の「夢判斷」に對する無理解な批評によつて私を怒らせたのであつた。私は產

科醫を名づくる Burckhard なる名を書く時に別の B. 卽ち著述家に就いての怒りを考へたらしい。何故なれば名を捩ぢ歪める事は、私が「話し損ひ」の處で說明したやうに侮辱を意味する事屢〻であるからである。*

* „Julius Cäsar" III, 3. の中にある次の所と比較せよ。
Cinna, ——確かに私の名はチンナです。
ビュルゲル——此男を寸斷せよ！ 彼は裏切者だ。
チンナ——私は詩人のチンナです！ 裏切者のチンナではありません。
ビュルゲル——それはどうでもよいんだ。彼の名はチンナだ。此男の心臟から名を毟り取つてからこの男を放免してやれ。

(3) この主張はアー・ヨット・シュトルフェルの自己觀察によつて、非常に立派に確かめられて居る。この觀察に於て彼は稱讚に値する程の率直さで彼が假想の競爭者の名を誤り思ひ出し、ついでこれを捩ぢ歪めて書きつけた動機を明らかにして居るのである。

「一九一〇年十二月私はチューリヒの書店の陳列窓に於て、當時新刊のエデュアルド・ヒッチマン Eduard Hitschmann の「フロイド神經症學」を見た。私は當時某大學の學會に於て、間もなくフロイドの心理學綱要に關して遣る筈になつてゐた講演の草稿をつくつてゐた。その時既に書き下ろしてゐた講演緖論に於て、私はフロイドの心理學が實地應用の領域に於ける硏究から發達した徑路を述べ、綱要の總括的敍說は從つて困難なる事を述べ、且つ未だ一般的敍說は發表

されてゐない事を述べて置いたのであつた。私が今迄知らなかつた學者の著書を陳列窓の中で見出した時、私は最初はそれを買はうとは思はなかつた。併し數日後私はそれを買はうと決心した。處がその書物は最早陳列窓の中にはなかつた。私は本屋の人に向ひ、近頃出版された書物の名を告げ、著者の名をエデュアルド ハルトマン Eduard Hartmann 博士と云つた。本屋は私の言を訂正し「あなたはヒッチマン Hitschmann の事を云つて居るのでせう」と云つて、私の處へ書物を持つて來たのであつた。

この失錯作業の無意識的動機は手近にあつた。私は精神分析學の綱要を纒め上げた事が一定度迄の功績であると考へてゐた。そして明らかにヒッチマンの書は私の功績を少なくするものと考へ、嫉みと不快とを以て之を見たのであつた。名を捩ぢ歪めた事は無意識的の敵對行爲であると、私は日常生活に於ける精神病理に從つて獨語した。これだけの說明で私はその當時滿足してゐた。

數週間の後私はこの失錯作業を書きつけたが、その際私は何故に Eduard Hitschmann を Eduard Hartmann に變化させたかと云ふ問題を自分に課して見た。單に名の類似が有名な哲學者の名に導いたものであらうか? 私の第一の聯想はショウペンハウエルの熱心な崇拜者ヒューゴー・フォン・メルツル Hugo v. Meltzl 教授から曾て聽いた言葉の追想であつた。その言葉は大體「エデュアルド・フォン・ハルトマンは臺なしにされて左側の方へ引くりかへされた

ショウペンハウエルである」と云ふのであつた。忘却された名に對する代償的形成を生ぜしめた感情的傾向は「ああ、このヒッチマン及び彼の總括的敍述は大したものではない。彼のフロイドに對する關係は、ハルトマンのショウペンハウエルに對するそれの樣である」と云ふのであつた。私はだからこの代償的「思ひ付き」を伴へる限定された忘却の例を書きつけた。

半年後私が書きつけておいたこの紙が私の手に入つた。それには私がヒッチマン Hitschmann の代りに徹頭徹尾ヒンチマン Hintschmann と書いてゐたのを認めた。(Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, II, 1914.)

(4)外見上これよりも重大に見える「書き損ひ」の例を次に掲げよう。この例は「摑み損ひ」の部類に入れても差支へないものであらう。

私は郵便貯金の中から三百「クローネ」の金額を引出して治療を受ける爲に不在になつて居た親戚の者に送らうと企てた。其際私の貯金高は四千三百八十「クローネ」である事を認めた。これを端數のない四千「クローネ」に引下げ當分この金高に手をつけない樣にしようと考へた。私が小切手を規定通りに書き出し、數に相當する數字を切り拔いた時、私は急に最初思つた樣に三百八十「クローネ」でなく四百三十八「クローネ」を要求した事を認め、私の行爲の不確實なのに驚いたのであつた。間もなく私はこの驚きが不當なものである事を認めた。私は今では以前ほ

ど貧乏ではなくなつたからである。併し私は暫くの間、如何なる影響が私には意識されずに私の最初の企圖を障礙したかを考へねばならなかつた。私は最初は邪道に入つて兩方の數380と438との間に減算をやつて見たがその差をどうしやうもなかつた。終に突然起つて來た「思ひ付き」が實際の關係を私に示して吳れた。四百三十八「クローネ」は全額四千三百八十「クローネ」の一〇%である。一〇%の割引は私共は書店に於て受けるのである。私は數日前全然不用になつた一定數の醫書を探し出し之を三百「クローネ」で本屋に提供しようと申込んだ。本屋はそれでは餘り高いと云ひ、近日確答する事を約したのであつた。若し本屋が私の申出を容れるならば、彼は私が患者の爲に支出せねばならぬ金額を丁度補塡する事になるのである。私がこの支出をしたくない事は明らかな事である。私の誤りを知覺した時の感情は、斯くの如き支出によつて貧乏になる事の恐怖として一層よく理解する事が出來る。併しこの支出に關する悲しみ及びこれに關係して貧乏になると云ふ不安は私の意識には全然未知であつた。私はかの金高を與へる事を約した時には殘念だと云ふ感じは持たなかつた。そしてその動機を滑稽なものと考へたであらう。若しも私が患者に對する精神分析の實施によつて精神生活に於ける被壓迫的要素(Verdrängtes)を知悉して居らず、又私が數日前に同じ解決を要求する夢を見てゐなかつたら、私は多分斯くの如き感情を全然自認しなかつたであらう。

＊私はこの夢を私の「夢に就いて」(„Über den Traum,„ Nr. VIII der „Grenzfragen des Nerven- un Seelenlebens,“ hg. von Löwenfeld und Kurella, 1901 ―及全集第三卷) なる短篇論文に範疇として採用した。

(5)ヴェー・シュテケルによつて私は次の例を引用しよう。この例が信憑するに足るものである事は私も之を認める事が出來る。『殆ど信ぜられない程のひどい「書き損ひ」と「讀み損ひ」が、廣く頒布されて居る或る週報の編輯に際して起つた。この週報の監督が腐敗して居ると云ふことが公に云はれた。そこで防衞と辯護の文章を書く必要が起つた。實際この事は非常な熱と情とを以て行なはれた。編輯係長はその文章を讀み、勿論筆者は原稿に於て數回之を讀み、ついで試刷に於ても讀んだのであつた。凡ての人は大いに滿足してゐた。突然校正者がやつて來て凡ての人が氣付かなかつた一つの小さな誤りを注意した。其處には明らかに次の樣に書かれてゐた。「吾等の讀者は吾等が常に最も利己的なる有樣に於て (in eigennützigster Wei.e) 全般の幸福の爲に働いて居ると云ふ證明書を書くであらう」と。勿論これは uneigennützigster (最も非利己的なる) と云ふべき處であつたのである。併し實際の考へが不可抗の力を以て、熱情的なる文章を突破してあらはれたのであつた。

(6)ペステル・ロイド „Pester Lloyd“ 紙の讀者ブダ・ペストのカータ・レヴィー夫人は近頃一九一八年十月十一日附の同紙ウィーン電報に、これと類似の企圖されざる公明さを注意した。

全戰爭期間を通じて吾々と獨逸聯邦との間に存した絕對的親善關係に基いて、兩國が何時でも一致の決定に到達するであらう事は疑ひの餘地なき事と假定していいであらう。現在の時期に於ても同盟國外交官の活氣ある不完全なる (lückenhaft) (lückenlos (完全なる) の「書き損ひ」——譯者) 共働が存する事はこれを切言するだけが餘計な事である。

その後數週間にして私共はこの親善關係を一層打明けて云ひあらはす事が出來るやうになつたから、最早私共は「書き損ひ」や印刷の仕損ひに逃げ場を求める必要がなくなつたのであつた。

(7)細君と喧嘩別れの狀態で、歐羅巴に滯在中であつたアメリカ人が、今では彼女と仲直りする事が出來ると考へ、彼女が一定の時期に大西洋を渡つて自分の處に來るやうにと云うてやつた。彼は手紙の中に「あなたも私と同樣に「マウレタニア」號 (Mauretania) で渡航する事が出來るといいんだが」と書いた。この文章の書かれてある紙を、彼は發送する事を敢てせず、それを新らしく書きかへたのであつた。何故なれば彼は船名を書き改める必要に迫られて訂正したのを細君に見られたくなかつたからである。卽ち彼は先づ「ルシタニア」號 (Lusitania) と書いたのであつた。

この「書き損ひ」には說明は不必要であり、それは直ぐ判るものである。併し偶然の惠みは一二の事をここに附言せしめる。彼の妻は戰前に彼女の唯一人の姉妹が死んだ後、はじめて歐羅巴

に渡航した事があつた。私の記憶に誤りがなければ「マウレタニア」號は戰爭中擊沈された「ルシタニア」號の生き殘つて居る姉妹船である。

(8)某醫師が一人の子供を診察して處方箋を書いたが、その中にアルコール Alcohol を書き込む事になつた。子供の母はさうして居る間も馬鹿らしい餘計な質問で醫師を煩はした。彼は心の中で今その事を怒るまいと企て、又實際この企圖を實行した。併し煩はされながら、彼が「書き損ひ」をした處方箋にはアルコール Alcohol の代りにアコール* Achol と書かれてあつた。

* Achol は謂はばカイネ カルレ Kein: Galle である。(譯者註＝Galle は立腹、癇癪等の意味を持つて居り、Keine は「無」である。結局 Achol は「怒らず」「癇癪を起さず」等を意味する事になる。

(9)材料上の類似と云ふ事からして私は此處にアーネスト・ジョーンズがヱー・ヱー・ブリルの事を報告して居る一つの場合をならべやう。ブリルは平生全然禁酒してゐたに拘らず、友人に誘惑されて少量の葡萄酒を飲んだ。翌朝ひどい頭痛が起り、自分の意志薄弱を後悔した。彼はエシール Ethel と云ふ一婦人患者の名を書く必要が起つて、而もエチール* Ethyl と書いた。この婦人患者が必要以上に酒を飲む習慣があつた事が多分問題になつたものと考へられる。

* Äthylalkohol (エチールアルコール)。

處方を書く時の醫師の「書き損ひ」は他の失錯作業よりも實際的意義が重大であるから、私は

この機會を利用して今迄發表されて居る唯一の分析例を詳細に報告しておかうと思ふ。

(10) エデュアルド・ヒッチマン博士報告『處方を書く際に於て「書き損ひ」の反復されたる一例』。「或る同僚が永い年月の經過中に於て、老年の一女性患者に與ふる一定の藥品を處方する際に、數回「書き損ひ」をした事を私に物語つた。彼は二度誤つて十倍の用量を處方し、後になつて急に氣付き、患者に危害を及ぼし、自らは非常な苦境に陷るかも知れぬと恐れ、急いで處方を取り戻す事に努力せねばならなかつた。この奇妙な症候行爲は、各の場合の詳細なる敍述と分析によつて之を明らかにする價値がある。

(第一の場合) この醫師は高齡の境にある貧乏な婦人に痙攣性便祕に對して、十倍量の「ベラドンナ」丸を誤り處方した。彼は外來患者診察所を去り、約一時間の後、家に於て新聞を讀み、朝食をして居る最中に、急に彼の誤りに氣づいたのであつた。彼は不安に襲はれ、先づ患者の住所を尋ねる爲に、外來に歸つて行き、そこから更に遠方にある彼女の住居に急いだ。彼は老婦人が未だ處方箋をそのままで持つてゐたのを喜び安心して家に歸つて行つた。彼はおしやべりな外來係長が、彼が處方をかいてゐた際に肩越しにそれを眺めて自分を邪魔したからだと云ふ事で自ら辯解したのであつた。それは又まんざら理由にならぬ事もなかつたのである。

(第二の場合) この醫師は或るオールド ミスの處へ往診する爲に、愛嬌のよい非常に美しい

婦人患者の診察を切り上げなければならなかつた。この往診に餘り澤山の時間がなかつたから、彼は自動車を利用した。何故なれば彼は一定の時間に彼の愛して居る若い女と、彼女の家の近くでひそかに逢ふ事になつてゐたからであつた。この場合にも同じやうな訴へに向つて、第一の場合と同様「ベラドンナ」投與の必要が起つた。而も再びこの藥を十倍強く處方すると云ふ間違ひが行はれたのであつた。婦人患者は本來の問題とは無關係な一二の面白い事を話した。併し醫師は言葉ではあらはさなかつたが、辛抱しきれない態度を示し婦曳に十分間に合ふ樣に患者の處を立ち去つたのであつた。約十二時間後、卽ち翌朝七時にこの醫師は眼をさまし、同時に彼が「書き損ひ」をしたと云ふ「思ひ付き」と不安が意識にあらはれ、藥がまだ藥局から取られてないかも知れぬと云ふ望みを以て使を遣り、今一度見たいから處方を返して呉れと乞はせた。併し彼は旣に調劑濟みになつた處方を返へされた。物に動ぜない諦めと、經驗ある人の樂觀とを以て、彼は藥局に行つたが其處では藥局助手が勿論（或は多分又過失のため？）その藥品を一層少ない分量に於て與へたと云つて、彼を安心させて呉れたのであつた。

（第三の場合）この醫師は彼の伯母（母の姉妹）に「ベラドンナ」丁幾と阿片丁幾とを無害な分量に於て處方しようと思つた。處方箋は直ぐに女中によつて藥局に持つて行かれた。暫時にしてこの醫師に丁幾と書く處を越幾斯（,extractum）と書いた事が思ひ出された。そしてその直

ぐ後に藥劑師はこの誤りに就いて問ひ合せの電話をかけて來た。醫師はこの處方箋が未だ完成してゐなかつた事、及びこの處方箋が意外に早く机の上から持ち去られたのであるから自分に罪がないと云ふ僞りの言葉を以て辯解したのであつた。

處方箋を書く時に起つたこの三つの過失に於ける顯著な共通點は、いつも同一の藥に就いて起つた事、いつも老年の婦人患者に起つた事及び藥の分量があまりに大量であつた事であつた。簡單な分析によつて、この醫師の母に對する關係が決定的の意義を有するものである事が判つて來た。卽ち彼が嘗て——多分この症候行爲のおこる以前に——矢張り高齡なる彼の母の爲に同じ處方を書いた事、而も彼の平常の投與量が〇・〇二であつたに拘らず、彼女を根本的に快くしようと云ふ考へから〇・〇三を處方した事を思ひ出した。か弱い母のこの藥に對する反應は逆上感と咽喉部の乾燥感とであつた。彼女はその時冗談半分にお前の樣な處方の仕方をしては危險でしやうがないと諷刺的に苦情を云つた。醫師の娘であつたこの母は、折々この醫師たる息子の勸める藥に對して同じやうに冗談半分に抗議を申込み、又中毒の事を話してゐた。

報告者がこの息子の母に對する關係を見透し得た限り、彼は本能的には愛情の深い子には相違なかつたが、母に對する精神的評價及び人格上の尊敬は決して高く强い方ではなかつた。一つ年下の弟並に母と同居して居た彼は年來この同居を自分の戀愛生活の自由の束縛と感じてゐた。尤

も私共は精神分析の經驗からこの所謂自由束縛が內的束縛（內心に於て母に對するつよい愛の羈に結ばれてゐる事――譯者）に對する口實として濫用され勝である事を知つて居る。この醫者はこの分析的說明を一定度迄滿足して承認し、Belladonna = schöne Frau（美婦）なる言葉が又戀愛關係を意味するかも知れないと云ふ事を微笑しながら考へたのであつた。彼はこの藥を以前には折々自らも用ひたと云ふ事である」（Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, I, 1913.）

私は斯くの如き重大なる失錯作業とても、私共が平生研究する無害な失錯作業とは決して別の徑路に於て起るものではないと判斷したいのである。

(11) エス・フェレンチーによつて報告されて居る次の「書き損ひ」の例を、人々は特に無害なものと考へるであらう。私共はこれを性急の結果起る凝縮作業と解釋する事が出來る（第五章……「話し損ひ」(1) Der Apfe の例と比較せよ）そして出來事の一層深い分析によつて一層强力な原因的要素が闡明される迄はこの解釋を固執してよいであらう。

「此處にあのアネクトーデ Anektode（譯者註、Tod 死）が丁度適合する」と私は或時私の「ノートブック」に書いた。勿論私は死の宣告を受け、自分の首を吊られる木を選定させて貰ふ恩惠を施されん事を嘆願したかの浮浪人の逸話を考へたのであつた（彼は一生懸命に探したが適當な木を見出さなかつた）。

(12)他の場合にはこれに反して極めて目立たない「書き損ひ」が、危險な內密な意味をあらはす事がある。無名氏が次の報告をした。

「私は一通の手紙を次の言葉で結びました。,Herzlichste Grüsse an Ihre Frau Gemahl in und ihren Sohn'（あなたの奥樣によろしく、そして彼女の令息にも）私がこの手紙を封筒に入れる直前に、私は'ihren Sohn'（彼女の令息）の頭字に誤り（Ihren Sohn（あなたの令息）であるべき筈である――譯者）ある事を認め、これを訂正しました。私は最近この夫妻を訪問して歸宅の途上、同伴の某婦人がその家の息子は同家に出入する友人某に非常によく似てゐて、たしかに彼の子供に違ひないと云つたのでした」

(13)或る婦人が自分の妹が手廣い新居に入つた事に就いてのお祝狀を書いた。傍に居合せた友人は、彼女の手紙の受信人の住所が間違つて居り、而も妹が此度去つた住居ではなく、新婚の妻として住んだ最初の家であり、既に夙くの昔に去つた住所を「アドレス」として書いた事を認めた。そして彼女に注意した。「なるほど、さうですね。それにしても私はどうしてこんな事をしたでせう？」と彼女は云つた。友人は云つた。「多分あなたは自身が手狹まに感じて居るこの家に住んで居るのに、あなたの妹が此度手に入れる事になつた立派な住居を妹に與へ度くなかつたのでせう。だから妹をその人自身にも不滿足であつた最初の家に引戻さうとなすつたのでせう」と。

――「確かに私は妹を新らしい家に住ませたくないのです」と彼女は正直に自白した。彼女は續けて云つた。「それにしても人間と云ふものはこんな事位に何故何時もさう卑屈なのでせう?」と。

(14) アーネスト・ジョーンズはエー・ブリルから與へられた次の「書き損ひ」の實例を報告して居る。或患者がブリル博士に手紙を書き、自分の神經病の原因を棉花市場に於ける危機に際會して、營業の經過に就いて持つた心配と興奮に歸せようと努力した。「私の病氣は全くこの呪はしい不活潑なる Wave（景氣の波）によるのです。そこには一つの Seed（景氣のよくなる種）もないのです」と。彼は „Wave“ と云ふ字で以て勿論金融市場に於ける波、或は流れを意味して居るのである。然しながら實際は、彼は Wave と書かず Wife（妻）と書いたのであつた。彼の心の奥には妻の夫婦生活に對する冷淡（不感症）と、子供のない事に關する妻への非難が潜んで居たのである。彼は自分に强制されてゐる節慾が病氣の原因の上に大なる要素をなして居る事を薄々認識してゐたのである。

(15) エル・ワグネル R. Wagner 博士は精神分析學中央雜誌第一卷に於て次の如く述べて居る。

「古い講義筆記帖を通讀して居る内に、私は筆記を急いだ爲の些細な「書き損ひ」をやつてゐたのを發見した。エピテル Epithel（上皮）の代りに私はエディテル Edithel と書いてゐた。この Edithel の最初の綴音にアクセントをつければ女の名の指小辭愛稱が出來て來るのである。

過去を回顧して分析して見ると、隨分簡單なものである。この「書き損ひ」をした頃には、私とこの名の所有者との間の親交は全然表面的のものであつたのであつて、ずつと後になつてから深い交際が生じたのであつた。從つてこの「書き損ひ」には私自身がまだ何等の豫感も持たなかつた頃に旣に私が持つて居た無意識的傾向が現はれた事の立派な證據がある譯であり、選ばれた愛稱の形はそれに伴ふ感情をあらはしたものである」

(16)女醫フッグ・ヘルムート夫人 Hug-Hellmuth. 報告。「或醫師が一婦人患者にレヴィコ ワッセル Levicowasser (「レヴィコ」水) を處方しようとしてレヴィチコ・ワッセル Levitico-wasser と書いた。この「書き損ひ」は或藥劑師に侮蔑的の言葉を發せしむるに都合のよいきつかけを與へたのであつたが、若しも人が無意識的動機を研究し、斯くの如き動機――それはこの醫師とは無關係な自分の主觀的假定ではあるが――が滿更ら有り得ない事ではないと考へるならば、今少しおだやかに解釋されたであらう。この醫師は患者に對して、あまり合理的でない食餌をかなりぞんざいな言葉で與へ、謂はば患者を叱りつける樣にしてゐたけれども大變繁昌してゐた。從つて彼の患者待合室は診察時間の前及びその間は一杯の人であつた。この事が醫師をして診察の濟んだ患者がなるべく早く (vite, vite) 着物を着て行つて呉れる事を希望せしめた事は無理もない事である。私は醫師の夫人がたしかに佛蘭西生れである事を記憶して居る。從つて少

し無鐵砲な假定かも知れないが、彼が患者が急いで奨れる事を希望して、正に佛語を用ひる事は一定度迄當然の事と思はれるのである。倘ほ斯くのごとき希望を外國語で云ひあらはす習慣は、多數の人々に見られる事である。私の父は散歩の際に〝Avanti gioventu〟(勇しく進め)或は〝Marchez au pas〟(歩調を揃へよ)と呼びかけて急がせた。それとは反對に私が頸の病氣で若い娘時代に治療を受けた老醫は餘り早過ぎる私の運動を靜める爲に〝Piano, Piano〟(軟かに)と云ふ言葉で制止しようと努めた。だからかの醫師もこの習慣を持つてゐた事が實際考へ得るとして Levicowasser の代りに Leviticowasser と「書き損ひ」したものと思はれる(Zentralblatt für Psychoanalyse, II, 5.)」この著者の若い時分の追想から來る他の實例(französisch 佛蘭西の)を frazösisch と「書き損ひ」した事及び Karl といふ名の「書き損ひ」も右の例と同じ處に記載されて居る。

(17)內容の上からは惡い洒落に相當し、而も洒落の企圖は確かに存在しない「書き損ひ」を、私はヨット・ゲー君(Herr J. G.)の報告から得た。この人から得た別の寄與に就いては旣に說明した。

『或肺結核療養所の患者であつた私は、近親者の一人が私と同じ病氣に罹つて居ると診斷された事を悲しくも知つた。そこで私は一通の手紙を書き、この人に或專門家の處へ行つて診て貰ふ

様に云うてやりました。この專門家は有名な大學教授であり、私が現在治療を受けて居り、その人の醫學上の權威に就いては私は確信してゐました。併し私は一面に於て種々の理由から彼の傲慢なる事を歎いて居た。何故なればこの「プロフェッソール」は、その少し以前に私にとつて非常に必要な證明書を書いて吳れる事を拒んだからでした。私の手紙に對する返書に於て、私は近親者から一つの「書き損ひ」を指摘されました。この「書き損ひ」はその原因が卽座に判つたので、私は非常にをかしくなりました。私は手紙に次の文句を用ひたのでした……übrigens rate-ich Dir, ohne Verzögerung Prof. X. zu insultieren'(……とにかく私はあなたが躊躇せずに「プロフェッソール・イックス」を侮辱する事をお勸めします)勿論私は konsultieren(……に相談する)と書かうと思つたのでした。——私の羅典語及び佛蘭西語の知識は、この「書き損ひ」が私の無智から起るものであると云ふ說明を除外する程度のものである事を此處に指示しておく必要があらうと思ひます』

(18) 字を書く際に於ける遺漏(Auslassungen)は勿論「書き損ひ」と同樣に判斷すべきものである。精神分析學中央雜誌第一卷に法學博士ベー・ダットネル B. Dattner は「歷史上の失錯作業」(historische Fehlleistung)の注意すべき例を報告した。「一八六七年に墺太利と匈牙利との間に協定が成立した。兩國の經濟的義務を規定した法文中にある,effektiv'(有效なる)と

云ふ一語が匈牙利語の飜譯文に脱漏してゐた。」ダットネルは、この脱漏には墺太利に對し利益を出來るだけ少なく承認しようとする匈牙利側の法律校訂者の無意識的思潮が關與して居るらしいと考へた。

私共が字を書いたり、又は書き寫し（Abschreiben）たりする際に同じ語が屢〻繰返される事――ペルセヴェラチン Perseveration 保續症――も矢張り無意味のものではないと信ずべき凡ての理由がある。書き手が一度書いた同じ語を二度も書いた場合には、彼がこの語から容易に離れ得ないとか、或は彼はこの場所に於てもつと多くの事を云ひ得た譯だが、それを云はずにやめたとか、或はそれに類似の事を示すのである。書き寫しの際に於ける保續症は „auch, auch ich" 「俺もだ、俺もだ!!」と云ふ言葉の代りになるものと思はれる。私は長々しい法醫學上の鑑定書を持つてゐるが、これには謄寫人の Perseveration が特に著しい箇所に現はれてゐた。そして私は謄寫人が自分の非人格的な役目に慊焉たるものがあり、書いてある事は全然俺の場合と同樣だ、或は全然自分と同じ考へ方だと云ふ樣に解釋したかつたものと説明してよからうと考へる。

(19)次に誤植は植字工の「書き損ひ」として取扱つて毫も差支へなく、大部分動機あつて起るものと解して何等差支へないものである。非常に興味あり、且つ爲になると思はれるこの種の失錯作

業の系統的蒐集は私はやらなかつた。ジョーンズはたびたび本書に於て述べた彼の著述に„Misprint“（誤植）なる特別の章を設けて居る。電報を歪める事も時々電報係の人の「書き損ひ」と解する事が出來るのである。暑中休暇に私は出版者から一通の電報を受取つた。それは„Vorräte erhalten, Einladung X. dringend“（食料品受取つた。Xの招待急ぐ）と云ふのであつた。謎の解決は電文の中にあるXなる名から出來た。Xはある著者であつて、その人の著書に私は序文（Einleitung）を書く事になつて居る。これがEinladung（招待）となつたのであつた。次いで私は數日前に他の書への Vorrede（序文）を出版者に送つた事を思ひ出した。從つてそれの到着と云ふ事が私に非常に確實にされた。そこで正しい電文は多分次の樣になるのである。„Vorrede erhalten, Einleitung X. dringend“（序文は受取つた。X氏の著書の序文至急送れ）

私共はこの電文が電報係の人の饑餓複合體（Hungerkomplex）の犧牲になつたものと假定してよいのであり、爲に電文の兩方の半分で發送者が企てたよりも一層密接に關係つけられる事になつたのであつた。その外にこの例は多數の夢に認められる第二次的改作（Sekundäre Bearbeitung）の好例である。

ハー・ジルベレル H. Silberer は國際精神分析學雜誌第八卷（一九二二年）に於て「故意の誤

植」(Tendenziöser Druckfehle) の可能性に就いて說いて居る。

折々他の人々から一定の傾向を否定する事の出來ない誤植が指摘される。例へばストルフェルは精神分析學中央雜誌第二卷（一九一四年）に於て「政治的誤植魔」(Der politische Druckfehlerteufel“) に就いて述べ、同第三卷（一九一五年）には小さな覺書を載せて居る。私はそれを此處に轉載しよう。

(20)今年四月二十五日發行のメルツ März に次の樣な政治的誤植が見られた。アルギロカストロンよりの通信としてアルバニエンに於ける暴動「エピルス」人の指導者（或はエピルス獨立統治の大統領と云つてもよい）ツォグラフォスの「ステートメント」が掲載されて居た。その中に次の文章があつた。「確かに自主的エピルス人はウォード侯の全く固有の利益に屬するものである。侯はエピルス人の上に sich stürzen (墜落)……するかも知れない」と(譯者註、… könnte … sich Stützen「たよる事が出來るであらう」の誤植)。「エピルス」人が彼に提供せんとする保護を受け容れる事が、自己の沒落 (Sturz) を意味する事は、多分この致命的な誤植がなくとも、アルバニエンの國王は知つて居たであらう(譯者註、アルバニエンはバルカン半島の一州である)。

(21)私自身近頃ウォーンの日刊新聞紙上に „die Bukowina unter rumänischer Herrschaft“「ルーマニアの統治下にあるブコヴォナ」(譯者註、die Bukowina は昔の墺國の一州である) なる論說を讀んだ。この論說の標

題は少なくとも餘りに早過ぎるものと考へられた。何となれば當時「ルーマニア」人は未だ彼等の敵意を公言して居なかつたからである。內容の上からは確かに rumänisch（ルーマニアの）の代りに russisch（露西亞の）と云はなければならない筈であつたのである。併し檢閱者自身がこの誤植を看過した處から見ると、この標題は彼にも不思議に感ぜられなかつたものと思はれるのである。

有名な（以前には帝室竝に王室御用であつた）印刷所、テッセンのカルル・プロカスカ（Karl Prochaska）の手で印刷された囘章の中に、次の樣な正書法の「書き損ひ」が讀まれるに至つては「政治的」誤植（Politischer Druckfehler）を考へざるを得ないのである。卽ち「今の處聯合國側の嚴命に依つて、オルザ河を境界と定める事により、シュレシエンのみでなくテッセンも二部に分たれた。その一つは波蘭に屬し、他はチェッコ・スロヴァキアに屬する（zufiel）事になつた」となるべき處が zuviel（あまり多過ぎる）となつて居るのである。

テオドル・フォンターネ Th. Fontane は或時餘りにも意味深長な誤植に對して抗議を申込まざるを得なかつた。その抗議の申込み方が非常に面白かつた。彼は一八六〇年三月二十九日附出版者ユリウス・スプリンゲルに次の手紙を書き送つた。

拜啓、私の小さな希望が容れられるやうに、私は天から賦與されて居ないやうに見えます。同

封の校正刷を御一覧下されば、私の云はうとする事がお判りになるでせう。尚ほ私は前に申上げておきました理由から二「ボーゲン」(Bogen = 十六頁)を必要とするのですが、一「ボーゲン」しか送つて呉れません。第一の「ボーゲン」(最初の十六頁)を再度の閲覧の爲――特に英語及び英文のために――今一度送つて下さる事もやつて呉れないやうです。それは私にとつては大切な事なのです。例へば今日の校正刷に於ては二十七頁にジョーン・ノックスと女王との場面が„Worauf Maria aasrief" となつて居ます。(譯者註、ausrief の誤植であり「それに對してマリアは叫んだ」となる筈の處である。)斯様な雷鳴でも轟くやうな事に對しては、私は誤植が實際に除かれたと云ふ安心を得たいものです。このアウス aus の代りに存するアアス aas(譯者註、Aas はやくざ者・畜生・腐肉等の意味を持つて居る)は彼女、即ち女王が彼を心の中で實際にさう呼んだであらう事が疑ひないのでありますから、一層工合が惡いのです。敬具。

テオドル・フォンターネ拜

私共は「話し損ひ」よりも「書き損ひ」を一層しやすい事は容易に確かめ得る事實だがこれに就きヴントは注目すべき論據を與へて居る。「正常な談話の經過中には意志の制止作用は絶えず觀念の經過と發語運動とを一致させる事に向けられて居る。字を書く場合の樣に、觀念に從つて

り易いのである」と彼は云つて居る。

起る表情運動が、機械的の原因の爲に緩徐にされる場合には取越し(Anti ipationen)は特に起

「讀み損ひ」の起る條件を觀察して見ると一つの疑問が起つて來る。私はこの疑點を不問に附する事が出來ない。何となれば、この疑點は私の見込みでは收穫多き研究の出發點になりさうであるからである。朗讀に際して讀者の注意が本文から離れて彼自身の觀念に向つて行く事屢〻である事は、吾人が已に知つて居る事である。朗讀者が讀んで居る最中に他人がこれを中斷させ、今迄讀んで居た處に何が書いてあつたかと聽いた場合に、答へ得ない事は珍しくないのはこの注意の彷徨の爲である。この場合に彼は自働的に讀んで居た事になるのである。併し彼は殆ど何時でも正しく讀んで居たのである。私は斯くの如き條件のもとに「讀み損ひ」が著しくその數を增すものとは信じない。大多數の官能が自働的に殆ど意識的注意を伴はず、而も極めて精確に實行されると云ふ事を假定する事には私共は慣れて居る。從つて「話し損ひ」「讀み損ひ」「書き損ひ」に對する注意の條件は、ヴントの云ふ注意の脫漏、或は弛緩以外に求めねばならぬ事になるのである。私共が分析にかけた實例では注意の量的減少そのものを原因と假定する權利を私共に與へない。私共は多分これとは正確には同じ物でないもの、卽ち吾人の知らぬ出しやばりな觀念に基く注意の障礙を見出したのである。

何人かが署名する事を忘れる場合は「書き損ひ」と「忘却」との間に挿入してよいものである。署名されない小切手は忘れられたものと同じものである。斯くの如き忘却の意義に向つて私はハンス・ザックス博士が注意した小説の或る箇所を引用しよう。

＊　＊　＊

「作家が非常に確實に精神分析學上の所謂失錯行爲及症候動作の心的機制を用ひ得た事を示す非常に有益且つ明瞭な實例がジョーン・ゴルスウォージー John Galsworty の「島の僞善者」(„The Island Pharisees“) の中にある。富裕な中流社會の青年が彼の深い社會的同情心と彼の階級の社交的慣習との間にはさまつて苦しむ事が、この小説の中心點をなして居る。第二十六章に彼の本來の人生觀から今迄數回補助をしてやつた事のある若い浮浪人からの手紙に對して、彼があらはした反應の有様が書かれて居る。手紙には金を呉れと云ふ直接の願ひは含まれてはなかつたが、非常に困つて居ると云ふ事が書かれてあつて、金が欲しいものと解する外はなかつた。手紙の受取人は最初金を慈惠院に寄附しないでおいて、到底なほらない人間を助ける事の考へを斥けた。「唯單に困つて居るからと云つて要求もされないのに同類の一人に救ひの手・自分自身の一部分・友人としてのうなづきを與へるとは何と云ふ馬鹿げた情操であらうか！　何處かに限界線を引いておかなくてはだめだ！」と。然しながら彼がこの結論をぼんやりと呟いて居た間に、

彼は自分の正義感がこれに反對して「噓つき奴！　お前は金を離すまいとするのだらう。それだけの事なんだ！」と云つて居るのを感じた。

彼は次いで親切な手紙を書き、次の言葉で結んだ。「私は一枚の小切手を同封しておきます。あなたの正直なリチャード・シエルトン拜」と。

彼が小切手を書く前に蠟燭の火の周圍をブンブン云ひながら飛んで居た一疋の蛾が彼の注意を他に外らさせた。彼はそれを捕へて外に放して遣つた。併しその爲に彼は小切手が手紙の中に封ぜられなかつた事を忘れてしまつた。そして勿論手紙はそのまま發送された。

この忘却は一旦克服された出し惜みの利己的傾向の擡頭と云ふ事で說明されるが、それ以外に一層微妙な動機を持つて居たのである。シエルトンは彼の未來の舅姑の別莊で、彼の許婚、その家族、家庭の客人等に圍まれて孤獨を感じて居た。彼はこの失錯行爲によつて自分を圍繞して居る無難な、而も一つの傳統に從つて同じ烙印を捺されて居る人々とは過去の生活に於ても、人生觀に於ても全然違つた彼の被保護者を慕つて居る事を示して居るのである。實際又彼の補助なしには立ち行かぬこの男は數日後にやつて來て、手紙に書かれてあつた小切手が同封されて居なかつた理由の說明を求めたのであつた。」

第七章　印象及び企圖の忘却

精神生活に關する私共現在の知識程度を過度に高く見積らうどする人があるならば、その人に對しては記憶の官能に於てのみは控へ目にするやうにと注意する必要がある。心理學の如何なる學説も記憶及び忘却の基本的現象を一緒に説明する事は出來ない。それのみではなく私共が實際に觀察し得る事を完全に分解する事は、未だ殆ど手をつけられて居ないのである。今日の處では多分忘却は記憶よりも不可思議の問題になつたやうである。何となれば夢や病的の出來事の研究は、私共が夙くに忘れてしまつたものと考へた事さへも再び急に意識に泛び出で得る事を敎へたからである。

勿論私共は一般の承認を期待し得る二三の觀點を持つて居る。私共は忘却が自發的の過程であり、一定の時間的經過に歸すべきものである事を假定する。私共は忘却に際しては、與へられる印象の間に一定の選擇（セレクション）が起る事、又各印象や經驗の細目の間に選擇が起る事を强調する。私共は記憶の永續性及びそれの呼びさまされ易い事に就いて一二の條件があり、これがなければ忘却される事を知つて居る。毎日の生活に於ける無數の出來事に就いて見ると私共の認識が非常に不完

全不滿足なものである事が判るのである。一緒に旅行して共通な外的印象を受けた二人が、後に彼等の記憶を互に語合つて居る有樣を傾聽して居ると一方の人にかたく記憶されて居る事が他方の人にはそれが全然起らなかつた事でもあるかの樣に忘れられて居る事がある。而も私共はその印象が一方の人にとつて他方の人に對してよりも心的に重要なものであつたと云ひ得ない場合に於てもさうである。記憶の選擇を決定する契機の多數は私共にはまだ明らかに知られて居ないのである。

忘却の條件を知る事に多少でも貢獻したいと思つて私は私自身に忘却が起つて來た場合にはこれを精神分析にかける事にして居る。私共は通常斯くの如き場合の內、一定群のもののみを取扱つて居る。それは私が當然知つて居る筈だと思つて居る事を忘れ、爲に自分が不思議に思ふ樣な場合のみである。尙ほ私は學んだ事は兎も角經驗した事に對しては健忘の傾向のなかつた事及び私が青年時代の短い時期の間は、實際非凡な記憶力を持つて居ないではなかつた事を此處にお斷りして置かうと思ふ。私の學童時代には私は勿論自分の讀んだ本の頁を諳誦する事が出來た。そして大學に入る少し前には、私は科學的內容を有する通俗講演ならばその直後殆ど言葉通りに書き下す事が出來た位であつた。最後の大學卒業口頭試問を受ける前の緊張に於て、私は尙ほこの能力の殘りを用ひたに違ひなかつた。何となれば私は一二の事に就いては、試驗官に教科書の本

文と正に同じ答を恰も自働的に與へたからである。而も私は教科書を唯一回大急ぎで目を通したに過ぎなかつたのであつた。

その後私の記憶力は益々不良になつた。併し私は最近迄一定の方法によつて普通には思ひ出し得ない事でも追想し得る事を確信するやうになつた。例へば或患者が診察時間中に私が前に一度彼に逢つた事があると主張し、而も私がその事實をもその時をも想ひ出し得ない場合には、私は推量する事によつて、卽ち現在から始め一定數の年を速かに思ひ泛べる事によつて自らを助けるのである。記錄或は患者の確實なる陳述が、私の思ひ付きをコントロールして吳れる場合には私は十年以上前の事でも半年以上の間違ひを來さない事が明らかにされた。*

*通常この場合に話して居る內に當時第一回訪問の際の細目が意識的に泛んで來るのが例であつた。

私が餘り近しくして居ない知人に出逢ひ、お世辭にその人の幼い子供等の事を尋ねる時にもそれと似た事が起るのである。彼が子供等の發育に就いて物語つて居る時、私はその子供が何歲になつたかと云ふ事を思ひ付かうと努力する。そして父の云ふ事によつて確かめて見ると高々一箇月位、少し年とつた子供の場合には三箇月位しか間違はないのである。尤も私はこの見積りをするに際して、どんな事を根據にするかと云ふ事は云ひ得ないのである。終には私は非常に大膽になり、私の見當をつけた事を自ら進んで云ひ、而も彼の子供に關する私の無智を暴露する事によ

つて父を怒らせる様な危險には陷らなかつたのであつた。私は斯くして兎に角非常に豐富なる無意識的記憶を呼びさまし、私の意識的記憶の範圍を擴げるのである。

それでは私は此處に主として私自身に觀察した忘却の著しい實例を報告しよう。私は印象及び經驗の忘却つまり知識（Wissen）の忘却と企圖（Vorsätze）の忘却つまり「すべきことをしないでおく事」（Unterlassungen）とを區別する。全體の觀察の一律なる結果を私は先づ此處に述べる事が出來る。卽ち「凡ての場合に於て、忘却は不快の動機（Unlustmotiv）に基く事が證明される」と云ふにあるのである。

(A)　印象と知識の忘却

(1)或年の夏に、私の妻はそれ自體としては何でもない事で私をはげしく怒らせた。私共はウヰーンから來て居る或男と對座して「ホテル」の共同食卓に就いて居た。その男を私は知つて居り、彼もまた私を想起し得たらしかつた。併し私には彼との相識を新たにしたくない理由があつたのであつた。向ひ側に居る男の名望ある名だけを聞いて知つて居た私の妻は、彼とその隣りに居る人との對話を餘りにも露骨に傾聽し、そこに話されて居る事を取り入れた問を以て自分に話しかけて來た。私は辛抱がしきれなくなつて終には怒つてしまつた。數週間後に私は妻のこの態度に

就いて或親戚の者に不平を云つた。併し私はかの男の話した事を一語も思ひ出す事が出來なかつた。私は平生寧ろ怨みを忘れない方のたちであつて、自分を怒らせた様な出來事の細目を忘れ得ない方であるから、この場合の記憶缺損は多分妻の人格を傷つけてはならないと云ふ顧慮に動機をおいて居るものである。つい近頃私に同じ様な事が再び起つた。私は親しい知人に向つて數時間前に妻の云つた事を笑ひ草にしようとした。併し私はその話を跡かたもなく忘れてしまつた爲に私の計畫は駄目になつてしまつた。私は妻に彼女が何と云つたつけねと訊かねばならなかつた。私のこの忘却は私共が近親に關する事柄に就いて陥る定型的な判斷障礙と同様に解すべきものである事は容易に判るのである。

(2) 私はウォーンに到着した土地不案内な婦人の爲に、書類や金を入れて保存する小さい鐵製手提金庫を買ふ事を引受けた。私がこの事を引受けた時私の眼前には私がこの種の手提金庫を見たに相違ない市の中心にある或る「ショーウォンドウ」の像が、異常に活溌にありありと見えて來た。私には街の名は思ひ出せなかつたが、私は市内を散歩する際に、確かにその店舗を見出すであらうと思つた。何となれば私は、私が數へ切れない程屢〻その店舗の前を通つたと云ふ事を記憶して居たからである。私は市の中心 (Innere Stadt) を色々の方向に通つて見たけれども、この手提金庫のならべてある飾窓を見出す事が出來なくていらいらした。私は宿所、姓名、職業を

書いた名簿録から金庫製造者を探し出した上、二度目の巡回の時に求むる飾窓を見出す外はないと考へた。併しそれにはあまり骨が折れなかつた。「アドレス・カレンダー」の中に書かれた「アドレス」中にそれと直ぐにわかる一つの「アドレス」があつた。私が曾て數へ切れぬ程度々飾窓の前を通つて居た事は事實であつた。私は多年來同じ家に住んで居るM氏の家庭を訪問する時にはいつも其處を通つて居たのであつた。この親密な交際が止んで全然疎遠になつた時、私は別にわけもなくこのあたり及びその家を避けるのが通例となつた。私が飾窓の中の金庫を探しながら市街を散歩した時には私はその附近の街路は凡て歩いたがこの一つの街路のみは恰も禁制でもあるかの樣に避けて居たのであつた。この場合私に見當のつかない原因となつた不快の動機は理解する事が出來た。併し忘却の機制は前の例ほど簡單なものではなかつた。私の嫌惡感は勿論金庫製造業者に適用さるべきものでなく、或る別人――その人に就いては私は何も知り度くはなかつた――に適するのであり、この人から私に忘却を起させたこの機會に轉移されたのである。前に述べたブルックハルト Burckhard の例に於ては、これと全く類似して、或人に對する憤怨が、他人に關係する場合に名の「書き損ひ」を惹起したのであつた。この場合には本質的に異つて居る二つの觀念圈の間の連絡をつくつたものは「名を同じうする事」であつたが、飾窓の例では空間に於ける近接、引離す事の出來ない近隣と云ふ事が現はれて居たのである。而も後の例で

は前の例に比して一層緊密に接合されて居た、それは今一つの內容上の結合が存したのである。何故なればその家に住んで居る家庭と疎遠になつた理由の中には金錢が一つの役目を爲して居たからである。

(3)私はベー・ウント・エル B. & R. 事務所から其處の事務員の一人を往診して吳れと賴まれた。その家へ行く途上私はその商店のある建物へは度々行つたに違ひないと考へた。私にはその店の看板は一つ低い階に見え自分が前に往診した處は一階だけ上であるやうに思はれた。併し私はそれが何と云ふ家であつたか何人を往診したのか思ひ出す事が出來なかつた。全體の事はどうでもよい事であり、且つ無意義な事ではあつたが、私はこの事件を取扱ひ、それに就いての「思ひ付き」を集め、いつもの樣に迂路を經て、終に B. & R. 商店のある處より一階上にフィッシャー下宿屋（Pension Fischer）といふのがあり、其處へは私が屢〻患者の往診に出掛けた事が判つて來た。そして今や私はその商店及下宿屋を包容して居る建物をも知つたのである。それにしてもこの忘却の際に働いた動機が私には判らなかつた。私は商店そのもの、或はフィッシャー下宿屋或は其處に住んで居た患者に關し、追想上不快な何ものをも見出さないのであつた。又私はその動機たるやひどく苦痛なものではなからうと推察した。でなければ前例に於ける樣な外的の補助材料を用ひず、廻り道をする事によつて忘れた事を再び支配する事は殆ど出來なかつたらう

と私は考へたのであつた。終に私は一寸前にこの新らしい患者の處へ行く途中一人の紳士が自分に挨拶をした事を思ひついた。この男を認識するには骨が折れた、私はこの男を數箇月前に外觀上重篤なる狀態に於て診察し、進行性痲痺症の診斷を下したのであつた。併しその後彼が囘復した事を聞いたので、私の診斷が間違つて居たかも知れないと思つて居た。若しも痲痺性癡呆症にも見られる事のある寛解狀態が起つたのでないとすれば、私の診斷は間違つて居たかも知れなかつたのであつた！　私をしてビー・ウント・エル商店の近所の家を忘れさせた影響は、この男との邂逅にその端を發して居た。そして忘れられた事を解決しようとする私の興味は診斷の疑はしいこの例の解決の興味から轉移されて居た。この場合には內的の關係は餘りなかつたのであつて、期待に反して囘復したこの男も、始終私に患者を送つて來る或る大商店の事務員であつたのである。併し聯想上の結合は姓名が同じであると云ふ事から起つて居たのであつて、私と一緒にこの疑はしい痲痺症患者を對診した醫師は同じ建物の中に住んで居り、且つ忘却された下宿屋同樣フィッシャー（Fischer）と云ふ人であつたのであつた。

(4) 或る物品を置き忘れ（Verlegen）ると云ふ事は、私がそれを何處に置いたかと云ふ事を忘れる事に外ならないのである。そして書き物や書物を取扱ふ多數の人々と同樣に、私は机の上の勝手をよく知つて居り、必要なものを直ちに取り出す事が出來るのである。他人に對しては無秩序

だと思はれる事でも自分にとつては歴史的にきまつて居る秩序である。處で何故に私は近頃自分に送られた書籍目錄を置き忘れて之を見出す事が出ない樣な事になつたのであらうか？ 實際私はその中に廣告されて居た「言語に就いて」（Über die Sprache）と云ふ書を注文しようと思つたのであつた。何となればその書物が或る著者の書いたものであり、その人の機智に富み活氣ある文體は自分が好きでありその人の心理學上の認識、その人の文化史上に於ける知識を自分が尊重して居たからであつた。だからこそ私はその圖書目錄を置き忘れたものと考へるのである。私はこの著者の書物を啓發のために自分の知人に貸してやるのを常として居た。そして數日前或人がその書物を返しに來た時に、その人は私に向つて「文體はあなたの文體そつくりですね、そして考へ方も同じです」と云つた。彼はこの言によつて如何なる事に觸れたかと云ふ事を知らなかつたのである。多年前私が未だ若くて仲間が欲しかつた頃、私が有名な某醫學者の書いたものを稱讃した時に、自分よりも年上の同僚が殆ど同じやうな事を云つた事があつた。「丁度あなたの樣な文體であり、あなたの樣な書き方樣式です」（Ganz Ihr Stil und Ihre Art.）と。これに大いに動かされて私はこの學者に對し、親交を求める旨の手紙を書いたのであつた。併し冷淡な返書を受取つて私は自分の殼の中に引込んでしまつた。私の最近の經驗の背後にはその外に尙ほそれ以前の私を脅かす經驗が多分隱れて居たのであらう。何となれば私はこの置き忘れた「カタロー

グ」を二度と見出さず、又この前徴によつて私はこの廣告された書物を注文する事を實際に阻止されてしまつたからである。私は勿論その書物及著者の名を實際に記憶に保存して居たから「カタローグ」が見えなくなつたとて書物を注文する事に實際の障礙は起らなかつた譯だけれども。*

*Th. Vischer 以來所謂「物體の惡戯」に歸せらるる多數の偶然の出來事に向つて、私は同じやうな說明を提唱したい。

(5)「置き忘れ」の他の一例は置き忘れられたものが再び見出されるに至つた條件が面白いので注意の價値がある。或る若い男が私に次の話をした。「一二年前に私共夫婦の間に或誤解がありました。私は妻が餘りに冷淡であると思ひました。そして私は妻の優れた性質を喜んで認めて居ましたものの私共は愛情なしに暮して居ました。或日彼女は散歩から歸つて來て、私に興味があるだらうと思つて買つた一册の書物を持つて來て吳れました。私はこの自分に對する配慮を感謝し、何れその內讀むからと云つてそれをちやんと仕舞ひ込みました。而もその後二度とこの書物を見出す事が出來ませんでした。數箇月を經過し、その間私は時折この失はれた書物の事を考へ、又實際それを見出さうとしましたがだめでした。約半箇年の後に別居して居た私の實母が病氣しました。私の妻は彼女の姑を看護するために家を去りました。患者の狀態は重篤となり、妻に彼女の最上の半面を發揮する機會を與へたのでした。或晩私は妻の行爲に感激し、彼女に對する感謝の念に滿ちて家に歸つて來ました。私は自分の机の傍に步み寄りました。そして特に企圖した

譯ではないが夢遊病者の確實さを以てその或る抽斗をあけました。そしてその一番上の處に私は永い間置き忘れて捜して居た書物を見出しました」

「置き忘れ」の動機がなくなると共に非常に確實に再發見が出來た點に於て、右の實例と一致して居る「置き忘れ」の一例をヨット・シュテルケが述べて居る。(前揭書)

(6)『一人の若い娘が「カラー」を造らうと思つて布片を切る時にこれを切損つてしまつた。女裁縫師に來てそれを直して貰ふ事になつた。さて愈〻裁縫師がやつて來て娘が、切りちぎられた「カラー」を確かに入れたと信じた抽斗を開け、之を出さうとした時に彼女はそれを見出さなかつた。彼女は抽斗の中を搔き探したがそれでも見付からなかつたのであつた。彼女はいらいらして坐り込み、何故それが見えなくなつただらうかと自問自答し、彼女がそれを見出し度くないのであらう、「カラー」の樣な簡單なものさへ臺なしにしてしまつたのだから勿論裁縫師に對して恥ぢて居るのであらうと考へた。彼女はこの時、立上り別の簞笥の處に行き、第一着手にあけた抽斗から切りちぎられた「カラー」を引き出した』

(7)「置き忘れ」の次の實例は精神分析者なら何人も知つて居る「タイプ」のものである。この「置き忘れ」を仕出來した患者が自らこれを解く鍵を見出したものと云つてよからうと私は考へる。「精神分析療法を受けて居た一患者は、夜脱衣の際に一つなぎの鍵を——彼の考へる處では

——いつもの場所に置いた。この患者には療法に對する抵抗があり、健康狀態のよくない時期に、この療法の夏期の中斷が來る事になつたのであつた。次いで彼は次の日——治療の最終日であり分析醫への謝金をも支拂ふべき日——の旅立ちのために尙ほ一二の品物を「テーブル」から出して持つて行かうと欲する事をも思ひ出した。その「テーブル」の中に彼はお金をもしまつてあつたのであつた。併し鍵は見えなかつた。彼は小さい住居の中を系統的に、然し段々苛立ちながら探したが效がなかつた。彼は鍵を「置き忘れ」た事が症候行爲であり、企圖された事であると認めたので、「囚はれざる者」の助けを得て更に探して見ようと思ひ、下男を呼び起したのであつた。一時間後彼は搜索を打切り、鍵を紛失してしまつたのではないかと思つた。次の朝彼は家具商に合鍵を注文し大急ぎで造つて吳れと賴んだ。前日歸宅の際に彼と同伴した二人の知人は、彼が電車から降りる時に何か地面の上でちりんちりんと鳴つたのを聽いた樣な氣がすると云つた。彼は鍵が「ポケット」から落ちたものと確信した。夕方下男が勝誇る樣にして鍵を彼に差出した。鍵束は厚い書物と薄い小册子（私の或る門下生の書いた論文）——この小册子は彼が夏休に讀む爲に持つて行かうと思つて居たものであつた——との間に非常に巧みに置かれてあり、何人もそんな處にあらうとは想像しなかつたのであつた。彼自身が鍵を今一度さう云ふ風に見えないやうに眞似て置く事さへ不可能であつた。祕密な、併し强い動機によつて或物品を「置き忘れ」る無意

識的技巧は、全く「夢遊病者の確實さ」を想起せしむるものがあるのである。この「置き忘れ」の動機は、勿論治療の中斷に就いての不快と健康狀態がよくもなつて居ないのに多額の謝金を拂はせられる事に對する祕密の怒りにあつたのである。

(8)エー・エー・ブリルが、報告して居る例であるが、或男が內心では全然興味を持たない或る社交的の會合に參加する樣彼の妻から勸められた。終に彼は妻の請ひを容れ、式服を「トランク」から出し始めたが途中で止めて先づ顏剃りをしようと決心した。それが終つて彼は「トランク」の處に戾つて來た。併し「トランク」には錠がおろされて居り、鍵は見付からなかつた。日曜日の夕方の事とて錠前屋を呼ぶ事が出來ず、二人はその會合に缺席する外なかつた。翌朝「トランク」が開かれた時鍵はその中にあつたのであつた。この男はうつかりして「トランク」の中に鍵を落し込み、そのままこれを閉ぢ込んだのであつた。彼は全然知らず、又何の企圖も持たずにさうしたと證言した。併し私共は彼が會合に行き度くなかつた事を知つて居る。だから鍵の「置き忘れ」には動機がなくはなかつたのである。

イー・ジョーンズは餘り煙草をすひ過ぎて、その爲に不快を感ずるやうになつた場合にはいつも「パイプ」を「置き忘れ」る事を自ら氣がついた。こんな時には「パイプ」はそれがあるべき筈でない場所、常におかれて居ない色々の場所に見出された。

(9)ドラ・ミュルレル Dora Müller は無難な而も動機が本人に承認されて居る次の實例を報告して居る。

エルナ・アー Erna A. 孃は「クリスマス」の二日前に次の物語をした。「私は昨晩私の胡椒入のお菓子の包の中からいくらかの菓子を出してたべました。その際私はヱス孃（彼女の母の話相手）が「お休みなさい」と云つて來たら、菓子を少し分けてやらうと考へました。私はさうする事に心から興味を持つては居ませんでしたが、それでもさうしようと思つて居たのでした。その後ヱス孃が來まして、私がその包を取らうとして机の方に手を伸ばしました時、其處に包が見えなかつたのでした。捜して見たら私の簞笥の中に入つて居ました。私は知らず識らず包を其處へ仕舞ひ込んで居たのでした」と。分析は必要なかつた。話し手自ら其間の消息を知つて居た。包を自分獨りだけに取つて置きたいと云ふ壓迫された傾向が、正にこの自働的行爲にあらはれたのであつて、この場合は勿論その後の意識的行動によつて帳消しにされた譯である（Internat. Zeitschrift. f. Psychoanalyse, III, 1915.）

(10)ハンス・ザックスは斯くの如き「置き忘れ」によつて嘗て仕事をなすべき責任逃れをした事を自ら敍して居る。「この前の日曜日の午後私は仕事をしようか、それとも散歩に出かけ、その足で訪問をしようかと暫くの間迷つて居た。少しく躊躇した後に終に私は仕事をする事にした。

約一時間の後私は用紙の蓄へが盡きて居るのに氣がついた。私は何處かの抽斗に數年來一束の用紙が蓄へられてあつた事を知つて居た。私は机の中及び私がそれを見出し得るかも知れないと考へた他の場所を非常に骨折つて捜し、ありとあらゆる古い書物や「パンフレット」や書類などを引掻き亂して捜したがだめであつた。そこで私はどうしても仕事を中止して出掛けねばならぬ事になつた。私が夕方家に歸り、安樂椅子に腰かけ、ぼんやりして向ひ側にある本箱を見遣つた時、私に一つの抽斗が目についた。そして私はその抽斗の內容を隨分久しく調べて見なかつた事に氣がついた。私は立つて行つてその抽斗を開けた。一番上の處に皮製の紙挾みがあつて、その中に使つて居ない用紙があつた。併し私がそれを取り出して机の抽斗に仕舞ひ込まうとした時に、初めてそれがその日の午後に捜しあぐんだ用紙であつた事を思ひ出したのであつた。私は全般的には吝嗇ではないが、紙の事になると非常に注意して扱ひ、まだ使へさうなのは僅かの殘りでも保存しておく方であると云ふ事を此處に云ひ添へておかねばならぬ。この場合の忘却の實際の動機が消失するや否やこの忘却を直ちに是正してそのあり場所を知らしめたものは、一つの本能に培はれて居たこの習慣であつた事は明らかである。」

「置き忘れ」の多數の實例を通觀して見ると、これが無意識的企圖の結果に外ならぬ事を認めざるを得ない。

(11) 一九〇一年の夏、私は當時學問上の問題に就いて活潑な意見の交換をやつて居つた友人某に次の様に說明した。「神經症の問題は個體が元來兩性的性慾を持つて居ると云ふ假定に完全に立脚する時に初めて解決が出來ます」と。すると私は次の様な答を得た。「その事は私が二年半前Br. と云ふ處で夕方の散步をした時にあなたに云ひました。當時あなたはそれを聞かうとはなさらなかつたのでした」と。創意を抛棄する事を要求される事は苦痛なものである。私はこの様な對話をした事及び友人がこの意見を披瀝した事を追想する事が出來なかつた。兩人の內何れか一人が思ひ違ひして居たに相違ないのである。處で「何人に都合がよいか?」(cui prodest?) の原則に從へば私が思ひ違ひをした方でなくてはならなかつた。(譯者註、諺に is fecit cui Prodest. (Der hat es getan, welchem es nützt.)「それが(その人に)役立つその人がそれを爲したのである」と云ふのがある。) その次の週の間に、私は實際友人がその時どう云ふ風に自分の意見を述べたかを一切思ひ出した。又私が當時どう云ふ答を與へたかと云ふ事も知つて居る。「私はまだそれ程には考へて居りません。私はその事に就いてお相手しようとは思ひません」と私は答へたのであつた。併し私はそれ以來醫學上の文獻の何處かに私の名と關聯せしめ得る二三の思想の一つでありながら私の名が其處に出て居ないものに遭遇しても以前よりはいくらか辛抱強くこれに堪へ得るやうになつた。

妻に對する夫の非難——反對側に變化した友情——醫師の誤診——同業者による排擠——他人

の思想の剽竊等手當り次第に集めた忘却の多數の實例は、それを說明するに當つては苦痛を起す問題に立ち入る事を必要とする事は、決して偶然の事ではないのである。それ處か私は何人と雖も自分自身の忘却の動機を研究するならば、同じやうに不快な事の見本カードを示す事が出來るやうになるであらうと推察するのである。不快な事を忘れる傾向は私には全く常の事の樣に見えるのである。不快な事を忘れる能力は、色々の人に於て色々の程度によく發達して居るやうである。醫業をやつて居る内に私共が遭遇する否認の或ものは、多分忘却に歸すべきものである。*

*或人に向つて拾年か拾五年前に黴毒に感染した事があるかどうかと問診して見ると、彼は精神的にこの病氣を急性僂麻質斯とは全然別な有樣に取扱つた事を非常に容易に忘れて居る——兩親が神經病に罹つた彼等の娘に就いて述べる既往歷に於ては、彼等が忘却した部分と祕する部分とを明確に區別する事は殆ど出來ないのである。何故なればこの娘の後來の結婚の障りになるやうな凡ての事は、兩親によつて系統的に除かれ——壓迫されるからである。——近頃愛妻を肺病で亡くした或男は、斯くの如き忘却によつて醫師の問診が邪路に導かれる次の例を私に告げた。「私の氣の毒な妻の肋膜炎が、何週間たつてもまだよくならなかつた時ドクドル・ペー Dr. P が協議醫師として招かれた。既往歷をとるに際し、彼はいつもの樣に訊ね、殊に私の妻の家庭に肺病があつたかどうかをきいた。私の妻はそれを否定し、私もそれを思ひ出さなかつた。ドクトル・ペーが辭去するに際し、話は偶然的に遠足の事に及んだ。そして私の妻は云つた。「私の可哀相な兄の葬られて居るランゲルスドルフ迄も永い旅です」と。この兄は約十五年前に數年も續く結核症で死亡したのであつた。私の妻は彼を非常に愛してゐて、屢〻彼の事を私に話し出してゐた。そればかりでなく妻が先頭肋膜炎と診斷された時彼女は非常に心配し、心が暗くなつて、「自分の兄も肺病で死んだのだ」と云つたのであつた。然るに今その追想は非常

に强く壓迫され、彼女が今述べたランゲルスドルフへの遠足の事を話した後でさへ、彼女の家庭に於ける病症の報告を訂正するきつかけを見出さなかつたのであつた。私自身には彼女がランゲルスドルフの事を話した瞬間にこの忘却された事が思ひ泛んだのであつた。——これと全く同じやうな經驗をジョーンズは既に度々述べた彼の著述に於て報告して居る。自分の妻が診斷不明の腹部疾患に罹つてゐた某醫師は、慰める樣な調子で「お前さんの家庭には結核症例がないからいいよ」と彼女に云つた。處が細君は非常に驚いて「あなたは私の母が結核で死んだ事、それから私の姉が結核症が癒らないで醫師から見放された事をお忘れになつたのですか」と云つた。

斯くの如き忘却に對する私共の解釋は、勿論この態度とあの態度との間の區別を、純心理學上の狀態に制限するものであつて、兩方の反應の有樣に於て其處に同じ動機の現はれを認めしめるのである。私が患者の家庭に於て見た不快なる記憶の否認の多數の實例の中で、一例は特に奇なるものとして私の記憶に殘つて居る。或母が元來神經質であり現在思春期にある自分の息子の兒童期の事を告げ、彼が他の同胞と同樣遲く迄寢小便に惱んだ事を物語つた。この事は神經病者の病歴に對して無意義のものでない事は周知の事である。數週間の後、彼女が治療の狀態に就いての報告を聞きに來た時に、私は彼女に向つて、この若い男の體質的病的素質に注意せよと云ひ、既往歴にあげられてゐた夜尿症の事を引合ひに出した處、驚いた事には彼女はこの事實がこの子及びその同胞にもあつた事を否定し、且つ一體私がその事を何處から知り得たかと訊ね、終に私から彼女自らがつい近頃物語つた事を告げられたのであつた。その事を彼女は忘れてゐたのであつた。*

*私がこれらの頁の原稿を書いてゐた頃、私は次の殆ど信じられない樣な忘却の例に遭遇した。一月一日に私は患者に報酬の勘定書を送る事が出來る樣に私の診療簿を調べてゐた。その際六月の處にM……lなる名に遭遇し、而もこの名に相當する人物を思ひ出す事が出來なかつた。だんだん頁を繰つて行く中に、私はこの症例を或る療養所に於て治療して居り、數週の間每日往診してゐたと云ふ事實を認むるに及んで、私の不審は一層加はつて來たのであつた。私はこれが男子であつたらうか、痲痺症患者であつたらうか、それとも何等興味のない症例であつたらうかと自分にたづねて見た。受取つた報酬に就いての記入の處に來て、初めて追想から逃れようとした凡ての知識が自分によみがへつて來た。M……lは十四歲になる少女であり、私の近年に於ける最も注意すべき症例であり、決して忘れ得ない敎訓を私に殘し、而もその成行は私に非常な苦痛の種となつたものであつた。この子供はまがふかたない「ヒステリー」症に罹つてゐた。そして私の手で速かに且つ根本的によくなつたのであつた。この輕快の後にこの子供は兩親の手によつて私から引き取られた。子供は尙ほ腹痛を訴へ、この腹痛は「ヒステリー」の症候像に於ける主役を演じてゐたのであつた。二箇月の後にこの子供は下腹部淋巴腺肉腫で死亡した。「ヒステリー」症の素質をもつたこの少女は、腫瘍の形成をその誘因として該症を起したのであつた。そして私は喧しいが併し無難な「ヒステリー」症狀にとらはれて徐々に起つて來る惡性の疾患を見落したのであつた。

だからして私共は健全であつて神經病に罹つてゐない人に於ても苦しい印象に就いての追想、苦痛を呼び起す觀念の表象に對しては抵抗が働く*ものであると云ふ事の多數の證據を見出すのである。

*アー・ピック A. Pick は近頃「精神病、神經病患者に於ける忘却の心理」なる論文に於て、感情的要素の記憶に及ぼす影響を認め、不快感に對する防衞の努力が忘却に對して貢獻する事を——多少明らかに——承認した多數の學者の名を

集めた。併しニイチェ Nietzsche が彼の警句に於て示した程に、この現象とその心理學的論證を適切に又同時に印象深く表現し得たものは私共の中にはゐないのである。彼は云つた「私はその事を致しました」と私の記憶が云ふ「私はそんな事をした筈がない」と私の自負心が云ひ、而も一歩も退かず、結局記憶が讓歩する事になる」と。

併し私共が神經症的人物の心理に立ち入つて研究して行くと私共は初めてこの事實の完全な意義を測り知る事が出來るのである。不快感を呼び起し得る觀念に對する斯くの如き原始的防衞傾向（elementares Abwehrbestreben）――痛覺刺戟ある場合に於ける逃避反射機能（Fluchtreflex）に對立せしめ得る――を私共は「ヒステリー」症狀を支持する機制の大黑柱と認めざるを得ないのである。吾人が吾人に迫つて來る苦しい記憶から解放され得ない事屢〻であり又悔恨・良心非難の樣な苦しい感情激發を逐ひ拂ふ事の出來ない事が屢〻である事を根據として人々は斯くの如き防衞傾向の假定に反對しないであらう。勿論この防衞傾向が到る處に於て成功するものであると私共は主張するのではない。又私共はこの傾向が心的の力相互間に起る葛藤に於て、別の目的の爲に正反對の事を成し遂げようと努力し、自分に拮抗して實際に之を成立せしめる樣な要素に遭遇する事がないと主張する者ではないのである。心的裝置の建築學上の原則として、層形成即ち上下に互に重り合つて居る動因よりの組立が推測される。そしてこの防衞傾向は低級なる心的動因に屬するものであり、高級なる動因からは制止され阻止される性質のものである事が

大いに可能である。兎も角も私共の忘却の實例に見るやうな過程をこの防衛傾向に歸し得るとすればこの傾向が存在し且つ勢力あるものであると云はなくてはならない。私共は或事柄がそれ自體の爲に忘れられるのを見るのである。それが可能でない場合には防衛傾向はその目標を轉じて少なくとも他の比較的重要でない事であり、而も本來の不快事と聯想上の結合に陷つた事を忘却させるのである。

此處に述べた觀點、卽ち苦しい記憶は特に容易に動機のある忘却に陷ると云ふ事は、今日までは未だ全く或は餘り顧慮されてゐなかつた二三の領域に關係つけられる價値があらう。例へば法廷に於ける證言を評價するに際して、この事は今尙ほ十分明確に强調されてゐないやうに思はれる。[*] この場合に人々は證人の宣誓に對してそれが彼の心的過程に對する淨化的影響を有するものとして過大の信賴をおいて居る觀があるのである。或る民族の傳說や傳說的歷史の成立に際しては、國民的感情に對して苦痛を起すやうな事を記憶から除外しようとする動機が働く事を考慮に入れなければならぬ事は一般に承認されて居る。精細に追究するならば、民族傳說及び各個人の幼時追想の出來る有樣の間には完全なる類似が認められるであらう。偉大なるダーウヰン[**]は忘却のこの不快動機を認識して科學硏究者に向つての金科玉條をこれから引き出したのである。

＊Hans Gross, Kriminalpsychologie, 1898. と比較せよ。

＊＊アーネスト・ジョーンズはダーウヰンの自叙傳に於ける次の箇所を指摘して居る。この箇所はダーウヰンの科學上の眞面目さと彼の心理學上の烱眼とを明らかにあらはすものである。
「多年の間私は一つの金誡（golden rule）を守つて居る。卽ち、發表されたる事實、新らしい觀察或は思想であつて、私自身の全般の硏究業績と矛盾するものを見出す場合には、私は直ちにそれを出來るだけ忠實に書きつけておく事にして居る。何となれば、經驗は斯くの如き事實や經驗は私共に好都合なるそれよりも容易く記憶から逃げ去る事を教へるからである。」

「名の忘却」の場合と全然類似して「印象の忘却」の場合にも「思ひ出し損ひ」（Fehlerinnern）と云ふ事が起り得る。この誤れる追想が信念を見出す場合には、記憶錯誤（Erinnerungstäuschung）と名づけられる。病的の場合に於ける記憶錯誤——偏執症（パラノイア）に於てはこの記憶錯誤は妄想系統形成に際して正に組織的要素の役目をなすものである——は非常に多數の文獻を生み出した。而も私は之等文獻を通讀して見て記憶錯誤の動機の指示は見出し得なかつた。この記憶錯誤の問題は、神經症の心理學に屬するものであるから、此處に之を取扱ふ事は止めにしよう。その代りに私は自分の記憶錯誤の奇なる實例を述べよう。この例では無意識的なる被壓迫的材料が記憶錯誤の動機をなして居る事及びこの材料との結合の有樣が十分明らかに見られるのである。

私が「夢判斷」に關する私の著書の後の方の章を書いた時には私は避暑地に居り、圖書館にも行けず參考書も手に入れる事が出來なかつた。それで私は後に訂正する事にして凡ての關係と引

用文とを記憶をたよりにして原稿に書き込んでおく外なかつたのであつた。幻想(Tagträume)に關する章を書いてゐた際に、私にアルフォンス・ドーデー Alph. Daudet のナバーブ „Nabab“ の中に描寫されて居る、貧しい簿記係の優秀なる人物が思ひ泛んで來た。この人物をかりて多分この作家が彼自身の幻想を描寫したのであつた。私はこの男——私は彼を Mr. Jocelyn と名づけた—が巴里の街路を散歩してゐた際に描いた空想の一つを明瞭に記憶して居るものと信じた。そしてこの空想を記憶からして再生し始めた。卽ち、ジョーセリン君が街路に於て勇敢に奔馬の前に身を挺して出で、これをとどめ、ついで扉が開いて馬車から高貴の御方がお出ましになり、彼に握手し、彼に向つて「あなたは私の救助者です、命の恩人です、どうしてお禮を申上げませうやら」と云つた處を空想したのであつた。

私はこの空想の描寫に多少不正確な處があるかも知れないが、それは家に歸つてその本を手にすれば譯もなく訂正し得る事だと考へて自ら慰めてゐた。然しながら、其後私が „Nabab“ の頁を繰つて最早印刷するばかりになつてゐた私の原稿と比較した時、私はジョーセリン君の斯くの如き空想は何も書かれてゐないばかりでなく、この貧しい簿記係は Jocelyn と云ふ名の男ではなくジョワイユーズ Mr. Joyeuse と云ふのであつたので、大いに恥ぢ入り且つ驚いたのであつた。この第二の誤謬はその後間もなく、第一の誤謬卽ち記憶錯誤の說明の鍵となつたのである。

ジョワイユー Joyeux ——その女性の形が Joyeuse となる譯である——は私の名なるフロイド Freud を佛蘭西語に飜譯したものとしか考へられなかつた。そこで、私がドーデーに歸したこの誤り記憶された空想は、一體何處から來たのであらうか？　この空想は私自身の製作物に外ならなかつたのである。卽ち、私自身がつくり、私には意識的にならなかつたか、それとも一度意識的にはなつたが、その後根本的に忘れられた幻想であつたものと思はれるのである。多分私は自らこの幻想を巴里に於てつくつたのである。其處では私はシャルコー先生 Charcot に御交際を願ふ事が出來る樣になる迄は隨分さびしくて、自分の援助者及び保護者があつて欲しいと熱望しながら、屢〻散歩したものであつた。そして „Nabab“ の著者には私はシャルコー先生のお宅で度々面會したのであつた。*

*つい近頃讀者からホフマンの少年文庫の一册が私に送り屆けられ、その中には私が巴里で空想した樣な救助の光景が詳細に書かれてあつた。一致點はあちらこちらにあらはれて居り、又一致は箇々の必ずしも普通ではない云ひあらはし方にも及んで居る。私が幼い子供の時に實際この少年讀物を讀んだかも知れないと云ふ想像は斥ける事が出來ない。私共の中學の生徒圖書館にはホフマンの叢書があり、生徒に他の如何なる精神的の糧の代りにも之を提供する準備が出來てゐた。私が四十三歲にして他人の製作物を思ひ出したものと信じ、ついで二十九歲の時に自分のやつた事を認めねばならなかつたこの空想は十一歲乃至十三歲の間に取り入れた印象の忠實なる再生であつたかも知れないのである。私が „Nabab“ の中にある失業簿記係を主人公にしてつくつた救助の空想は、單に自己の救助の空想への道をつくるものであり、愛顧者

及び保護者を得たいと云ふ熱望を自分の自尊心に牴觸しないやうにするものに外ならなかつたのである。さすれば私自身が私の意識的の生活に於て、保護者の愛顧に依賴して居ると云ふ觀念に對し、絕大なる反抗心を持つて居り、又これに似たりよつたりの事が實際に起つた一二の場合に於てそれに堪へ得なかつたと云ふ事を聞いても、人の心をよく知つて居る人は、誰も不思議には思はれないであらう。斯くの如き內容を持つ空想の深い意味及び特徵の殆ど完全なる說明を、アブラハムは「神經症性空想に於ける父救助と父殺し」なる論文（Internat. Zeitschrift f. Psychoanalyse, VIII, 1922.）に於て發表して居る。

十分に說明する事の出來た記憶錯誤の他の例は後に述べる「誤れる再認識」（fausse réconnaissance）を思ひ起させる。私は患者の一人で功名心に富み、且つ有能な男に、或る若い大學生が近頃「美術家、性慾心理學の試み」（Der Künstler, Versuch einer Sexualpsychologie）と云ふ興味ある著述をして、私の門下生に仲間入りした事を語つた。一年三箇月の後にこの書が出版された時、この患者は、私が最初この書の事を彼に話した前（一箇月、若くは半年前）に旣にこの書の廣告を何處か——多分或る書店の廣告——で讀んだ事を確かに記憶して居ると主張した。彼は、尙ほこの廣告の事は、そのときに直ぐ思ひ出したと云ひ、尙ほ著者は標題を變化し、最早 „Versuch“ ではなく „Ansätze zu einer Sexualpsychologie“（「性慾心理學への追加」）となつて居ると云つた。併し著者によくよく訊ねてみ、且つ時の關係を比較してみて、患者があり得べからざる事を記憶しようとして居る事が判つた。この書については、出版前に何處に

も廣告は出なかつたし、確かに出版の一年三箇月前に廣告したと云ふ様な事はなかつたのであつた。私はこの記憶錯誤の判斷をそのままにしておいたところ、彼は同じ記憶錯誤の復興をやつた。彼は近頃書店の飾窓で「臨場苦悶」(„Agoraphobie“)に關する書を見た様な氣がして、凡ての出版屋の目錄をさがし、この書を手に入れようと努力したと云ふのであつた。其處で私は何故彼の骨折りが、無效に終つたかと云ふ事を說明する事が出來た。「臨場苦悶」に關する著書は無意識的の計畫として彼の空想の中に初めて成立つたものであり、彼自身によつて書き上げらるべきものであつたのである。かの青年に負けないやうになり斯くの如き科學的業績によつて門下生になりたいと云ふ彼の功名心が彼を最初及び二度目の記憶錯誤に陷らしめたのであつた。其處で彼もまたこの間違つた認識をさせるに役立つた書店の廣告は「發生、生殖の法則」(„Genesis, das Gesetz der Zeugung“)なる標題の書に關係があると云ふ事を思ひ出した。併し彼が說明した標題の變化は、私の責任を負ふべきことであつた。何となれば、私自身も„Ansätze“の代りに„Versuch“と云ふ風に標題を云ひあらはす樣な不正確をやつた事を思ひ出す事が出來たから。

(B) 企圖の忘却

注意力の不十分と云ふ事だけでは失錯作業を十分に說明し得ないものであると云ふ命題の證明

には「企圖の忘却」は他の如何なる現象群よりも適當して居る。一つの企圖（計畫）は旣に是認されたる行爲への衝動であり、而もその行爲の實行が或る適當なる時刻迄延期されて居るものである。さて斯くしてつくられた時限の間に勿論動機に變化が起り、企圖が實行されないと云ふ事が起り得るのである。しかしこの場合には企圖は忘れられるのではなくして、修正され或は拋棄されるのである。私共が日々に、又凡ての可能なる狀態に於て經驗する企圖の忘却をば私共は通例動機の調整に於ける最近の變化によつては說明せず、一般にそれを不問に附するか、或は企圖の成立に缺くべからざる條件であり、從つて企圖の出來る時にはその行爲に向つて自由に用ひ得る樣になつてゐた注意が、行爲實行の際には最早準備されてゐなかつたのであると云ふ假定の下に心理學的說明をもとめて居る。處で企圖に對する私共の正常的態度の觀察は、この樣な說明を出鱈目なものとして、斥けしめるのである。私が朝の內に或企圖を立て夕方それを實行しようと考へたとすると私はその日の中に一二囘その事を思ひ起す事があらうがその企圖を一日中意識して居なくてもよいのである。實行の時が近づく時、企圖は急に私に思ひ泛び、行爲に必要な準備をさせるのである。私が散步に出かける時に發送すべき一通の手紙を持つて行くと假定して、神經質でない正常人として、私はその手紙を手に持つて郵便箱を搜す必要はないのである。私は手紙を「ポケット」に入れて步き、私の考へを自由に色々のことに馳せしめるのが常である。而も

最寄りの郵便箱は私の注意を刺戟して、私に「ポケット」の中を摑んで手紙を取出さしめるであらう事を期待するのである。企圖を持つて居る場合の正常的の狀態は、催眠術に於て所謂「長期の催眠術後の暗示」を與へられた人に實驗的に起される行動に、完全に一致して居るのである。*
私共はこの現象を次の樣に敍述するのを常として居る。「暗示された企圖は實行の時が近づく迄は、その人々に眠つて居るのである。ついで、企圖はめざめて行爲を起させるのである」と。

*Bernheim, Neue Studien über Hypnotismus, Suggestion und Psychotherapie, 1892. と比較せよ。

人生の二つの狀態に於ては、心理學者でない人も企圖の忘却はそれ以上分解し得ない元素的現象であるとは考へず、結局白狀されない動機によるものである事を知つて居る。私は戀愛關係と軍隊に於ける從屬關係の事を云つて居るのである。情人との媾曳を怠つた男が「殘念ながら忘れたのだ」と辯解してもだめである。彼女は必ずや彼に向つて「一年前ならあなたはそれをお忘れになるやうな事はなかつたでせう。今ではあなたは私の事なんか何うでもいいのでせう」と答へるであらう。假令彼が上述の心理學的說明を提げて「仕事がつかへてゐて忙しかつたのだ」と辯解しようとしても精神分析醫の樣に烱眼になつて居るその婦人は、「さう云ふ事務上の障礙が以前に起らなかつたのは不思議な事ですわね！」と答へる事必定である。確かに彼女も忘却の可能性に就いては否定しないであらう。唯彼女は故意ならざる忘却からも意識的の逃げ口上と大體同

様の結論卽ち氣がなかつたのだ(Nicht-Wollen)――と云ふ推論を引出し得るものと考へるだけの事である。而もこれは無理のない事なのである。

これと似て軍隊の勤務に於ては忘却による怠慢と、故意のそれとの區別を原則的に無視して居る。而もこれは尤もな事である。兵士は軍務が命ずる何事でも忘れてはならないのである。彼が命令を知りつつそれを忘れた場合には、軍務を果さうとする動機に反對の動機が對立して居ると云ふ事になるのである。例へば一年志願兵が點檢に際して、服の釦をピカピカに光らせておく事を忘れたと云つて辯解しても罰せられる事は確かである。併しこの罰は「規則づくめの勤務は私は徹頭徹尾厭だ」と怠慢の動機を上官に表明した場合に受ける罰よりも輕いのである。いはば彼は苦痛を避ける經濟的の理由から罰の輕減の爲に忘却を遁辭として用ひるか或は忘却は妥協として成立するものである。

女に對する媚も軍務も共にこれに關する萬事は恐れられてはならない事になつて居り、從つて、忘却は重要でない事柄には許し得るが重要なる事にあつてはそれを忘れた場合當人がこれを重要でない事の様に取扱はうとし、その重要性を認めないでおかうとして居る兆候であると云ふ考へを起させるのである。此處に於て吾人は心的價値評價の考へ方を實際拒否する事が出來ない。何人も心の働が何うかして居るのでないかと人から思はれないやうに彼自身が重要だと思ふ行爲を

實行する事を忘れないのである。だから私共の研究は多少重要でない企圖の忘却にのみ向けられて行くわけである。私共は如何なる企圖と雖もそれを全然どうでもよい（重要でない）ものとは考へないであらう。何となれば若しも全然重要性のないものなら確かに企圖はつくられなかつた筈であるからである。

＊バーナード・ショオの演劇「シーザーとクレオパトラ」に於て、埃及を去らうとして居るシーザーが、暫時の間彼が何かしようと企てた筈だつたが、それを忘れたと云ふ考へに苦しむ處がある。終にシーザーの忘れてゐた事が判つて來た。それはクレオパトラに別れを告げる事であつた。この些細な點によつて――歴史上の事實とは全然反對に――シーザーがその埃及の小さい女王を如何に問題にしてゐなかつたかと云ふ事が明らかにされて居るものと云ふべきである（ジョーンズ前掲書四八八頁）

さて私は前に述べて來た官能障礙に於けると同様に私自身に於て觀察された忘却による怠慢（爲すべき事をしないでおく事）の例を蒐集してこれを説明しようと努力し、而もこれらが全般的に白狀されない不明の動機――換言すれば反對意志（Gegenwillen）――の干渉に歸すべきものである事を見出したのである。これらの場合の多數に於て、私は奉公勤めに似た立場で一定の強制の下に立つて居り、而もこの強制に對して反抗する事を全然止めず、從つて忘却によつて反抗を表明したのであつた。これは私が誕生日、祝賀會、結婚式、昇任等に就いての祝辭を述べる事を特に忘れ易い事によつて説明される。私は絕えず繰返して決心をするのであるが、それに成

功しない事を今迄よりも一層強く自認するのである。私は今では斷念して反抗する動機を意識的に承認しようとして居る。その過渡の時期に於て私は一定の期日に自分の方へも祝電を寄越して呉れと賴んだ或友人に向つて、兩方とも忘れるであらうと豫め斷つておいた。そしてその豫言が事實になつたのに不思議はなかつた。同情の言葉を必然誇張して云ひあらはさねばならない場合に、同情を實際にあらはす事が出來ないと云ふ事は苦しい生活上の經驗である。何となれば、私の感動が少ないに不拘、右に相當したやうな云ひあらはしかたをする事は許されない事であるからである。私は他人の虛僞の同情を屢〻眞實のものと考へてゐた事があつた事を認識した。そして私は一方に於てこの同情表示が社交上必要である事は洞察して居るものの、この慣習には反抗して居るのである。不幸のあつた場合の「おくやみ」は、この矛盾した取扱ひ方から除外される。私が「おくやみ」に行かうと決心した時には、私はまたこれを怠らないのである。私の感動が社交上の義務と沒交渉である場合には、その感動の表示は、決して忘却によつて忽諸に附される事はないのである。

一旦抑壓された企圖が「反對意志」として表面に現はれ出で、收拾する事の出來ない狀態を釀した忘却の例をT中尉が戰時の捕虜生活から報告して居る「捕虜將校の宿泊所の最古參者が彼の仲間の一人から侮辱された。彼は事件の擴大を防ぐために、彼に可能な唯一の高壓手段を用ひて

この侮辱者を遠ざけ、別の宿泊所に轉ぜしめようと欲した。二三の友人の勸告によつて初めて彼は内心の希望に抗して、この手段に出でず――色々と不快な事を引起す事必然だと思はれたが――紳士道を踏んで行かうと決心したのであつた。――その日の午前この司令官は將校の名簿を監督機關の監督の下に讀み上げねばならなかつた。彼は同宿の士官達を既に永い間知つてゐたので、今迄嘗て間違ひを起した事はなかつた。處が今日は彼は侮辱者の名を讀み落したためにこの人はこの誤りが明らかになる迄は他の凡ての人々が去つてしまつたのに、一人でその場に居殘らねばならなかつた。見落された名は紙の眞中の處に非常に明瞭に書かれてゐた。――この出來事は一部の人からは故意の「いやがらせ」として說明され、他の一部の人からは氣の毒な、そして誤解され易い偶然の出來事と見られたのであつた。併し後になつて、この事件を起した發頭人はフロイドの精神病理學を知つた後に、この出來事の正しい判斷をする事が出來た。

　他人に對する好意からしてやる事を約した行爲の實行を忘却する場合は、同樣に因襲的の義務と白狀されない内的評價との間の葛藤によつて、說明すべきものである。この場合には忘れたと云ふ事で辯解出來ると信ずるのは好意を與へる方の人だけであつて、好意を乞ふ方の人は疑ひもなく正しい答へを與へるのである。後者は「あの人は氣がないから忘れたのだ。さうでなければ忘れる筈がないさ」と答へるであらう。世間には何事も忘れつぽい人だと云はれて居る人がある。

而も往來で人に出逢ひながらお辭儀*もしない近眼者と同樣に人から大目に見ておかれる人が居る。これらの人々は凡ての小さい約束を忘れ、彼等の受けた命令は凡て不履行のままに捨てておき、小さな事ではあてにならない人物である事を示すのである。而も他人がこれらの些細なる過失に就いて自分を惡く思はないで吳れる樣にと要求する。即ち彼等の人格のせゐにはせず、機質的の特徴のせゐ**にして欲しいと要求するのである。私自身はこの種の人物には屬せず、又忘却を選擇し、その動機を發見するためにこの種の人物の行爲を分析する機會も持つた事はなかつた。然しながら、私は類推の上からして斯る場合には異常に強く、而も自白されない他人に對する輕蔑がその動機をなして居り、この動機は體質的要素を自分の目的のために利用する***ものと推定せざるを得ないのである。

*婦人は無意識的精神過程に對し、一層微妙な理解を持つて居り、吾人が街上で彼等を見それ、從つて挨拶をしなかつた場合には手近の説明、即ち吾人が近眼者であるとか、物思ひに沈んでゐたためだと云ふ風には考へず、寧ろ自分に對する侮辱のあらはれと解する傾向があるのが例である。彼等は他人が自分等を尊重するならば夙くに彼等を認めてゐた筈だと推論するのである。

**フェレンチーは「うつかり」者であり、失錯行爲を度々やる事及びその失錯動作の奇なる事によつて知人に驚かれてゐた。併しこの「ぼんやり」なる徵候は、彼が患者の精神分析療法を行ひはじめ、彼自身の自我の分析にも注意を向ける必要あるに至つて殆ど全然消失した。彼は云つて居る。「人は自分自身の責任を大いに擴大する場合には失錯行爲を捨て

るものである」と。だから彼は放心の狀態は無意識的複合體に從屬する狀態であり、從つて精神分析によつて治癒し得るものであると考へて居るが、これは尤もな事である。處で或日フェレンチーは、一患者に精神分析の技術上の失錯をやつたと云ふ自責の下にあつたが、この日彼の以前の「ぼんやり」が逆戻りして來た。彼は街路を歩いて居て何度も躓跌し（治療に於ける faux pas（誤れる歩武）の現はれ）彼の紙入れを家に忘れ、電車の中では Kreuzer（獨逸の小貨幣）を一つ少なく數へ、洋服の釦をきちんと嵌めなかつたりなどした。

＊＊＊これに就いてジョーンズは云つて居る。屢々抵抗がそこに働くものである。卽ち忙しい男は彼の妻から――少々迷惑ながら――頼まれた手紙を「ポスト」に入れる事を忘れる。丁度彼が彼女からの買物の注文を實行する事を忘れるのと同じやうに。

他の場合には忘却の動機を見出す事一層困難であり、而も見出された場合に非常なる驚異を惹起する。例へば私は以前には澤山な往診患者のある場合に、無料患者の往診或は同僚患者の處への往診のみを忘れ、他の患者への往診は忘れなかつた。これを恥ぢて私はその日その日の往診先を朝にプランとして書きつける習慣をつけたのである。私は他の醫師も同じやうな風にして同じ事をやるやうになつたかどうかは知らない。併しこれで何が所謂神經衰弱症者をして彼等が醫者に話さうと思ふ事を評判の惡い「紙片」（„Zettel“）に書きつけさせるかと云ふ事を朧ながらも知る事が出來るのである。彼等は記憶の再生能力に對する自信がないと稱して居る。それは確かに正しい事である。併し場面は通常次の有樣に展開して行くのである。患者は色々の病苦や質問

を非常に長たらしく述べ立て、それが終つてから一寸休んで「紙片」を取出し『私は何も記憶する事が出來ないので「ノート」を作つて來ました』と云ひ譯がましく云ふのである。通常彼は「紙片」の上に何も新らしい事を見出さない。彼は凡ての點を繰返し、自問自答し「やあこの事は既にお尋ねしました」と云ふのである。彼はこの備忘錄によつて、多分彼の症狀の一つ、卽ち彼の企圖が屢〻不明の動機の干涉によつて、妨げられる事を實證して居るのである。

尙ほ私は——以前には特に甚しく——借りた書物を返却する事を非常に容易に、又永い間忘れる事があつた事、或は私が特に容易に金錢の支拂を忘却によつて遲れさせる事があつた事を自白するが、この惱みは私のみでなく私の知つて居る健康者の大部分の人にある事である。近頃の或朝私は每日葉卷煙草を買求める煙草小賣店から金を拂はずに立ち去つた事があつた。これは非常に無難な失錯である。何となれば私はその家ではよく知られて居り、次の日に借りがある事を注意される事を期待し得たからである。併しこの些細な過失、負債をつくる事の試みは、確かに私が前日中考へた遺繰筭段と無關係ではないのである。金錢と所有の問題になると大多數の所謂正しい人々にも分裂したる態度の痕跡が認められる。凡ての物體を——口に持つて行くために——*掴まうとする乳兒の原始的慾望は文化及び教育によつて多分一般に甚だ不完全にしか征服されないものである。

＊題目が同じである爲に、私は本書に用ひて居る章節の區分を無視して「金錢の事に關しては私共の記憶は特別の偏頗な態度を示すものだ」と云ふ事を上記の事に附加してよからう。何かを既に支拂つてしまつたと云ふ記憶錯誤は、私自身の經驗からも判つて居る樣に時には非常に頑强なものである。トランプ遊びの場合の樣に――處世上の大問題から遠ざかり、全然面白半分に――射利的企圖を遺憾なく發揮させる場合には、非常に正直な人々でも「思ひ違ひ」「記憶の錯誤」「勘定違ひ」等に陷る傾向があり、自分ではどうしてであるかよく知らないで小さな詐欺をやつて居るのを發見する事がある。遊戲には精神を爽快にさせる特徵があるものだがそれは一部分はこの自由さから來るものである。「遊戲の際には人の性格があらはれる」と云ふ諺は若しも顯在性の性格を目安にして居るのでなければ承認すべきものである。――勘定係の給仕に故意ならぬ勘定違ひがあつた場合には、これは明らかに同じやうに判斷すべきものである。――商人の中には金錢の支出、勘定支拂を延ばす人を屡〻見る。而もこれは本人に利益を與へる所以ではなく、ただ心理學的に金錢支出に對する反對意志の表現と解すべき性質のものである。――ブリルはこの點に關して警句的の鋭さを以て次の樣に云つて居る。「吾人は小切手の封入されて居る書信よりも請求書の入つて居る手紙を置き忘れ易い」と。――婦人連が醫師に報酬を拂ふ事に特別の不快を示すのは、最も內密であり且つ最も明らかにされ難い感情に關係する。彼女等は財布を持つて來る事を忘れた爲に診察時間に支拂ひをする事が出來ないのが常であり、ついでは報酬を家から送る事をいつも忘れるのである。從つて醫師は「彼女等の美しい眼」のために無償にて治療した事になるのである。彼女等は謂はば彼女等の美貌で以て支拂ひをするのである。

私は今迄に揭げた凡ての實例で以て全く平凡になつてしまつた事を恐れるのである。併し私は凡ての人が知つて居り、且つ凡ての人が私と同じ樣に理解して居る事柄を扱ひ得れば、それで滿足である。何となれば私は單に日常の事を集めて、それを科學的に利用しようと企てて居るだけ

の事であるからである。日常の生活經驗の沈澱物たる叡智が科學の收穫の中に取り入れられ得ないとは自分は考へないのである。科學的勞作の本質的特徴をなすものは對象を多種多様にする事ではなくて、立證の方法を益〻精確にし、關係を愈〻廣遠につけて行く事を努力する事にあるのである。

多少重要な企圖は、暗い動機が起つて彼等を妨げる時に忘却される事を私共は常に見出した。尙ほ一層重要でない企圖に於ては、私共は忘却の第二の機制を發見するのである。この場合には反對意志が他の何かから企圖に轉移されるのであつて、この轉移はこのものと企圖の內容との間に外的聯想がつくられた後に起るのである。次の例はこれに屬するものである。私は美しい吸墨紙に重きを置き今日の午後市の中心へ行く途上でそれを買はうと企てた。併しその後四日間私はそれをわすれた。そしてなにがこの怠慢の原因であらうかと自分に問うて見た。私が吸墨紙は „Löschpapier" と書くけれども平生私共はこれを „Fliesspapier" と云つて居ると云ふ事を考へた時、この原因は直ぐに判つた。フリース Fliess は伯林に居る私の友人であり、その日に彼は苦しい心配な考への發端を私に與へたのであつた。この考へからは私は逃れる事は出來なかつた。併し防衞傾向があらはれ、これが言葉の同じである事によつて、無關係な、從つて又抵抗力の弱い企圖の上に轉移されたのであつた。

直接の反對意志と一層遠い動機とが一緒になつて次の遲延の例に見出される。「神經生活及精神生活の限界問題」(„Grenzfragen des Nerven-und Seelenlebens“)なる叢書に、私は自著「夢判斷」の內容を抄錄した夢に就いての短篇論說を書いた。ウキースバーデンの出版者ベルヒマンは、校正刷を寄越して、この册子を「クリスマス」前に出版したいから、折返して送つて吳れと賴んで來た。私は其晩の內に校正し、翌朝持つて出ようと思つて、机の上に置いた。朝になつて私はそれを忘れ、午後になつて机上に帶封したものを見て初めて思ひ出した。處がその午後にも夕方にも次の朝にも私は同じやうに忘れ、終に氣を取り直して——二日目の午後になつて——何がこの遲延の原因であらうかと訝りながら——それを郵便函に持つて行つたのであつた。私は明らかにそれを發送したくなかつたのである。而も何の爲かは判らなかつたのであつた。その散步の序に、私は夢判斷を出して居るウキーンの出版書肆に立寄り或る注文をした後突然思ひ付いたかの樣に云つた。「私が又夢の事を書きましたが御存じですか?」と。「あゝさうですか、そんなら又お願ひしませう」と出版者が云つた。「レーウェンフェルド・クレラ叢書への短い論說ですから御安心なさい」と私が云つた。併し出版者はそれで滿足しなかつた。彼はこの論文が「夢」の賣行を惡くする事を心配した。私はそんな事はないからと云ひ最後に「若し私がもつと早くあなたにお話しして居たら、あなたはその出版に反對されたでせうか?」と尋ねた。すると

出版者は「いいえ決してそんな事はございません」と答へたのであつた。私自身は全然正しい行動をとつて居り、普通一般に行なはれて居る事以外の事はしてゐなかつたのである。それでも出版者が云つたと同じやうな懸念が私の校正刷發送を遲延せしめた動機であつた事は確實であるやうに思はれたのである。この懸念は以前の機會に遡つて行つた。その時には私は何うにも仕方がなくて私が以前腦性小兒痲痺症に關して出した書物の數頁をそのままノートナーゲルの內科全書の同じ題目を取扱つた處に收めたので別の出版者が苦情を持込んで來たのであつた。併しその時の非難も問題にならなかつた。私はその時にも最初の出版者（「夢判斷」の出版者と同人）に正直に私の企圖の諒解を得てあつたのであつた。併しこの追想列が一層深く過去に及んだ時、私は今一つのもつと以前の出來事を思ひ出した。これはフランス語からの飜譯の際の事であつて、この場合には私は實際出版の際に問題になる版權を侵害したのであつた。私は本文に註釋をつける事に就いて著者の許しを得て居なかつたのである。そして一二年の後に、著者が私のこの手前勝手に對して不滿であつた事を察すべき理由を見出したのであつた。

企圖の忘却は偶然のものではないと云ふ、世間一般の知識をあらはす諺がある。「一度忘れた事はその後何度も忘れるものだ」

實際吾人が忘却及び失錯行爲全般に就いて云ひ得る事は、人々に自明の事として知られて居る

事だと云ふ印象を禁じ得ないのである。而もこの判り切つた事を人々に意識させる必要があるのは、隨分不思議な事ではないか！　非常に屢〻私は人がかう云つてるのを聽く。「私にそんな事を賴まないで下さい。何うも忘れさうな氣がしますから」と。この豫言が的中するのに何の不思議もない譯である。さう云つた本人は自らこの依囑を實行したくないと云ふ企圖を感じ、而もこの企圖を白狀する事を拒んだに過ぎないからである。

「企圖の忘却」は私共が「誤れる企圖を立てる」（„Fassen von falschen Vorsätzen“）とも稱すべきものによつて一層明らかにされるのである。私は或時若い某著述家に彼の短篇の著作に就いての抄錄を書く事を約した。併し自分にもよく判らぬ內的抵抗のためにそれを延ばして置いたのであつたが、或日終に彼に催促されて餘儀なくその日の晚に書かうと約束した。私も書かうと云ふ眞面目な企圖を持つたのであつたが私はどうしても延期する事の出來ない鑑定書の作成のために、その晚をとつておいた事を忘れてゐた。斯くて私が自分の企圖を誤つて居る事を認めたので私は自分の抵抗と鬪ふ事を止め著述家の要求を斷る事にした。

第八章　摑み損ひ

前揭メーリンゲル及びマイエルの著述から私は尙ほ次の箇所を引用しよう(「話し損ひ」は全然獨立して存在するものではない。話し損ひは人類の他の活動の際に屢〻起り、而も可なり馬鹿らしくも「健忘」と稱せられて居る失錯に相當する)

從つて私は健康者の日常生活に見る些細な官能的障礙の背後に、意味と企圖とを推定する第一*人者では決してなかつたのである。

＊メーリンゲルの第二回の發表は、私が彼氏に斯くの如き理解を要求した事が不當であつた事を示した。

運動性作業たる「談話」の失錯に斯くの如き見解が許されるとすれば、吾人の他の運動性作業の失錯にも同じ期待をかける事は手近にある。私は此處に二群の場合を作つた。失錯の結果が本質的のものとして現はれる場合、卽ち企圖から外れた場合を摑み損ひ(dsa Vergreifen)と名づけ、他の群の場合卽ち全體の行爲が不都合不適當にあらはれるものを症候行爲(Symptomhandlungen)及び偶然行爲(Zufallshandlungen)と名づける。尤もこの區別は矢張り、純粹には實行する事の出來ないものである。吾人は勿論本論說に用ひられる凡ての分類は單に敍述的に意

ある。

義あるものであつて、現象の分野の內的統一には矛盾するものであると云ふ認識に到達するので

「摑み損ひ」の心理的理解は吾人がこれを失調症特に「腦皮質性失調症」なる名稱の下に包括したからとて特に進步する譯ではない。だから吾人は寧ろ箇々の例をその時々の條件に遡つて硏究する事にしようと思ふ。私は矢張りこの目的に自己觀察を用ひようと思ふが、この自己觀察の機會は私には特に屢〻起つて來る譯ではない。

(a) 以前私が數多く往診をやつてゐた頃、私は「ノック」するか或は「ベル」を鳴らす筈の扉の前に到着した時に「ポケット」から私の家の鍵を取り出し、ついで恥ぢらひながら再び、これを「ポケット」に入れる事が度々あつた。如何なる患者に於てこの事が起つたかを引くるめて考へて見ると――「ベル」を鳴らす代りに鍵を出す――この失錯行爲は、私がこの「摑み損ひ」に陷つた家に對する敬意を意味したものと假定せざるを得なかつた。この失錯行爲は「此處では私は自分の家に居る樣な氣がする」と云ふ考へに等しいものであつた。何となればこの事が患者からの尊敬を得た場合にのみ起つたからである(私自身の家の扉の處では、勿論私は決して「ベル」を鳴らさないのである)

だからこの失錯行爲は元來眞面目な意識的な假定に向つて定められてゐない一定の思想の象徵

的表現である。何となれば神經病醫は實際患者が醫師から利益を得る事を期待する間だけ醫師を要求するものである事をよく知つて居り、又醫師自らは心理的療法の目的のためにのみ、患者に對する過度に曖い興味を表示するものである事をよく知つて居るからである。

鍵を意味深く誤り扱ふことが私だけの特性でない事は、他の人々の多數の自己觀察によつても明らかである。

私の經驗と殆ど同じ反復をアー・メーデル A. Maeder（日常生活の病的心理に關する知見補遺）（Arch. de psychol, VI, 1906）が敍述して居る。「極く親しい友人の家の玄關に立つた時に、自分の道具を取り出す事、例へば自分の家のつもりで自分の鍵で扉を開けようとして驚く事などは誰にもある事である。之は結局は呼鈴を鳴らさねばならぬ事だから、一つの遲延には違ひないが、然し人間と云ふものは自分の友人と自分とを同樣に考へる――或は考へたがる――ものだと云ふ一つの證明になる」と。イー・ジョーンズ（前揭書五〇九頁）「鍵を用ひる事はこの種の出來事の豐かなる源泉となるものである。私はその內の二例をあげよう。私が家で專心に仕事をして居る最中に或るおきまりの仕事をするために病院に行かねばならぬ事になつて邪魔されると、私は自分の家の机の鍵で病院の試驗室の「ドーア」を開けようと努力して居る事が度々ある――兩方の鍵は互に少しも似てゐないのに。この失錯行爲は私がその瞬間に於てゐたいと願つて居る

場所を無意識的に示して居るのである。

私は數年前或る研究所の低い位置に勤めてゐたが、この研究所の玄關の「ドーア」は鍵がかけられて居り、入る爲には呼鈴を鳴らす必要があつた。數度の機會に於て、私は一生懸命になつて自分の家の鍵で、この「ドーア」を開けようとして居る自分に氣がついた。永續的にこの研究所に勤務して居る各職員――私もその一人になりたいものと熱望してゐた――は「ドーア」の處に待たねばならぬ煩を避ける爲に鍵を與へられてゐたのであつた。私の失錯行爲は斯くて彼等と同じ地位にあり、研究所に居心地よくゐたいと云ふ希望を現はしたものである。

似よりの事をハンス・ザックス博士が報告して居る。「私はいつも二本の鍵を持つて居る。一本は私の事務所の「ドーア」他の一本は私の住宅の扉(ドーア)を開くものである。さて彼等が取り違へられ易い事は決してなかつた。事務所の鍵は住宅のそれに比して少なくとも、三倍位大きかつたからである。尙ほ私は前者を「ズボン」の「ポケット」に、後者を「チョッキ」に入れておくのであつた。それにも不拘、私が「ドーア」の前に立つた時に間違つた鍵を階子段を登る途中で用意してゐた事が度々あつたのであつた。私は統計的に實驗しようと決心した。私は毎日同じやうな感情狀態で兩方の「ドーア」の前に立つのであるから、二つの鍵が心的に別々に限定されてゐたものとすれば、兩方の鍵の取り違へも規則正しい傾向を示さなければならぬ譯であつた。その後の

出來事の觀察は、私がいつも事務所の「ドーア」の前で家の鍵を取出した事を示したのであつた。唯一囘だけは丁度反對の事が起ると云ふ結果があらはれた。それは私が疲勞して、家に——而も一人の客人が待つて居る事を知りながら——歸つた時の事であつた。「ドーア」の前で、私は戶を勿論遙かに大きい事務所の鍵を以て開けようと努力してゐたのであつた。

(b) 私が六年この方毎日二囘一定の時刻に三階の「ドーア」の前に立つてそれが開かれるを待つた或家があつたが、この永い間に、短い間隔をおいて、二囘私が一階だけ高く昇り過ごし、即ち、「昇り損ひ」をした (versticgen) 事があつた。一度は私が「愈〻高く登らう」(„höher und immer höher steigen") との功名心に富んだ空想を抱いて居る時であつた。その時には私は足を四階に昇る階段の初めの方の段に乘せた際、問題の「ドーア」が開く音さへ聞いた樣な氣がしたのがあつた。今一度は矢張り私が考へに沈んで居て(„in Gedanken versunken") 行き過ぎた (ging…… zu weit) のであつた。それに氣がついて引返し、私を支配してゐた空想を素早く引捉へようとした時に、私は自分の論文に對する「空想的」批評を怒つて居り、而もその批評では「私がいつも極端に走りすぎる」(„Zu weit ginge") と云ふ非難がなされたのを見出した。そして私はこの批評をあまり丁寧でない云ひあらはしかたなる „versticgen"(「高く昇り過ぎる」) によつて置き換へたのであつた。

(c)　私の机の上に多年來反射機能檢査用の槌と音叉が乘つて居る。或日私は診察時間が終つてから、或る市街鐵道の列車に間に合ふ樣に出かけようと急いだ。そして槌の代りに音叉を上衣の「ポケット」に入れ、「ポケット」を下の方に引きさげる音叉の重みによつて、自分の「摑み損ひ」に氣づいたのであつた。この樣な些細な出來事に考へを貸す事に慣れてゐない人達は、この「摑み損ひ」をその時の「急ぎ」と云ふ事によつて說明し辯解する事は確かである。併し私は何故槌の代りに音叉を擇んだかと云ふ問題を敢て立てて見た。急速と云ふ事は矢張り行爲のやり直しに時を費さないやうに行爲を正しく實行させる動機を持つて居るに違ひないのである。

「何人が最終にこの音叉を手にしたか？」と云ふのが私の頭腦に迫つて來た疑問であつた。それは數日前に私が感官印象に對する注意を檢査した白痴の子供であつた。そしてその子供は音叉に非常な興味を持ち、ために彼の手から音叉をはなさせるのに仲々骨が折れたのであつた。さうすると私が白痴だと云ふ事になるだらうか？　勿論さうらしいのである。何故ならば槌（ハンマー）（Hammer）に關して聯想された次の「思ひ付き」はカマー„Chamer“（ヘブライ語でEsel（馬鹿）に相當する）と云ふのであつたから。

それにしてもこの惡罵は何を意味するのであらうか？　吾人は此處で事情をしらべて見ねばならない。私は西部鐵道沿線の或る場所に於て或る患者を對診すべく急いで行くのであつた。この

患者は手紙にかいてある既往歴によると、數箇月前「バルコニー」から落ちて、それ以來歩く事が出來ないと云ふのであつた。自分を招いた醫師は、それが脊髓の損傷であるか、それとも外傷性神經症――ヒステリー症――であるか自分には判らないと書いて來てゐる。そこで自分はそれを決定せねばならないのであつた。きはどい類症鑑別に於て特に氣をつけよと云ふ警告が起つて來る譯である。同僚達はそれでなくても私共が他に、より重大な病氣があるのに餘り輕率に「ヒステリー」症の診斷を下す樣に考へて居るのである。併し惡罵の根據はそれだけではない。その小さい停車場のある處は、私が數年前に一人の若い男を診察したその場所である。この男は或る感動を受けた後に正しく歩行する事が出來なくなつてゐた。私はその時「ヒステリー」症の診斷を下し、後にその患者に精神療法を施したのであつた。そしてその後、私は勿論正しく診斷しなかつた譯ではなかつたが、さうかと云つてその診斷は正しくもなかつた事が判つて來た。患者の示した病狀の大多數は「ヒステリー」性のものであつた。そしてそれは治療の經過中に實際速かに消失した。併しその病症の背後には、この治療法では行かぬ殘物が現はれて來て、それが多發性腦硬化症に關係づける外仕方のないものであつた。この患者を私よりも後に見た人は機質的疾患を認める事が容易であつた。私としては他にしやうもなく判斷のしやうもなかつたが、然し印象は重大なる誤診のそれであつた。彼に與へた治癒の約束は守る事が出來なかつたのであつた。

槌の代りに音叉を誤り摑んだ事は、次の様に言葉に翻譯する事が出來た。「汝、白痴よ！　馬鹿者よ！　今度は確りして、數年前同じ場所で見た氣の毒な男の樣に不治の疾患があるのに「ヒステリー」症と診斷する樣な事が二度とあつてはならないよ！」と。而もこの小さな分析の爲には幸福にも――私の氣分の爲には不幸ではあつたが――重い痙攣性痲痺を有するこの男は二三日前に、そして白痴の子供を見た翌日に私の診察を受けに來たのであつた。

私共はこの場合に、自己批評の聲が「摑み損ひ」によつて聞える樣になつたのを認めるのである。自己非難として斯くの如き有樣に用ひられるのに「摑み損ひ」は特に適當なものである。この場合「摑み損ひ」は何處か外でやつた過失を表現しようとするのである。

(d)　勿論「摑み損ひ」は多數の他の不明なる企圖にも役立つ事があるのである。此處に第一の例がある。私が物を壞す事は非常に稀である。私は特に器用ではないが、私の神經筋肉裝置が解剖學的に整つてゐる爲私には好ましからぬ結果を生むやうな運動の起る譯は外見上ないのである。だから私は今迄物を壞した覺えはないのである。勉强室が狹いので私は非常に不便な姿勢で、私所有の多少の蒐集品の中の古代の土器や石器を取扱はねばならぬ事は度々あつた。それで見て居る人は私が何かを落して壞しはしないかと云ふ心配をもらした事があつた。併し今迄一回もそんな事はなかつた。それに私が或時、大理石で出來た極く簡單な細工の「インキ」壺の蓋を落して

壞したのは何故でせうか！

私の「インクスタンド」は大理石の板で出來てをり、硝子製のインク壺を入れるやうに彫り込んである。インク壺は大理石の蓋を持つて居り、これには同じ大理石の取手がついて居る。「インクスタンド」の背後には青銅製の像及び「テラコッタ」陶器の小像の一團がおかれてあつた。私は書き物をしようと思ひ、机に向つて着席し、ペン軸を持つてゐた手で非常に拙劣な手を突出す運動をやり、既に机の上にあつた蓋を、床上に落したのであつた。この過失の説明は見出すに難くなかつた。一二時間前私の姉妹が私が近頃手に入れた一二の品を見に私の室に入つて來た。そして「あなたの机は實際立派に見えますね。唯「インクスタンド」がそれに相應しません。あなたは今少し立派なのをお持ちにならねばいけません」と云つた。私は姉妹と一緒に外に出て數時間後に初めて歸つて來た。それから私はこの宣告を受けた「インクスタンド」に執行をやつたかの樣に見えるのである。私は姉妹の言葉からして彼女が次のお祝事のあつた時に、もつと立派な「インクスタンド」を私に贈つて呉れる事を企てたものと推察し、この暗示された企圖の實現を彼女に强ふる爲に、この古い穢いのを壞したのではなからうか？　さうであれば私のこのぞんざいな運動は單に外見上拙劣であつただけの事であつて、實際は非常に巧みであり、目的を意識して居り、附近にあつた高價な品物を凡て避ける事を知つて居た譯である。

私は人々がこれと同様の判斷を一見偶然的な無細工な多數の運動に向つて、假定しなければならぬものと信ずる。この運動は一つの企圖に支配されてをり、意識的故意的の運動に劣らぬ適確さを以てその目標にぶつかるものである。この暴力性と適確性なる二特徴に於て、この運動は「ヒステリー」性神經症に見る運動及び少なくとも部分的には夢中遊行症の場合の運動と共通である。この事實は兩方の場合に於て神經分布過程に同じ不明な變化がある事を示すものである。ルー・アンドレアス・サロメ夫人 Lou Andreas Salomé の發表して居る自己觀察もまた頑固固執される「拙劣さ」が非常に巧みに不明の企圖に役立つ事を明らかにするものである。

「牛乳が乏しく爲に高價な商品となつた。丁度その頃から牛乳を煮えこぼれさす事が絶えず起つて私を驚かせ苛立たせました。私はふだんは、自分が「ぼんやり」であり不注意者だとは全然云へませんでしたのに、この事ばかりはうまくやらうと思つてもだめでした。人間と同じやうにフロインド Freund（露西亞語では Drujok）と云ふ名をつけられて居た白い愛犬の死後に、此の事が起つたのなら寧ろ當然な事だと云ひ得たかも知れなかつたのですが犬の死後には牛乳は一滴だつてこぼれる事はありませんでした。それに就いて私は第一に斯う考へた。「かまどの板の上やゆかの上に流れたものはだめなんだからこぼれないのは誠に結構な事だ！」と。處がその瞬間「フロインド」が調理を觀察しながら緊張して其處に坐つて居る姿がありありと私に思ひうか

んだ――頭を斜めにし期待に滿ちて尾を振り、其處に起つて來る自分に都合のよい災難を待望しながら――これで勿論凡てが明らかになりました。私にはこの犬が私自身が意識してゐた以上に可愛かつたのだと云ふ事も判りました」

この樣な觀察を集め出して以來近年に、私が一定の價値ある品物を壞す事が一二度起つた。併し私はこれらの場合を硏究して見てそれが決して偶然や目的のない無器用の結果でなかつた事を確かめ得た。或朝私は浴衣を着て藁で作つた上靴を履いて或室を通つた時に、突然の衝動に驅られて上靴を足から壁に向つて投げつけ、その爲に美しい小さな大理石づくりの「ヴィーナス」像が腕木から落ちた。「ヴィーナス」像は微塵に破壞したに不拘、私は全然無頓着に、ブッシュBusch の詩を誦したのであつた。

Ach! die Venus ist perdü ――

あつ！　クリッケラドームの「ヴィーナス」――

Klickeradoms! ―― von Medici ――

メヂシーの「ヴィーナス」は失はれた。

この狂的行爲とその損害に對する私の平氣な態度とは、當時の事情から說明が出來た。私の家庭に重病人がありその恢復の望みは最早ないものと私は心ひそかに考へてゐた。處がその朝患者

が非常によくなつたのを知つた私は彼女が生命を取とめるだらうと獨り言を云つた事をおぼえて居る。其處でかの破壞的狂的發作は、運命に對する感謝の氣分のあらはれであり、犧牲を捧げる行爲（Opferhandlung）の實行に役立つたのであつて、謂はば私は若しも彼女が健康になるなら何でも犧牲にする事を誓つた樣なものである。私がこの犧牲に Venus von Medici を擇んだ事は確かに恢復しつつある人に對する婦人崇拜者的敬意に外ならなかつたのである。併しこの場合にも私が斯くも早く決心し、かくも巧みにねらひを定め、非常に近くにある他の品物には當てなかつた譯は判らなかつた。

私が手から外れたペン軸を以てやつた他の破壞は矢張り犧牲の意味を持つてゐた。併しこの場合は危險豫防の爲の祈りの犧牲(Bittopfer)であつた。私は或時忠實にして價値ある友人を、或る徵候――彼の無意識界からの――の判斷だけを根據として非難した。彼はそれを勘違ひして私に手紙を寄越し、友人を精神分析的に取扱つて吳れるなと云つて來た。私は尤もな事だと承認し、返書をかいて彼を宥めたのであつた。私がこの手紙を書いてゐた時に、私の前に最近手に入れたエヂプト出來の立派な釉藥をかけた像が立つてゐた。私は前記の樣にしてこの像を壞した。そして私が一層大きい不幸を防ぐためにこの災難を釀した事を直ぐに知つたのであつた。幸にも友情と像の兩方共にひびが認められない位につぎ合はす事が出來た。

第三の破壞は、餘り重大な關係のものではなかつた。それは最早私がいやになつたものに對する „maskierte Exekution „（假面を被れる處分）――ヴィッシャー Th. Vischer の（" Auch einer."）に書かれてある云ひあらはし方を用ひるならば――に外ならなかつた。私は暫くの間、銀の柄のついた「ステッキ」を持つてあるいてゐた。薄い銀箔が或る時特別に私がやつたと云ふ譯でなく破損したが修繕はうまく行かなかつた。「ステッキ」が修繕からもどつて來た時に私は面白がつてその柄を私の子供の一人の脛にかけて引つぱつた。その爲に柄は勿論折れてしまひ、私はその「ステッキ」を手放してしまつた。

斯くの如き場合に當人がその出來た損害を受け入れる際の無頓着さは、それを實行する際にそうなる樣にとの無意識的企圖が存在した事の證據と見るべきである。

この樣に物を壞すと云ふ樣な些細な失錯動作の根據を研究するに際し私共は時折本人の今迄の經歷に深く喰ひ入つてをり、且つ現在の狀態にも固着して居る一定の關係に遭遇する。エル・エーケルスによる次の分析はその一例となるものである。

「或る醫師が左程高價なものではないが、それでも立派な土製の花瓶を持つてゐた。これは嘗て他の多數の――その中には高價なものもある――品物と一緒に、ある既婚の婦人患者から贈られたものであつた。この患者が精神病者だと云ふ事が明瞭になつた時、醫師は凡ての贈物――唯

遙かに安價なこの花瓶だけを殘して――を家人に返却した。この花瓶が美しいと云ふ譯で、彼はそれを手放したくなかつたのであつた。併しこの着服は氣の小さいこの男に內的葛藤を起させた。彼は實際この行爲の不當な事をよく意識してゐた。そして單に花瓶が價値のないものであると云ふ事及び荷造が困難であると云ふ事を理由として、良心の苛責を片附けておいたのであつた。一二箇月の後この患者の治療費の殘額を、辯護士の手で請求し取立てさせようとした時に、彼にこの自責の念が再現して來た。この想像的の横領が患者の家人から發見され、刑事訴訟に於て告訴される事になりはしないかと云ふ不安が彼に一寸現はれた。自責の念は暫くの間は非常に強く起り爲に彼は――謂はば横領した物に對する賠償として――約百倍も高い金額の請求權を捨てようと考へた位であつた。併し彼はこの考へを馬鹿な事として片附け、この考へに打克つたのであつた。

この氣分で居る間に平生は滅多に物を壞さず、筋肉裝置をよく支配するこの醫師が花瓶の水を取りかへる際に、この行爲とは本質的に何の關係もない奇妙な無器用な運動によつて花瓶を机の上から落した。その爲に花瓶は五つ六つの大きな破片に壞れてしまつた。しかもこの事は彼が前の晩にひどく躊躇した擧句この花瓶に花を盛つて食堂のテーブルの上で而も招待した客人の前に置かうと決心し、尙ほ壞す直前にこの花瓶の事を考へ、自分の居間を捜したが見つからず、心配

して手づから他の室から持つて來た後に起つたのであつた。彼は最初驚いた後に破片を集め、これをつぎ合せて見て、花瓶が殆ど完全に組立て得る事を確かめたが、その瞬間に二三の大きい破片が手から滑り落ちて無數の破片に碎けてしまひ花瓶に對する望みは全くなくなつてしまつた。

勿論この失錯作業はこの醫師に――彼が抑留してゐたものを除き、又彼が他人から抑留されて居たものを請求する事を、謂はば妨げてゐたものを除く事によつて――彼の權利を追求する事を可能にする實際的傾向を持つた事は疑ひのない所である。

併しこの直接の限定の他に、この失錯作業は精神分析學者から見れば比較にならぬ程深く且つ重要な今一つの象徵的限定を持つて居るのである。何となれば花瓶は疑ひの餘地なき婦人の象徵であるからである。

この小話の主人公は、若くて美しい最愛の妻を悲劇的に喪つた。彼は神經症に罹り、その神經症の原因は「彼がこの不幸に對して責任がある」(卽ち「彼が美しい花瓶を壞した」)と云ふにあつた。彼は最早婦人とは關係せず結婚生活及び永續的の愛の關係に對して嫌忌の念を持つに至つた。女を愛する事は無意識界に於ては亡妻に對する不貞の意味を持ち、意識界に於ては彼が婦人を不幸にし、自分が原因で婦人を殺す事になると云ふ事に理窟をつけられてゐた。(だから彼は勿論花瓶を何時迄も持つてゐてはならないのであつた!)

性慾の强かつた彼に既婚婦人との一時的關係（卽ち他人の花瓶を抑留しておく事）が最も適當なものと思はれたのも無理のない事である。この象徵に對する立派な證明は次の二つの要素に存して居る。神經症の爲に彼は精神分析療法を受けたが彼が前述の土製の花瓶をこはした話をした分析時間中に、今一度婦人に對する關係に就いて語り、自分が馬鹿らしい程氣難かしく、婦人から „unirdische Schönheit" （「此世では見られない美」）を要求して居ると云つた。卽ち彼は今でも尙ほ死んだ、卽ち此世にゐない（unirdisch）妻にこだはつて居り、現世の美は問題にしないと云ふ、非常に明らかな强調を示したのであつて、從つて「土の」（この世の）花瓶（irdene (irdische) Vase）の破壞が起つたのであつた。そして彼は感情轉移の現はれとして分析醫の娘と結婚しようと云ふ空想を描いたが、丁度その時彼は醫師に一箇の花瓶を贈呈した——いはばその意味に於ける返禮が望ましいと云ふ事を諷刺して。

この失錯作業の象徵的意義は、まだ色々に變化され得る望みがある。例へば花瓶に水を滿したくないと云ふ事なのである。併しそれよりも私に一層興味深く考へられる事は多數の——少なくとも二つの——多分前意識界及び無意識界から別々に働く動機がこの失錯作業の重複——花瓶を押し倒す事、及び手から花瓶が滑り落ちた事——にあらはれて居る事である。*

* Interant. Zeitschrift für Pschoanalyse 1, 1913.

(e) 物體を落し、それを倒し、或は破壞する事は非常に屢〻無意識的考慮進行の表現として用ひられる樣に見える。この事は吾人が折々分析に依つて證明し得る事であり、一層屢〻世人が迷信的に、或は冗談にこれに與ふる說明から知り得る事である。鹽をこぼしたり、酒盃をひつくりかへしたり、或は床の上に落ちた「ナイフ」が床に突立つたりする事などが如何樣に解釋されるかは周知の事である。この樣な迷信的說明がどの程度迄注意される價値があるかに就いては私は後に說明しようと思ふが、此處では箇々の無細工な行爲が決して定まつた意味を持つものでなく、その時、その時の事情によつて色々異つた企圖を現はすものである事を述べておく必要がある。

近頃私の家で非常に澤山な硝子器具及び陶製器具が壞された事があり、私自身も二三壞したのであつた。併しこの小さな精神的の地方病は容易に說明する事が出來た。それは私の長女の結婚前の幾日かの間の事であつた。結婚式の際には故意に器具を壞し、且つ祝辭を述べるのが例である。この習慣は犧牲の意義を持つて居り、又他の象徵的意味を持つて居るかも知れない。

召使がこはれ物を落して壞した場合に、私共はそれに對する心理學的說明を先づ以て考へる事はしない。併しこの場合にも不明の動機の參與が矢張りありさうに思はれるのである。無教育者には美術や美術的製品の觀賞は非常に緣遠いものである。この製品に對する漠然たる敵意が、召使を支配するのである。殊に價値を洞察し得ない品物が、彼等の仕事の源泉になる場合にさうで

ある。これに反して、同じ位の教育程度、同じ位の身分の人達でも、科學方面の研究所などに於て彼等が自分を彼等の上役と同一視し、自分等がその研究所の重要人物であると考へ始める頃になると、危險な器物を取扱ふ上に於て非常に巧みさと確實さに秀いでる事があるのである。

私は此處に若い技師の云つた事を挿し加へようと思ふのだが、これは物を毀す場合の機制への洞察を許すものである。

「先頃私は大學の實驗室で、二三の同僚と一緒になつて込み入つた彈性實驗をやつてゐた。この仕事は勿論私共が進んで引受けたものだが、さてやつて見ると思つたよりも多くの時間をとる事になつた。或日私は同僚F君と一緒に實驗室に行つたがその途中F君は「今日は澤山の時間をとられては困る。自分には家でしなければならぬ仕事が澤山あるのに」と云つた。私は唯だ彼に同意し前週に起つた或出來事に言及して冗談半分に「機械が又利かなくなり早く仕事を止めて歸る事が出來るやうになるといいんだがなあ」と云つた。――分業の關係から壓搾機の瓣を操縱する事になつた彼は徐かに瓣を開いて壓液を「タンク」から水壓機の圓筒の中へ入れる事になつて居た。實驗の指導者は壓力計の處に立つて適當な壓に達した時には「止めよ！」と高聲に合圖する事になつて居た。この命令に應じてFは瓣を摑んで力一杯これを左の方に回轉した（凡ての瓣は右方へ閉ぢられる樣になつてゐたのであつた！）。その爲に「タンク」の全壓が壓搾機に作用

し、導管はそれに應ずる様に用意されてゐなかつた爲に、管の連接部が破裂した——これは極く無害な機械の破損に過ぎなかつたが、私共はその日は仕事をやめて家に歸らねばならぬ事になつた。——不思議な事には暫く經つて後に私共がこの事に就いて話し合つた時、F君は私が確かに記憶してゐた私のその時に云つた言葉を絶對に思ひ出さうとしなかつた」

落ちる事、足を踏み外す事、滑る事等は、必ずしもいつも偶然的な運動の失敗と説明される必要はないのである。これらの云ひあらはし方が言葉の上に於て二重の意味を持つて居る事は、斯くの如き身體の平衡狀態の抛棄によつて表現され得るやうな、隱れた空想の種類が其處にある事を指示するものである。私は婦人や少女の一定數の輕い神經病を思ひ起すのであつて、これらの病症は怪我のなかつた墜落の後に起り、其際の驚愕の結果起つた外傷性「ヒステリー」症と解すべきものであつた。當時旣に私は事情がこれとは別で墜落そのものが神經症の準備をなして居り、性的内容を持つ無意識的空想——これは症狀の背後にある動力と解釋して可なるものである——のあらはれであらうと感じて居た。この事は正に「處女が落ちる時には背中を下にして落ちる」と云ふ諺に云ひあらはされて居るのではあるまいか?

何人かが乞食に銅貨や銀貨を與へる代りに金貨を與へる様な場合も矢張り「摑み損ひ」に加ふべきものである。斯の様な失錯の説明は容易である。これは運命を宥め凶事を防衞するための犧

牲行爲である。私共のやさしい母や叔母が散歩に出かける前に、子供等の健康に就いての心配を云ひあらはして居り、而もこの散歩の途上に於て、彼女が厭々ながら、慈善的な振舞ひをしたとすれば、私共は最早彼女が云ふ處の好ましからぬ出來事の意味を疑ふ事は出來ないのである。斯くて吾人のあらはす失錯行爲は、不信心になつた理性の反對を受け爲に吾人の意識の光を避けねばならぬ様になつた凡ての敬神的及び迷信的習慣の實行を可能にするものと云ふべきである。

(f) 偶然的行爲が元來故意的のものである事は、性的動作の領域に於て最も明らかに信ぜられる。實際この性的領域に於ては偶然的及び故意的動作の間の境界はなくなる様に見えるのである。外見上不器用な運動が、性的の目的に向つて非常に狡猾に用ひられ得る事を一二年前私は自ら經驗した。私は或る親しい人の家で、お客として來てゐた若い娘に出逢つたが、この少女は私にはすでに夙くなくなつて居たものと考へられた快樂を呼びさましたのであつた。そして私はその爲に快活になり、おしやべりになり、愛想よくなつた。その時私は如何なる道程を經てこの事が起つたかと云ふ事を研究して見た。一年前にこの同じ少女に逢つた時には私は冷靜であつたからである。さてこの少女の叔父に當る非常に年寄つた紳士が其室に入つて來た時、私共兩人は急に立上つて彼の爲に室の隅にあつた椅子を取つて來ようとした。彼女は私よりも敏捷であり、椅子に近くゐたために彼女の方が最初に椅子に手をかけた。彼女は椅子の背を自分の方に向け、兩手を

腰をかける部分の端にかけて運んだ。私は遲れて椅子に達したがそれでもその椅子を運ばうとする要求を捨てず、急に彼女の背後に立ち、兩腕を後方から彼女に掛け、私の兩手は一瞬間彼女の膝の前の處で出逢つたのであつた。私は勿論この狀態を出來ると直ぐやめたのであつた。如何に巧みに私がこの無細工な運動を利用したかと云ふ事には何人も氣がつかなかつた樣であつた。

街路上に於て起り、吾人を苛々させる無細工な人を避ける運動――その場合人が一二秒の間あちらこちらと而も相手の男或は女と同じ方向に步み、終には兩者が向き合つて立ちつくし他人の道をふさぎ邪魔する運動――は古代の無作法な挑發的行爲を繰返すものであり、無細工の假面の下に性的企圖を追ふものである事を、私は折にふれて自認せざるを得なかつた。神經症者に於ける私の精神分析から私は若い人達や子供等に見る所謂無邪氣（Naivität）と云ふ事は、屢々本人が何の遠慮束縛もなしに鄙猥なる事を云つたりしたりする爲に用ひられる假面に過ぎない事を知つて居る。

ヴェー・シュテケルは自己に起つたこれと全然似よりの觀察を報告して居る。「私は或家に入つてその家の主婦に私の右手を差出した。その際をかしな事には私は彼女の寬濶な朝の衣服の上にしめてゐた彼女の紐をほどいた。私は何等無禮な企圖を意識しては居なかつたがこの拙劣なる運動を手品師の巧みさを以て實行したのであつた。」

私共が此處に考へて居ると同じ樣に作家が失錯作業を意味あり、動機あるものとして解釋して居る事の證據を私は今迄繰返し掲げる事が出來た。だから新らしい實例に於て、作家が拙劣なる運動を意味あるものとし、後に起つて來る出來事の前兆として用ひて居るのを見ても、別に不思議はない譯である。

テオドル・フォンターネの小説〝L' Adultera〟(「姦通」)(全集第二卷六十四頁ヱス・フィッシャー出版)に次の樣に記されて居る「……そしてメラニエ Melanie は飛び上つて彼女の夫に挨拶のつもりで大きな鞠の一つを投げた。併し彼女のねらひは正鵠を缺いた。鞠はわきの方に行つてルーベーン Rubehn がそれを掴んだ。」この小さな挿話は或遠足の間に起つたのであるがやがて此の遠足からの歸途、メラニエとルーベーンとの間に對話が交はされて居りこの對話は萠え出でんとする傾向の最初の暗示をあらはして居る。この傾向は熱情に迄高まり、メラニエは終に夫を捨てて全然彼女の愛人に屬する事になつたのである。(ハンス・ザックスの報告)

(g) 正常人の「掴み損ひ」から生ずる結果は通常非常に無難な性質のものである。正にこの理由から醫師や藥劑師の過失の樣に重要な意義を持ち、重大な結果を招來し得る「掴み損ひ」が私共の見解の範圍内に入つて來るかどうかと云ふ問題に、特別の興味がつながつて來るのである。

私は醫師としての手當をする場合が非常に稀なので、自分の經驗からは醫師としての「掴み損

ひ」の報告すべきもの一例を持つてゐるだけである。私が多年來每日二度宛往診して行く非常に年とつた婦人に對して朝の往診の際に爲すべき事は二つあつた。それは眼に數滴の眼藥を點眼し、「モルフィン」の注射をする事であつた。眼藥を入れる青い瓶と「モルフィン」液を入れる白い瓶の二つがいつも用意されてゐた。兩方の仕事の間、私の考へは多くは別の事を取扱つてゐた。その事は注意力が必要でない位屢〻繰返されたからであつた。或朝私はこの自働機械が間違つて動き、點眼管が青い瓶でなく白い瓶に入り、眼藥でなく「モルフィン」液が眼に注がれたのに氣がついた。私は非常に驚いたが、ついで二〇%の「モルフィン」液が數滴位結膜囊に入つても、何等の害を與へないであらうと云ふ考へで安心したのであつた。驚愕の原因は明らかに他の方面にあつたのである。この小さな「摑み損ひ」を分析しようとする試みに於て、私に先づ「老婦人を摑み損ふ」(sich an der Alten vergreifen) と云ふ句が思ひ泛び、これが解決への近道となつた。私はその前の晩一人の若い男が物語つた一つの夢の印象の下に立つてゐた。*この夢の內容は彼自身の母との性交を基礎としてのみ說明し得るものであつた。

*この夢はエディプス王の傳說理解の鍵を握るものであるから、私は之を「エディプス」夢と名づけるのを例として居る。ソフォクレスの原文では斯くの如き夢への關係を、ジョカステをして語らしめて居る。(「夢判斷」第百八十二頁第七版第百八十三頁と比較せよ)

「ヱディプス」傳說が王妃ジョカステの年齢の事で何も困つて居ないらしいのは妙であるが、これは自分の母に對する戀愛にあつては、母の現在の人物ではなく、子供の時に得た母の若い時分の追想が問題になると云ふ結果によく一致するものと思はれる。斯くの如き矛盾は、二つの時期の間にさまよふ空想が意識的にされ、以て一定時期に結びつけられる場合にはいつも現はれるこの様な考へに深く沈みながら、私は九十歳以上になる私の患者に思ひ及んだ。そして私は多分「ヱディプス」傳說の普遍的人間性特徵を神託にあらはれて居る運命の相關物と解釋しようとしてゐたに相違ないのである。何となれば私は老婦人に關して、或は老婦人に於て（bei oder an der Alten）「摑み損ひ」をやつたからである。併しこの摑み損ひも矢張り無難なものであつた。私は「モルフィン」の液を點眼するか眼藥を注射するか、二つの起り得べき間違ひの中で遙かに無難な方を選んだのであつた。併しここに重大な害を與へる恐れある「摑み損ひ」の場合にも今述べた場合と同樣に無意識的企圖を考慮に入れてよいものかどうかと云ふ事が問題として殘るのである。

期待される樣に材料は此處で私を見捨てるのである。そして私は假定や推論を賴りにせねばならないのである。精神神經症の重症例に於て、自企傷が折々病的症狀として起り、精神軋轢が自殺に終結する事は、決して珍しい事ではない。斯くの如き患者に起る外見上偶然的な損傷が、本

來自企傷であり、平生は自己非難としてあらはれ、或は絶えず潛伏して居て症狀形成の助けとなる自己懲罰の傾向が偶々與へられた外的事情を巧みに利用し、或はこれを助けて希望された損傷を成就させる事は、私のよく知つて居る事であり又よく說明される實例によつて證據立て得る事である。この樣な出來事は、中等度の重さの症例に於ても決して稀な事ではなく彼等は種々の特別な性狀——例へば所謂不慮の災害に際して患者が示す著しい沈着*——によつて、その無意識的企圖を暴露するのである。

*完全なる自己滅絕（自殺）を目的としないこの自企傷は、私共現在の文化狀態では偶然の出來事の背後に隱れるか、或は自發的に起る病氣の樣な風を裝つてあらはれる外にしやうがないのである。以前の或る時代にはこれは哀悼のしるしとして習俗的に行なはれ、又他の時代には信仰及び現世厭離の傾向となつて現はれた。

醫師としての經驗から私は唯一例を此處に報告しよう。或る若い女が馬車の事故からして片側の下腿の骨折を受け數週間臥床する事になつた。而も彼女が痛がらない事及び靜かに彼女の苦惱を忍ぶ有樣が目に立つた。この災厄は永く續く重い神經症を惹起し、終に精神分析療法によつて恢復するに至つた。治療に際し、私は災厄の起つたときの事情及びそれに先立つて起つた出來事を知つたのである。この若い婦人は嫉妬深い夫と一緒に、彼女の結婚して居る姉の農場に、他の同胞竝にその夫妻と共に暮してゐた。或晩この親しい一團に交つて彼女は自分の藝の一つを演じ

た。彼女は手際よく「カンカン」（Cancan）（鄙猥なる一種の舞踏）を踊つて、親類の人々の喝采を博した。併し彼女の夫はそれを喜ばず後に彼女を非難し「お前は又娼妓の様な行動をとつたね」と云つた。この言葉は適切なものであつた。それが踊をやつた爲ばかりであつたかどうかは此處には不問に附して置かう。彼女はその夜はよく眠れなかつた。翌朝彼女は馬車で外出しようと決心した。彼女は自分で馬を選擇し、一對の馬を拒絶して他の一對を要求した。一番末の妹が自分の乳呑兒に乳母をつけて同車させようとしたが彼女はつよくそれに反對した。「ドライヴ」の間彼女は神經過敏になつて居り、馭者に向つて馬が臆病になつて來たやうだと注意した。そして落ちつかなくなつた馬が實際一瞬間故障を起した時、彼女は驚いて馬車から飛び降り、脚を折つたのであつた。而も馬車の中に居殘つてゐたものには何の怪我もなかつた。この詳細な事情が明らかにされた後には、私共はこの事故が實は目論まれた事である事は殆ど疑ひの餘地がなかつた。併し私共は罪に對して非常にふさはしい罰を課する爲に、この出來事を强ひて釀さしめた巧みさには驚嘆せざるを得ないのである。何となれば彼女には「カンカンダンス」は永い間不可能にされる事になつたからである。

私自身の自己傷害に就いては、落着いてゐる時には報告すべき事はないが非常なる條件の下には自己傷害はない事はない。私の家庭の一員が、今舌を嚙んだとか指に挫傷を受けたなど訴へる

場合には期待された同情の言葉の代りに「何の爲にお前はさうしたか?」と云ふ問が私から發せられる。併し或る若い患者が治療時間中に私の長女——丁度その時彼女は極度に危篤の狀態で療養所にゐた——と結婚したいと云ふ(勿論眞面目にとる事の出來ない)企圖を打ちあけた後に私は私自身非常に痛く私の拇指をつめた。

私の男の子の一人——この子は性質が活潑なので病氣の時にはいつも看護が非常に困難であつた——が或朝午前中は寢て居れと云はれて激怒發作を示し、彼が新聞を讀んで知つてゐた樣に自殺すると云つて人々を威嚇した。その日の夕方彼は私に胸の脇の處にある一つの血腫を見せた。それは「ドーア」の「ハンドル」に打ちつけたために出來たものであつた。私が皮肉まじりに何の爲にそんな事をしたのか、どんな心算でしたのかと訊ねた處、十一歳になるこの子供はわかつた樣な顏をして「これは今朝早く私が威嚇した自殺の試みでした」と答へた。但し私はその頃私の子供等に自己傷害に關する私の考へ方が判つてゐたとは思はない。半ば故意的な自己傷害——このまづい云ひあらはし方が許されるとして——が起る事があるものだと信ずる人は、意識的・故意的自殺の外に生命の脅威を巧みに利用し、これを偶然の災禍の樣に裝はしめる、無意識的・半故意的自己絶滅もあり得る事を容認するであらう。これは決して稀な事ではないのである。何となれば自己絶滅の傾向は、これを實行に移す人々よりも遙かに多數の人々に一定の强さに存在

して居るからである。自己傷害は通常この自己絶滅の衝動とこれとは反對に働く力との間の妥協であり、又實際に自殺が起る場合にも其處にはこの傾向が永い以前から多少弱い強さに於て存在し、或は無意識的・被壓迫的傾向として存在してゐたのである。

意識的自殺企圖と雖も時と手段と機會とを擇ぶものである。無意識的自殺企圖が、自殺の原因の一部を引受けてその個體の防衞力を奪ひ、以てこの自殺企圖を本人の壓迫より*解放して呉れる他の動機を待つのは全く當然な事である。私が此處に述べる事は決してむだな論議ではないのである。一見偶然的の災禍（落馬或は車から落ちると云ふ樣に）であつて、その詳細なる事情を調べて見ると、無意識的に容認された自殺の疑ひを辯護する例は私の知つて居るものでも一二にして止まらないのである。例へば將校の乘馬競走の際に、一將校が落馬して重傷を負ひ、その後數日にして死亡した。彼が意識を囘復した時の態度には、二三の點に於て目立つものがあつた。事前の彼の態度行動には、尚更ら注意すべきものがあつたのである。彼は愛してゐた母の死によつて、非常に憂鬱になり、仲間の者と一緒にゐて泣きじやくりに陷つた事があつた。彼は親友に向つて生きてゐたくないと云ひ出し、辭職して亞弗利加の戰爭に參加したいと云つた事があつた。そんな事は平生は彼に何の**興味もない事であつたのである。以前には勇敢な騎手であつた彼が今ではなるべく乘馬を避けるやうにした。終に彼が避ける事の出來ない競爭の前に、彼は悲しい豫

感を云ひあらはしたのであつた。私共の考へ方からすれば、この豫感が事實になつても驚くに當らぬ事である。人々は斯くの如き憂鬱狀態には健康な時の樣に馬をうまく御し得ないのは當然だと云つて反對するであらう。それには私も全く同感である。唯私は所謂「神經質」に依るこの運動制止の機制を、私が此處に强調した自己絕滅の企圖の中に求めようとするのである。

＊この場合は結局或婦人が性的襲擊を受けた場合と同じであり、男子の襲擊は婦人の全力に依つては抵抗されず、被襲擊者の無意識的感情の一部が却つてこれを促進し、これに迎合するのである。實際斯くの如き狀態は婦人の力を痲痺させるものだと云はれて居るがこれは至言である。私共は唯だこの痲痺の理由を附加しさへすればよいのである。この點に於て、サンチョー・パンザ Sancho Pansa が彼の島の總督として下した機智に富んだ判決は、心理學的には不條理なものと云はねばならない（ドンキホーテ、第二卷第四十五章）。或女が或男を判官の前に引張つて來た。この男は彼女の云ふ處に依れば、彼女を暴力を以て辱めたと云ふのであつた。サンチョーは被告人から取り上げたお金の一杯入つて居る財布によつて彼女の損害を賠償した。そして彼女が去つた後に男に彼女を追跡して財布を取返してもよいと云ふ許可を與へたのであつた。彼等兩人は爭ひながら引返して來た。そして女はこの惡漢が財布を奪ふ事が出來なかつた事を自慢した。それに對してサンチョーは云つた「若しお前がこの財布の場合の半分の眞劍さでお前の貞操を守つてゐたら、この男はお前の貞操を奪ふ事が出來なかつたであらう」と。

＊＊戰場に於ける狀態は意識的自殺企圖に迎合し而も直接の方法を避けてゐる狀態である事は明らかである。「ワルレンシュタイン」の中にある瑞典の陸軍大尉がマックス・ピッコロミニーの死に就いての言葉「彼は死にたがつて居たと云ふ事だ」を參照せよ。

ブダペストのエス・フェレンチーは偶然の銃創だと云ふ一例――フェレンチーはこれを無意識

的自殺企圖と說明して居る――の分析の公表を私に委せて吳れた。私は彼の解釋に贊成であると云ふ事を述べておかう。

「J. Ad. と云ふ二十二歲になる指物職の徒弟は一九〇八年一月十八日私を訪ねて來た。彼は一九〇七年三月廿日に彼の左側顳顬部に這り込んだ銃丸が手術で除き得るかどうか、又この銃丸は取去らねばならぬかと訊ねた。時々起る輕い頭痛の外は彼は全く健康な氣分であり、又客觀的にも左側顳顬部にある火藥で黑くなつて居る特有な瘢痕の外には何もなかつたので、私は手術はせんでもよいと云つた。その場合の事情を聞いて見ると、彼は偶然に自ら傷つけたのであると云つた。彼は兄弟の持つてゐた短銃を弄んで居り、彈丸が裝塡されてゐないものと信じて居り、左手を以て左側の顳顬に當て（彼は左利きではなかつた）引金に指をあてた處、彈丸が發射されたといふのであつた。六連發短銃の中には三箇の彈藥筒がつめられてあつたと云ふ事であつた。私は彼に向つてどうして銃を手にする考へになつたかと訊ねてみた。彼は丁度その時徵集（兵役に）の時であつたと答へた。その前晚彼はこの武器を飮食店に持つて行つた。それは彼が喧嘩を恐れたからであつた。徵兵檢査では彼は靜脈瘤のために、不合格と云ふ事になり大いに恥ぢた。彼は家に歸り、短銃を弄したが自殺しようなどとは考へなかつた。然しこの偶然の出來事が起つたと云ふのであつた。尙ほ彼が自分の運命に關し、その他の點に於て滿足してゐたかと訊ねた處、彼

は嘆息を洩らして或る少女との戀愛に就いて物語つた。彼はこの少女を愛して居り、彼女も彼を愛してゐたが、而も彼を捨て去つた。彼女は單に金を得たいと云ふ欲望から亞米利加に渡航したと云ふのであつた。彼は彼女の跡を追うて行かうとしたが、兩親は彼を止めた。彼の愛人は一九〇七年一月廿日卽ちこの災禍の起る二箇月前に旅立ちしたのであつた。之等の凡ての疑はしい點があつたに拘らず、彼はこの短銃の發射は不慮の出來事であると云つて頑張つた。併し私は銃を弄ぶ前に裝塡されて居る事を確かめなかつた粗漏及びこの自己傷害は心的に限定されたものである事を確信した。彼はその頃まだ不幸な戀愛の悲しい印象の下にあつた。そして明らかに軍隊生活によつてこれを忘れようと欲した事は確かである。そして彼にこの望み迄もなくなつた時、銃を弄する事卽ち無意識的なる自殺の試みが起つたのであつた。彼が短銃を右手に持たずして左手に持つた事は、彼が事實弄ぶ考へであつた事、卽ち意識的には自殺しようと思はなかつた明らかな證據である。」

この觀察者から私に提供された外見上偶然的な自己傷害の他の一分析例は「人を呪へば穴二つ」と云ふ諺を思ひ起させる。

中流階級の良家のX夫人は、結婚して三兒を擧げてゐた。彼女は神經質ではあつたが生活には十分堪へ得たので强力な治療は必要としなかつた。或日彼女は次の樣にして一時的のものだが可

なり目に立つ程度に彼女の顔を醜くした。彼女は修理中の或道路で積み重ねた石に躓づき、顔を或家の壁に打ちつけ。顔全體は擦りむけ、眼瞼は蒼くなり且つ腫れ上つた。そして彼女は眼がどうかなりはしないかと云ふ心配から醫師を呼びに遣つた。この點に關して安心を與へた後、私は彼女に訊ねた。「それにしてもあなたはどうして倒れなさつたのですか？」と。彼女は丁度少し前に一二箇月このかた關節の病氣で歩行不自由だつた夫に對して、この道路では氣をつけなくてはならぬと注意した。そして彼女は斯くの如き場合に不思議にも他人に注意した事が、彼女自身に起ると云ふ經驗を前にも屢〻持つた事があると答へた。

私は彼女の災禍のこの限定では滿足しなかつたのでまだ話す事があるのではないかときいてみた。災禍の直前に彼女は街路の向側の店に綺麗な繪があるのを見て、急にこれを子供部屋の裝飾にしたいと思ひ、直ぐにこれを買はうと欲した。だから彼女は街路には注意せず直ぐに店の方に向つて行つた。そして石の積み重ねたものに躓き、自分の顔を手を以て保護しようとする少しの試みもせずに家の壁に打ちつけた。繪を買はうと云ふ企圖は直ぐに忘れてしまつた。そして彼女は大急ぎで家に歸つて行つたと云ふのであつた。「それにしても貴女は何故よく御覽にならなかつたのでせう？」と私は尋ねた。彼女は「さうですね、それは多分罰だつたのでせう、私があなたに既に內々で打明けましたあの話の爲の」と彼女は答へた。「さうするとあの事は不相變

あなたをそんなに苦しめてゐたのですか？」と私は訊ねた。彼女は「はい――後になつて私はその事を非常に殘念に思ひました。そして自分自身を非常に惡い、罪深い不道德な者だと思ひました。併し私はその頃は神經質のために殆ど狂氣してゐたのでした」と答へた。

これは金錢上の關係から子供が澤山出來る事を避けようと云ふ考へから、彼女が夫との合意上、女藪醫者によつて始めさせ、專門醫によつて結末をつけて貰つた、墮胎の事であつたのである。

『私は屢〻自分を「併しお前は子供を殺させたではないか」と非難し、又「そんな事が罰なしに濟むものか」と云ふ不安を持ちました。今あなたが私の眼が何ともないと云つて下さいましたので安心しました。私はどのみち旣に十分罰せられたのです』と彼女は云つた。だからこの災禍は一面に於て彼女の不正行爲を償ふための自己懲罰であつたのであり、他面に於ては多分一層大きい不明の罰――それを受けはしないかと彼女は數個月の永い間絕えず不安に思つて居た――から逃れる爲の自己懲罰であつたのである。彼女が夫に注意を與へてゐた間に於て、旣に彼女の無意識界に可なり強く動いてゐた全體の出來事と、それに伴ふ凡ての恐怖心への追想が彼女が繪を買ふために突進して行つた瞬間には、壓倒的に強くなり、多分次の如き文句になつて現はれたのであつた。「何の爲にお前は子供部屋の裝飾品を買ふ必要があるのだ。お前は自分の子供を殺させたではないか！　重い罰が確かに近づきつつあるのだ」

この考へは意識的にはならなかつた。併しその代りに、彼女はこの謂はば心理學的瞬間に於ての狀態を利用し、彼女にお誂へ向きな石の積み重ねを目立たぬ有樣に彼女の自己懲罰に利用したのであつた。だから彼女は倒れる際に決して兩手を伸ばさなかつたし、又怪我をしてもひどく驚かなかつた。彼女の災禍に對する第二の多分はるかに弱い限定はこの事件の共犯者なる夫をなきものにしようと云ふ無意識的願望に對する自己懲罰であつた。この願望は石の積み重ねてある街路では氣をつけようと云ふ全然餘計な警告によつて暴露されて居る。何故なれば彼女の夫はよく歩けなかつたので、非常に氣をつけて歩いてゐたからである。*

* Van Emden, Selbstbestrafung wegen Abortus.（墮胎の爲の自己懲罰）
(Zentralblatt f. Psychoanalyse, 11/12)

或る人が「失錯作業による自己懲罰」なる題目に就いて次の樣な事を書いて寄越した。「私共が路上で人々の行動を注意して見て居ると、――世間によくある樣に――通り過ぎて行く婦人を振返つて眺める男子達に小さい災禍が非常に屢々起るのを目擊する。或男が時には――平坦な地上で――足を挫き、時には街燈に烈しく突當り、或は色々の怪我をするのです」

この場合の詳しい事情をよくよく考察するならば、火傷による一見偶然的な自己傷害を犧牲的行爲としてゐるヨット・シュテルケ（前揭書）の解釋をも尤もな事と考へ得るであらう。

或る婦人――その人の女婿は兵役に就く爲に獨逸に旅立たねばならぬ事になつてゐた――は次

の事情の下に彼女の足に火傷を負うた。彼女の娘は間もなくお產をする事になつてゐた。そして戰爭の危險と云ふ事に對する考へは勿論家人全體の心を暗くした。旅立ちの前日、彼女は婿と娘を晩餐に招待した。不思議な事には彼女は先づ自分のいつも穿いて居る底の平たい深編上げ靴を脫いで、大き過ぎ而も上の方の開いた夫の上靴とはき換へて自ら臺所で食事の用意をした。彼女が煮立つた「スープ」の入つて居る大きい鍋を火からおろした時、これを落して一方の足、殊に――ひらいた上靴であつた爲に――保護されてゐなかつた足背に、可なりひどい火傷を負うた。勿論この災禍は凡ての人々からは判り易い彼女の神經質に歸せられた。この燔祭（丸燒にして神壇に供へる贄）の後、數日の間彼女は熱いものに對して非常に用心した。それだのに彼女は一二日の後に又熱い「スープ」で一方の手首を火傷した。*

*この樣な災害による損傷或は殺害の大多數の例では解釋は不明の儘に止まつてしまふ。本人に緣の遠い人は災禍に於て偶然と云ふ事以外何ものをも見る機會を持たないであらうが、不幸に陷つたものに近い關係のある人及び內密な細目を知つて居る人は、「偶然」の背後に無意識的企圖を推測すべき根據を持つのである。この知識が如何なる種類のものであるか、又如何なる附隨した事情が問題になるかと云ふ事に就いては、次に示す若い男――この人の許婚の婦人が街上で轢かれたのだが――の報告がよい實例となるのである。

「去年の九月に私は三十四歲になるZ孃と知合ひになつた。彼女は裕福な狀態で暮してゐた。戰前には約婚の狀態にあつたが約婚の夫は現役將校として一九〇六年に戰死した。私共は互に知り且つ愛し合つたが、最初の間は結婚しようと云

ふ考へはなかつた。それは事情特に年齢の差——私自身は二十七歳であつた——が結婚に不都合であるやうに見えたからであつた。私共は同じ街に向ひ合つて住んで居り毎日一緒にゐたので、交際は時の經過と共に親密な形を取る樣になつた。その爲結婚の考へが近寄つて來て、終に私自身もこの考へに贊成するに至つた。今年の復活祭を期し婚約する事が計畫された。併しZ孃はそれに先立ちM市に住んで居る彼女の親戚の處へ旅行しようと企圖したが、これはカップ（Kapp）騷動によつて惹起された鐵道從業員の同盟罷業によつて急に妨げられたのであつた。勞働者社會の勝利とその爲に將來展開して來るらしく思はれた暗い前途は暫時の間私共の氣分にもあらはれ、特にZ孃——平生非常に變り易い氣分の持主であつた——には強くあらはれた。何となれば彼女は私共の將來に向つて新らしい障礙を認むべきものと信じたからであつた。土曜日（三月二十日）には彼女はいつになく愉快な氣分にゐた。この狀態は私を實際驚かせ又私をも同じ氣分に引摺り込み、爲に私共をして萬事を薔薇の花の色を見る樣な感じを以て見させた。私共はその一、二日前、折々一緒に教會に行かうと話したが別に時を定めてゐなかつた。次の朝（日曜日、三月廿一日）九時十五分過彼女は私を電話口に呼び出し教會へ行くから直ぐ迎ひに來て吳れと云つた。併し私は拒絕した。それは私が丁度間に合ふ時間迄に用意が出來かねたし、尙ほやりかけた仕事を片附けたいと思つたからであつた。Z孃はひどくがつかりした。そして單身で出かけ、彼女の家の階段の上で一人の知人に出逢ひ、その人と一緒にタウエンチエン街を通つてランケ街迄の短い距離を步いて行つた……頗る上機嫌で而も私共の對話の事に就いては何も云はないで……その男は「お孃さんは此處で幅廣くなつて居て明らかに見渡し得る土手をお越えになればそれでよいわけですね」——と冗談を云つて彼女と別れたと云ふ事である。正にその時彼女は人道の極くきはの處で馬車に轢かれたのである。——そして肝臟壓潰は數時間後に死を招來した——この場處は私共が今迄數回も通つた處であつた。Z孃は非常に用心深い人であつて、私自身の輕率な行爲を屢〻制止した程であつた。その朝は、殆ど何の運輸機關も通つてゐなかつた。電車と乘合自動車は同盟罷業をやつてゐた——丁度この時間には絕對的の靜けさが支配してゐた。彼女は馬車を見なかつたにしても、馬車の音は必ず聽いたに相違なかつた！——世間の人は凡て

「偶然」を信ずる——私の最初の考へは「そんな事は考へられない——故意の企圖であると云ふ事も、勿論云ひ得ない」と云ふのであつた。私は心理學的說明を試みたが永い間經つてからあなたの「日常生活に於ける精神病理」に於て說明を見出し得たと信ずる。殊にZ孃は時々自殺への一定の傾向を現はしたばかりか私にもさうさせようと試み——私は隨分屢その考へを諫止したのであつた。例へば彼女は二日前にも散步から歸つて來てから外見上何の動機もないのに彼女の死と遺產整理の事を話し出したが財產整理はやらなかつた！　これは彼女の云つた事を故意の企圖に基くものと見てはならぬ一つの徵候である。私がこの事件に就いての私一個の見解を述べる事が許されるとすれば私はこの不幸を偶然とは見ず、意識溷濁の結果とも見ず、偶然の不幸として假裝されては居るが實は無意識的企圖に於て實行された有意の自己絕滅と見るべきであらうと思ふ。私はZ孃が未だ私を知らなかつた以前、及びその後に親戚の人々に云つた事、及び最近迄も私に云つた事から推して、この解釋に對する信念を一層深くするものである。——要するに凡ては彼女の以前の約婚の夫の死去の結果と解すべきものであつて、この夫は彼女の眼前にある何物を以てしても、決して代へる事が出來ないものであつたのである。」

この樣にして自己の安全と自己の生命に對する憤りが、一見偶然的に見える無器用さと運動の不完全さの背後にかくれて居る事があり得るとすれば、私共は他人の生命及び健康を著しく危險にする失錯に同樣の解釋を持つて行く事を可能にする爲に、別に一足飛びをする必要はない譯である。此の考へ方の妥當性に對する證據として私が提供し得る事は、神經症者に於ける經驗から得られたものであつて此の場合の要求には完全に適合しないものである。私は此處に一つの場合を報告するがこの例では本來の失錯と云ふよりも、寧ろ症候行爲或は偶然行爲と名づけるにふさ

はしい事が患者の精神軋轢の解決を可能にする手掛りを私に與へたのであつた。私は曾て非常に聰明な或男の夫婦關係をよくする事を引受けた事があつた。この男と彼を熱愛してゐた妻との間の不和には、確かに實際の根據を引合ひに出す事は出來たが――彼自らが承認した樣に――この根據だけでは完全に說明する事が出來なかつた。彼は絕えず離婚しようと云ふ考へを持つたがその都度この考へを斥けた。それは彼が二人の小さい子供を非常に愛してゐたからであつた。それでも彼は不相變離婚の計畫に逆戾りし而も自分の境遇を耐へ得べきものに改善する何等の手段も講じてはみなかつた。この樣な精神軋轢未解決の狀態は、無意識的・被壓迫的動機があつてこれと相剋する意識的動機を强めてゐる事の證據であると私は考へる。そして私はこの樣な場合には精神分析に依つて精神軋轢を終結せしめる事を企てるのである。處で此の男は或日彼が非常に吃驚した小さい出來事を物語つた。彼は大きい方の子供――彼が小さい方の子供よりも一層可愛がつてゐた――をからかつて居て子供を高く抛り上げたり降ろしたりしてゐた。そして一度は子供の腦天が天井から下つて居るしつかりした瓦斯燈の「シャンデリヤ」に打ちつけられたかと思はれる程の高さと位置に子供を抛り上げた。今にも當らうとした位であつたが、それでも際どい處でやつと當らずに濟んだ！　子供は無事であつたが吃驚して眼がくらんだ。父は驚いて子供を抱いたまま棒立ちとなり母は「ヒステリー」性發作を起した。この無謀な運動に於ける特種の技巧

と、兩親の現はした反應の激烈さとから、私はこの偶然的は事件の中に愛兒に對する惡意を示す症候行爲が潛んで居る事を察した。この父が子供に對して示して居た現實的な愛情に對するこの行爲の矛盾を、私はこの子供がまだ一人であつて幼く從つて父がこれに興味を持ち之を愛する必要のなかつた頃に遡り父がこの子供を害せんとする衝動を持つた事實を明らかにする事によつて除く事が出來た。その頃妻に滿足してゐなかつたこの男が次の樣な考へ或は企圖を持つた事は容易に推定する事が出來た。即ち「私がちつとも愛してゐないこの小さい奴が死んだら、自分は自由になりこの妻から離婚する事が出來るのだが」と。今では非常に愛して居るものに對する死の希望は即ち無意識的に存續してゐたにちがひなかつた。此處からしてこの願望の無意識的固定への道程は容易に見出す事が出來た。强力なる限定要素は、實際この患者の幼時追想から現はれて來た。即ち患者の幼弟の死――患者の母はその原因を父の不行屆に歸した――が、兩親の間の烈しい喧嘩を釀し、今にも離婚と云ふ處迄行つたといふ事實であつた。この患者のその後の夫婦生活の經過及び治療上の效果があつた事から私の分析の正しかつた事が證明された。

ヨット・シュテルケ（前掲書）は作家が「摑み損ひ」を故意の行爲と同列におき、從つてこれを重大な結果を招來する原因と見做す事に些の懸念をも持つて居ない事の實例を示して居る。

ハイエルマンスの短話の一つの中に「摑み損ひ」或はもつと精確に云へば、失錯の一例が出て

居り、これを著者は戯曲的動機として用ひて居る。

*Hermann Heyermans, Schetsen van Samuel Falkland, 18. Bundel, Amsterdam. H. J. W. Becht, 1914.

それは「トムとテッディー」(„Tom und Teddie")と云ふ短話である――寄席に出て永い時間水中に止まり、硝子の壁に圍まれた鐵製の水槽の中で種々の藝當を演ずる――潛水者夫婦があり、その妻は近來別の男(調教者)と仲よくなつて居た。男子潛水者は演技の前に着衣室に於て彼等(妻と調教者)が一緒に居る現場を押へた。靜かな場面、おどす樣な目付き、そして潛水者は「あとで」! と云つた。――愈〻演技が始まつた。――潛水者は最も難かしい演技をやるのである。「彼は二分半の間密閉した箱の中で水中に止まるのである。」――彼等は旣に何度もこの演技をやつた事があつた。箱は閉ぢられた。そしてテッディーは時計で時間をはかつて居る觀衆に鍵を見せた! 彼女は尙ほ故意にその鍵を一二度池の中に落し込み、急いで――箱を開けねばならぬ時迄に間に合ふ樣に――鍵の跡を追うて水中に潛るのであつた。

一月三十一日のこの晩に、トムは何時もの樣に元氣な快活な妻の小さな指によつて箱の中に閉ぢ込められた。彼はのぞき孔の背後で微笑した――妻は鍵を弄びながら彼からの警戒信號を待つてゐた。舞臺の兩側面背景の間に調教者がきちんとした燕尾服を着、白い「カフス」をつけ、乘

馬鞭を持つて立つてゐた。彼女の注意を牽く爲に彼は三度目の口笛を短く吹いた。彼女はその方を眺めて笑ひ、注意をそらされた人が誰でもするやうな不器用な身振りを見せながら鍵を亂暴に高く投げ上げた。鍵は丁度二分二十秒と云ふ時に、箱のそばで箱の脚臺を覆うてある旗布の間に落ちた。何人もそれを見なかつた。何人もそれを見る事が出來なかつた。觀覽席の方の人々は皆視的錯覺によつて鍵が水中に入つて行つたものと見たらしかつた――そして旗布は鍵の落ちる音を弱めたために劇場の助手もそれを認めなかつたのであつた。

笑ひながら猶豫なくテッディーは池の緣に攀ぢ登つた。笑ひながら彼女は梯子を降りて來た――潛水者はよく辛抱してゐた。笑ひながら彼女は臺の下に消えて行つた――其處を探す爲に。そして彼女が直ぐに鍵を見出さなかつた時、盜む時の樣な身振りを見せ「ああ！　何とうるさいんだらう！」と云つたかの樣な表情を顏に泛べて旗布の前にしやがんだ。

その間トムはのぞき孔の背後で落ち付かなくなつた樣な風に、彼の滑稽なしかめ面をした。人人は彼の義齒の白いのを見、髯の下に彼の唇を嚙む運動を見、又林檎喰ひの藝當の際にも見た樣な滑稽な、息吹きを見た。人々は彼の蒼白い骨張つた手指の掘りかへすやうな、引搔きむしる樣な運動、(Grabsen und Wühlen) を見た。そして人々は其晩に旣に何度も笑つたと同じ樣に笑つた。

二分と二十八秒
三分と七秒……十二秒
うまいぞ！　うまいぞ！　うまいぞ！……

この時觀覽席には驚愕の叫びが起り足摺りの音が起つて來た。それは劇場の使用人や調教者までが鍵を探し始めたからであつた。そして水槽の蓋が開かれない内に幕が下ろされた。次の朝になつて公衆は不幸が起つた事、テッディーがやもめになつて世の中に取り殘された事を知つた。

以上引用した處により、この藝人自身が非常に適切にこの致命的失錯の深い動機を吾人に示した處から察すると、彼がこの症候行爲の本態を非常によく理解して居た事が判るのである。

第九章　症候行爲と偶然行爲

今迄述べて來た行爲——吾人が無意識的企圖の實行をそこに認めた——は他の企圖された行爲の障礙として起り、且つ無器用（Ungeschicklichkeit）と云ふ口實の下に隱れてゐたのである。處が此處に述べる偶然行爲は「摑み損ひ」とは異なり、意識的企圖の支持を必要とせず、又口實を必要としない。彼等は獨立して現はれ、且つ吾人が彼等に何の目的も目標もあるとは思はない爲に彼等は默認されるのである。「何の考へもなしに」或は「純粹に偶然的に」或は「手が自然に動いて」これらの行爲を實行するのであつて、從つて私共はこの様な事からして、行爲の意義を更にこれ以上研究する必要なきものと、確信して居るのである。この除外例的の位置を獲得する爲に、最早無器用と云ふ辯解を要求しないこれらの行爲は一定の條件を滿たさねばならないのである。即ち彼等は目立たぬものであり、彼等の結果は些細なものでなくてはならないのである。

私はこの様な偶然行爲の多數を、自分及び他人に就いて集め、各例の根本的研究の結果これを寧ろ症候行爲（Symptomhandlnng）と名づくる方がよいと考へるのである。彼等は行爲者自身が自分等にあるとは考へず、彼が通常他人に知らさずに祕して置かうと考へてゐる或事を表現す

るのである。從つて彼等は今迄觀察した他の凡ての現象と全く同樣に、症候の役目を果すものである。

斯くの如き偶然行爲或は症候行爲の最も豐富な獲物を、私共は勿論神經症者の精神分析療法の際に得るのである。私はこの根源から得た二例に於て、この眼立たない出來事の限定が無意識的の觀念によつて如何に遠く、且つ微妙に行はれるかを示す事を禁じ得ないのである。症候行爲と「摑み損ひ」との限界は非常に不明確である。從つて私は此等の實例を前章に屬せしめてもよかつたのである。

(1) 或る若い婦人が診察時間中の「思ひ付き」として、彼女がその前日爪を切つてゐて爪床の薄皮を取除かうとしてゐた際に、肉の中に切り込んだと話した。これは誠に些細な出來事であり、そんな事が記憶され、話されるのが已に不思議な位の事であり、結局それが症候行爲であらうと推察されるものである。この小さい不器用な事の起つたのは實は紅さし指であり、結婚「リング」を嵌める指であつた。尙ほこの事が彼女の結婚當日に起つたので薄皮を傷つけると云ふ事に容易に察し得る一定の意味を與へた。同時に彼女は夫の無器用な事及び妻としての不感症を暗示するやうな夢を物語つた。それにしても何故彼女は左手の紅さし指を傷つけたのであらうか、結婚「リング」は右手に嵌めるものだのに? 彼女の夫は法律家「Doktor der Rechte」(文字通り

には權利のドクトル）（譯者註、Rechte＝權利、rechte＝右）である。そして彼女の娘時代の意中の人は文字通りには左のドクトル「Doktor der Linke」（譯者註、linke＝左）諧謔的には醫師に屬してゐた。身分違ひの結婚（Eine Ehe zur linken Hand）と云ふ事も一定の意義を持つてゐたのである。

(2) 或未婚の若い婦人は語つた。「私は昨日全然故意でなく百「グルデン」紙幣を二つに裂いて、その一半を來訪の婦人に與へたのでしたが、それも矢張り症候行爲と云ふ事になるのでせうか？」と。詳細に調べた結果は次の樣な事情が明らかにされた。彼女は自分の時間と財産の一部を慈善事業に捧げてゐた。彼女は或る他の婦人と共同で孤兒の教育をやつてゐた。百「グルデン」紙幣はかの婦人が彼女に送つて來た寄附金であつたが、それを彼女は封筒に入れた儘差當り自分の机の上に置いたのであつた。

來訪の婦人は立派な貴婦人であり、その人のやつて居る別の慈善事業を彼女は輔佐して居た。この貴婦人は援助を乞ふべき人々の名を書き付けようと思つたが、紙を持合はさなかつたので患者は机の上の封筒を手にとり、中味の事は考へないで、二つに裂き、一方を名簿の寫しとして自分に取つて置き、他の一方を訪問者卽ち貴婦人に渡した。この不都合なる行爲の無難な事は明らかである。百「グルデン」紙幣は裂かれても、破片を完全につぎ合せば價値を減ぜない事は判り切つた事である。貴婦人がその紙片を捨ててしまはないであらう事は、大切な人の名が書かれて

あるから大丈夫であつた。又その婦人が價値ある内容物を認めたら、早速送り戻して來る事に疑ひの餘地はなかつた。

それにしても忘却によつて可能にされたこの偶然行爲は如何なる無意識的觀念を表現するものであらうか？　來訪の貴婦人は私の治療と一定の關係があつた。前に醫者ならフロイドがよいとて當時病んでゐたこの娘に私を推薦して吳れたのは正にこの貴婦人であつたのである。だからこの娘は貴婦人のこの紹介に對して感謝せねばならぬと考へて居た筈である。すると半切りにされた百「グルデン」紙幣はこの媒介に對する謝禮を意味する事になるのだらうか？　それではまだ變である。

併し此處に他の材料が來り加はるのである。數日前全然別の媒介者が彼女の親戚の人に向つて、彼女が或る紳士と交際する意志があるかどうかと尋ねた。そしてその朝貴婦人來訪の一二時間前に、求愛の手紙が到着して、彼女を非常に愉快にさせた。さて貴婦人が彼女の健康狀態を尋ねる事で話を切り出した時に、彼女は次の樣に考へたらしい。「あなたは良い醫師を自分に推薦して下さつたが、若しあなたが良い男（と、そしてやがては又子供と）をお世話して下さるなら、私は一層あなたに感謝するでせうに」と。この被壓迫的な觀念から彼女にとつて兩方の媒介者が一つになつて仕舞つた。そして彼女は彼女の空想が他の人に渡さうと用意してゐた謝禮を、この貴

婦人に渡したのであつた。私がその前晩に偶然行爲或は症候行爲に就いて、この患者に話をしたと云ふ事を此處に附け加へれば、以上の解釋は完全に納得し得るものになるだらう。彼女は直ぐに起つて來た機會を利用して、似よつた行爲を作り出した事になるのである。

斯く非常に屢〻起る偶然行爲・症候行爲を吾人は習慣的に一定の事情の下には規則正しく起るものと箇々の場合に起るものとに分類する事が出來る。第一群のもの（時計の鎖をいぢる事、鬚をひねくる事等のやうな）は、殆ど本人の特徴として役立ち得るものであつて、種々のチック（痙攣）運動に近い關係があり、たしかにこれと關聯させて取扱つてよいものである。第二群には私は「ステッキ」をいぢる事、鉛筆でなぐり書きをする事、ポケットの中でチリンチリンと貨幣の音をさせる事、捏粉及び他の造形的材料をこねる事、衣服をいぢる事及びこれに類する多數の他の行爲を加へようと思ふ。分析療法の間にあらはれる斯くの如き遊戯的作業の背後には、表現が禁ぜられて居る別の意味や意義がいつもかくれて居るのである。通常本人は自分がそんな事をやつて居る事を知らずに居り、或は自分のいつもの遊戯に一定の變化をして居る事に氣づかずに居る。そして彼は又これらの行爲の結果をも看過し聞きのがすのである。例へば本人は自分が貨幣をチリンチリンと鳴らせた時の音を聞かず、而も吾人がその事を彼に注意すると驚いた樣な態を示し、又それを信じない樣な態度をとるのである。同樣に本人が時には氣付かずして、自分

の衣類に就いて行ふ凡ての事は大切であり、醫師の注意に値する事である。いつもの服裝の各變化、凡ての些細なる遺漏怠慢――例へば釦を嵌めずに置くやうな事――露出の一寸した形跡等は、その着物の所有者が直接に云はんとはせず、又全然云ふ事の出來ない事柄をあらはすのである。これらの些細な偶然行爲の解釋及びこの解釋に對する根據は、吾人がこの一見偶然的な事に吾人の注意を向ければ、いつも十分確實に診察時間中にあつた隨伴事情、丁度今取扱つた問題及び起り來つた「思ひ付き」等から現はれて來るのである。だから私は私の主張を分析例をあげて支持する事は止めようと思ふ。併し私はこれらの事が正常人に於ても私の患者に於けると同じ意義を持つ事を信ずるからこれを説明したのである。

私は少なくとも一例に於て習慣的に實行される象徴的行爲が、健康人の生活に於ける最も內密な事及び重要な事と非常に密接に關係し得る事を示さずには居られないのである。*

*Jones, Beitrag zur Symbolik im Alltag. (Zentralblatt für Psychoanalyse, I, 3, 1911.)

「フロイド教授が教へられた樣に常人の幼兒期生活に於ける象徴は吾人が以前の精神分析的經驗から期待したよりも遙かに大きい役割を演ずるものである。この點から見て次に述べる短い分析は多少興味あるものであり、特にそれが醫學の領域關係にあるが故に一層面白いものである。

「或る醫師が、彼の新居に家具を列べようとする際、木製の眞直ぐな聽診器にぶつかつた。何

處にこれを置かうかと一瞬間考へた後、彼は「テーブル」の上で、脇の方卽ち丁度彼の椅子と患者用の椅子との間に横たへて置く外はないと思つた。この行爲は二つの理由からして奇妙であつた。第一に彼は元來聽診器を餘り用ひないし（彼は神經病醫である）、必要な時には兩耳聽診器を用ひるのであつた。第二に彼の凡ての醫療用器具及び器械は——唯だこの聽診器のみを除いて——抽斗になつて居る箱の中に仕舞ひ込まれてあつた。兎も角も彼はこの聽診器に就いては最早考へなかつたが、或日未だ眞直ぐな聽診器を見た事のなかつた婦人患者からこれは何ですかと尋ねられた。彼が聽診器ですと告げた處、何故それを丁度其處においておくかと尋ねられた。彼は直ちに場所は何處でもよいのですと答へたが彼はこれに驚き、この行爲に何か無意識的動機があるのではあるまいかと考へ始めた。そして精神分析法に精通して居た彼は、これを研究しようと決心した。

第一の追想として、彼が醫科大學生時代に、病室廻診の際何時も眞直ぐな聽診器を手にして居ながら、決してそれを用ひなかつた或る病院の醫師が自分に印象を與へてゐたと云ふ事が彼に思ひ泛んだ。彼はこの醫師に驚嘆し、大いに私淑してゐた。後に彼が自ら病院に勤務する樣になつた時、彼は同じ習慣を持つた。そして彼が誤つてこの聽診器を手に持つ事を忘れて自分の室を出るやうな事があると、非常な不快を感ずるのが常であつた。この習慣の無益である事は、彼が實

際に用ひたのは「ポケット」に持つてゐた兩耳聽診器だけであつたと云ふ事實だけではなく、この習慣は一切聽診器の要らない外科病室に行つた時にも續けられたと云ふ事實にあらはれてゐた。この觀察の意義は吾人がこの象徵的行爲が男根性のものである事を指示すれば直ちに明らかになるのである。

第二の追想として、彼の幼い頃眞直ぐな聽診器を帽子の中に入れて歩く、自分の家のかかり付けの醫師の習慣に驚いた事を思ひ出した。醫師が往診に行く時、彼の主なる道具を何時も持つて居る事及び彼が着物の一部分なる帽子をとつて、それを引き出しさへすればよいと云ふ事を彼は面白いと思つた。彼は幼い子供としてこの醫師に非常になついてゐた。そして近頃自己分析によつて彼が三歳半の時に妹の出産に關して二重の空想を持つた事を發見した。それは第一に妹が自分と母との間の子供であると云ふ事、第二には醫師と自分との間の子であると云ふ事であつた。だからこの空想に於て彼は男性及び女性の兩方の役目をしてゐた事になるのである。尙ほ彼は六歳の時、この醫師の診察を受けた事を思ひ出した。そして聽診器を自分の胸に當てて居るこの醫師の頭を彼の身近くに感じた時の色情的快感を明らかに思ひ出し、又律動的に動く醫師の呼吸運動を思ひ出した。三歳の年に彼は胸部の慢性疾患に罹つた。そして度々の診察を受けたに相違なかつたが、それを彼は實際に思ひ出す事は出來なかつた。

八歳の時に、年上の男の子が彼に告げた言葉、即ち醫師と云ふものは婦人患者と一緒に床に就くのが慣習になつてゐると云ふ言葉は、彼に強い印象を與へたのであつた。この評判には實際一つの根據があつたのであつた。そして兎も角も近所の女共（彼の母をも含んで）は、この若くて美しい醫師に非常に參つてゐたのであつた。被分析者自身は色々の機會に於て、彼の婦人患者に關して性的誘惑を感じた。そして二度婦人患者に惚れ込んだ事があり、つひにその中の一人と結婚したのであつた。この醫師との無意識的同一視が、彼をして醫業を擇ばしむるに至つた最も主なる原因であつた事は疑ひの餘地がないのである。他の分析例からしても、この事が確かに最も屢〻――どのくらゐ屢〻であるかは決定し難いが――見る動機である事は推定する事が出來るのである。この場合には二重の限定があつたのである。第一の限定は二三の機會に於て證明し得た事實、即ち醫師が自分の父よりも優れて居ると云ふ事――この父に對してはこの息子は非常な嫉妬心を保持してゐた――第二の限定は醫師が禁ぜられた事に關する知識を多く持ち、又性的滿足の機會が多いと云ふ事であつた。

ついで明らかな同性愛的被虐待淫亂症的（homosexuell-masochistisch）の夢*――この夢は既に別の處に發表された――があらはれた。この夢では醫師の代理人物なる一人の男が本人を劍を以て襲擊した。劍は彼にニーベルンゲン Nibelungen（寶を守護する神仙）傳說中の一つの物語

を思ひ起させた。この話ではシーグルトが抜身の劍を自分とブリューンヒルデ姫との間に置いて寢たのであつた。これと同じ話はアルッス Arthus 傳說（キング・アーサーの傳說──譯者註）にもあり、この男はそれをも詳しく知つてゐたのである。

*,, Freuds Theory of Dreams " American Journal of Psychol. Apr.1 1910. P. 301, Nr. 7.

其處でこの症候行爲の意味は明らかになつたのである。この醫師は彼の眞直ぐな聽診器を、丁度シーグルトが彼の劍を自分と自分が觸れてはならない女との間に置いたと同じ樣に、彼と婦人患者との間に置いたのであつた。この行爲は妥協形成であり、二つの感情に奉仕するものである。卽ち魅力のある婦人患者と性的關係を結ばうとの被壓迫的願望を想像の上に於て滿足し、而も同時にこの願望が實現されてはならない事を思ひ起させるものであつた。これは謂はば誘惑に陷る事を防ぐ魔術で、私はこの男の兒に對して Lord Lytton の Richelieu の中にある次の箇所、

,Beneath the rule of men entirely great.
The Pen is mightier than the sword'*

（完全に偉大なる人々の統治下では「ペン」は劍よりも偉大である）

が大なる印象を與へた事及び彼が創作力に富んだ著述家となり、異常に大きな萬年筆を用ひてゐた事を附け加へておかう。私が彼に向つて何の爲にそれが必要なのかと訊ねた處、彼は「私には

書きたい事が非常に澤山あるのです」と答へた。

*オルダム Oldham の "I wear my pen as others do their sword"（「他の人々が、劍を持つて居るやうに私はペンを持つ」）と比較せよ。

この分析は無難無意味な行爲が吾人の精神生活に對する非常に深い洞察を許す事、及び吾人の生活の非常に早い時期からして象徴を以て表現する事の傾向が發達する事を教ふるものである。

私は自分の精神療法上の經驗から尙ほ一例を述べよう。この例ではパンの碎片をいぢくつてゐた手が雄辯な證言を與へたのであつた。患者は約二年來重症「ヒステリー」に罹つてゐた十三歳未滿の男兒であり、水治療院に於ける永い間の入院治療が無效である事が判つてから、私が終に精神分析療法を引受けたものであつた。私の推定では、彼が性的經驗を持つたに相違なかつた。そして彼の年柄として性の問題に惱んでゐるにちがひなかつた。併し私は說明によつて彼を助けようとはしなかつた。それは私が自分の推定を今一度吟味して見たかつたからであつた。從つて私は如何なる徑路を經て、私の求むるものがあらはれて來るかと云ふことに好奇心を持つた。ところが或日彼が何かを右手の指の間で轉ばして居り、それを「ポケット」の中で弄び又「ポケット」から取出してはいぢくつて居る事が私の眼についた。私は彼に手で何をいぢくつて居るのかとは訊かなかつたが彼は急に手を擴げてそれを私に見せた。それは捏ねて一塊にしたパンの心で

あつた。次の診療時間にも彼は同じ丸めたものを持つて來た。對話中彼はそのパンのかたまりで非常に速かに、且つ眼を閉ぢたままで私の興味を呼び起すやうな一つの像をつくつた。それは確かに頭と二本の腕と二本の脚とを持つた極くお粗末な有史前の偶像の様な人形であつた。そして二本の脚の間には一本の突起があり、それは長く引きのばされて居た。突起が出來るが早いか彼は人形を丸めてしまつた。その後彼は人形を作つて、丸めずに置いたが、同じやうな突起を背中から出し、或は他の場所から出させて最初の突起の意味を隱さうとした。私は彼を理解した通りに彼に說明しようとした。倂し同時に彼が人形を作つた際には何も考へてゐなかつたと云ふ逃げ口上を張らせないやうにしたかつた。そこで私は急に羅馬の王が王子からの使者に對して庭園に於て身振狂言的返答を與へた話を知つて居るかと訊ねた。少年患者は私よりも遙かに短年月以前に學んだ筈の事を追想しようとはしなかつた。彼はそれが「滑らかに剃られた奴隷の頭上に答へを書いた話ですか」と訊ねた。「いやそれはギリシヤの話だよ」と私は云ひ且つ次の如く語つた。タルクキニウス・スーペルブス王 Tarquinius Superbus は彼の王子セキスツス Sextus を敵地羅典市に忍び込ませた。其處で地盤を作つた王子は王の處に使者を遣り今後の行動を如何にすべきかを訊ねさせた。王はそれには答へず庭園に出で、今一度問を反復させた後、無言で最も大きく且つ美しい虞美人草の頭を打ち落した。使者はこの事をセキスツスに報告する外なかつた。セ

キスツスは父の意を察し、市の最も有力なる市民を暗殺によつて除かしめたのであつた。

私が話して居る間少年はかたまりを捏ねる事を止めてゐた。そして王様が庭園でやつた事を物語り「無言の儘打ち落した」と云ふ言葉に達した時彼は、電光石火人形の頭を切り取つた。だから彼は私を理解し、又彼は私から理解された事を認めたのであつた。そこで私は彼に直接に問診する事が出來る樣になり、彼の望む知識を與へ、斯くて比較的短い期間に彼の神經症を治す事が出來た。

患者に於けると同樣健康者に無盡藏に認め得る症候行爲は種々の理由から吾人の興味を向けられる價値がある。醫師に向つてはこれら症候行爲は今まで未知であつた新らしい關係や狀態を知る爲の價値ある指標となるものであり、人間觀察者に向つて屢〻色々の事、――時には觀察者が知らうと望まぬ事――迄も知らしめるものである。從つてこれをよく利用し得る人は時に自分が東洋の傳說に動物の言葉さへも理解したと云はれて居るソロモン王にでもなつた樣に感ずるであらう。

或日私は一青年を彼の母の家で診察する事になつた。彼が私に向つて步行して來た時、彼の「ズボン」の上にある特有な、かたい周邊に圍まれて居て、一目にそれと判る大きい蛋白質斑點が私の眼についた。この青年は一寸狼狽した後、聲が嗄れたので生卵を飲み、すべつこい卵白が

少し着物の上に流れたと云ひ、その證據として室內の皿の上に乘つてゐた卵殼を指示した。斯くして怪しい斑點は無難に說明されたが母が去つて二人きりになつた時、私は彼が私の診斷を樂にして吳れた事を感謝した。そして直ぐに彼が手淫の苦惱に惱んで居ると云ふ告白を私共の話の題目にした。

又或時私は、金持で吝嗇で馬鹿で自分の容態を端的に述べず澤山な訴へをならべ立てて醫師を困らす婦人患者の處に往診した。私が入つて行つた時に彼女は小さい「テーブル」の處に坐つて銀貨を小高く積み重ねて居た。そして彼女が立ち上つた時、彼女は銀貨二三箇を床上に落した。私はそれを拾ふ事を手傳つてやり、間もなく彼女が自分の不幸に就いて永々と話すのを遮つて「彼女の上品な婿が澤山な金を浪費したか？」と訊ねた。彼女はつよくこれを否認したが間もなく彼女の婿の贅澤で困ると云ふ悲しい話を述べた。併し彼女はそれ以來私を招かなくなつた。相手の人々に彼等の症候行爲の意味を告げてやつたからとてその人々と友人になれるとは限らないものである。

ヘーグのヨット・エー・ゲー・フワン・エムデン博士は「失錯行爲による自白」の他の例を報告して居る。「伯林の或る小さい料理店に於て「ボーイ」が勘定に際して一定の料理の値段が――戰爭のために――拾「フェンニッヒ」だけ高くなつたのだと主張した。何故それが値段書に示

されてゐないのかと云ふ私の問に對して、これは明らかにつけ落ちであり確かにさうなつてゐたのだと返答した。總額を「ポケット」に入れる際に、彼は不器用にも拾「フェンニッヒ」の金を丁度私の爲に、「テーブル」の上に落した。「今私はあなたが私から餘計な勘定をとつた事を確かに知つた。勘定場に行つて訊ねて見てもよいかね?」と私が云つた。

「どうぞ一寸だけお待ち下さい」と云つて彼は直ぐに行つてしまつた。

勿論私は彼を行かせてやつた。そして二分間の後「他の料理との間違ひでしたから、どうぞあしからず」と不可解な辯解をした後に、私はその拾「フェンニッヒ」を「日常生活に於ける精神病理」知見補遺の報酬として彼に呉れてやつた。」

食卓について居る人々を觀察すると美事な、有益な症候行爲を確認する事が出來る。

ハンス・ザックス博士は物語つて居る。私は親戚の老夫婦が夕食をして居る處に偶然列席した事があつた。婦人は胃病で嚴格な食養法を守らねばならなかつた。主人には丁度今燒肉がつけられた。すると彼はこの食物を一緒にたべる事の出來ない妻に向つて、芥子を出して呉れと頼んだ。妻は戸棚を開き、手をさし入れ、自分の胃病藥の瓶を主人の前に置いた。樽形の芥子壺と小さい滴瓶との間には、勿論この失錯を說明し得る何等の類似もなかつた。しかも妻は主人が笑ひながらこれを注意した時に初めて自分の取り違へた事に氣付いた。この症候行爲の意味は別に說明を

要しない。

この種の貴重なる實例であつて、觀察者から非常に巧みに利用されて居るものを私はベルンハルド・ダットナー（ウヰーン）のお蔭でここに擧げよう。

「私は哲學での同僚H博士と或「レストラン」で晝食をしてゐた。彼は外交官試補生の不利に就いて物語り、自分が學業を終らない內に智利の公使、或は寧ろ特命全權公使の祕書官になつてゐた事に言及した。然しその後この公使が轉任になり、新たに任命された公使には自分は會はうとはしなかつたと云つた。そして彼がこの最後の文章を話した時、彼は一片の「パイ」を口の處に持つて行かうとしたが、彼は不器用の爲であるかの樣にそれを落した。私は直ぐにこの症候行爲の隱れた意味を理解した。そして精神分析には餘り親しんでゐなかつたこの同僚に向ひ、偶然の樣にして「あなたは實際美味しい一口を落しましたね」と云つた。併し彼は私の言葉が彼の症候行爲にも關係して居る事に氣がつかず、妙に愛嬌のいい驚く程の活潑な調子で丁度私の云つた言葉——恰も私が正にその言葉を彼から取りでもしたかの樣に——と同じ言葉を繰返して、「私が落したのはほんたうに美味しい一口でしたよ」と云つた。それから彼はこの手當のよい地位を失ふに至つた拙劣さを詳細に物語る事によつて自らを氣輕にしたのであつた。

この象徵的症候行爲の意味はこの同僚が餘り親しくない私に、彼の乏しい物質上の境遇につい

て語る事を躊躇した事、彼の被壓迫的觀念が祕しておくべき事を象徵的に表現する症候行爲の假面を被つて現はれた事、及び、かくして話した人が無意識界よりの慰藉を得た事を考ふる時に、一層明らかになつて來るのである。

外見上企圖なくして物を持ち去り（Wegnehmen）或は持つて行く（Mitnehmen）事が非常に意味深いものであり得る事は次の實例が之を示してゐる。

ベー・ダットナー博士報告――「或る同僚が非常に尊敬してゐた青年時代の女友達の處へ、彼女の結婚後最初の訪問をした。彼はこの訪問の事を語り、彼が極く短時間の訪問に止めようと決心してゐたに不拘、思はずも長居した事に就いての驚きを述べた。尙ほ彼は其處で起つた奇妙な失錯作業に就いて報告した。女友達の夫は對話に加はつてゐたが、彼は同僚が到着した時には確かに机の上にあつた燐寸箱をさがした。同僚もまた若しや自分が燐寸箱（„sie"）をポケットに入れ（„eingesteckt"）はしなかつたかと思つて探したが無益であつた。しばらく經つてから、彼はそれを（„sie"）自分のポケットの中に發見した。そして唯一本の燐寸が中に入つてゐた事に氣付いた。――一、二日の後に彼が見た夢――それは箱の象徵（Schachtelsymbolik）を明らかに現はし、且つ靑年時代のその女友達を取扱つたものであつた――は私の與へた說明を確かなものにした。その說明と云ふのは同僚がこの症候行爲に依つて、彼の優先權を主張し、彼の獨占權

(箱の中に唯一本の燐寸が入つてゐた事)を宣言しようとしてゐたと云ふのである。

ハンス・ザックス博士報告――「私の家の女中は或る特別の「パイ」が好きであつた。この事實には疑ひの餘地がなかつた。何となればこれは彼女が何時も上手に調理する唯一の食物であつたからである。或る日曜日に彼女はこの「パイ」を私共の處へ持つて來て、それを控へ卓子の上におろし、前の料理に用ひた皿や小刀、肉叉、匙等を取つて今「パイ」を乘せて來たお盆の上に積み上げ、その上に「パイ」を乘せ、私共にお給仕せずに臺所へ行つてしまつた。私共は最初は女中が「パイ」に何か手を入れ直す事でもあつての事だと考へた。併し女中がもどつて來なかつたので、私の妻は呼鈴を鳴らして訊ねた。『ベッティよ「パイ」はどうなりましたか?』と、それに對して女中は問の意味が判らないらしく『何ですか?』と云つた。私共は彼女が「パイ」を臺所へ運び返した事、彼女が皿を積み重ねた上に「パイ」を乘せ「何の氣もつかずに」それを運び去つた事を告げなければならなかつた。――次の日私共がその「パイ」の殘りを食べようとした處、「パイ」は私共が前日に殘しておいたそのままになつてゐた。卽ち女中は彼女が當然食していい好きな料理の一部を食べずにゐたのである。『何故「パイ」を食べなかつたのか』と問うた處、女中は多少慌て氣味に『食べたくなかつたから』と答へた。――兩方の場合共に子供らしい態度が明らかに認められた。最初は子供らしい貪慾であつて、自分の食べたいものを他人にわか

つ事を好まない事、ついでは同じく子供らしい反抗の反應、卽ち『お前達は自分に呉れる事が惜しいのならとつておけばいいでせう。私は要らないから』と云ふにあつた。

結婚生活の事柄に關して起る偶然行爲、症候行爲は、時に最も重大な意義を持つものであり、無意識の心理に關心を持たない人々には緣起（前兆）を信ぜしめる樣な事になる。若い婦人が新婚旅行の途上に結婚リングを失ふ事は――たとひリングが置き忘れられてゐて間もなく見出されたとしても――決して緣起の良い事ではないのである。――私は今では夫と離婚して居る婦人を知つて居るが、この婦人は彼女の財產管理に關し、その書類に自分の結婚前の姓を以て署名した。而もそれは彼女が離婚して實際にこの結婚前の姓を持つ樣になる多年前に起つたのであつた。――或時私は新婚の夫婦の處へ客人として行つてゐた。そして新妻が笑ひながら彼女の最近の經驗を話して居るのを聞いた。それによると新婚旅行から歸つた次の日、彼女は夫の出勤中に彼女の未婚の妹を訪ね、一緒に以前の樣に買物に出かけた。處が彼女は突然街路の向側に居る一人の男を見つけて妹をつつきながら『御覽なさい、あそこをLさんが步いて行きますよ』と叫んだといふ事であつた。卽ち彼女はこの男が一二週間以來自分の夫であつた事を忘れた譯であつた。この話をきいて私は身慄ひした。併し私はそれに就いては何の推論をも敢てしなかつた。私はこの短話を其後何年かを經てこの結婚が不幸な轉歸を取つた後に想ひ出したのであつた。

しよう、これは「忘却」の處で述べてもよいものである。

*Alph. Maeder: Contributions à la Psychopathologie de la vie quotidienne.（日常生活の病的心理に關する知見補遺）
Archives des Psychologie, T. VI, 1906.

「最近私共は一婦人からかう云ふ話を聞いた。彼女は婚禮の晴着を着て見る事を忘れてゐた。そして、それを結婚の前日、而も晩の八時頃最早仕立屋に會ひ得る見込みもなくなつてから思ひ出した。之はこの花嫁が人妻の着物を着る事に大した幸福を感じてゐなかつた事、從つて彼女はこの辛い役割を演ずる事を忘れようとしてゐた事を證明するに十分である。彼女は今……離婚して居る」

徴候を觀察する事を學んだ一友人が、私に偉大なる女優ヱレオノラ・デゥーゼの事を語り、彼女がその役割の一つに於て症候行爲を用ひて居り、この症候行爲は彼女が非常に深い處から彼女のしぐさを持つて來る事を明らかに示すものであると云つた。これは姦通劇であつて、彼女は今し方夫と議論をして居り、それから誘惑者が彼女に近づいて來る前に獨白をしながら立ち上がるのであつた。この短時間中彼女は指に嵌めてゐた結婚リングをいぢり、これを引拔き、又これを

はめたり拔いたりするのであつた。彼女には今や別の男を迎へる用意が整つて居る譯である。

テオドル・ライクが指環に關する他の症候行爲に就いて述べて居る事を此處に附け加へよう。『私共は夫婦が結婚「リング」を拔いたり、嵌めたりして演ずる症候行爲を知つて居る。私の同僚Mは似よりの症候行爲を示した。彼は自分の愛して居る少女から指環をおくられたが、その際少女は「この指環を失はないやうにして下さい。若し失ふ樣な事があれば、あなたが最早私を愛して呉れてゐない事になります」と云つた。その後彼は指環を失ひはしないかと云ふ大變な心配を持つた。時々例へば洗面の際彼は「リング」を拔き取り、それを置き忘れ、再び之を手に入れる爲に永くかかつて探さねばならなかつた。彼が手紙を「ポスト」に投げ込む時に彼は「リング」が「ポスト」の緣に引かかつて引拔かれやしないかと云ふ淡い不安を禁じ得なかつた。一度は實際彼が非常に拙いやりかたをしたために「リング」が「ポスト」の中に落ち込んだ。この時彼の發送した手紙は、以前の愛人への絶緣狀であつた。そして彼はこの愛人に對して惡いと思つてゐたのであつた。同時に彼にはこの婦人に對する憧憬の念が呼びさまされ、これが現在の愛の對象に對する傾向との間に精神軋轢を釀したのであつた。(Internat. Zeitschrif tfür Psychoanalyse III, 1915.)

指環の題目に於ても私共は精神分析學者が詩人の一歩先きに踏み出し、詩人がまだ知らなかつ

た新らしい事を見出す事は困難であると云ふ印象を持つのである。フォンターネの小說「嵐の前」の中で法律顧問官ツルガニーは罰金遊び（譯者註、――遊戲の規則に違反したるものは罰金として持物を預けておき、後に之を受戻す）の最中に、次の樣に云つて居る「貴婦人達よ、あなた方は自然の最も深い神祕が罰金を出す事に現はれるものだとは思はれませんか」と。彼がこの主張を確かめる爲に擧げて居る實例の中で、次の一つは私共の特別の興味を牽く價値あるものである。「私は盛年期にある大學教授夫人の事を思ひ出しました。この夫人は度々結婚リングを罰金として指から外すのです。その家の夫婦生活上の運命に就いてお話しませう」と彼は云ひ、尙ほ語り續けて「同じ仲間の中に一人の男が居り、その男が英國製の「ナイフ」で十本の刄とコルク拔きと火打鎌のついて居るものをこの夫人の膝の上に度々預け、その爲にこの刄のついた怪物が終に二三枚の絹の着物をやぶつて、全體の人々の怒號の前に消え失せたのでした」と云つた。

指環の樣な豐富な象徵的意義を持つ物體は、それが結婚或は約婚「リング」として色情的結合を名づくる場合でなくても、意味深い失錯行爲に用ひらるる事は不思議のない事である。エム・カルドス博士 M. Kardos は斯くの如き出來事を示す次の例を私に提供して呉れた。

「數年前私よりも遙かに年下の或男が私の仲間になり、私と精神的努力を共にし、私に對しては先生に對する子弟の關係にあつた。私はこの男に一定の機會に指環を贈つた。そしてこの指環

は私共二人の間の關係に何か不都合な事が起つた場合には、度々症候行爲・失錯行爲のきつかけとなつた。近頃彼は特に見事な透明な次の場合を私に報告した。彼は一週一回の會合――その際に彼はいつも私に會ひ、私に話をする事になつてゐた――に或る若い婦人との約束の方が一層望ましかつたからだと云ふ口實の下に出て來なかつた。翌日午前彼は、家を出てしまつた後に自分が指環を嵌めてゐない事に氣がついた。彼は每晩指輪を乘せておく手箱（Nachtkästchen）の上に置き忘れられたものであつて、歸宅すれば指輪が其處にあるものと思つたので餘り心配しなかつた。彼は家へ歸ると直ぐ見たけれども指輪がなかつたので室のなかを搔き探したが無效であつた。終に彼に指輪が一年以上も前から小さい小刀と一緒に手箱の上におかれる事になつて居た事が思ひ泛んだ。その小刀を彼は何時も「チョッキ」の衣囊に入れておくのであつた。そこで彼は「うつかりして」小刀と一緒に指輪を「ポケット」に入れたかも知れぬと思つてその「ポケット」を摑んで見た。そして實際其處に探して居た指輪を發見したのであつた。――諺に「チョッキ」の「ポケット」の中の結婚リング（„Der Ehering in der Westentasche"）は男子が自分に指輪を吳れた女をだまさうと企てる時「リング」を保存する有様である。だから彼の罪惡感は先づ自己懲罰（汝は最早「リング」を嵌めるだけの資格がない）を彼に加へた。次いでは――勿論證人のない單なる失錯行爲の形に於て――彼の不忠實の懺悔をさせたのであつた。この失錯行爲の

起つたのであつた。

報告――それは勿論豫想し得るものではあつたが――を迂廻して犯された小さな不忠實の懺悔が

私は可なり年とつた一人の男を知つて居る。この男は非常に若い女と結婚したが、結婚の當夜を旅行に出かけずに大都市の「ホテル」で過さうとした。「ホテル」に着くか着かないかに彼は新婚旅行のために取つておきの全金額の入つた紙入れのない事、卽ち何處かに置き忘れたか、或は紛失した事を發見して大いに驚いた。やつとの事に召使を電話口に呼ぶ事が出來、召使は花婿の脫ぎ捨てた上衣の中にこの紛失物を見出し、待ちこがれてゐた本人――この人はかくして無財產（Ohne Vermögen）で結婚生活に入つたのである――の處へ屆けて來た。それで彼は翌朝新妻と一緒に旅行に出掛ける事が出來たが、彼は心配して居た樣に結婚當夜生殖無力（陰萎）（unvermögend）であつたのである。

人々が物を紛失する事（„Verlieren"）は豫想外に大なる範圍に於て、症候行爲と見るべきものであり、從つて少なくとも紛失者の內密なる企圖にとつて好都合なものである事はせめてもの事と考ふべきである。これは紛失された物に對する輕視或はその物或は人――その人からこの物が由來した――に對する嫌厭の表現に他ならない事がある。或は紛失の傾向は象徵的の觀念結合によつて、他の一層重要な物象からこの物に轉移されたものである。價値ある物を失ふ事は色々

の感情の表現に役立つものである。これは壓迫された觀念を象徴的に表現する事がある。卽ち私共が聞き度くない樣な警告を繰返す事がある。或はこれが不明な運命の力に犧牲を捧げる事を意味する事もある。この運命の力に對する奉仕は私共文化人に於ても未だ全然消滅してはゐないのである。

紛失に關するこの命題を說明するために一二の實例を擧げよう。

ベー・ダットナー博士の報告。「或る同僚が私に話した處に據ると、彼は旣に二年以上も使つてゐてそれが優秀な特徵を備へて居る點から非常に大切にしてゐた鐵筆（Penkalastift）を不意に紛失した。分析はつぎの事情を明らかにした。その前日この同僚は義理の兄から非常に不愉快な一通の手紙を受取つた。その手紙の末尾に「現在自分にはお前のやうな輕率な怠惰者を助けてやる考へもなく、又時も持たない」と書いてあつた。この手紙に關聯して起つた感情は、非常にはげしいものであつて、次の日早速同僚はこの義兄から贈られたこの鐵筆を犧牲にしてしまつたのである。これは義兄の恩惠を蒙つてゐないやうにするためであつたと思はれる。」

私の知つて居る或る婦人は老母の喪中芝居見物を遠慮してゐた。一年間の喪が數日であけると云ふ時に、彼女は知人の勸めに動かされて、或る特別に面白い芝居の入場券を買つた。劇場の前に行つた時、彼女は入場券を紛失した事を知つた。後になつて彼女は電車から降りる際に、入場

券を電車の切符と一緒に捨てた事を思ひ出した。この婦人は不注意から物を失つた事がない事を誇つてゐた人であつた。

だから彼女が經驗した紛失の今一つの例も滿更動機なしに起つたものではない事を推定してよからう。

或る湯治場に到着した彼女は以前に住んで居た事のある下宿屋を訪ねた。其處では彼女は舊知として迎へられ宿泊した。そして彼女が支拂をしようとした時「お客樣だからそれには及びません。女中にいくらかの金を置いて行つて下さるならおいて行つて下さい」と云はれた。彼女はすまない樣な氣がした。そして財布を開いて一マルクの銀貨一箇をテーブルの上においた。夕方になつて下宿屋の下男が「テーブル」の下に見付け出し、女主人が彼女のものであらうと云つたと云ふ五マルク紙幣を彼女の處に持つて來た。それを彼女は女中への心附を出す時に財布から落したのであつた。多分彼女は勘定を拂ひたかつたのであらう。

オットー・ランクは長い論文に於て*、この行爲の根本になる犧牲心と、その深い動機とを夢の分析の助けによつて明らかにした**。彼は時によつて紛失ばかりでなく物を發見する事(Finden)にも精神的限定がある事を附け加へて居るが、これは面白い事である。如何なる意味にこれを解釋するかと云ふ事は私がここに引用する彼の觀察から明らかになるであらう。兎も角も紛失と云

ふ場合には物は既にあつたのであるし、發見する場合には物はこれから探さねばならぬのは判り切つた話である。

＊Das Verlieren als Symptomhandlung, Zentralbl. für Psychoanalyse I, 10/11

＊＊同じ内容の別の報告が Zentralblatt für Psychoanalyse, II. 及 Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse, I, 1913. に出て居る。

「物質的に親にたよつてゐた若い娘が、安價な裝身具を買はうと思つた。彼女は店で自分に氣に入つた品物の値段を尋ねた處彼女の貯金高よりも高價であつたのでがつかりした。併し僅か二「クローネ」さへあれば彼女はこの小さい喜びを得る事が出來る譯であつた。重々しい氣分で彼女は賑かな夕方の街をぶらぶらと家の方へ歩いて行つた。最も人通りの多い場所に於て彼女に突然――彼女の云ふ處によると、彼女は深い思ひに沈んでゐたとの事であるが――地上にある小さい紙片が眼についた。彼女は向き返つてそれを拾ひ上げた處それがくしやくしやに折り疊まれた二「クローネ」の紙幣であつたので驚いた。彼女は「これは私があの裝身具を買ふ事が出來るやうに運命が授けて吳れたものであらう」と考へてこの暗示に從ふべく喜んで後戻りした。併し同じ瞬間に彼女は「さうしてはならない。この金は拾ひ物であつて取つておかねばならぬものだから」と獨語を云つたのであつた。」

この偶然行爲の理解に必要な分析の一片は本人からの個人的告白を須たずとも當時の事情から推論して差支へないであらう。娘が家に歸る途上持つた考への內で彼女の貧しさと物質上制限されて居ると云ふ考へがとりわけ先に立つてゐたであらう。殊にこの困つた狀態から脫却したいと云ふ願望成就の意味に於て右の考へが先に立つて居たであらう事は私共の推察し得る處である。どうすれば最も容易にこの足りない金高を手に入れ、自分の希望を滿足する事が出來るかと云ふ考へは、彼女の希望が餘り大きくなかつただけに必ずや手近にあつたに相違なく、彼女に最も簡單な解決法卽ち拾得（發見）（Finden）の考へを持たせたであらう。斯くして彼女の注意が他の事に奪はれてゐた（„in Ged nken versunken")（考へに沈む）ために拾得の考へは完全に意識的にはなつてゐなかつたとしても——彼女の無意識界（或は前意識界）は拾得に向つて焦點を定めてゐたであらう。實際私共はこれと似た他の分析を根據として無意識的の搜索準備（„Suchbereitschaft"）は意識的に向けられる注意よりも遙かに早く成功に導き得る事を主張してよからうと思ふのである。さうでなければ實際何故に數百人の通行人の中で此の一人が——加ふるに不十分なる夜の照明と群集雜閙の困難なる事情の下に於て、彼女自身にも驚かれたこの發見を爲し得たかと云ふ事は、理解に苦しむ事であるからである。この無意識的或は前意識的準備が、事實非常に盛んに存在した事は、この娘がこの見付け物をした後、卽ち最早準備が不必要となり、確か

に意識的注意から遠ざかつた後に於て歸途郊外の街の暗いさびしい場所で手巾を拾得したと云ふ奇妙な事實が之を示して居るのである。

＊Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse, III, 1915,

私共は斯くの如き症候行爲が正に人間の最も內密なる精神生活の認識への最上の通路をなすものと云はなくてならぬのである。

箇々の偶然行爲の中から私は分析をしないでも深い解釋が出來、斯くの如き症候が全然目立たずにつくられ得る條件を明らかにし、而も實際的に重要な意義がこれに結びつき得る一例を此處に報告しよう。或る夏季休暇の旅行中、私は或る場所で私の同行者を待たねばならぬ事が起つた。その間私は二人の若い男と知合ひになつたが、その男も矢張り寂しがつて居る樣に見え、進んで私に接近して來た。私共は同じ「ホテル」に泊つてゐたので、凡ての食事を一緒にとり、又共に散歩に出かける樣になり勝ちであつた。三日目の午後彼は急に今晩自分の妻が急行列車で着く事になつて居ると云つた。私の心理學的興味は活潑になつて來た。何となれば既にその日の午前私の仲間は少し遠い處へ遠足に行かうと云ふ私の提議を拒絕し、又私共の一寸した散歩に於ても或る道は餘り急な坂になつて居るとか危險だとか、云つて步かうとしなかつた事が私に氣づいてゐたからであつた。午後の散步の途上彼は突然私がお腹を空かして居るだらうから、自分のために

夕食を延ばして貰つては氣の毒だ、自分は妻が到着してから、妻と一緒に夕食する心算だと云つた。私は彼の暗示を理解して食卓に就き、彼は停車場に行つた。翌朝私共は「ホテル」の玄關で出逢つた。彼は私を自分の妻に紹介した後附加へて「あなたも御一緒に朝食をなさいませんか」と云つた。私は次の街に一寸用事があつて行つて來るが直ぐに歸つて來ると云つた。私が用事を果してから食堂に這入つて見ると夫婦は窓のそばの小さい食卓の一方の側にならび合つて就いて居た。向ひ側には唯一脚の椅子があつたが、その椅子の背にはその男の大きな重々しい粗毛布の外套がかかつてゐて坐席を覆つてゐた。私には――確かに故意にやつた事ではないが、その代りに一層意味深長な――この外套のおき方の意義がよく判つた。それは「お前の坐席は此處にはないよ、お前は今ではもう用のない人なんだ」と云ふ意味であつたのである。その男は私が坐らずに食卓の前に突立つてゐたのに氣づかなかつた。併し彼の妻はこれに氣づき夫をつつき「あなたは、この方のお席をふさげてゐますよ」と囁いた。

此結果及び他のこれに類似の結果を見て私は故意ならずして實行された行爲でも、人と人との交渉に於て必然誤解のもとになり得るに違ひないと考へた。行爲者は行爲に關聯して居る企圖を知らず、從つてこれを勘定に入れず、行爲に對して責任がないものと考へる。これに反して他の人はいつも相手の斯くの如き行爲をもその本人の企圖や意向の推論に利用するから他人の精神現

象からして、本人が自ら承認し且つ話したと信ずるよりも以上の事を認識するものである。本人は併しこの症候行爲から引出された結論を持出される場合には——自分には行爲實行の際に企圖に對する意識がなかつたのであるから——怒つてそれが根據のない事であると說明し、他人からの誤解であると訴へるのである。詳細に調べてみると、斯くの如き誤解は餘りに纖細な又餘りに多過ぎる理解に基くのである。二人が神經質であればある程彼等はお互に仲違ひになる發端を與へ易いのであつて、各自がこの仲違ひの論據を自己に關する限り決然として否定し、相手に關する限り確實なものと假定するのである。そしてこの仲違ひになる事は多分人間が或る感情を最早自分で支配し得なくなつた場合に自己及び他人に向つてこの感情が却つてよく判る筈だのに「忘却」「摑み損ひ」「故意でない事」等の口實の下にこれを現はす事の不誠實に對する罰である。實際私共は各人が絕えず傍人の精神分析を行つて居り、その結果自己を知る以上に傍人をよく知つて居るものである事を一般的に主張する事が出來るのである。「汝自らを知れ」γνῶθι σεαυτόν と云ふ警告に從ふべき途は自分自身の一見偶然的な行爲や怠慢の硏究を通つて進んで行くものである。

折々些細な症候行爲や失錯作業に就いて記載し、或は之を用ひて居る凡ての詩人の中でストリンドベルヒほどそれの內密なる性質を明らかに認め、その狀態に不氣味な生命を與へた人はない

のである。この種の認識に對するこの人の天才は勿論深い精神上の異常によつて補助されて居るのである。カルル・ワイス博士 Karl Weiss（ウォーン）は、彼の著述の中にある次の箇所を指摘して居る（Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse, I, 1913, S. 268）

「暫時の後、伯爵は實際にやつて來た。そして彼は徐々にヱステルに近づいた。恰も彼が彼女と密會の約束をしてでもあつたかの樣に。

――「永い間お待ちでしたか。あなたは？」と彼は聲をひそめてきいた。

――「あなたが御存知の樣に六箇月間」とヱステルは答へた。「處であなたは今日何處かで私を御覽になつたでせう？」

――「さうですとも、電車の中で、そして私はあなたの眼を見入つたからあなたと話したも同樣だと信じました。」

――「色々な事が起りましたね！　この前會つた時以來」

――「さうです、そして私は私共の間柄はもう終つたものと信じました」

――「それはまた何故ですか？」

――「私があなたから貰つたいろんな小さいものが二つになつてしまつた――而も幽玄な有樣に於て。尤もそれは古い觀察だが」

――「何をおつしやるのでせう！　今私は自分が偶然だと思つてゐた澤山な場合を思ひ出しました。私共が仲よしであつた頃いつか私は祖母から鼻眼鏡を貰ひました。それは磨いた水晶から出來てゐた、屍體解剖の際に大變重寶なものであり、實際の傑作品であつたので、私は大事にしておきました。或日私は祖母と仲わるくなり、彼女は私に對して意地惡くなりました。さうすると、次の解剖の時に別に理由なしに硝子が落ちました。私は單純に二つになつたのだと思ひ修繕にやりました。然るにそれはたうとう役に立たなくなりました。抽斗に入れておきましたら何處かへ行つてしまひました。」

――「何をおつしやいます！　眼に關する事が最も鋭敏なのは變ですね。私が友人から雙眼鏡を貰ひました。それが私の眼に大變よく合ひ、それを使用する事が愉快でした。處がその友人と私は不和になりました。處がね！　別に明らかな原因がないのにさうなりました。唯仲よくしてはならない樣な氣がして來るだけなんです。その次に私が「オペラグラス」を使はうとしました時、私は明瞭に見る事が出來ませんでした。眼鏡の股の處が餘り短くて、像が二つに見えるのです。股のところが短くなつたのでも、私の眼の間の距離が遠くなつたのでもない事は勿論の事なんです！　これは毎日のやうに起り、へたな觀察者の氣付かない不思議なんです。さてその説明は？　憎惡の力は私共が信じて居る以上に大きいものと思はれます。――その外に私があなたか

ら戴いた指環ですがそれの寶石がなくなりました——そして修繕する事が出來ないんです。あなたは今私と絶緣しようと思つて居られますか？……（„Die gotischen Zimmer“（ゴチック式の室）S. 259 f.)」

精神分析的觀察は、症候行爲の領域に於ても詩人に優先權を讓らねばならないのであつて、唯詩人が夙くに云つて居る事を繰返し得るに過ぎないのである。ウルヘルム・ストロス君はローレンス・スターンの著述に係る有名な諷諧小說トリストラム・シャンディー „Tristram Shandy“の中にある次の箇所（第五章第六節）を私に注意して吳れた。

『……そしてナジアンツムのグレゴリウスがユリアンの速かな不安定な身振りを知覺して、他日彼が變節するであらう事を豫言し——聖アンブロシウスが、彼の書記の頭が連枷(カラサヲ)の樣に左右に不作法に動くと云つて彼を追拂つた事——或はデモクリッスが、プロタゴラスが粗朶の束を縛る時に最も細い粗朶を中の方においたのを見て、直ぐにプロタゴラスの學者である事を認めた事等は何も不思議のないことである。——私の父は尙ほも語り續けて「人々に氣のつかぬ無數の穴があつて、これを通して銳い眼は心を見拔く事が出來るものだ」と云ひ、尙ほ附け加へて「私は物の判つた人は室に入る時に彼の帽子を下に置く事が出來ず、彼が出て行く時に取り上げる事が出來ない。それは彼を裏切る何かが思はず飛び出すからである事を主張する」と云つた。』

尙ほ此處に健康者及び神經症者に見る雜多なる症候行爲の小さい寄せ集めを述べよう。「かるた遊びに於て、負嫌ひな或老同僚が或晩可なり大きな負け高を、苦情は云はなかつたが一種特有な隱忍した感情的態度で支拂つた。彼が行つてしまつた跡に、彼が色々の持物を殘して行つた事が發見された。眼鏡、煙草入れ及び手巾等であつた。これは多分次の樣な飜譯を要求するものである。「泥坊等よ、汝等は俺のものを捲き上げをつたな」と云ふ意味である。

時々起る陰萎症に惱んでゐた或男――その陰萎症は彼が兒童期に於て母に對する關係が非常に親密であつた事に原因してゐた――は母の名の頭文字なるSを持つて居る書きものや、圖を以て室內を裝飾する習慣がある事を告げた。彼は家から來る手紙を机上に於て他の神聖でない書類と接觸せしむるに忍びなかつた。爲に家から來る手紙を別にして保存する樣に强ひられた。

或る若い婦人が、自分よりも前に來てゐた婦人がまだゐる治療室の「ドーア」を突然に開いた。彼女は「何の考へもなかつた」と云つて、辯解した。併し間もなく彼女が子供の時に兩親の寢室に闖入した際に持つたと同じ好奇心を示したものであると云ふ事が判つた。

美しい髮の毛に自慢の少女は、櫛や毛ピンを巧みに避けて、對話の最中に髮がほどける樣にする方法を知つて居る。

二三の男は臥位に於て治療を受けて居る間に「ズボン」の「ポケット」から小貨幣を撒き散し、

かくて彼等の評價に應じて治療時間中の仕事に對して謝禮をする。

醫師の處へ行く時の持物例へば鼻眼鏡・手袋・手提袋等を置き忘れる人は、その醫師と絶緣し得ず、又來たいと云ふ考へのあることを示すのである。イー・ジョーンズは「醫師は一箇月間に彼が集め得る遺失品、例へば洋傘、手巾、錢入れ等の數の多さによつて、彼が精神療法の實施にどの位成功して居るかを大體はかる事が出來る」と云つて居る。

極く些細な習慣的の仕事、而も最小限度の注意を以て行はれる事例へば就寢前に時計のゼンマイを卷く事、室を去る前に消燈する事等が時に行はれぬ事があり、爲に非常に强い力を持つて居ると云はれる「習慣」に對する無意識的複合體の影響が明らかに示される事がある。メーダーはチエノビウム〃Coenobium〃と云ふ雜誌に或病院醫師の事を述べて居る。この醫師は或晩勤務があつて病院をあけてはならない事になつてゐたのに或る重要なる用件の爲に町に出かける事にした。彼が歸つて來た時、自分の室に燈がついてゐたのに驚いた。彼は外出の際に室を暗くする事を忘れたのであつて、これは彼には今迄にない事であつた。併し彼は間もなくこの忘却の動機に氣がついた。病院構內の家に住んで居る院長は醫員室に燈がついて居る事からして、醫員が院內に居る事を察せねばならなかつたのは勿論である。

心配が多過ぎて時々憂鬱になる或男が、私に向つて「其の前夜に生活が苦しくて生きて居る事

がいやになつた様な時には、何時も翌朝時計が止まつて居るのを見る」と告げた。彼は時計を巻く事を怠る事によつて、次の日に生きて居る事が彼には問題にならない事を示して居る譯である。

私に未知の或人が私に手紙で次の様な事を云つて來た。「困難な運命にぶつかつて生きて居るのがいやになり次の日を過すだけの氣力もないと考へた様な時には、私は毎日決して忘れず就床前に殆ど機械的にやつてゐた時計を巻く事を忘れるのでした。唯稀に私が翌日に何か大切な事或は私の興味を牽く様な事を企てて居る時ばかりは、私は時計を巻く事を思ひ出しました。これは矢張り症候行爲でせうか？　私はこの事を全然説明する事が出來ませんでした」と。

ユング（「早發性癡呆症の心理に就いて」一九〇七年、六二頁）やメーダー（「心理學への新らしき道――フロイドとその學派」「チエノビウム」ルガノ „Coenobium" Lugano 一九〇九年）の様に人が企圖せず、又何氣なく口ずさむ「メロディー」に注意する人は多分何時もこの「メロディー」の本文と本人の取扱つて居る題目との關係を見出し得るであらう。

談話や書き物に見る觀念表現の微妙な限定にも細心の注意を拂ふ價値がある。吾人は一般に言葉を以て自分の考へを裝ひ、像を以て自分の考へを扮裝させるに就いての選擇をなすものと信じて居る。併し仔細に觀察すると別の顧慮がこの選擇を決定する事、及び觀念の形によつて一層深く且つ企圖されない意味がほの見えて來る事が判るのである。或人が好んで用ひる像や話振りは

その人を判斷する上に無關係ではなく、又他の像や話振りは屢〻談話者を力強く摑んでは居ても而も背景に保たれて居る或題目への諷刺である事が判るのである。私は或人が或時學問上の話に於て繰返して „Wenn einem plötzlich etwas durch den Kopf schiesst“ (「或人に急に何かの考へが起つて來る場合には」) と云ふ話風を用ひて居るのを聞いた事がある。併し私は彼が最近彼の息子の一人が被つて居た兜を露西亞軍の彈丸によつて前から後ろへ射貫かれたと云ふ報知を受けた事を知つて居た。(譯者註＝射る＝schiessen)

第十章　思ひ違ひ

記憶の誤謬（die Irrtümer des Gedächtnisses）は、誤れる追想を伴ふ忘却（das Vergessen mit Feh'erinnern）とは一つの點に於て違つて居る。それは後者即ち誤れる追想は誤りとして認識されず本人が信念を持つて居る點である。併し思ひ違ひ（Irrtum）なる語の使用は今一つ別の條件に關聯して居るやうに思はれる。吾人が誤り追想する（„falsch Erinnern"）とは言はないで思ひ違ひをする（„Irren"）と稱する場合は再生される心的材料に於て、客觀的實在の特徴が强調される場合卽ち吾人自己の精神生活の事實以外の何物かが追想され、それ處か他人の追想に依る證明或は反駁が可能である場合である。この意味に於ける「記憶の誤謬（誤り）」の正反對のものは初めから知らない事卽ち不知（Unwissenheit）である。

私の「夢判斷」*（一九〇〇年）と云ふ書に於て、私は歴史的材料及び事實上の材料に於ける一定數の誤謬をやつたのであつて、これに就いては私はこの書の出版後に氣付いて驚いたのであつた。詳細に吟味して見た結果、私はそれが私の不知から出たのではなくて、分析によつて明らかにし得る記憶の誤謬に歸すべきものである事を發見した。

＊第七版一九二二年

(1) 第一版、二百六十六頁に於て、私はシルレルの誕生地がマールブルヒ市であると言つた。その名はシュタイェルマルク（墺太利の一州）にあらはれて居る。この「思ひ違ひ」は、夜の旅行中に見た夢の分析の中にあるのであつて、私は車掌の呼んで居る市名「マールブルヒ」によつてこの夢から呼びさまされたのであつた。夢の內容に於てはシルレルの或る書物の事が問題となつて居る。さてシルレルはマールブルヒと言ふ學都で生れたのではなくて、シュワーベンのマルバッハに生れたのであつた。私は尙ほこの事は何時でもよく知つてゐた事を主張するものである。

(2) 百三十五頁にはハンニバル（Hannibal）の父がハスドルーバル（Hasdrubal）と名づけられて居る。この誤謬は私を特に腹立たしくさせるものであつたが、然し、又斯くの如き「思ひ違ひ」の解釋に就いての私の信念を最もつよくかためさせたものであつた。讀者の中には「バルカス」家の歷史に就いては著者以上に通曉して居る人は少ないであらう。而も著者はこの「誤り」を書き下ろし、三度の校正に際してこれを見落したのであつた。――ハンニバルの父はハミルカール・バルカス（Hamilkar Barkas）と言ふのである。――ハスドルーバルはハンニバルの兄弟の名であり、尙ほ彼の義兄弟及びその先將軍の名であつた。

(3) 百七十七頁及び三百七十頁に、私はツォイスが彼の父なるクロノスを去勢し、これを王位

より突落したと主張して居る。この殘虐なる行爲を、私は誤つて一代だけ遲らせたのであつた。ギリシヤの神話はクロノスをしてこの殘虐行爲をその父なるウラノスに對して犯させて居るのである。*

*これは全然の誤りではない！　オルフォイスによるこの神話の飜譯は息子たるツォイスによつてクロノスの去勢を繰返させて居る（ロッシェル Roscher の神話辭典 Lexikon der Mythologie）

さて私の記憶――讀者も知る如く平生私の記憶は隨分かけ離れた、又不用な材料を私に供給する癖に――が、これらの點において誤りを起させたのはどう說明すべきであらうか？　尙ほ又私が注意して行なつた三回の校正に際して盲人の樣にこれらの誤りを看過したのはどう言ふ事であらうか？

ゲーテはリヒテンベルクの事を次の樣に言つて居る。「彼が洒落を言ふ處には一つの問題が隱れて居る」と。同じやうな事を私は私の著書の上記箇所に就いて主張する事が出來る。卽ち「誤謬のある處には壓迫（Verdrängung）が背後にかくれて居る。より正しく言へば、被壓迫的の事象に基く不正確や歪みが隱れて居る」と。あの書物に發表した私の夢の分析の際に、私は夢想が關係して居る問題の性質上、一面に於ては分析を完成させないで途中の何處かで中斷し、他面に於ては輕度の變形（歪み）によつて不謹愼なる細目からその鋭さを奪ふ樣に强ひられた。私は

外に仕樣もなかつたし又實例と證據を提供しようとしても他に選擇の仕樣がなかつたのであつた。私のこの困つた立場は被壓迫的事象即ち意識され得ない事象に表現の機會を與へる夢と言ふものの特質上必然起つて來るものである。それにも不拘一層敏感な魂を苛立たせる材料が十分に殘つてゐたらしい。私自身の今尙ほ知つて居り、且つ引續き存在して居る觀念を變形させたり或は祕して言はずにおく事を痕跡も殘らないやうにする事は出來る事ではない。私が抑壓しようと欲した事は屢〻私の意志に逆らつて、私が取り上げたものの中に侵入して來て、私に氣のつかない「思ひ違ひ」としてあらはれたのである。處で上揭の三つの實例に於ては同じ題目が根本になつて居るのであつて「思ひ違ひ」は死んだ私の父に關する被壓迫的觀念の製產物である。

(1)に對する附言。二百六十六頁に分析されて居る夢を讀過する人は、私が父に對する好意なき批評を含むやうな考への處で中斷してゐる事を一部は露骨に知る事が出來、一部を諷刺から推測する事が出來るであらう。さて觀念及び追想のこの方向に於ける續きに不快な話があり、この話では書物及びマールブルヒと言ふ私の父の商賣友達が一定の役割を演じて居るのであつた。このマールブルヒと言ふのは、南方鐵道の一停車場であつて、その名を呼ぶ聲で私が眼をさました處である。このマールブルヒなる男を、私は分析に際して私及び讀者に對して揉み消さうと欲したのであるが、その復讐として、彼は出る幕ではない處に出て來てシルレルの誕生地の名（マール

バッハ〕をマールブルヒに變化させたのである。

(2)への附言。ハスドルーバルをハミルカールの代り、卽ち兄弟の名を父の名の代りにした「思ひ違ひ」は、私の中學時代に持つたハンニバル空想及び「我が國民の敵」に對する父の態度への不滿から起つたのである。私は父に對する關係が、英國旅行に依つて如何に變化したかと云ふ事を語り續ける事が出來たのであるが、それをしなかつたのである。この英國行は、父の前の結婚生活から出來て英國に住んでゐた異母兄と私とを知合ひにした。この兄は私と同年の長男を持つてゐた。從つて私が父の子でなくて、この兄の子供として生れてゐたらどうなつてゐたらうかと言ふ空想を持つ事に何のさはりもなかつた。この抑壓されたる空想は、私が分析を中斷した箇所に於て、兄弟の名を以て父の名に代へさせ、私の著書の「テキスト」を誤らしめたのである。

(3)への附言。この同じ兄についての追想の影響で、私はギリシヤの神代に於ける神話的殘虐行爲を一代だけずらせたのである。この兄が私に與へた訓戒の內の一つは永い間私の記憶に殘つて居る。「お前の生活をやつて行く上に於て、お前が父の二代目でなくて元來三代目に屬すると言ふ一事を忘れるな」と彼は言つたのであつた。私共の父は後年に於て再婚した。その爲に第二の結婚生活から出來た子供にとつては非常に年老いてゐたのであつた。私の書に於ける「上述の思ひ違ひ」を私は親子の間の敬虔の念を論ずる箇所でやつたのである。

私の友人や患者――その人達の夢を私が報告し、或は夢の分析に於てその人達の事を諷刺した――が、私とその人達とが一緒に經驗した出來事の狀況が、私によつて不正確に物語られて居ると言つて注意をして來た事が一二度あつた。さてこれは矢張り歷史的の誤謬である。私は箇々の場合を訂正した後に再吟味した。そして事實に關する私の記憶は、矢張り私が分析に於て或事を故意に變形させ、或は祕した處に於てのみ不正確であつた事を確かめたのであつた。卽ち此處にも故意の隱し立て、或は壓迫に對する代償としての氣づかぬ誤謬がある譯である。

壓迫現象より發するこれらの「思ひ違ひ」と、實際の不知に基く誤謬とははつきり區別される。例へば私はワッヒャウ Wachau へ遠足した時にここが革命者フィッシュホーフの滯在地であると信じたのは、不知の爲であつたのである。兩方の場所は唯共通の名を持つて居るだけである。フィッシュホーフのエンメルスドルフはケルンテン（墺國の州名）にあるのである。併し私はその事を知らなかつたのである。

(4) 今一つ恥かしいが併し敎へられる處の多い「思ひ違ひ」の例をあげやう。これは謂はば一時的無知の實例である。或患者が或日ヴェニスに關する二册の書物をかねての約束通り持つて行き度いと言つた。この書物で彼は復活祭旅行の準備をしようといふのであつた。私は用意して置いたと答へ、それを取りに書齋に行つた。實際は私はそれを探しておく事を忘れてゐたのである。

何故かと言ふと、私は治療には不必要な中絶となり、醫師に對して物質上の損害を醸すこの患者の旅行には實際贊成してゐなかつたからである。よつて私は書齋に於て私が目當にしてゐた兩方の書物を急いで見廻した。「美術都市としてのヴェニス」と言ふのがその一册であつた。併しその外に私は類似の叢書中の一册で歴史を書いたものを持つて居たに違ひないと思つた。確かに其處に „Die Mediceer“（メヂシー家の人々）（譯者註＝「メヂシー」家は伊國フローレンスの名家である）と言ふ書があつた。私はそれを取り、待つて居る人の處に持つて來た。而も恥らひながら自分の「思ひ違ひ」を自白せねばならなかつた。私は實際メヂシー家がヴェニスと無關係である事は知つてゐた。併し暫くの間は全然それが間違つてゐないやうに思はれたのであつた。さて私は正義を實行せねばならぬ。私は患者に對して屢〻彼の症候行爲を指摘したのであるから、私が彼に對する權威を失はないやうにする爲には、正直になつて彼の旅行を好まないと言ふかくれたる動機を發表する事が必要であつた。

人間が眞實を語らうとする衝動は人が通常自分について考へて居るよりも遙かに强いものであると言ふ事は一般の人を驚かせるであらう。但し私が最早嘘を吐く事が出來ないのは、多分私が精神分析をやつて居るからであらうと思ふ。私が誤魔化しをしようとすると、何時も私は「思ひ違ひ」或は他の失錯作業に陷り、それによつてこの例及び前にあげた實例に於ける樣に、私の不

正直が暴露されるのである。

「思ひ違ひ」の機制は凡ての失錯作業の内で最も表面的のものであるやうに思はれる。卽ち「思ひ違ひ」の發生は一般に當該精神活動が或る邪魔をする影響と戰はねばならぬ事を示すのである。而も「思ひ違ひ」の種類は隱れてゐて邪魔をする觀念の性狀によつて限定されるものではない樣である。併し「話し損ひ」や「書き損ひ」の單純な例の多數に於ても、同じ狀態を假定すべきである事を附け加へておかう。私共が「話し損ひ」或は「書き損ひ」をやる場合には、私共は何時でも企圖以外の精神機轉に依る障礙がある事を推論してよいのである。併し「話し損ひ」や「書き損ひ」は、類似、便宜、或は促進の傾向等の法則に從ふ事がある事を認めねばならない。而も邪魔をする要素が自己の特徵の一部を「話し損ひ」や「書き損ひ」の際に出來る「誤り」の中に現はす事に成功するとは限らず言語材料の方からの迎合があつて、初めて「誤り」の限定が可能にされ、又この限定に限界が與へられるのである。私自身の「考へ違ひ」ばかりを揭げないで、此處に尙ほ一二の例を述べようと思ふ。勿論これらの實例は「話し損ひ」や「摑み損ひ」の處に揭げてもよかつたものであるが、これらの失錯作業の凡ての種類は、同じ價値を有するものであるから、そんな事はどうでもよいのである。

(5) 私は或る患者に對して、彼が絕緣しようと目論んで居る愛人に電話をかける事を禁じた。

それは話をすれば、彼の絶縁に就いての葛藤を再燃せしめるからであつた。彼は最後の考へを、彼女に手紙で——手紙を彼女に手渡しする事は困難ではあつたが——書いてやる事になつた。さて彼は午後一時に私を訪ねて來て、彼がこの困難を避ける一つの方法を見出したと言ひ、なほ就中彼が私の醫師としての權威を引合ひに出してもよいかと訊ねた。二時頃彼は絶縁狀の作成に從事してゐたが、急にやめて其處にゐた母に向ひ、「私は先生にこの手紙の中に先生の名を書いていいかどうかをきく事を忘れました」と言つた。彼は急いで電話口に出て行き、電話をつないで貰つて『モシモシ、お食事のあとで「プロフェッソール」にお話してもよいでせうか?』と訊ねた。すると「アドルフさん、あなた氣でも違つたんぢやないの」と言ふ驚きの答が私の命令によつて最早聽いてはならぬ筈の聲で、彼の耳に響いて來たのであつた。彼はただ「間違つた」のであつた。そして醫師の家の電話番號の代りに愛人の家のそれを言つたわけであつた。

(6) 若い女がハプスブルゲル狹路に住んで居る最近結婚した友を訪問する事になつてゐた。彼女は食卓についてゐてその事を話してゐたが、間違つて「バーベンベルゲル狹路に行かねばならぬ」と言つた。食卓についてゐた他の人々は笑ひながら、彼女の氣のつかなかつた「誤り」——「話し損ひ」と言ひたければ言つてもよい——を指摘した。その二日前にウィーンでは共和國の宣言が布告され、黑と黃の墺國の旗はなくなり昔のオストアルク（譯者註＝獨逸東部邊境の國）の旗の色、即ち赤

──白──赤に變り、ハプスブルヒ家（譯者註『墺國王朝の人々』）は除かれてしまつた。話した人はこの置き換へを友人の「アドレス」に於て行つたのであつた。因みにウヰーンには有名なバーベンベルゲル街（Strasse）はあるがウヰーンの人でこれを狹路（Gasse）と言ふ人はない筈である。

(7) 或る暑中休暇中、貧乏だが併し立派な若い學校教師が大都市から來てゐた別莊持の娘に求愛した結果、娘は終に彼を熱愛する樣になり、地位や人種の相違があつたに不拘結婚を是認して貰ふ樣に彼女の家庭の人々を動かした。或日この教師は自分の兄弟に一通の手紙を書いて「娘つ子は決して美人ではないが非常に可愛ゆく、その點はいいのです。併し私が猶太人の女と結婚する決心がつくかどうかは未だわかりません」と言つてやつた。この手紙が愛人の手に入り、彼の兄弟が自分に向けられた愛の宣誓の手紙を受取つて吃驚して居た間に婚約は破談になつた。私にこの事を報告した人はこの場合は全く間違つたのであつて其處に何等狡猾な「トリック」があつたのではない事を證言した。私は或る婦人が昔からかかりつけの醫者がいやになつたが明らさまに斷る事が出來ないで、手紙を取り違へたやうにしてこの目的を達した別の一例を知つて居る。併し少なくともこの場合には「誤り」が原因になつたのであつて、意識的詭計が例の喜劇的動機を利用したものでない事を確言する事が出來る。

(8) ブリルは一婦人の事を報告して居る。この婦人はブリルに向つて或る共通の友人の健康狀

態を訊ねる際に誤つてこの友人を娘時代の姓で呼んだ。ブリルに注意されて彼女はこの友人の夫が嫌ひであり從つてこの友人の結婚には非常に不滿であつた事を自白した。

(9) 此處に「話し損ひ」として記述してもよい「思ひ違ひ」の一例がある。或る若い父親が次女の出產屆をする爲に戶籍吏の處に行つた。子供の名は何と言ふかと訊ねられて、彼は「ハンナです」と答へたが、吏員から「あなたにはその名のお子さんが既に一人おありですね」と言はれた。私共はこの次女は以前長女が生れた時程歡迎されてゐない事を推論し得るであらう。

(10) 私は此處に「名の取違へ」の他の一二の觀察を附け加へよう。これは勿論本書の他の章に入れてもよいものである。

一婦人は三人の娘の母であつて二人の娘は既に嫁いで居り、一番年下の娘はまだ彼女の運命を待つてゐた。懇意にして居る某婦人は、今迄の二度の結婚に際し同じ贈物をして來た。それは高價な銀製茶器であつた。處でこの道具の話になると、母はいつも間違へて第三女をそれの所有者として名づけるのであつた。この「誤り」は末の娘も結婚させたいと言ふ希望を現はす事は明かである。彼女はその際娘が同じ結婚の贈物を貰ふ事を前提して居るのである。

母が娘、息子或は婿の名を取り違へる場合も同じやうに容易に說明する事が出來る。

(11) 頑固な「名の取違へ」の立派な實例で理解し易いものを私はヨット・ゲー君が某療養所入

院中に得た自己觀察から引用しよう。

「療養所の共同食卓で私は隣席に坐る婦人と餘り面白くもない話を世間並の調子で話して居る間に特に愛想のよい語句を用ひた。このオールドミスは彼女に對してこの様に愛想よく親切なのは平常の私らしくないと言つた。この答は私等二人共が知つて居り且つ私がいつも一層大きい注意を拂つて居る或る令嬢に對する多少の氣兼ねと言ふよりは寧ろ明らかなあてこすりを含むものであつた。私は勿論直ぐにそれをさとつた。私共二人のその後の對話の經過中私はその女から私がかの令嬢の名でもつて彼女に話しかけた事を注意されて非常に困つた。彼女はこの令嬢を自分よりも一層幸福な競爭者と見做したのは無理もなかつた。

(12)　私は重大な背景を持つ出來事で、この出來事に近い關係を持つてゐた證人が私に報告して吳れたのを「思ひ違ひ」としてここに述べよう。一婦人はその夫並に他の二人の男と伴れ立つて一夕を戶外に過した。この二人の他人の內の一人は、彼女の非常に親密な友人であつたがその事に就いては他の人々は全然知らず、又知つてはならなかつたのであつた。友人等は夫妻を家の戶口迄送つて行つた。「ドーア」の開くのを待つて居る間に彼等は別れを告げた。婦人は二人の友人にお辭儀をし握手して一言二言お世辭を言つた。ついで彼女は祕密の愛人の腕をとり夫の方を向き、彼に同じやうに別れを告げようとした。夫はこの狀態に調子を合はせ帽子を取つて非常

に鄭重に「奥様、手に接吻して下さい」と云つた。吃驚した婦人は愛人の腕を放した。そして門番が出て來る迄には暫し嘆息しながら「いやこんな事は何人にも有勝ちの事だ！」と呟くだけの餘裕があつた。この夫は細君が不義をすると言ふやうな事は有り得ない事と考へる種類の亭主に屬してゐた。彼は度々「若しそんな事があつた場合には、一つ以上の命があぶないんだ」と言つて居た。卽ち彼はこの「誤り」の中に含まれてゐる挑戰に氣付くべく餘りに強い內的壓迫を持つてゐた。

(13) 私の患者の一人の「思ひ違ひ」は、反對の意味への反復によつて特に敎へられる處が多い。非常に神經質な或る若い男が永い間考へ拔いた擧句永い以前から愛し又愛されて居た娘と結婚の口約束をした。彼はこの許婚の女を彼女の家に送つて行き、彼女と別れ、非常に幸福な氣分で電車に乘り、女車掌から——二枚の乘車券を買つたのであつた。約半年の後には彼は旣に結婚してゐた。併し未だ伉儷の樂を實際に見出す事が出來なかつた。彼は結婚した事が良かつたかどうかと疑ひ、以前の様な親密な關係を見出し得ず、妻の兩親を色々に非難した。或晩彼は若い妻を彼女の兩親の家から連れ出し、二人で市街電車に乘つたが、女車掌にただ一枚の乘車券を吳れと言つた。

(14) いやいやながら壓迫してゐる願望を「誤り」によつて滿足し得る事の立派な事例をメーダ

ーが報告してゐる。或る同僚が休日を邪魔されないで樂しみたいものと考へた。併し彼はルツェルンで一箇所訪問せねばならぬ處があつたがこの訪問を彼は好まなかつた。永い間考へた末、彼はそれでも行くことに決心した。彼は慰みにチューリヒ――アルト・ゴルダウ間の汽車旅行の間新聞を讀み、そこで乘換へて又新聞を讀み續けた。旅行を續けて居る間に監督車掌は彼が間違つた列車に乘つて居る事、卽ちルツェルン迄の切符を買つておきながらゴルダウからチューリヒに歸つて行く汽車に乘つてゐた事を發見した。(Nouvelles contributions etc., Arch. de Psych. VI, 1908.)

(15) これと類似して壓迫された願望を「間違ひ」の同じ機制によつて現はさうとした試み――それは完全には成功しなかつたが――をフォン・タウスク博士が「誤れる旅行の方向」と言ふ題下に報告して居る。

「私は休暇を得て戰地からウィーンに歸つて來た。ある老患者は私がウィーンに居る事を知り自分が臥床して居るので往診をしてくれと乞うた。私はその請に應じ、彼の處で二時間を過した。辭去するに際し、彼は「いくらお拂ひしませうか?」と訊ねた。私は「今は休暇で歸つてゐて醫業をやつて居ないから私の往診を好意上の事と思つていらつしやい」と答へた。患者は職業上の仕事を無報酬の好意として要求する權利がないと思つたので躊躇した。終に彼は私が精神分析醫

であるから、確かに正しい行動をとるのであると言ふ敬意を拂つた考へ方——この考へ方は金がかからずに濟む事の喜びから限定されて居る——から私の答を受容れた。處で私自身には旣に數瞬間の後にこの貴族風な態度が正しいかどうかと言ふ疑念が起つて來て居た。そして解決の出來ない兩義的な疑念に滿たされて、私は電車線Xの電車に乘つた。少し行つてから私はY線に乘換へる筈であつた。乘換場所に待つてゐた間、私は報酬の事は忘れて了ひ、患者の病的症狀の事を考へてゐた。間もなく私の待つてゐた電車が來て私はそれに乘つた。併し次の停留所で私は再び降車せねばならなかつた。それは私がY電車に乘る處を誤つてX電車に乘つてゐて、丁度今來た方向即ち私が謝禮金を取らうとしなかつた患者の家の方向へ走つてゐたからであつた。私の無意識界は謝禮金を取つて來ようと欲した譯であつた」(Internat. Zeitschrift für Psychoanalyse, IV 1916/17.)

(16) 實例(14)と非常によく似た曲藝が私自身にも一度成功した。私は自分の長兄の君に夙くにする筈であつた訪問を今年の夏英國の或る海水浴場に於てする事を約した。そして時が迫つてゐたので何處にも泊らずに最短の道を通つて旅行して行く事にした。私は和蘭に立寄るために一日の延期を兄に乞うたが、兄はそれは歸途の事にしてもよからうと言つた。そこで私はミュンヘンからケルンを經て和蘭の沙嘴ロッテルダムに向つて汽車に乘つて行つた。そこから汽船が夜中にハ

ーキッチに向つて渡航するのであつた。私はケルンで乘換へる譯であつた。私は汽車から降りてロッテルダム行の急行列車に乘換へようとした。併し其の列車は發見されなかつた。私は色々の鐵道從業員に訊ね、あちらの「プラットホーム」こちらの「プラットホーム」へとやられ、非常な絶望に陷つた。そして私がこんな事で無駄に捜し廻つて居る内に、連絡列車に乘り遲れたのであらうと斷定した。この事が確かめられた後に私はケルンに一泊しようかと考へた。それには特に敬神の念も手傳つてゐた。何故なら私の家の古い傳說によると、私の先祖は嘗て猶太人迫害の際にこの都市から逃れたとの事であつたからである。併し私は別の決心をし、後の列車でロッテルダムに向ひ其處へは深夜に到着した。そして一日を和蘭で過さねばならぬ事になつた。この日は私に永年抱いて居た希望を滿足させて吳れた。私は海牙及びアムステルダム國立博物館に於けるレンブランの繪畫を見る事が出來た。翌日午前になり英國に於ける汽車旅行の最中私が色々の印象を集める事が出來る樣になつた時にやつと私に確かな記憶が浮んで來た。それは私がケルンの停車場で列車から降りた場所の數步前方の處卽ち同じ「プラットホーム」に Rotterdam —— Hook of Holland（ロッテルダム——和蘭の沙嘴）と書いた大看板を見たと言ふ記憶であつた。其處には列車が待つてゐて、それに乘れば私は旅行を續ける事が出來た筈であつた。兄の指圖に反してレンブランの繪畫を往路に於て觀賞したいと言ふ事が、私の企圖であつたと假定しなけれ

ば私がこの明らかなる指導標があつたのに他の場所へ急いで行つて列車を探した事は理解し難い眩惑だと言はれても仕方があるまい。私の巧みにやつた慌て方、ケルンに一泊しようとの敬神的企圖が思ひ泛んだ事などは皆私の企圖が完全に遂行される迄それをかくしておく工夫であつたのである。

(17) 丁度これに似て表面上捨ててしまつた願望を滿足するために所謂「健忘性」を口實としてなされる工夫の例をヨット・シュテルケが自分自身の事から報告してゐる。

「私は或る時或る村で幻燈を見せながらの講演をする事になつた。この講演は一週間だけ延期された。私はこの延期を通知して來た手紙に返事を出し、變つた日附を手帳に書きつけた。私は時間があつたら午後にこの村に行き、其處に住んで居る知合ひの著述家を訪問したかつたが、當時私はその爲に午後の時間をあける事が出來なかつたので、殘念ながらこの訪問を思ひ止まつて居たのであつた。

講演のある日の夕方が近づいた時、私は幻燈の畫の一杯入つて居る袋を持つて停車場に急いだ。私は列車に間に合せる爲に「タクシー」を賴まねばならなかつた（私には列車に間に合ふ樣に「タクシー」を賴まねばならぬ位ぐづぐづして居る事が度々ある）その場所に到着した時に、停車場には——小さい場所での講演の際には驛に出迎へに來る事が例になつて居るのだが——私を

案内して呉れる何人も來てゐなかつたので少々驚いた。急に講演が一週間延期になつた事、從つて私が今最初に定められてゐた日時に於て、無益な旅行をして來た事に氣がついた。私は自分の健忘性を心から呪つた後、次の列車で家に歸るべきかどうかと考へた。よくよく考へた擧句私は今こそ希望してゐた訪問をする絶好の機會であると考へ、實際に又その訪問を果した。その途中私は初めてこの訪問のための適當な時間を得たいと言ふ滿たされなかつた願望が陰謀を見事に用意してゐた事に氣づいた。重い袋（幻燈の畫の一杯入つた）を引摺つて行つた事及び汽車に間に合ふ樣に急いで行つた事は無意識的企圖を一層巧みにかくす事に役立つたのであつた。

人々は、私が此處に説明した一群の「誤り」を非常に多數に起るものであり、又特に意義深いものであるとは思はないであらう。併し私共は同じ觀點を日常生活にある人々並に科學にたづさはる人々の示す遙かに重要な判斷錯誤の解釋にも押し擴むべき理由を持つのではないかと考へるのである。最も精選され、最もよく均衡のとれた精神にして初めて外界實在の知覺像を歪み——知覺者の心的個性を通過する際に知覺像が受ける——より保護し得る樣に思はれる。

第十一章　複合失錯作業

前章に述べた「誤り」の二例、即ち「メヂシー」家を「ヴェニス」に持つて行つた「思ひ違ひ」及び電話による愛人との對話によつて禁止を出し拔いた若い男の「思ひ違ひ」の例は、元來不精密に敍述されたものであり、注意して觀察するならばこれは忘却と「思ひ違ひ」の合併したものとしてあらはす事が出來るのである。同じ樣な合併を私は他の一二の實例に於ても示す事が出來る。

(1)　或る友人が私に次の經驗を物語つた。「數年前私は或る文藝協會の委員に選ばれる事に同意した。それはこの團體が何時かは私の「ドラマ」を上演する事に於て私を援助するかも知れぬと思つたからであつた。そして餘り興味もなかつたが規則正しく每金曜日の會合に出席してゐた。さて數月前私の「ドラマ」の一つがFに於ける劇場に上演されると言ふ保證を得た。それ以來私にはいつもかの協會の會合を忘れると云ふ事が起つて來た。私が會合の「プログラム」豫告を讀んだ時、私は自分の忘却を恥ぢ、私が彼等を必要としなくなつたからとて缺席するのは卑しい事だと自ら責め、次の金曜日には決して忘れない樣にしようと決心した。私はこの企圖を繰返して思ひ出し、終にこれを實行し、會議室の「ドーア」の前に立つた。驚いた事には「ドーア」は閉

ぢられてをり、會合は既に過ぎてしまつてゐた。卽ち私は日を間違つたのであつてその日は土曜日であつた。

(2) 次の實例は症候行爲と「置き忘れ」との複合である。これは廻り路を經て私の手に入つたものであるが、確かな出所から得られたものである。

或る婦人が彼女の義弟――有名な美術家――と一緒に羅馬へ旅行した。美術家は羅馬在住の獨逸人から高い榮譽を與へられ、就中古代の金「メダル」を贈られた。婦人は義弟がこの立派な贈物を高く評價し得ない事を悲しんだ。歸國後彼女は荷物を解いてゐて――どうしてだか判らないが――自分が「メダル」を持つて來てしまつて居る事を發見した。彼女は直ぐに手紙でこの事を義弟に知らせてやり、「メダル」を次の日に羅馬へ送り返すと云つてやつた。併し「メダル」は巧みに置き忘れられてどうしても見付からず、從つて送り返す事が出來なかつた。其處でこの婦人に自分の「ぼんやり」が何を意味するかと云ふ事がかすかに判つて來た。つまり彼女はこの「メダル」を自分のものとして取つておきたかつたのである。

(3) 此處に失錯行爲が頑强に繰返され、而も同時にその行爲の樣式の變化する一二の實例がある。

ジョーンズ(前揭書、四百八十三頁)は不明の動機から或る手紙を數日間机上に殘して置き、

毎回それを發送する事を忘れた。終に彼はそれを發送したが手紙は不能配達信書取扱所から彼に返送されて來た。それは彼が「宛名」を書かなかつたからである。二度目に彼は宛名を書いて發送したが、手紙は再び返送されて來た。今度は「スタンプ」が貼られてなかつた。そこで彼はこの手紙を發送する事に對する無意識的嫌厭感があつた事を最早見のがす事が出來なかつた。

(4) カルル・ワイス博士(ウヰーン)の一小報告は内的抵抗に反對して一定の行爲を實行しようとする努力の無效である事を非常に印象的に記述して居る。

「無意識界が或る企圖を實行せしめないでおかうとの動機を持つ場合には如何に頑强にその目的を達し得るか、又この無意識界の傾向を防ぐ事がどんなに困難であるかと言ふ事は次の出來事によつて說明されるであらう。或る知人が私に一册の書物を貸して吳れと言ひ、次の日にそれを持つて來て吳れと乞うた。私は直ぐにそれを約束したがその際差當り說明の困難な併し明らかな不快感を經驗した。そして後になつてそれが私に明瞭になつて來た。その人は年來私から一定額の借金をして居た。而もそれを支拂ふと言ふ事は考へて居ない樣であつた。私はその事に就いてはそれ以上考へなかつたが翌朝同じ樣な不快感と共にこの事を思ひ出した。そして直ぐ獨り言を云つた。「お前の無意識界は書物を忘れさせるかも知れないが、お前は不親切な事をせず、從つて忘れない樣に努力せよ」と。私は家に歸り、書物を紙に包み、私が手紙を書く間それを机上で

行かうとして居た手紙を机上に殘して來た事を思ひ出した。（序でに云つて置くが、その內一本の手紙は私に或る事をやる樣に勸めて居た人に宛てたものであり、それには少々不快な事が書いてあつた）私は後戾りして手紙を取り、再び出かけた。電車の中で私は自分の妻の爲に買物をする約束をした事を思ひ出した。そして私はそれが小さい包にしかならない事を喜んだ。ここで急に包……書物なる聯想が起つて來た。そして今や私は書物を持つて居ない事に氣づいた。卽ち私は最初出かけた時ばかりでなく、私が手紙を取りに入つた時にも矢張り書物を忘れたのであつて而もその手紙のそばに書物が置いてあつたのであつた。」

(5) 詳細に分析されたオットー・ランクの觀察にも同樣の事が見られる。

「非常に几帳面なそして緻密過ぎる癖のある男が彼には全然常ならざる次の經驗を報告して居る。或日の午後彼が街路上で時計を見ようとした時、時計を家に置き忘れて來た事に氣がついた。こんな事は彼の記憶して居る處では今迄一度も起つた事はなかつた。彼はその晩時間を定めての約束があり、その前に時計を取つて來る時間がなかつたので親しい婦人を訪ねて時計を其晩だけ借りる事にした。彼はその以前からの約束で、その翌日午前にこの婦人を訪問する事になつてゐたから、この事は非常に好都合であつた。彼はその時に時計を返却する事を約した。併しその翌

日彼が借りた時計をその所有主に渡さうと思つた時、彼はそれを家に置き忘れて來た事がわかつて驚いた。この際彼は自分の時計を「ポケット」に入れてあつた。彼はそこで婦人の時計を午後に返却する事を堅く決心し、又その計畫を實行した。併し彼が辭去するに際し、時を見ようとした處、自分の時計を忘れてゐて、非常に怒り且つ驚いた。この失錯作業の反復は、平生非常に几帳面なこの男には全く病的なことに思はれた。從つて彼はその心理學的動機を知りたいと思ひ、早速彼が最初忘却した日に何か不快な經驗があつたかどうか、又如何なる關係に於てそのことが起つたかと云ふ精神分析の問題を課する事によつて判つて來た。彼はその問に對して、直ちにその日彼が外出し、時計を忘れた少し前に晝食後母と話をし、母が今迄彼に色々の心配をかけ、金錢上の犧牲を拂はせた輕率な或る親類の男が時計を入質し、而もその時計は家で用ひるものだから質受けする金をくれと願つて居ると云ふ事を話した事を思ひ出した。この殆ど强制的に金を出させられる事が彼には非常に氣に觸りこの男が多年來彼に與へた凡ての不快な出來事を再び記憶に持ち出させた。だから彼の症候行爲は色々な要素によつて限定されて居る事が判つた。第一にこの症候行爲は「俺はそんな風に、金をねだり取られたくない。そして時計が必要なら俺のを家に置いておかう」と云ふ意味の考へ方を現はすものである。併し彼自身晩方の會合の爲に、時計が必要であつたから、この企圖は單に無意識的道程に於て、卽ち症候行爲の形に於てのみ現はれ

得たのであつた。第二にこの忘却は、次の意味卽ち「このやくざ人間の爲に何時迄も續く金錢上の犧牲を拂つて居ては自分は破產し凡てのものを與へてしまはねばならなくなる」云々の意味を持つのである。さてこの話に就いての怒りは、彼の云ふ處では瞬間的のものであつたとの事だが症候行爲がかく反復された事はこの怒りが無意識界に於て強く働き續け、恰も意識が「この話は私の頭腦から去らない」*と云ひ現はす場合に等しいものであつた事を示すのである。婦人の時計が、後に同じ運命に逢着した事は無意識界のこの態度から見れば何の不思議もない事である。

*無意識界に於ける作用のこの連續は或は失錯行爲に續發する夢として現はれ、或は失錯行爲の反復若くは是正の不履行にあらはれる。

併し特殊の動機が多分「この罪なき」婦人の時計への轉移を促したものと思はれる。手近にある動機は自分がこの婦人の時計を犧牲にされる自分の時計の代りに持つてゐたいと云ふ事であつて、だから彼は翌朝時計を返す事を忘れたのであらう。尙ほ彼は時計を婦人に關する記念として持つてゐたかつたのであらう。尙ほ又婦人の時計を忘れる事は、敬愛して居る婦人を今一度訪問する機會を彼に與へるものである。彼は勿論翌日彼女を別の用事で訪問する事になつてゐた。そして時計を忘れた事はこの前からきまり切つてゐた訪問を、時計を返却しがてらの訪問にする事が彼には勿體なく思はれたらしく思はれるのである。また自分の時計を二度忘れて婦人の時計を

代りに用ふる事が出來る樣になつた事は、この男が兩方の時計を同時に持つ事を避けようとして居る事を示すのである。彼は有り餘つて居るやうに見える事は親類の男の貧乏な有樣との間に著しい對照を示す事になるのでこれをさけようと努めてゐたのである。一面に於て彼は、この婦人と結婚したいと云ふ明らかなる企圖に對し、自分が家庭（母）に對して解除されない義務を負つて居ると云ふ自己警告を與へる意味に於て兩方の時計を同時に持つ事を避けたのである。婦人の時計を忘れた事の今一つの理由は、彼が前晩獨身者でありながら女持の時計を持つて居る事を恥ぢ、こつそりと時計を見た事及びこのいやな狀態を繰返す事を避ける爲に、彼がこの時計を持つて居る事が出來なかつたと云ふ事實に求むべきである。併し彼は時計を返す義務があつたので此處に又無意識的に實行される症候行爲が起つたのであつて、この症候行爲は互に鬪ふ感情の間の妥協形成であり、高價で購はれた無意識的動因の勝利の現はれである。」(Zentralblatt f. Psychoanalyse, II, 5.)

ヨット・シュテルケの三つの觀察を此處に揭げよう。

(6) 壓迫された反對意志の表現としての――「置き忘れ」――「破壞」――「忘却」(Verlegen――Zerbrechen――Vergessen)「或る科學的研究の說明圖を集めたものの中から、私は一二の圖を弟に貸さねばならぬ事になつた。それを弟は或る講演に用ひようと欲したのであつた。私

は一瞬間自分が非常に苦心して集めたものの複寫を自分に先立つて弟に供覽させ、發表させたくないと思つたが、それでもその望まれた陰畫を探し出し、それの幻燈の畫を作つてやる事を約した。處が陰畫は見出されなかつた。この問題に關聯した陰畫を貯藏してあつた箱の中を私は見通し、二百枚位の陰畫を一々手に取つて見た。併し私の探す陰畫は其處にはなかつた。私は初めから弟にこれらの畫を與へる事を好んでゐない事を察した。私がこの好意のない考へが自分にある事を意識し、これを責めた後に私は一番上の貯藏箱を傍に置いた儘それをよく見なかつた事に氣がついた。そしてこの箱の中には正に探してゐた陰畫が入つてゐたのであつた。この箱の蓋にはその內容に關する簡單な說明があり、私は多分この箱を傍に置く迄にそれを一寸見たに違ひなかつた。好意のない考へ方はそれでもまだ全く征服されなかつたらしい。何故かと云ふと幻燈の畫が發送される迄に色々の事が起つたからである。幻燈の畫の硝子面を綺麗に磨いてゐた時に、私は一枚の畫を抑へて壞した――私は平生こんな風に幻燈の畫を壞した事はなかつた――この硝子板を更に新らしく作つた時、それが手から落ちた。そして私が足を前に突出してそれをとらへた爲に板は壞れなかつた。私が畫を表裝してゐた時全部のものが今一度床上に落ちた。幸に何も壞れなかつた。そして最後に私がそれを荷造して發送する迄に尙ほ二三日かかつた。それは私が每日さうしようと思ひながらその企圖を忘れたからであつた。

(7)　『反復された忘却』――『最後の實行の際に於ける「摑み損ひ」』「或日私は或る知人に葉書を出さねばならなかつた。而もそれを二三日も繰返して遷延した。その際私は次の事が原因であらうと云ふ强い想像を持つた。一通の手紙で知人はその週の内に或人が自分を訪問したいと云つて居る事を報じて來た。私はその訪問を熱望してゐなかつた。その週が過ぎてしまつてこのやな訪問がありさうになくなつた頃私は終に葉書を書き、會見の日時を知らせてやつた。私がこの葉書を書いた時、私は最初「骨の折れる忙しい仕事或は數多くつかへてゐた仕事」ドルック・ウェルク（druk werk）の爲に手紙を書くことが出來なかつたと書き添へようかと思つた。併し私は終にそれを書かなかつた。それはかう云ふ月並の云ひ草は、物の判つた人からは決して信ぜられないと思つたからであつた。このつまらぬ嘘がそれでも現はれなくては濟まなかつたのかどうかは知らないが、自分が葉書を郵便箱に投込む時誤つて箱の下の方の穴卽ち印刷物（ドルックザッヘン（Drucksachen）を投込む方の穴に投込んだものであつた。」

(8)　『「忘却」と「思ひ違ひ」』「或る少女が或朝非常に天氣がよかつたので、石膏像の繪をかくために「リクス」博物館（,Ryksmuseum,）に出かけた。この樣な好晴の日には寧ろ散歩に行きたいと思つたが、それでも彼女は精を出して繪をかかうと決心した。彼女は先づ畫用紙を買はねばならなかつた。彼女は博物館から徒歩で十分位の處にある店に行き、鉛筆やその他の繪道具

を買つた。併し畫用紙を買ふ事を忘れて博物館に行つた。そして彼女が椅子に腰かけていざ始めようと用意した時に、紙を持つてゐなかつたので更に店に行かねばならなかつた。彼女は紙を持つて來た後、實際に繪をかき始め、仕事は大いに進んだ。そして暫くして博物館の塔の鐘の音が澤山鳴るのを聽いた。彼女は「もう十二時だらう」と考へ、なほ鐘が十五分を報ずる迄仕事を續け、十二時十五分過であると考へ、繪道具をつつみ「フォンデル公園」（,Vondelpark'）を通過して彼女の姉妹の家迄散歩して行き、其處で「コーヒー」を飲まう（＝和蘭に於ける第二食事）と決心した。「スアッソー博物館」（,Suasso-Museum'）の傍を通る時、彼女は十二時半ではなくて、やつと十二時であるのを見て驚いた。誘惑的な好天氣は、彼女の勤勉を欺き、その爲彼女は塔の鐘が十一時半に十二を打つた時に塔の鐘が半の時にも鳴る事を考へなかつたのであつた。」

(9) 前掲の觀察の一二の例が既に示して居るやうに、無意識的な邪魔をする傾向は同種類の失錯作業を頑固に繰返させる事に依つて目的を達し得る事を示して居る。私は此處に「フランク・ウェデキントと劇場」と云ふミュンヘンの「ドライ・マスケン」書肆から出て居る小さな書物から面白い例を引用しよう。併し「マーク・トウェーン式（譯者註 Mark Twainは滑稽小說家である＝）」に記されたこの話に對する責任はこの書の著者に歸せられねばならぬ。

「ウェデキントの一幕物,Die Zensur'（「檢閲」）の中で最も重大な箇所に次の言葉『死に對

する恐怖は「考へ違ひ」である』(‚Die Furcht vor dem Tode ist ein Denkfehler.‘) がある。この箇所が氣に懸つてゐた著者は、試演の際に俳優に向つてデンクフェーラー Denkfehler と云ふ字の前の處で短時間の間を置いてくれと乞うた。上演の晩に俳優は彼の役を進めて行き、實際又「間」を正しくおいたが、故意にではなく勿體振つた語調で「死に對する恐怖はドルックフェーラー Druckfehler (誤植) である。」と云つた。幕が下りた後に著者は俳優に向つて彼には非の打ちどころはなかつたが唯例の個所は「死に對する恐怖は―― Druckfehler である」と云ふのではなくて Denkfehler であると確かめた。「檢閲」が翌晩も演ぜられた時、俳優はかの意識的な箇所に來ると再び儀式張つた聲で「死に對する恐怖は――デンクツェッテル ‚Denkzettel‘ (覺書) である」と云つた。ウェデキントは再び俳優を非常に稱贊し、ただ序に「Furcht ...... Denkzettel でなく Denkfehler だから」と注意した。――その次の晩「檢閲」が演ぜられ、著者と懇意になり、藝術に關する意見の交換をやつたその俳優は、例の箇所になつた時に非常に勿體ぶつた顔附をして「死に對する恐怖は――ドルックツェッテル Druckzettel である」と云つた。――俳優は著者から無條件の稱贊を得た。この一幕物は尙ほ屢〻繰返されたが著者は、‚Denkfehler‘ なる概念は何時も駄目なものと考へて居た」

ランクは又失錯行爲と夢との非常に面白い關係に注意を拂つた (Zentralbl. f. Psychoan-

alyse II. S. 266 u. Internat, Zeitschr. f. Psychoanalyse III, S, 158) 併しこの關係に立ち入る爲には失錯行爲に續發する夢を詳細に分析せねばならないのである。私は或時自分が財布を紛失した夢を長々と見た。朝になつて着物を着る時、私は實際財布がないのに氣がついた。私は夢を見た夜、寢る前に財布を「ポケット」から出して、いつもおく場所に置くのを忘れたのであつた。從つてこの忘却は私には知らぬ事ではなかつたのである。これは多分*夢の内容に現はれようとしてゐた無意識的觀念に表現を與へたものであらう。

＊「紛失」「置き忘れ」等の失錯作業が夢——この夢において本人は紛失物の所在を知る——に依つて取消される事は、そんなに稀な事ではなく而も夢みる人と紛失者とが同一人である限り、これは何等神祕的の事ではないのである。或る若い婦人は次の樣な手紙を寄越した「約四箇月前私は——銀行で——非常に美しい指環を紛失しました。私は自分の部屋の隅々を探し拔きましたが、それが見つかりませんでした。一週間前に私はその指環が暖房室の箱の傍にあると云ふ夢を見ました。この夢は勿論私を寢させて吳れませんでした。そして次の朝私は實際その場所に指環を發見しました」彼女はこの出來事に驚歎し、彼女の思考や希望がこの樣にして滿足される事が時々あると主張した。併し彼女は指環を紛失した時からその再發見迄の間に於て、彼女の生活に如何なる變化が起つたかと云ふ事を研究する事を等閑に附して居るのである。

私は斯くの如き複合失錯作業が前に箇々の場合に見なかつた新事實を私共に教へるものであるとは主張しない。併し失錯作業が同じ結果を保ちながらその形態を色々に變化するのは、一定の

目標に向つて努力して居る意志に成形的作用があると云ふ印象を私共に與ふるものであり、從つて失錯作業が偶然的のものであり說明を必要としないものであると云ふ考へ方に對して一層强く反對するものである。又これらの實例では意識的企圖は失錯作業の成立を阻止する事に全然失敗すると云ふ事實も私共の眼に立つ事である。私の友人は文藝協會の會合に出席し得なかつた。かの婦人は「メダル」を手放す事が不可能である事を見出した。これらの企圖に反對して働いた不明なる何物かは第一の道が塞がるや別の出口を發見したのである。この不明の動機に打克つ爲には意識的の反對企圖を以てしては駄目であり、それ以外の或ものが必要なのである。卽ち不明なものを意識に知らしめる心的作業を必要とするのである。

第十二章　定命論——偶然の信念と迷信——種々の觀點

前記の個々の解說の一般的結論として吾人は次の認識を主張する事が出來る。卽ち吾人の心的作業の不十分なる事（Unzulänglichkeit）——それの共通なる特徵に就いてはやがて詳細に定義しようと思ふが——及び何等の企圖がないやうに見える一定の實行は吾人が精神分析學的研究を適用すれば明らかに動機があり、而も意識には知られて居ない動機によつて限定される事が判るのである。

斯く說明される現象の部類に加へられる爲には心的失錯作業は次の條件を滿足せねばならぬ。

(a)　この失錯作業は吾人の評價によつて定められ、「正常の範圍內にある」と云ふ言葉によつて形容される一定の度を超えてはならない。

(b)　これは瞬間的及び一時的障礙の特徵を具備して居なければならぬ。吾人はこの同じ作業を以前にはもつと正確に實行して居り、或はこれを正確に實行し得る自信がいつもなければならない。吾人が他人から訂正される場合には、その訂正の正しき事及び吾人自身の心的機轉の正しくない事を直ちに認識しなければならぬ。

(c) 凡そ吾人が失錯作業を知覺する場合には吾人はその失錯作業の動機に就いては吾人の心の内に何物をも感知してはならないのであつて、これを不注意によつて起る事と說明し、或は偶然の事と主張する樣に誘惑されねばならぬ。かくてこの群には「忘却」の諸例、よく知つて居ながらの「思ひ違ひ」「話し損ひ」「讀み損ひ」・「書き損ひ」及び所謂偶然行爲等が現存する事になるのである。

これらの語が Ver なる接頭語（前綴）を持つて居り、同じ樣な構成を有する事はこれら現象の大多數が內的に同じ種類のものである事を言葉の上で示すものと云ふべきである。併し斯く定められた心的過程の說明には、一部分非常な興味を喚起するであらう多數の觀察が附隨して來るのである。

(A) 吾人は心的作業の一部を目的觀念からは說明し得ないものとして拋棄し、以て吾人の精神生活に於ける限定（Determinierung）の範圍を無視するのである。處で限定はこの場合——及び他の領域に於ては尙更ら——吾人の想像以上に達するのである。私は一九〇〇年に雜誌「時代」（"Zeit"）所載、文學史家マイエル（R. M. Meyer）が論說に於て、吾人が故意に又隨意に「意味なき事」（Un inn）を構想する事は不可能であると論じ、實例に就いて之を說明して居るのを見た。多年來私は吾人が或る數を勝手氣儘に思ひ泛べる事不可能であり「名前」も亦同樣で

ある事を知つて居る。吾人が一見隨意に、而も冗談に或は陽氣に作つた數を研究して見ると、吾人が實際可能であるとは考へなかつた嚴格な限定がそこにある事が判つて來るのである。私は此處に人工的に選ばれた個人名の例を簡單に説明し、ついで何の考へもなしに云はれた或る數の例を詳細に分析しよう。

(1) 私の一患者の病歴を發表する準備中私は彼女に何と云ふ名をつけようかと考へた。選擇し得る範圍は非常に廣い樣に思はれた。一二の名は初めから除外された。第一には彼女の實名、第二には私の家族の者の名——それでは私が不快を感ずる——及び特に珍しい發音を持つ他の婦人名等であつた。それにしても私は名をつけるに困らない筈である。私が多數の女性名を自由に用ひ得る事は人々も期待する處であらうし、私自身もさう考へるのである。然るに唯一つの名だけが思ひ泛び、その外の名は思ひ泛ばなかつた。それはドーラ（Dora）と云ふのであつた。私はその限定を調べて見た。誰がその外にドーラと云ふ名を持つて居るであらうか？ 次に起つて來た觀念を私は信じないで斥けようとした。それは私の姉妹の子供の保姆がドーラと云ふ名の女であると云ふ事であつた。併し私は分析に於ける自己訓練或は練習を大いにやつて居たので思ひ付きをつかみ、更に益〻これを紡いで行つた。すると直ぐに前晩の出來事が思ひ泛びそれが求むる限定を私に提供した。私は姉妹の家の食堂の「テーブル」の上に「ローザ・ヴェー孃 Fräulein Ro-

sa W.」と表書した手紙を見た。驚いて私はこれが何人であるかと訊ね、ドーラだと思つて居た人は元來ローザ（Rosa）と云ふのだが、ローザと云ふ名は私の、姉妹に關係があるからと云ふので、彼女はこの家に住込む時に自分の名を捨てねばならなかつた事が判つた。私は氣の毒になつて「氣の毒な人だ。彼等は自分の名さへも保持する事が出來ないんだ！」と云つた。私はこの事を聞いた時に暫時靜かに色々な眞面目な事を考へ始めた事を思ひ出した。そしてその考へはその時には不明瞭な事の中へ進入して行つたが今では容易に意識し得る事であつた。斯くしてその翌日私が自分の名を持つて居てはならぬ婦人の名をさがした時に、私にはドーラ以外のものは思ひ付かなかつたのである。この場合の獨占は堅い內的聯想に基いて居た。何故かと云ふに私の婦人患者の病歷に於て、治療の經過に向つて決定的な影響が他家に奉公して居る家庭女教師から來て居たからである。

この小さな出來事は數年後に思はぬ繼續を見出した。或時私が今ドーラと名をつけた少女の夙くに發表されて居た病歷を私の講義の際に話したが、その時來て居た二人の婦人聽講者の內の一人が色々の關係から何度も云ふ必要のあつたドーラと云ふ名の所有者である事が私に思ひ付いた。そして私はこの若い婦人――その人を私は個人的にも知つて居た――に彼女の名も矢張りドーラであつた事を實際に考へなかつた事及び講義に出て來る名を他の名に取り換へませうと云つて詫

びた。私は早速別の名を選ぶ事に着手した。そしてその際今一人の婦人聽講者の名を用ひる樣な事があつてはならない事、そしてそんな事をして既に精神分析學を學んで居る同僚に惡い手本を見せてはならぬと考へた。こんな譯で私はドーラの代りにエルナ(Erna)と云ふ名を思ひつき、それを講義に用ひて非常に滿足した。講義の後に私はエルナと云ふ名が何處から來たであらうかと考へた。そして私の心配した事が代りの名を選擇するに際して少なくとも一部分實現されて居たのを認めた時失笑を禁じ得なかつた。この婦人の家族名はルツェルナ(Lucerna)と云ふのであつた、エルナ(Erna)はその一部分であつたからである。

(2) 或る友人への手紙で私は「夢判斷」の校正が終つた事を報じ「その中に 2467 の誤謬があつたとしても、最早この著述の何處をも變へようとは思はない」と云つて遣つた。私はこの數字を說明しようと試み、短い分析を「追伸」として手紙の終りの處に書き添へた。私はこの處置を取つた當時現場を押へて書いた儘を此處に引用するのが上々だと考へる。

『尙ほ私は日常生活に於ける精神病理への一知見補遺を急いで此處に書き添へやう。あなたはこの手紙の中に「夢の書」の中にあるかも知れない誤謬のおどけ混りの勝手な見積りの數として 2467 と云ふ數字を見出されるであらう。これは「どんなに澤山な誤りがあらうとも」と云ふ意味である。そしてその時にこの數字が現はれて來た。さて精神現象には出鱈目なもの、限定を缺

いたものは何もないのであるから、あなたも多分無意識界がこの數を限定しようと急ぎ、これが意識界から解放されたものである事を期待されるであらう。今しがた私は新聞紙上に歩兵大將(墺國の) E. M. 將軍が退職した事を讀んだ。私がこの人に就いて興味を持つた事をお話ししよう。私が軍醫生として勤務して居た當時、陸軍大佐であつた彼が或る時病院に入院して來た。そして醫師に向つて「あなたは私の病氣を八日間によくして吳れねばなりません。私は皇帝が期待して居られる仕事をせねばなりませんから」と云つた。當時私はこの人の經歷を追うて行かうと企てた。そして今や(1899 年)彼はその經歷の終りなる歩兵大將となり、既に退職したのである。私は彼が何年間にこの道程を辿つたかを計算しようと思ひ、私が 1882 年に彼を病院で見たものと假定した。さうすると 17 年と云ふ事になる譯である。私はこの事を妻に話した處、妻は「さうするとあなたも既に退職して居らねばならぬ譯でせうか?」と云ひ、私はそれに反對して「とんでもない事だ」と云つたのであつた。この對話の後に私はあなたに手紙を書く爲に机に着いたが以前の考へが續いて行つたのに不思議はなかつた。計算は間違つて居た。私はそれに對して確かな點を記憶に持つて居た。私の成年卽ち私の二十四回目の誕生日を私は軍隊の禁錮に於て祝つた。それは私が許可を受けずに休んだ爲であつた。それは 1880 年の事であつてそれから 19 年になる譯である。そこで 2467 と云ふ數が出て來た譯である! さて私の年齡 43 を取り、これ

に24を加へると67と云ふ數が得られる！ 卽ち私も退職する事を欲するかと云ふ問に對して、私はいま24年働き度いと云ふ希望を現はした譯である。外見上私がM大佐の跡を追うて行つた期間に於て、多くを爲し遂げ得なかつた事は私を怒らせたのであつた。而も彼は最早終つてしまひ、自分にはまだ爲すべき事があると云ふ事實には喜悅があるのであつた。斯くして何の氣なしに投げ出された2467と云ふ樣な數字でさへも無意識界からの限定を缺いて居ないと云ふ事が正に云ひ得るのである。』

(3) 一見任意に擇ばれた數字の說明のこの第一例以來、私は度々同じ樣な試みを繰返し、いつも同じ樣な結果を得た。併し大多數の場合は非常に內密な內容を持つて居る爲に報告が出來ないのである。

だから私はアルフレット・アドラー博士 Alfred Adler が彼の知つて居る全然健康な證人から得た「數の偶然」の興味ある分析を此處に加へる事を怠り得ないのである。この證人は次の樣に報告して居る。『昨晚私は「日常生活に於ける精神病理」を讀みにかかつた。そして注意すべき偶發事件が私を妨げなかつたら、その書を讀了したかも知れなかつた。吾人が一見全く出鱈目に意識に呼び起した數が一定の意味を持つものだと云ふ事を讀んだ時、私は實驗をして見ようと決心した。私に1734なる數が思ひ泛んだ。急に次の思ひ付きが次々に起つて來た。1734÷17=

102, 102÷17＝6 次いで私は 1734 を 17 と 34 とに崩した。私は今 34 歳である。私は嘗てあなたに云つた様に記憶しますが 34 歳を少壯時代の最終と見做して居る。だから私はこの前の誕生日には非常に悲しく感じた。私の 17 歳の終りに私にとつては發達の非常に良い面白い時期が始まつた。私は私の生活を 17 年宛に分けて居る。この區分は何を意味するのであらうか？ 私には 102 なる數に關し「レクラム」の萬有文庫の 102 番にはコッツェブーエ Kotzebue の「人嫌ひと後悔」(Menschenhass und Reue) と云ふ戯曲が載つて居る事が思ひ泛んだ。「私の現在の心境は人嫌ひと後悔である。文庫の第六卷――私は澤山な卷を暗記して居る――はミュルネルの「罪」(Schuld) である。私は自分の能力によつて成り得るものにならなかつたのは自分の責任だと云ふ考へに絶えず惱んで居る。ついで私に文庫の 34 番には同じミュルネルのデル・カリベル Der Kaliber と云ふ標題の話が載つて居る事を思ひ付いた。私はこの言葉をカ Ka ――リベル liber に分割し、尚ほこの言葉がアリ 'Ali' カリ 'Kali' を含んで居る事に氣がついた。この事は嘗て私が六歳になる息子のアリ Ali と一緒に詩を作つた事を思ひ出させた。私は彼にアリ Ali に就いて詩を作つて見よと要求した。彼には詩が思ひ付かず、私に作つて吳れと云つた時、私は Ali reinigt den Mund mit hypermangansaurem Kali (アリーは過マンガン酸加里で口を淸めた) と云つた。私共は大笑ひしアリーは大變可愛かつた。此頃私は彼が最早以前の

様な可愛いアリーでない（Ka（Kein）lieber Ali sei）事を不滿ながらも認めねばならぬ。

次いで私は文庫の 17 番は何であつたかと自分で考へて見たが思ひ出せなかつた。併し私は以前には確かにそれを知つて居たのだから、私はこの數を忘れようと欲して居るものと假定した。色々に考へを廻らしたがだめであつた。私は書物の先の方を讀まうと思つたが、ただ機械的に讀むだけであつて、一語も理解し得なかつた。17 と云ふ數が私を惱ませたからである。私は燈を消して更に探した。終に 17 番はシェークスピアの或る戯曲でなければならぬと云ふ事が思ひ泛んだ。併しそれが何であつたらうか？ 私に Hero und Leander が思ひ泛んだ。これは明らかに私の注意を轉向させようとする私の意志の馬鹿な試みであつた。私は終に立ち上り、文庫の目錄をさがした。17 番は Macbeth である。驚いた事には私は「マクベス」と云ふ戯曲に就いては――私がシェークスピアの他の「ドラマ」よりも一層興味を持つたに不拘――殆ど全く知らなかつた。私にはただ Mörder（殺人者）、Lady Macbeth（マクベス夫人）、Hexen（魔女）、「美は醜なり」など及び私がシルレルによる「マクベス」の翻譯を非常によいと思つた事が思ひ付いたに過ぎなかつた。だから私は確かにこの戯曲を忘れようと欲したのであつた。尚ほ私に 17 と 34 を 17 で割れば 1 と 2 になる事が思ひ付いた。文庫の 1 番と 2 番はゲーテの「ファウスト」である。私は以前には自分にファウストの樣な處を多分に見出したのであつた。』

醫師の愼み深さがこの一聯の思ひ付きの意味を洞察せしめない事は遺憾である。アドラーはこの男には彼の分析の綜合が成功しなかつたのだと云つて居る。彼の聯想はこれを續けて行く事によつて 1734 なる數及び觀念の全連鎖を理解し得る鍵を吾人に提供して吳れるのでなければ此處に記述する價値がない譯である。尙ほ引用を續けよう。

『今朝早く私は勿論フロイドの考へ方の正しい事を辯護する一つの經驗を得た。私が夜中に起き上がる事によつて眼をさまさせた私の妻は文庫の目錄をどうしようと思ふのかと私に訊ねた。私は彼女に一部始終を話した。彼女は凡ては詭辯的だと云つた。唯だ面白い事には私が大いに抵抗した「マクベス」の事を彼女は承認した。彼女は數の事を考へても何も心に起つて來ないと云つた。私は答へた。「一つやつて見ようではないか」と。それに對し彼女は 117 と云ふ數を云つた。私はそれに對して直ぐに答へた。『17 は私が一度今あなたに話した事に關係してゐる。尙ほ私は昨日あなたに「妻が 82 歲で夫が 35 歲であつたら非常に不釣合である」と云つた』と。この二三日來私は妻が 82 歲の年とつたお母さんの樣だと云つて妻をからかつてゐた。82＋35＝117 である。』

彼自身の數を何う限定すべきかを知らなかつたこの男は彼の妻が外見上全く勝手に選んだ數を云つた時に直ぐにその解決を見出したのであつた。實際妻は如何なる複合體（Komplex）から

彼女の夫の數が來て居たかと云ふ事はよく理解して居た。そして自分自身の數を同じ複合體から選擇したのであつた。この複合體に於ては二人の年齡關係が問題になつて居たのだからこの複合體は確かに兩人に共通であつたのである。此處に於てこの男に起つて來た數を說明する事は吾人には容易になつたのである。アドラー博士が云つて居る樣に、これは夫の壓迫された希望を現はしたものであつた。それは完全に云ひ現はせば次の意味になるのであつた。「34歲の私には17歲の女が釣合ふ」と。人々が斯くの如き「遊戲」を餘り輕視しない樣にするために、私はアドラー博士から近頃聞いた話卽ちこの分析が發表された後一箇年にしてこの男が妻と離緣*した事を附け加へておかう。

*レクラム叢書拾七號「マクベス」の說明としてアドラーはこの男が十七歲にして國王弑逆を目標とする無政府主義者の結社に入つた事を私に告げた。多分その爲に「マクベス」の內容が彼に忘れられたのであらう。その頃この男は暗號を發明したが、その暗號では文字の代りに數字が用ひられて居たと云ふ事である。

(4) アドラーは强迫性に現はれて來る數の成立に向つて類似の說明を與へて居る。所謂「好きな數」(Lieblingszahlen) の選擇もその人の生活と無關係ではない。そして一定の心理學的興味を缺いては居ない。17と19を特に好きだと自白した或男は暫く考へた後に彼が17歲にして大學に入る事になり、永い間憧憬してゐた大學の自由に到達し、19歲にして彼の最初の大旅行を

やり、その後間もなく科學上の發見をなしたと述べた。この偏好の固定は併し二つの如何はしい事件があつて後に起つたのであつて、この事件の起つた時にこの二つの數が彼の愛の生活に對する意義を得たのであつた。――人々が一見勝手に一定の關係に於て特に屢〻用ふる數も分析の結果は意外な意味に歸し得る事がある。例へば私の一患者は或る日彼が機嫌の悪い時に好んで「その事を私はあなたに 16 乃至 36 回云ひましたよ」と云ふ癖がある事を思ひ付いた。そしてこれに何か原因があるだらうかと自ら訊ねて見た。間もなく彼が月の 27 日に生れ、彼の弟が 26 日に生れた事及び運命は彼の生活から多數の幸福を奪つてこれを弟に向けさせた事を訴ふべき理由があると云ふ事が彼に思ひ泛んだ。卽ち彼は運命のこの不公平な事を自分の生れた日附から 10 を減じ、これを弟の生れた日附に加へる事によつて現はしたのであつた。彼は云つた「私は年齢は多いけれども大いに損をして居る」と。

(5) 私は「數の思ひ付き」の分析に今暫く止まらうと思ふ。何故かと云ふに箇々の觀念の內で意識が全然知らずに居て而も非常に複雜な考慮過程の存在をこれ程顯著に證明するものは他になく、又一方に於て屢〻非難される醫師の共同作業（卽ち醫師の與ふる暗示）がこれ程確實に除外される分析の好例は外にはないからである。私は一患者の「數の思ひ付き」の分析を患者の承諾を得て此處に報告しよう。この人は澤山の子供の中の末子であり、彼が憧憬して居る父を幼時に

亡くしたと云ふ事を述べておく必要がある。特別上機嫌の時に彼に 426718 なる數が思ひ付いた。そして自分に「さてこれに就いて何が思ひ泛ぶであらうか?」と云ふ問題を課した。先づ彼が嘗て聞いた諸諺卽ち「鼻風邪は醫者に治療して貰ふと42日間續き、打捨てておくと6週間かかる」が思ひ付いた。これは數の最初の方の數字に一致する。卽ち 42=6×7 である。この最初の解釋の後に行きつまつたので私は彼の撰んだ六桁の數は 3 と 5 を除く凡ての數字を含んで居ると注意した。すると彼は直ぐに解釋を續けた。「私達は7人同胞であつて私は末子である。3は姉のAに相當し、5は兄のLに相當する。二人共に私の敵であつた。私は子供の時每晩神樣にこの二人の苛責者の命をとつて下さいと祈つた。さて私はここにこの希望を自ら滿足した樣な氣がする。3と5卽ちこの悪い兄と嫌ひな姉は省かれてゐる」と彼は云つた。私は訊ねた。「若しこの數が同胞を意味するとすれば、終りの18は何を意味するだらうか? あなた方は7人だけの同胞ではないか」と。彼は答へた。「私は屢〻父がもつと永く生存して居たら私は末子にはならなかつたであらう。今一人出來て居れば同胞は8人になり、私は今一人小さい子供を私のあとに持ち、その子供に對しては兄として立つて行く事が出來たであらう」と。

これで數は明らかにされたが私共二人は分析說明の最初の部分と其後の部分との間の關係を作らうと望んだ。これは最終の數字のために必要とされた條件卽ち「父がもつと永く生きてゐた

ら」云々から非常に容易に出來た。42＝6×7は父を助ける事の出來なかつた醫師への嘲笑を意味し、從つて父の生存の希望をこの形に於て現はしてゐる。全體の數は元來彼の家庭に關する二つの小兒期願望の充足に相當して居る。卽ち二人の惡い同胞が死亡し、彼のあとに小さい一人の弟妹が出來ればよいと云ふ願望或は最も短的には「愛する父の代りに二人の同胞が死んで居ればよかつた」と云ふ願望の充足に相當するのである。＊

＊簡單にするために私は患者の適切な中間「思ひ付き」の一二を削除した。

(6) 私への通信文の中から一つの小さい例を揭げよう。Lと云ふ處の電信局長が私に手紙を寄越して、醫學を學ばうとしてゐる彼の十八歲半の息子が「日常生活に於ける精神病理」を硏究して居り、自分の兩親に私の說の正しい事を信ぜしめようと努力して居ると云つて來た。私は彼の行つた實驗の一つを討論はぬきにしてここに記さう。

「私の息子は私の妻と所謂「偶然の出來事」に就いて話し合つてゐて、彼女に向ひ一つの詩も一つの數も實際は單に「偶然に」思ひつくものではないと說明した。ついで二人の間に次の樣な對話が行はれた。息子「何んな數でもいいから云つて御覽なさい」――母「79」――息子「何が此場合あなたに思ひ泛びますか?」――母「私は昨日見た美しい帽子の事を考へます」――息子「いくらでしたか其の帽子は?」――母「158マルク」――息子「そら判りました。158÷2＝

79です。あなたは帽子が餘り高價だと思ひ半値なら買はうと考へられたに違ひありません」

息子のこの話に對して私は先づ婦人と云ふものは一般に特に勘定をするものでない事、從つて母も確かに79が158の半分であると云ふ事を明らかにしなかつたに違ひないと云ふ反對意見を述べた。卽ち彼の學說は下意識が正常的の意識よりもよく計算すると云ふ眞實らしくない事實を前提として居ると云つた。處が息子はそれに對して「そんな事は全然ありません。假りに母が158÷2=79の勘定をしなかつたとしても彼女がこの等式を折々見た事は考へられます。そればかりか彼女は夢で帽子を取扱ひその際それが半値であつても何と高價なものだらうと云ふ事を明らかにしたかも知れません」と答へた。」

(7)　數の分析の他の例を私はジョーンズから引用しよう。彼の知合ひの或る紳士が986と云ふ數を思ひ付き、これと彼が考へ出す事との間に關係をつけて吳れと要求した。被實驗者の第一の聯想は永い間忘れて居た諧謔の追想であつた。六年前の年の最も暑い日に新聞紙に寒暖計が華氏の986度を示したと云ふ記事があつた――これは寒暖計の示した實際の度なる98.6の滑稽な誇張であつた事は明らかである。私共はこの對話の間非常に熱い火を前にして坐つて居り、その火から彼は今しがたあとすざりしたばかりであつた。そして彼はこの熱が眠つて居た彼の記憶を呼び起したものであらうと云つたが、多分それは正しい事と思はれた。私は併しさう容易く滿足は

しなかつた。そしてその記憶が何うしてかくも固く彼にこびりついて居たかを知りたいものだと云つた。彼はこの諧謔を非常に笑ひ、これが彼に思ひつく時にはいつも更にこれを面白がつたと語つた。併し私はこの諧謔が特に面白いものだとは思はなかつたから、何か内密な意味が背後にあるだらうと云ふ期待を一層強められただけであつた。彼は次の考へは熱の觀念が彼にはいつも大きい意義を持つと云ふ事であつた。彼は熱は宇宙に於ける最も重要なものであり、凡ての生活の源泉であるなどと云つた。平生非常に無味乾燥なこの若い男のこの熱中は確かに或る説明を必要とした。そこで私は彼に自由聯想を續ける事を要求した。彼の次の考へは彼の寢室の窓から見える工場の煙突であつた。彼は屢〻夕方この煙突から出る煙を眺め、その際いつも「エネルギー」の痛ましい消耗に就いて考へたと云ふ事であつた。熱、火、焰、凡ての生活の源泉、高いうつろな筒からの「エネルギーの」浪費――これらの聯想からして熱や焰の觀念が象徴的考慮に於ていつもさうである樣に愛の觀念と關聯して居る事、强い手淫複合體が彼の數の「思ひ付き」を引起した事は推定に難くはなかつた。彼は私のこの推定を承認する外なかつた。

數の材料が無意識的考慮に於て處理される有樣に就いて好い印象を得ようと思ふ人には Jung の論文「數の夢に關する知見補遺」(精神分析中央雜誌第一卷、一九一二年) 及び Jones の他の論文「數の無意識的處理」(精神分析中央雜誌第二卷、五頁、一九一二年) を指示しよう。

私自身に於けるこの種の分析に於て二通りの事が特に眼立つて居る。第一に私が正に夢遊病者的の確實さに於て未知の目標に向ひ突進し且つ計算する考慮過程に沒入し、次いでこの考へが急に求むる數に到達する事並に全部の後作業が非常に速かに實行される事である。第二には併し私が元來計算の拙な人間であり、年數や家の番號等を意識的に記憶する事の非常に困難な人間だのに無意識的考慮作業に關しては迷信に陷る傾向ある事を見出すのである。この傾向のよつて來る源泉は私には永い間判らない儘になつて居る。*

*ミュンヘンのルドルフ・シュナイデル Rudolf Schneider は斯くの如き數の分析の證明力に對して興味ある反證を擧げた。(『フロイドの數の「思ひ付き」の分析的研究に就いて』(Internat. Zeitschr. f. Psychoanalyse, 1920, Heft 1) 彼は與へられた數、例へば開いた歷史書に於て最初に眼に入つた數を捉へ、或は自分の撰擇した數を他人に提示し、次いでこの外部から押しつけられた數に對しても外觀上限定された「思ひ付き」が起つて來るか何うかを觀察した處實際に起つて來た。彼が報告して居る自分自身の例では——シュナイデルの實驗では數が外から與へられたものであり、限定を必要としない譯であるのに——自發的に泛んで來た數に就いての吾人の分析に於けると同樣に豐富であり、且つ意味深長な限定が現はれた。他人に就いての第二の實驗では彼は明らかに問題を餘りに容易なものにした。何となれば彼はその人に2と云ふ樣な數——その數の或る材料による限定が何人にも達せられる筈である——を課したからである。——さてシュナイデルは彼の經驗から二通りの事を推論して居る。第一は精神（das Psychisch ）は數に對しても概念に對すると同樣、聯想の可能性を有する事、第二は自發的の數の「思ひ付き」に對してこれを限定する「思ひ付き」が泛んで來てもこの數がそれの分析の際に見出される觀念から出て來たと云ふ證據にはならないと云ふのである。さて第一の推論は疑

ひもなく正しいものである。吾人は與へられた數に對しては話しかけられた言葉に對すると同樣に適當な事を同じく容易に聯想し得るのである。そればかりか多分一層容易である。何故なれば小さい數字の聯想能力は特に大きいからである。人々はこの場合には單純にブロイレル、ユング學派に依つて縱橫に研究された所謂聯想實驗の狀態にある事になる譯である。この狀態に於ては「思ひ付き」(反應)は與へられた言葉(刺戟語)によつて限定されるのである。併しこの反應は尙ほ非常に多種のものであり得るのであり、ユングの實驗はそれ以上の區別も亦「偶然」に委されるものではなく――無意識的複合體が刺戟語によつて觸れられる場合には――この複合體が限定に參與する事を示したのである。

シュナイデルの第二の推論は極端に走り過ぎて居る。與へられた數或は語に對して適當な「思ひ付き」が泛んで來ると云ふ事實からは自發的に泛んで來た數(或は語)の根源を究める事に向つて何の結論も引出し得ないのであり、この事は已に以前から問題にならなかつた事である。これらの思ひ付き(言葉或は數)は限定されてゐないか、或は分析によつて出て來る觀念に限定されてゐるか、或は分析に於ては現はれなかつた他の觀念によつて限定されて居るのであつて、この後の場合には分析は吾人を邪道に導いた事になるのである。吾人はこの問題が數に對しては言葉の「思ひ付き」に對するとは別だと云ふ考へを捨てなければならない。この問題の批判的研究、從つて精神分析の思ひ付きの方法(Psycho-analytische Einfallstechnik)の辯護は本書の目的外の事である。精神分析の實地に於ては吾人は上述の第二の可能性(即ち「思ひ付き」は分析によつて出て來る觀念に限定されて居ると云ふ事)は當つて居り、大多數の場合に於て利用し得るものだといふ假定から出發して居る。或る實驗心理學者の研究はこれが本當らしい事を教へた(ポッペルロイテル Poppelreuter)(尙ほこの點に就いてはブロイレルが「自閉的無規律的考慮…」(Das autistisch-undisziplinierte Denken u. s.w.1919.) と云ふ著書に於ける「心理學的認識の蓋然性に就いて」と云ふ章に述べて居る注意に値する詳論と比較せよ。)

數のみでなく、他の種類の言葉の「思ひ付き」も分析的研究の結果はいつもよく限定されて居

る事が證明されても別に不思議はない。

(8) 絶えず現はれ、追掛ける樣に起つて來て人を惱ます言葉の根源を究める事の好例がユングの診斷學的聯想研究(Diagnostische Assoziationsstudien, IV, S. 215)に出て居る。「一婦人が數日來絶えず Taganrog と云ふ言葉が口について居て、而もそれが何處から來るのか判らないと語つた。私は婦人に最近に起つた事で強い感情を帶びて居た出來事や壓迫された願望に就いて訊ねた。少しく躊躇した後に彼女は Morgenrock (朝衣) が非常に欲しかつたが夫はそれに對して興味を持たなかつたと語つた。Morgenrock Tag…… an…… rock ……吾人は此處に部分的に存する意義並に音の類似を見るのである。この語が露西亞語の形を取つた事の限定は殆ど同時頃にこの婦人がタガンローグから來て居る人と知合ひになつた事から來て居るのであつた。

(9) エー・ヒッチマン博士 E. Hitschmann のお蔭で私は此處に別の一例をあげよう。この例では詩句が一定の場所に於て繰返して腦裏に泛んで來、而もその由來や關係が判らなかつた。

『法學博士E君の話「私は六年前にビアルリック Biarritz からサン・セバスチアン San Sebastian へ汽車旅行をした。汽車は佛國とスペインの境をなして居るビダッソア河 Bidassoa をよこぎるのであつた。鐵橋の上では好い眺めがあり、一方には廣い谷とピレニー山脈(Pyrenaen)を見渡し、他方には廣い海を見るのであつた。それは非常に天氣の好い明るい夏の日であ

つた。凡てのものは陽光を浴びて居た。私は夏期休暇旅行の途にあり、西班牙に行く事を樂しみにして居た。其時私に Aber frei ist schon die Seele, schwebet in dem Meer von Licht.(併し靈は既に自由となり光の海に漂ふ）と云ふ詩句が思ひ泛んだ。私はその時何處からこの詩句が來たものだらうかと考へた。而もそれを思ひ出す事が出來なかつた事を記憶して居る。韻律から推してこの句は私が全然忘れた或る詩から來て居るに相違なかつた。この詩句はその後繰返し思ひ泛んだので私は二三の人にも訊ねて見たが何も判らなかつた。

昨年私はスペインからの歸途同じ鐵道を旅行した。それは眞暗な夜であり、雨が降つて居た。私は最早國境停車場に着いたか何うかを見ようと思つて窓の外を眺めた。すると私共はビダッソア鐵橋の上に來て居た。直ぐに私に前記の詩句が思ひ出された。そして矢張り私はそれが何處から來たのか思ひ出し得なかつた。

二個月後私は家に居て、ウーランドの詩書を手にした。私がその書を開くや私の視線は Aber frei ist schon die Seele, schwebet in dem Meer von Licht. なる詩句に落ちた。この句は「巡禮者」(Der Waller) と云ふ詩の終句をなして居た。私はその詩を讀んだ。そして多年前に私が一度それを讀んだ事を極めて漠然と思ひ出した。脚色の舞臺がスペインになつて居り、この事が今引用した詩句と鐵道の上記の場所とを結ぶ唯一の關係であるやうに私には思へた。私は

この發見で十分滿足出來なかつた。そして機械的に書物の頁をだんだんと繰つて行つた。Aber frei ist schon u. s. w. なる詩句は頁の終りの處にあつた。頁を繰る際に私は次の頁に Bidassoabrücke（ビダッソア鐵橋）と云ふ標題の一詩を見出した。

尙ほ私はこの詩の內容は私には前に述べた詩よりも一層疎いものに思はれた事及び初めの方の詩句は「ビダッソア橋上に白髮の老聖者が立つて居り、右方はスペインの山々を祝福し、左方は佛蘭西の高原を祝福して居る」と云ふにあつた事を述べておかう」』

(B) 一見隨意に擇ばれた名や數に限定があると云ふこの認識は他の一つの問題を明らかにする事に多分貢獻するであらう。絕對的の心的定命論の假定に對しては多數の人々が自由意志の存在の强い確信感を楯に取つて反對して居る事は人の知る處である。この確信感は實際に存在し、定命論の信念に對しても讓步しないのである。これは他の凡ての正常的感情と同樣に何かによつて立證されなければならない。併し私が觀察し得る範圍內ではこの確信感は非常に重要な意志決斷の場合には現はれないのであつて、斯くの如き場合には吾人は却つて心的强迫の感を持ち、好んでこの感を引合ひに出すものである。（ルーテルの言「此處に私が立つて居る。私は他にしやうがない」と比較せよ）一方に於て些細な何うでもよい樣な決斷の場合には吾人は他に致し方があつた事、從つて何の動機も存在しない吾人の自由意志によつて行動したと斷言しようとするので

ある。吾人は分析したからとて自由意志存在の確信感を持つ事の權利を放棄する必要はないのである。吾人が意識界からの限定と無意識界からの限定とを區別すれば、確信感は意識的動機卽ち吾人の凡ての運動の決斷に行き亙るものではない事を報ずるのである。Minima non curat praetor（執政官は小さい事を意に介せず――大は小を顧みず）である。斯くして一方の側から取り殘されたものは他の側卽ち無意識界からの動機を受け以て精神界に於ける定命論が完全に實施*されて行くのである。

＊一見隨意的な心的作用に對する嚴しい限定に就いてのこれら見解は已に心理學上――多分又司法上に豐富な成果を齎した。ブロイレルとユングは所謂聯想實驗の際に起る反應をこの意味に說明した。この實驗では被研究者は自分に呼び掛けられた言葉に對して自分に思ひ浮ぶ最初の言葉を以て答へ（刺戟語――反應語）、尙ほその際に經過した時間（反應時）を測定するのである。ユングは彼の「診斷學的聯想研究」（一九〇六年）に於て、かく解釋された聯想實驗が非常に微妙纎細に働く鑑識法を吾人に與へる事を示した。刑法學者なるプラーグのハー・グロース H. Gross の二人の門下生ウエルトハイマー Wertheimer 及びクライン Klein はこの實驗から刑法上の實例に於ける「實相診斷」（Tatbestanddiagnostik）の方法を發達させ、それの吟味は心理學者及び法學者によつて行はれて居る。

(C)　意識的考慮は上述の失錯作業の動機に就いては全然無智であらねばならぬ。併し動機の存在の心理學的證據を發見する事は望ましい事であらう。實際無意識界の深い知識によつて得られた根據から斯くの如き證據が何處かに見出される可能性が出て來た譯である。實際この動機の無

意識的であり、從つて移動された智識に相當する現象が二つの分野に於て認められる。

(a)　平生吾人が何とも思はぬ極めて些細な他人の行動の細目に絕大の意義を附し、これを解釋し以て遠大なる結論の基礎にする事は偏執病者の狀態に於ける顯著であり又周知の特徵である。例へば私が最近診た偏執病者は人々が彼の停車場に於ける旅立ちに際して一定の手の運動をしたと云ふので彼の周圍の人々の一致團結を結論した。他の一患者は人々が何う云ふ風に街路を步くか、どう云ふ風に「ステッキ」を振り廻すかと云ふ樣な事を注意した。*

*他の觀點から出發して他人に於ける重要ならず且つ偶然的な事がらを斯く判斷する事を吾人は關係妄想（Beziehungswahn）と名づける。

心的作業及び失錯作業の一部であつて正常人が偶然の事だとか或動機を必要としない事だと認めようとし、或は實際にさう認める事柄を偏執病者は他人の心的表現に適用する事を拒むのである。彼が他人に認める凡ての事は意味深いものであり、解明し得べきものであるのだ。これは何うしてさうなるのであらうか?　多分彼はこの場合及び多數の他の類似の場合に自分自身に無意識的に存する事を他人の精神生活に投影するのである。偏執病に於ては吾人が正常人及び神經症者に於て精神分析によつて初めて無意識界に存在する事を立證し得ると同じ雜多な事が意識界に侵入し來るのである。だからこの場合或る意味に於ては偏執病者は正しいのである。彼は正常人

には見えない事を認めるのであり、又正常的の考慮能力よりも鋭く物を見るのである。併し斯く認識した事を他人に轉嫁する爲に彼の認識は無價値のものになつてしまふのである。讀者諸君は私が凡ての偏執病的解釋を辯護するものと勘違ひしては困るが吾人が偶然行爲の理解に關して偏執病者が正しいと認めるならば偏執病者がこれら凡ての解釋に對して持つ確信の心理學的理解を容易にするであらう。この解釋には確かに多少の眞理があるのである。病的とは云ひ得ない吾人の判斷錯誤に伴ふ確信感も同じ有樣で生ずるのである。この確信感は誤りたる考慮進行の或る部分或はそれの由來する源泉に向つて是認され、ついで吾人によつて他の關係に押しひろめられるのである。

*例へば精神分析によつて意識的にされる「ヒステリー」患者の性的並に殘酷なる虐待に關する空想は凡ての細目に亘つて被追跡偏執病者の訴と重なり合ふ事が折々あるのである。同じ内容の事が又現實の事として色情倒錯症者に彼等の情慾を滿足する爲の工夫として現はれる事は注意すべき事であり、而も決して不可解な事ではないのである。

(b) 迷信の現象は偶然行爲及び失錯行爲の動機が無意識的のものであり、且つ移動されたものであると云ふ事の一つの證據となる。私はこれらの考へ方の出發點となつた小さい經驗を論ずる事によつて私の考へを明らかにしようと思ふ。

休暇旅行から歸ると間もなく私の考へは新たに始まつた年度に於て取扱ふべき患者に向ふので

ある。私の第一着手は多年來毎日二回宛同じ醫療上の手當を與へてゐた非常に老年の婦人に關係する。この單調の爲に患家に行く途上及び治療中、私に無意識的の考慮が非常に屢〻あらはれる。彼女は九拾歳以上であつた。從つて毎年の初めに於て、彼女が何時迄生存して居るであらうかと云ふ疑問を抱く事が手近にあつた。私が今話して居るその日には私は急いで居たので私を彼女の家の前迄連れて行つて呉れる車を雇つた。私の家の前の駐車場に居る御者達は、皆老婦人の住所を知つて居る。それはどの人も既に度々私を其處へ案內して行つた事があつたからである。今日は偶々御者が彼女の家の前ではなく、近くの實際によく似た樣に見える平行街路の同じ番號のついて居る家の前に止まつたとする。そして私が間違ひを認めて御者を責め御者がおわびを云つたとする。この老婦人の居ない家の前に引張つて行かれた事に何か譯があるであらうか？　私にとつては確かにそんな事はないのである。併し若しも私が迷信的人間であつたらこの出來事を今年が老婦人の最終の年だと云ふ運命の前兆と考へるであらう。歷史上に保存されて居る非常に多數の所謂前兆はこれ以上良好なる象徵には基いて居ない。勿論私はこの出來事をそれ以上深い意味を持たぬ事と說明するのである。

若しも私が徒步で行き、而も或る考へに熱中して居るか、或は放心狀態に於て隣町の家の前に間違つて行つた場合には事態は全然別である。その場合には私は決して偶然事とは云はず、無意

識的企圖を有し、解釋を必要とする行爲であると說明するであらう。この行き損ひ Vergehen に對して私はこの老婦人にやがて逢はなくなる時節が來る事を期待して居るものと解釋せねばならぬであらう。

卽ち私は迷信家と次の點に於て違つて居るのである。私の精神生活が無關係で成立した出來事が私に現實界の未來の姿に就いての隱れた何かを敎へ得るとは私は信じない。併し私は私自身の精神活動の思はぬ表現は勿論私の精神生活の隱れた何かを顯現するものと信ずるのである。私は外的（現實的）偶然はこれを信ずるが、內的（心的）偶然は信じないのである。迷信家はこれと反對である。彼は自分の偶然行爲や失錯作業の動機に就いては何も知らず、心的偶然があり得るものと信じて居る。その代り彼は外的偶然に對して將來實際の出來事に現はれるかも知れぬ意味を附與し、偶然の事を外部にあつて彼には判らぬ何かの現はれと見ようとする傾向がある。私と迷信家との差は二つあるのである。第一に迷信家は私が內に求むる動機を外に投影するのである。第二に私が偶然の原因を考慮に求めるのに彼は出來事によつて偶然を說明するのである。併し彼にとつて隱れて居る事と云ふのは私にとつての無意識界に相當する。*そして偶然を偶然として捨ておかず、これを解釋しようとする强迫は私共兩方に共通である。

*私は此處に立派な一例を書き添へよう。この例に於てエヌ・オッシポフ N. Osipow は迷信的・精神分析的及び神

祕教的解釋の差異を說明して居る。（「精神分析と迷信」Internat. Zeitschr. f. Psychoanalyse, VIII, 1922.）彼は露西亞の或る地方の小都會で結婚し、その直後新妻と一緖にモスコウに向つて汽車旅行をして行つた。目的地に達する二時間前の或る停車場で彼に驛の出口迄行つて町を一瞥して來ようと云ふ希望が起つて來た。列車は彼の期待した處では十分永い間停車して居る筈であつた。ところが彼が數分間の後に引返して來た時には列車は彼の若い妻を乘せたまま出發して了つて居た。家に居た彼の老母はこの偶然の出來事を聞いた時首を振りながら「この結婚には碌な事はあるまい」と云つた。その際オッシポフはこの豫言を一笑に附した。併し五個月後彼が妻と離婚したので彼は後から考へて見て自分が列車を去つた事が結婚に對する「無意識的抗議」(unbewusster Protest) であると解せざるを得なかつた。この失錯作業の起つた都市は多年の後に彼に向つて大なる意義を持つ事になつた。それは運命が彼と密接に結びつけた或る人物がここに住んで居たからであつた。この人のみならずこの人の存在の事實は當時彼には全然未知であつたと云ふ。併し彼の態度の神祕教的說明は次の樣であつたであらう。「彼はかの都市に於てモスコウ行の列車と妻を捨てた。それは右の人物に對する關係を豫滿して居た未來がそれをほのめかさうとしたからだ」と。

さて私は心的偶然事の動機に對する意識的無智及び無意識的知悉が迷信の心的根源の一つであると假定する。迷信家は自己の偶然的行爲の動機を知らず、而もこの動機の事實はそれが承認を得る事の出來る場所に向つて迫つて行く結果、彼は外界に移動せしむる事によつてこれを處理するやうに餘儀なくされるのである。斯くの如き關係が存するならば、これはこの個々の場合に限られるものではないのである。實際私は近世の宗教に迄も廣く浸潤して居る神話的世界觀の大部分は外界に投影された心理學に外ならぬ事を信ずるものである。無意識界の心的要素及び關係の

漠然たる認識*（いはば心內知覺）——これを別の有樣に云ひ現はす事は困難である。この場合吾人は偏執病との類推を參考にせねばならない——が超感覺的（形而上の）現實の構成に反對して居るのであり、この超感覺的現實は科學によつて再び無意識界の心理學に變化させらるべき運命を持つて居るのである。吾人は樂園の神話及び人間墮落の神話、神、善惡、不死其他の神話をば斯くの如き有樣に說明し、形而上學 Metaphysik を異型心理學（Metapsychologie）に轉換する事を敢てし得るであらう。偏執病者に於ける移動と迷信家のそれとの間には一見大きい隔りがある樣に見えるがこれはさ程大きくないものである。人類が考へ始めた頃には外界を神人同性同形說的に自分自身の像にかたどつた多數の人物に分解する事を餘儀なくされた事は人の已に知つて居る處である。だから彼等が迷信的に說明した偶然の出來事は人々の行爲や表現であつたのである。從つて彼等は他人が自分等に與へる眼立たぬ徵候から結論を引出す偏執病者の如き態度を取つたのであり、又自分の仲間の人々の偶然であり、故意でない行爲を自分の人格を評價する土臺にする健康者の如き態度を取つたのであつた。迷信は吾人の自然科學的であり、而も未完成な近世の世界觀に於てのみ非常に排斥すべきものに見えるのである。科學以前の時代並に人類の世界觀に於ては迷信は正當とされ又矛盾なきものであつたのである。

*これは勿論何等認識としての特徵を持たないものである。

從つて鳥が逆の方向に飛ぶのを見て重要な計畫を抛棄した羅馬人の態度は比較的正しかつた譯である。彼は自分の假定に從つて矛盾なく行動したのであつた。併し若しも彼が閾に躓いて倒れた（羅馬人は歸るであらう un Romain retournerait）からと云ふので企圖を中止したとするならば、彼は吾人迷信を信ぜざる者に比して絶對にまさつて居たものであり、吾人が目標として居る心理學者よりも遙かに偉い心理學者であつたものと云つてよいのである。何となればこの躓きは彼に疑惑の存在、内心に逆流の存する事を證するものであり、この逆流の力は實行の瞬間に於て彼の企圖から力を拔取る事になり得るからである。卽ち吾人は全力を纏めて之を吾人の望む目標に傾倒する時のみ確實に完全に成功を得るのである。自分の男兒の頭上から林檎を射落す事に非常に永い間躊躇したシルレルのテルは「何故二本目の矢を用意したのか？」と云ふ代官の問に對して何と答へたか？*

*我れ若し愛兒を射るが如き事あらばこの矢で我れは――汝を射貫くのだ。そして汝ならば――確かに我れは射損じない。

(D)　人間の隱れた精神的傾向を精神分析法で研究する機會を持つ人は迷信に現はれる無意識的動機の性質に就いても一二の新らしい事を述べる事が出來る。非常に聰明であり、強迫考慮や强迫狀態を示す神經質者に於て時に吾人は迷信が被壓迫的なる敵對的並に殘忍性傾向から出る事を

最も明らかに認め得る。迷信は大部分は凶事の期待である。他人に對して惡い事を希望し、而も好い躾けの爲にこの種願望を無意識界に壓迫して居る人は、この無意識的の「惡」に對する懲罰を外部から彼に迫つて來る凶事の形に於て期待する傾向を特に持ち易いのである。

吾人は右に述べ來つた事に依つて迷信の心理を決して云ひ盡しては居ない事を認めるが、一方に於て吾人は少なくとも迷信の眞の根源が全然否定さるべきものであるか何うかの問題、實際に於て凶兆、豫言的の夢、千里眼的經驗、超感覺的の力の現はれ等は無いものであるかどうかと云ふ問題に輕く觸れなければならない。私はこれらの現象——それに就いては智的に秀でた多數人々の深く立ち入つた觀察があり、尙ほ今後の研究の最上の對象となるべき——を一概に即座に否認しようとは更々思はない。それればかりかこれら觀察の一部を吾人現在の無意識的精神過程の認識により、吾人今日の見解に根本的變改を加へる事なしに説明し得るに到らん事が望ましいのである。*例へば若しも降神術者によつて主張されて居る樣な他の現象が證明されるならば、吾人は宇宙に於ける事物の關係に關して、途方に暮れる事なく、吾人の法則を新らしい經驗に從つて變改しようと企てるであらう。

＊エー・ヒッチマン「千里眼批判」Wiener Klinische Rund ch u, 1910, Nr. 6. 及び「詩人とその父、宗教家の改宗並に遠隔精神作」の現象の心理知見補遺」Imago, IY, 1915/16.

これらの說明の範圍內に於て私はここに揭げられた諸問題を單に主觀的に卽ち私の個人的經驗に據る以外には答へる事が出來ない。殘念ながら私は無價値な人間の部類に屬して居る事を自白せねばならぬ——この部類の人間の前に出ると心靈もその活動を止め、超感覺的のものは見えなくなるものである——從つて私は自ら不可思議な事の存在の信念を呼び起す樣な事を經驗し得た事はないのである。私は凡ての人々と同樣に豫感を持つた事もあり、又禍を經驗した事もあつた。併し兩者はお互に避け合ひ爲に豫感はあつても何事も起つて來ず、又不幸は豫感なしに私を襲つて來た。私が單獨で外國都市に住んで居た青年時代、私は非常に屢〻急に私の名を紛ふ方なき親しい人の聲で呼ぶのを聞いた事があつた。そしてこの樣な場合私は幻覺の起つた時間を書きつけて置いた。それは其時に何が起つたかを家に殘つて居る人々に訊ねる事が出來る樣にする爲であつた。處がそれは何でもなかつた。反對に私はその後何等の豫感もなく靜かに患者を取扱つて居たが、その間に私の子供は出血によつて死に瀕して居た事があつた。又患者達が私に告げた豫感の內で一つとして私の承認を得る事の出來るものはなかつた。但し私はこの二三年間に一二の注意すべき經驗をした事を自白せねばならぬ。これらの經驗は遠隔精神作用的思想傳達（以心傳心）を假定する事によつて說明し得るかも知れない。

豫言的な夢を信ずる人は多數にある。それは願望が先以て夢の中に作り上げた通りに二三の事*

が其後實現されると云ふ事實に支持されるからである。併しこの事にはあまり不思議はないのであつて、夢と實現との間には通常廣大たる距離があるのだが夢見る人の輕信がこれを忽諸に附するのである。豫言的の夢と名づけても無理だとは云へない様な夢の好例を或時聰明で眞理を好愛する一婦人患者が詳細に分析をして吳れと云つて私の處へ持つて來た。彼女の語る處によると或時彼女は以前の友であり、且つかかりつけの醫師であつた人に或る街路の或る商店の前で逢つた夢を見た。そして彼女が翌朝市の中心に行つた時に夢に見た場所で實際その人に出逢つたと云ふのである。私はこの不思議な合致の意義は後に起る何等の經驗によつても證明されず、即ち將來の事からは立證され得なかつた事を認めるのである。

*フロイドの「夢と遠隔精神作用」(Imago, VIII, 1922.)…フロイド全集第三卷に收められてゐる。

注意して調べた結果、この婦人が右の夢を見た夜の後、早朝散歩に出て醫師に出逢ふ迄にこの夢を思ひ出したと云ふ證據が少しもない事が判つた。この出來事から凡ての不可思議な事が取去られ、唯だ興味ある心理學上の問題のみが殘る様な有様に迄事情が明らかにされた時、彼女は何等反對を唱へる事が出來なかつた。彼女は或日の午前街路を歩き、その店舗の前で年とつた彼女の家のかかりつけの醫師に出逢つた。そして彼を見た後に彼女がその前夜その場所でのこの邂逅を夢みたと云ふ信念を得たのであつた。分析の結果は彼女が如何にしてこの信念——この信念は

一定度迄信憑するに足るものであつた――に到着したかを大凡ながら示す事が出來た。豫めの期待通りに一定の場所で人に出合ふと云ふ事は勿論媾曳の事である。この老家庭醫は彼女に古い以前の記憶を呼び起させたのだ。その當時にはこの醫師とも親しくしてゐた第三者の男との媾曳は彼女にとつては非常に重要な事であつたのである。この男とは彼女はその後も交際して居り、右の夢を見た日の前日彼女はその男との媾曳に待呆けを喰つたのであつた。若し私がここに存した關係を詳細に報告する事が出來たら昔の友（老家庭醫）に會つて思ひ出したと云ふ豫言的な夢の錯覺は多分次の話に等しい事を容易に示し得たであらう。「ああ先生!! あなたは今私に昔を思ひ起させます。あの頃は私はNと媾曳の約束をした場合に決して待呆けを喰はされる事はありませんでした」

或人の事を丁度考へて居る時にその人に出會ふ事はよくある事だが、この「不思議な邂逅」の簡單にして容易に說明し得る例を私は經驗した。これは多分同じやうな場合の模範となるものである。君主國においては大なる權威を附與される大學教授の稱號が私に授けられた數日後、市の中心部を歩いて居て私の考へが急に或る兩親に對する子供臭い復讐の空想に向つて行つた。この兩親は一二個月前私を彼等の小さい娘の處へ呼び迎へた。この娘には或る夢に續發して興味ある强迫現象が起つて居た。私は原因を見透し得るものと信じたこの症例に非常な興味を持つたが、

兩親は私の治療を拒み、催眠術療法を施す外國の或る權威者に賴まうと思つて居ると云つた。さて私はこの兩親はこの試みが全然不成功に終つた後になつて私に「完全にあなたを信賴して居るのだから治療を始めて呉れ」と賴んで來るであらうなどと空想した。併し私はこの空想に答へた。『勿論私が「プロフェッソール」になつた今日、彼等は信賴を持つだらう。稱號は私の能力を變化させはしなかつたのだ。お前等は講師としての私を用ふる事が出來なかつたのだから教授としての私をも缺き得るだらう』と。この時私の空想は聲高い挨拶『お芽出度う「プロフェッソール」さん』によつて中斷された。そして私が見上げた時たつた今彼等の要求を斥ける事によつて復讐したその兩親は私の傍を通り過ぎた。これは一見「不可思議の事」の樣だが次に起つた考へは之を打壞してしまつた。私は眞直ぐな廣い而も殆ど人通りのない街路上をこの二人に向つて歩いて行き、多分二十歩位離れた處で彼等の威嚴ある人柄をチラと眺めてそれを認識した。併しこの知覺は——消極的幻覺 negative Halluzination（譯者註＝消極的幻覺と云ふのは幻覺とは逆に當然起るべき知覺が起らないのを云ふのである。）の原型に從つて——上記の感情的動機によつて片付けられてしまひ、ついでこの動機は一見自發的に泛び出た空想の形で現はれたのである。

「外觀上の豫感」の他の分析例を私はオットー・ランクによつてここに報告しよう。

『つい先頃私はかの「奇なる邂逅」即ち今考へて居た人に出逢ふ場合の珍しい一異型を經驗した。

「クリスマス」の直前私は十箇の新らしい「クローネ」銀貨を贈物にする目的で兩替しようと思ひ墺匈國銀行に行つた。私の尠ない持金と、銀行の中に積まれてある澤山な金高との對照に關聯する功名心に滿ちた空想に耽りながら、私は銀行の在る狹い銀行横丁に入つて行つた。玄關の前には自動車が止まつて居て多數の人々が出入して居た。私は銀行員が僅かな數の「クローネ」でも取替へて呉れるだらうと思つた。兎も角も私は早く片付けたいと思ひ兩替すべき紙幣を置いて「私に金貨 Gold を下さい！」と云つた。――直ぐ私は自分の誤りに氣付いた――私は勿論銀貨を要求すべきであつたのだ――そして私は空想から目ざめた。私は入口からやつと數歩離れた處に居た。そして一人の若い男が自分の方に歩いて來るのを見た。私はそれが知人の樣に思はれたが、私が近視眼であるために未だ確かにそれと認識する事が出來なかつた。彼が近づいた時に私は彼が Gold と云つて私の兄弟の學校仲間である事を認めた。この人の兄弟で有名な著述家から私は自分の文學者としての經歷の初めに大いに援助を期待したが援助を受ける事が出來なかつた。その爲に銀行へ行く途上で私が空想した樣な物質上の成功も得られなかつたのであつた。だから私はゴルド君の近づいて來るのを無意識的に認めたに違ひなく、彼は物質的成功を夢みつつある私の意識を刺戟し、出納係に向つて價値少ない銀貨の代りに金貨を要求するやうにさせた譯である。一方に於て私の無意識界が對象を正しく知覺し得たのに私の眼は後になつてから漸くこれを

認識したと云ふ矛盾した事實も亦一定度迄はブロイレルの「複合體の準備」“Komplexbereitschaft”(Bleuler)と云ふ事から說明されるのであつて、この準備は勿論物質を目標として居り、私の一層高尙な知識とは反對に私の步みを金貨及び紙幣の交換のみの行はれるかの建物の方向に導いたのであつた(Zentralblatt f. Psychoanalyse, II, 5.)』

「不思議な事」「不氣味な事」の範疇には又かの特有な感覺も屬するのである。これは吾人が或時或狀態に於て恰かも吾人が丁度其の事を旣に一度經驗し、或は同じ狀態に旣に一度あつた樣に感ずるものであり、而も骨折つて見ても斯くの如く現はれて來る以前の事を明らかに追想し得ないのである。私は斯くの如き瞬間に吾人に起り來るものを感覺 Empfindung と名づける事は明確な言語の用法に從つて居るものだとは思はない。私は多分これは判斷であり特に認識判斷であると思ふ。兎も角もこれらの場合は全然特有な性質を具へて居り、吾人がその求むるものを決して想ひ出し得ないと云ふ事實は無視する事の出來ない點である。此の Déj vu(「旣に見た事がある」)なる現象が個體に於ける以前の心的存在の證據として今迄に眞劍に用ひられた事があるかどうかは私は知らない。併し心理學者はこの現象に興味を持ち、この謎を色々の思索的方法によつて解決しようと努力した。提示された說明の試みは一つとして私には正しいとは思はれない。何となればどの說明にもこの現象の隨伴現象及び補助的條件だけしか考慮されて居ないからであ

る。私の觀察によれば "Déja vu" の說明に向つて獨りその責に任じ得るかの心的過程卽ち無意識的空想は今日に於ても尙ほ心理學者から一般に看過されてゐる。

既に一度經驗したと云ふ事の感じを錯覺 Illusion と名づける事は正しくないと私は考へる。却つて斯くの如き瞬間に於て本人が既に一度經驗した或る事が實際に觸れられるのである。唯だこの事が未だ嘗て意識されなかつたために、意識的に追想され得ないのである。"Déja vu" の感覺は簡言すれば無意識的空想の追想に相當するものである。意識的の空想——斯くの如き意識的創造物のある事は各人が自分の經驗から知つて居る事である——があると同樣に無意識的空想卽ち幻想 Tagträume があるものである。

私はこのデジャーヴーの現象は詳細なる硏究の價値あるものである事を知つて居る。併し此處にはその唯一つの分析例を揭げるだけにしようと思ふ。この例に於て顯著であつた事は感覺が特に强く又永く續いた事であつた。現在三十七歲になる一婦人は彼女が十二歲半の年に田舍に居る學校友達の家へ最初の訪問をした。彼女が庭園に入つた時、直ぐに彼女は前に此處へ一度來た事があつたと云ふ感覺を持つた事を非常に明瞭に記憶して居ると主張した。この感覺は彼女が屋內に入つた時に今一度起り、彼女は其次にどんな室があり、その室からはどんな眺望があると云ふ事迄豫め知つて居た樣な氣がした。併しこの知つて居ると云ふ感じはこの家及び庭園への以前の

――例へば彼女の幼時の――訪問に基く事は全然除外されて居り、彼女は兩親にも訊ねて見たがそれは否定されたのであつた。これを報告した婦人は心理學的說明を全然求めようとはせず、この感覺の起つた事は是等の女友達が其後彼女の感情生活に向つて重要な意義を持つ様になつた事の豫言的指示であると考へたのであつた。併し彼女にこの現象が現はれた事情を考察した處、吾人は別の解釋の道に導かれた。彼女がこの訪問をした時彼女は友人なる少女達が唯一人の重病に罹つて居る兄弟を持つて居る事を知つて居た。彼女はこの訪問に際してこの兄弟の人を見た。そして彼の狀態が非常に惡さうに見え、彼が間もなく死ぬであらうと思つた。さて彼女の唯一人の兄弟は一二個月前に「ヂフテリア」症に罹り非常に重態であつた。彼が病氣して居た間彼女は兩親の家から遠ざかり數週間親類の家に住んで居た。彼女は自分の兄弟もこの田舍への訪問に一緒に出かけたものと信じた。それればかりか、これが彼の病後に於ける最初の稍〻大きい遠足であつた様に思つた。併しこれらの點に於ける彼女の記憶は著しく不確實であつた。而も他の凡ての細目、特に彼女がその日に着て行つた着物は彼女が眼前に見る様に非常に明らかに記憶して居た。專門家にはこの徵候から彼女の兄弟が死ぬだらうと云ふ期待が當時この少女に大きい意義を持つて居り、而もこの期待は全然意識されなかつたか或は病氣が幸福な轉機を取つた後に強く壓迫されたものである事を推論するに難くないのである。他の場合（兄弟が死んで居た場合）には彼女

は別の着物即ち喪服を着ねばならなかつたであらう。處で彼女は彼女の友達に同じ境遇即ち唯一の兄弟が間もなく死ぬべき危險にあると云ふ狀態を見出したのであつた。而も此事は其後間もなく實際に起つたのであつた。彼女はこの狀態を數個月前に自らも經驗したと云ふ事そのものを意識的に想起すべき筈であつたのである。然るにこの事が壓迫作用によつて妨げられて居た爲に彼女は此事を想ひ出さず、その代りに記憶の感を場所・庭園・家等に轉移し、彼女が凡ての事を丁度同じ有樣に於て既に一度見たと云ふ "fausse reconnaissance"（誤れる再認識）に陷つたのである。壓迫の事實から吾人は彼女の自分の兄弟が死ぬであらうと云ふ當時の期待は願望空想 Wunschphantasie の特徵と相距る事遠からざる特徵を持つて居た事を推定して差支へないのであつて、さうなれば彼女は家庭の獨り兒として殘る譯であつたのである。彼女に後に起つた神經症に於て彼女は兩親を失なふのではないかと云ふ不安に強く惱んだ。分析はこの不安の背後に同じ內容の無意識的願望を例によつて發見する事が出來た。

私自身の一時的な "Déja vu" の經驗は同じ樣に其時の感情狀態から說明する事が出來た。「デジャーヴーは境遇をよくしたいと云ふ希望としてあの時此の時に私の心の中に作られ、かの無意識的であつて、未知なる空想を呼びさます一つの原因となるものであらう。」デジャーヴーのこの說明は今迄唯一人の觀察者によつてその價値を認められた。この書の第三版に多數の價値

ある知見補遺を提供して呉れたフェレンチー博士はこれに就いて次の樣に書いて寄越した。『私は私自身に於ても他人に於てもこの說明し難い「知つて居ると云ふ感じ」は無意識的空想に歸すべきものであり、この空想を本人が現實の狀態に於て無意識的に思ひ起させられるものと考へる。私の患者の一人に於てこの事が外見上には別の有樣に起り、而も實際は同じ樣に起つたものであつた。この感じは彼に於て非常に屢〻起つた。併しいつも前夜の忘れられた（壓迫された）夢の部分から來て居る事が明らかにされた。從つて"Déja vu"は單に幻想 Tagt äume からばかりでなく夜の夢からも來得るものであるやうに思はれる』と。

私はその後グラッセー Grasset が一九〇四年にこの現象に對して私の說明とは非常に近い說明を與へて居る事を知つた。

一九一三年に私は小論文に於て"Déja vu"に非常に近似の他の現象を記載した。*それは"Déja raconte"「既に物語つた」なる現象であつて、何かを既に話したと云ふ錯覺である。これは精神分析療法の最中に起る場合には特に興味深いものである。この場合には患者は自分の主觀が確かだと云ふ凡ての徵候を以て一定の記憶を既に夙くに話したと主張するのである。併し醫師にはその反對の事が確實であつて、通常患者に彼の「思ひ違ひ」である事を納得せしむる事が出來る。この面白い失錯作業の說明は多分彼がそれを話さうと云ふ衝動と企圖を持つて居たのだ

が、それを實行する事を怠つたのであつて、今や彼は前者の追想を以て後者の實行の代償として
しまつたのである。

＊精神分析作業中の誤れる再認識 „Déja raconte“ に就いて。(Internationale Zeitschr. f. Psychoanalyse, I, 1913. ――フロイド全集第六巻に包容されて居る)

フェレンチーの所謂想像的失錯行爲＊ vermeintliche Feh handlungen も亦似よりの實相――
――多分同じ機制を示すものである。人は何か――或る物體――を忘れ、置き忘れ、或は紛失した
ものと信ずる。而も彼が何もその様な事をしたのではなく、凡てがちやんとなつて居る事を確か
め得るのである。例へば或る婦人患者が置き忘れた「パラソール」を持つて行くんだと云つて醫
師の室に引返して來る。而も醫師は彼女が手に「パラソール」を持つて居るのを認めるのである。
卽ち斯くの如き失錯作業への衝動があり、これが實行の代償となるに十分であつた譯である。そ
の差別を除けばこの想像的失錯作業は眞の失錯作業と同列におくべきものであり、唯だ謂はば價
格の低廉なものなのである。

＊ Internationale Zeitschr. f. Psychoanalyse, III, 1915.

(E) 私が近頃哲學の素養ある一同僚に「名の忘却」の一二實例を分析と一緒に話した處、彼は
急いで答へた。『それは非常に結構だが自分には「名の忘却」は別の有様に起る』と。確かに吾

人はこの問題をさう簡單に片附けて了ふ事は出來ないのである。私は同僚が未だ嘗て「名の忘却」の際の分析の事を考へた事があるとは信じない。又彼も「名の忘却」が彼にどう云ふ風に別様に起るかを云ひ得なかつた。併し彼の言は多數の人々が第一に考へたがる問題に觸れて來るのである。それは此處に述べた失錯及び偶然行爲の分析が一般に適用され得るものであるか、それとも唯だ個々の場合にのみ適中するものであるか？　そして後者の場合が眞であるとすれば、これを別の有様に起つた現象の說明にも用ひ得るやうにする條件は何であるか？　と云ふ事である。この問題に答ふるに當つて私の經驗は私を窮地に置き去るのである。私は今迄示して來た樣な關係が稀なものであると考へる事をしない樣に人々に諫める事が出來る。何となれば私が私自身及び私の患者に於て試驗する度毎にこの關係は上述の實例に於ける如く確實に證明され、或は少なくともこの關係を推定してよい樣な根據が出て來たのである。凡ての場合に症候行爲の隱れた意味を見出す事が出來なくとも、それは驚くに足らない。何となれば分析に反對する內的抵抗の大きさが決定的の要素と認められるからである。吾人は自分自身或は患者に於て、凡ての夢を一々判斷する事は出來ないのである。學說が一般的に有效な事を確かめる爲には、吾人が隱されて居る關係の中に少しでも立ち入り得ればよいのである。夢を見た翌朝分析しようと試み、而もそれが出來なかつたのが、時に一週間或は一箇月も經て、その期間中に起つた現實の變化の結果、互に

抗爭して居た心的要素がその價値を減じた爲に、其夢の祕密が判る樣になる事は屢〻見られる。同じ事は失錯並に症候行爲の分析にも適用される。"Im Fass du ch Europa"(樽に入つて歐洲旅行)なる「讀み損ひ」の例は最初分析し難かつた症狀が壓迫された考へに對する實際の興味が緩むと共に分析が可能になる事實を吾人に示す「きつかけ」を與へたのである。羨むべき稱號を私の弟が私に先立つて受ける可能性のあつた間は、上記の「讀み損ひ」は反復された分析的努力に抵抗したのであるが、弟の拔擢が本當らしくない事が判つたら、私に急にその分析に導く道が明らかになつたのである。だから分析に抵抗する凡ての場合にそれが此處に發見されたとは別の機制によつて成立するものと主張する事は正しくないであらう。この假定に向つては消極的の證據以外に尙ほ別の證據を必要とするであらう。健康者が一般に失錯並に症候行爲に別の說明があるものと信じたがる傾向があるが、これは少しも實證力を持たないのである。これは勿論この祕密を作り、從つてその祕密を守る事に努力し、それの解明に對して抵抗する同じ心的「エネルギー」の表現である。

*此處に非常に興味ある經濟的の問題——卽ち心的經過が快感を求め不快感を廢除する事を目標とすると云ふ事實を顧慮する問題——が關聯して來るのである。不快動機によつて忘れられた名が如何にして代償的聯想の道程を逆つて得られる樣になるかと云ふ事は旣に經濟的の問題である。タウスクの立派な業績「報償による壓迫動機の價値低下」(Internationale Zeitschr. f. Psychoanalyse, I, 1913.)は好例に於て忘れられた名がこの名を快感を帶ぶる聯想——それは名

の再生の際に起る不快感に顚覆する――に引入れ得る場合には想ひ出し得る樣になる事を示して居る。

他方に於て吾人は壓迫された觀念や感情が症候行爲や失錯行爲への表現を自分等だけで獨立にかち得るものでないと云ふ事を看過してはならないのである。神經支配が斯く橫道にそれる事の技巧は神經支配とは無關係に存在せねばならぬ。卽ちこの技巧は意識的表現を得ようとする被壓迫的材料の企圖によつて好んで利用されるのである。「話し損ひ」の場合に關聯して如何なる構造及び官能關係がこの企圖に役立つかを決定しようとして哲學者及び言語學者が詳細なる研究をやつた。そして吾人は失錯並に症候行爲の條件に關して無意識的動機とこれを迎へる生理學的及び精神身體的關係とを區別するけれども、健康者の領域內に於てこの無意識的動機の樣に又はそれに代つて働き、右の如き關係を經て失錯行爲及び症候行爲を作り得る他の契機ありや否やの問題は未決定の儘におくべきである。この問題に答へる事は私の任務ではないのである。

且つ又失錯作業に對する精神分析的解釋と通常の解釋との間には可なり著しい距りがあるが、それを一層誇張する事は私の企圖する處ではない。却つて私はこの區別が大いにその鋭さを失ふ場合を指示したいのである。「話し損ひ」「書き損ひ」の最も簡單であつて目立たない實例――これらの場合には言葉が短縮され或は言葉や文字がぬかされる――には複雜な說明はないのである。精神分析の立場からは吾人は斯くの如き場合には企圖に何等かの障礙が現はれたものと主張せね

ばならぬ譯であるが、何處からこの障礙が來り、何を目的とするかは云ふ事が出來ないのである。この障礙はその存在を知らせる以外には何事をも仕出來さなかつたのである。斯くの如き場合に於ては吾人は音の上の價値關係及び手近にある心理學的聯想が失錯作業を起り易くする事――この事に就いては吾人は前に決して反駁はしなかつた――に有效となるを見るのである。併し「話し損ひ」或は「書き損ひ」の斯くの如き未完成の場合を一層明らかなる場合――それの研究が失錯作業の原因に就いての明らかな說明を生じた――に倣つて判斷する事は正しい科學的要求である。

(F) 「話し損ひ」に就いての說明以來、吾人は失錯作業が隱れた動機を有する事を證明する事に滿足し、精神分析の方法を用ひてこの動機の認識に吾人の道を開いて行つた。失錯作業に現はれる心的要素の一般性狀及び特性を吾人は今迄顧慮せずに置いた。兎も角も吾人は彼等を一層詳細に限定し、彼等の法則を吟味しようとはしなかつた。吾人は現在に於てもこの對象の根本的解決は試みないであらう。何となれば第一步を踏み出して後間もなく吾人はこの分野領域へは別方面から入る方が入り易い事が判つたからである。*吾人は此處に二三の問題を提示する事が出來るので、それを少なくとも此處に揭げ、その範圍を限定しようと思ふ。卽ち

(1) 失錯並に偶然行爲に現はれ來る觀念や感情は如何なる內容のものであり、如何なる根源から由來するものであらうか?

(2) 一つの觀念や感情がこれらの出來事を表現の方法として用ふる樣に强ひられ、又用ひ得る樣になる爲の條件如何？

(3) 失錯作業の種類とこれによつて表現される性質 Qualität との間に一定の關係が證明されるか何うか？

等である。

＊本書は、全然通俗的に書かれたものであり、例を集めて無意識的でありながら而かも有效なる精神過程が必然ある事の假定を承認せしむる事を目標として居る。從つてこの無意識界の性狀に關する凡ての理論的考慮を避けたのである。

私は最後の問に答ふるための一二の材料を提供する事から始めよう。「話し損ひ」の例を說明するに際し、吾人は企圖された話の內容を超越し、言語障礙の原因を企圖以外に求めねばならぬ必要を見出した。原因は一定數の場合に於ては手近にあり、話す人の意識に知られて居た。一見最も簡單であつて透明な實例では談話を妨げるものは同じ權利を以て響き、同じ觀念を現はす別の用語である。而もこの場合本人は何故に一方が隱れて他方が表面に現はれたかを云ひ得ないのである（メーリンゲル及びマイエルの汚染 Kontamination）第二群の場合では一方の考への屈服が一定の顧慮に原因するのである。而もこの顧慮は完全なる阻止を要する程强くはなく（zum Vorschwein gekomm n）、阻止された考へも明らかに意識的であつたのである。第三群に於て

初めて吾人は妨げる觀念が企圖された觀念と違つて居る事を無制限に主張する事が出來、又この場合は多分本質的の區別を立てる事が出來る樣である。妨げる考へは妨げられるものとは觀念聯合によつて結びつけられて居るか（内的矛盾による障礙）、或は邪魔する考へは邪魔されるものとは全然本質を異にし、邪魔される言葉は邪魔する觀念——これは屢〻無意識的である——とは奇妙な外的聯合によつて結ばれて居る。私が自分の精神分析から擧げた實例では全體の話が同時に活動的となり、而も全然無意識的な觀念の影響の下に立つて居た。そしてこの無意識的觀念は障礙そのものによつて暴露され（Klapperschlange …… Kleopatra）、或は無意識的觀念は意識的に企圖された話の個々の部分が互に邪魔し合ふ事を可能にする事によつて間接の影響を現はすのである（Asenatmen …… この場合には Hausenauerstrasse 佛蘭西婦人への追想が背後に存するのである。）言語障礙の出發點をなす被抑留又は無意識的觀念は雜多な根源のものである。從つて全體を見渡した處普遍性はどの方面にも認められないのである。

「讀み損ひ」及び「書き損ひ」の例を比較研究して見ても同じ結果に達するのである。個々の實例は「話し損ひ」の場合と同樣にそれ以上深い動機を認め得ない凝縮作業 Verdichtung arbeit によつて生ずる（例へば Apfe）併し斯くの如き凝縮——夢の作業に於ては規則的に起るものであり、覺醒時の考慮に於ては誤謬である——が起る爲には、特別の條件が滿たされねばならぬか

何うかと云ふ事は吾人の知らんと欲する處である。而もこれに關しては吾人は實例そのものからは何等の說明をも得ないのである。併し私は意識的注意の弛緩以外には斯くの如き條件がないと云ふ結論をこれから引出す事には反對である。何となれば私は他の方面から自働的作業が正確と確實さに於て勝れて居る事を知つてゐるからである。私は寧ろこの場合に於ては生物學に於て屢さうである樣に、正常的の狀態或は正常のものに近い狀態は硏究の對象としては病的狀態ほど都合のよくないものである事を强調したいのである。私はこれら輕度の障礙の說明の際に不明な事は重い障礙を明らかにする事によつて光明を受けるであらう事を期待するものである。

「讀み損ひ」及び「書き損ひ」に於ても遠くに存する複雜な動機を認めしめる樣な實例はない事はないのである。「樽に入つて歐洲旅行」"Im Fass durch Europa" は懸け離れ且つ本質の違つた觀念の影響によつて說明される「讀み損ひ」であり、この觀念は嫉妬心と功名心の壓迫された感情に發し Beförderung（昇進・運輸）なる言葉の手形（Wechsel）を本人の讀んだ無難な題目との連結の爲に用ひた。Burckhard の例では名そのものがこの手形（Wechsel）であつたのである。

言語の官能障礙は他の心的作業のそれよりも起り易く、從つて障礙を起させる力が左迄大きくなくても起る事は明らかである。

本來の意味に於ける忘却卽ち過去の經驗の忘却（第一章及び第二章に述べた固有名及び外國語の忘却は度忘れ（Entfallen）として、又企圖（Vorsätze）の忘却は怠慢（Unterlassen）としてこの嚴密な意味の忘却から區別する事が出來る）を檢する場合には吾人は別の地盤の上に立つのである。忘却の正常的過程の根本條件は未知である。* 吾人は人々が忘れたと考へる凡ての事が實際忘れられて居るものでないと思はねばならない。吾人のこの說明は「重要でない事は忘れ、重要な事は記憶に保存される」と云ふ法則を破つて吾人に奇異の感を呼び起す場合にのみ關係するのである。吾人に特別の說明を要求する樣に見える忘却の實例を分析して見ると、苦痛感を呼び起す或事を想起する事の不快が、忘却の動機となつて居る事を明らかにするのである。吾人はこの動機は精神生活に全般的に現はれようとするのであるが、反對に作用する他の力によつて、規則正しく現はれる事が妨げられるものであると云ふ推論に到達するのである。苦しい印象を想起する事を喜ばぬ範圍と意義とは最も愼重な心理學的研究をなす價値あるものであらう。又如何なる特別條件が一般に努力されてゐるこの忘却を個々の場合だけに可能にするかの問題はこの廣汎な關係からは解決し得ないのである。

*本來の忘却の機制に就ては私は多分次の樣に云ふ事が出來る。記憶の材料は一般に二つの影響――凝縮と歪み――を受けるものである。歪みは精神生活を支配してゐる諸傾向の仕事であり、特に――凝縮作用に對して抵抗の大なる――強

い感情を帶びた記憶の痕跡に向つて作用するものである。どうでもよくなつた樣な痕跡は無抵抗で凝縮過程に陷るのである。併し吾人は歪みの傾向は現はれようと思ふ處で出られなかつた爲に、どうでもよくなつた材料を喰ひ物にするのを認める事が出來る。この凝縮と歪みの過程は永い間續き、その間凡ての新らしい經驗が記憶の內容を變形させる樣に作用するものであるから、吾人は記憶を不確實不明瞭にするものは「時」であると考へるのである。凡そ忘却に際して「時」の直接の官能を云爲する事は多分出來ないであらう――壓迫された記憶の痕跡は最も永い期間を通じて少しの變化も受けなかつた事を確かめる事が出來る。元來無意識界には時間はないものである。心的固定の最も重要であり、且つ最も不思議な特性は一面に於て凡ての印象がそれが領取された儘の有樣に保存される事及び尙ほその上にその後の發展につれて取つた凡ての形で保存される事である。この事情は他の領域に見る現象との比較によつては說明する事の出來ない事である。だから理論上記憶內容の以前の狀態はそれらの要素が凡て元來の關係を夙くに新らしい關係と置き換へた場合でも再び記憶に囘復せしむる事が出來るであらう。

企圖の忘却の場合には今一つ別の要素が前景に現はれて來る。想起する事が不快な事を壓迫する際に起るものと唯だ想像されて居た精神軋轢はこの場合には把握し得る樣になる。そして吾人は實例の分析の際にいつも企圖に反對しながら而もこれを廢めさせる事の出來ない反對意志(Gegenwille)を認めるのである。前に述べた失錯作業に於けると同樣に吾人はこの場合にも二つの型の心的過程を認める。反對意志は或は直接に企圖に向つて反抗するか(多少重要なる企圖の場合)、或は企圖そのものとは無關係であつて、唯だ外聯合によつてこれと關係を作るか(あまり重要でない企圖の場合)である。

同じ精神軋轢は「掴み損ひ」の現象をも支配する。行爲の障礙となつて現はれる衝動は屡〻反對衝動(Gegenimpuls)である。併し一層屡〻現はれるものは全然未知の衝動であり、この衝動は行爲の實行に際して唯だその機會を利用し行爲の障礙となつて現はれるのである。障礙が内的の矛盾によつて起る場合は一層意義重大であつて又一層重要なる實行に關係するのである。

偶然行爲及び症候行爲の場合には内的の精神軋轢は後景に退くのである。意識界から輕視され或は全然看過されるこれら運動性表現は多數の無意識的或は被抑留性の感情を現はすに役立つのである。彼等は大抵空想或は願望を象徴的に現はすのである。

失錯行爲となつて現はれる觀念や感情が如何なる根源のものであるかと云ふ第一の問題に對しては吾人は次の如く云ふ事が出來る。一定數の場合に於ては邪魔をする觀念が精神生活の被壓迫的感情から由來する事がたやすく證明出來る。利己的・嫉妬的・敵對的の感情や衝動――それを道德的教育の壓力が重みで押しつけて居る――は健康者に於ても彼等の否定し難い有様に於て存在し、而も高尙な心的動因の承認を受け得ないこれらの力を一定の有様に於て表現する爲に、失錯作業の道が利用される事は稀な事ではないのである。これら失錯行爲及び偶然行爲を放任し、引續きその存在を許す事は、大部分不道德な事の愉快な默認に相當するのである。これらの被壓迫的感情の中では種々の性的傾向は大なる役目を演じて居るのである。私の實例に於ては分析に

よつて發見された觀念の中に性的傾向が非常に稀にしか現はれて居ないが、それは偶然の事である。私が主として私自身の精神生活からの實例を分析にかけたから、選擇は最初から偏頗であり、性的事象の除外が目的とされたのであつた。他の場合には邪魔する觀念は非常に無難な異議及び遠慮から出た樣に見えた。

次に吾人は第二の問題卽ち一つの觀念が完全な形で現はれず、謂はば寄生蟲的な形で他の觀念の變形又は障礙となつて現はれねばならぬのは如何なる心理學的條件に基くかと云ふ事に答へねばならぬ。失錯行爲の最も顯著な實例に就いて見ると、これらの條件は意識され得る能力（Bewusstseinsfähigkeit）への關係卽ち被壓迫的材料（Verdrängtes）に於て多少明瞭に見られる特徴に求むべきは明らかである。併し實例の多數を研究して見るとこの特徴は多數の判然しない要素から成つて居る事が判るのである。或事が時間潰しになると云ふので之を看過する傾向——或は當該觀念が實際企圖された問題に關係がないと云ふ考へ方——之等は一定の觀念の抑壓の動機として反逆的感情に對する道德的判決及び絕對的に無意識的な觀念列から出て來るものと同じ役割を演ずる樣に見えるのである。そしてこの抑壓された觀念は他の觀念の障礙を奇貨として現はれる樣に餘儀なくされるのである。失錯及び偶然行爲の條件の一般的性質の認識はこの方途に於ては得られないのである。但しこの研究は唯一つの意義ある事實を吾人に與へるのである。卽

ち失錯行爲の動機が無難なものであればある程、又失錯行爲に表現される觀念が不快の度少なく、從つて意識不能の程度が輕い程、吾人は注意をそれに向ける事によつてこの現象の分析を一層容易になし得るのである。「話し損ひ」の最も輕い場合は卽座に認められ、自發的に訂正されるのである。實際に壓迫された感情に動機づけられてゐる場合には、その解決には注意深い分析を要するのであつて、この分析は時には困難に遭遇し或は失敗に終る事があるのである。この最後のものの研究の結果から失錯行爲及び偶然行爲の心理的條件の滿足な說明は別の方法に依り又別の方面からして得られるものであると考へる事は多分正當な事であらう。だから私は寛大なる讀者が以上の論述はこの題目を可なり人工的に一層廣汎な關係から切り出した切斷面の示說であると見て吳れる事を希望する。

(G)　一二言を費してこの廣汎な關係への方向を指示しよう。吾人が精神分析法を用ひて知り得た失錯行爲並に偶然行爲の機制は主要な點に於て私の夢判斷に關する著述の中で、夢の作業の章*に於て說いた夢の形成の機制と一致してゐる。凝縮及び妥協形成(汚染)は此處にも見られるのである。無意識的觀念が異常な徑路をへて外聯合によつて他の觀念の變形として表現される事情も同樣である。夢の內容の不合理、荒唐無稽及び誤謬――これらの爲に夢は殆ど心的作業の生產物とは認められて居ない――は吾人の日常生活に於ける普通一般の誤りと同じやうに生ずるので

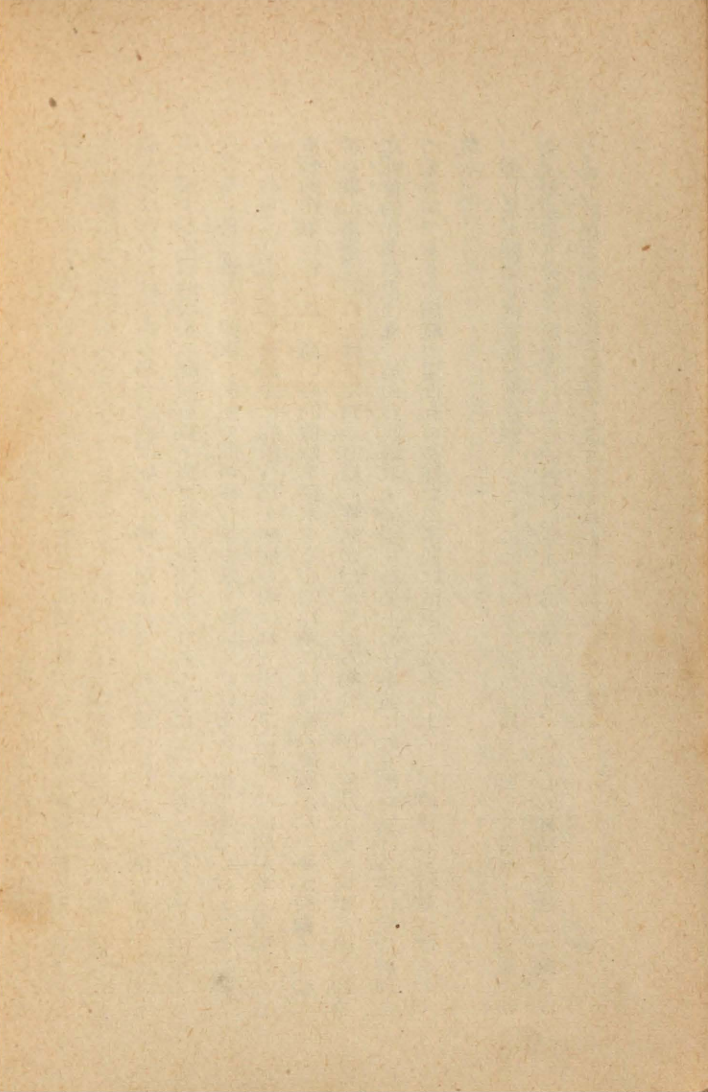
ある。唯だ夢は存在する材料を一層自由に用ふるのである。兩方の場合共に官能が正しくない樣な外觀を呈するのは二つ或はそれ以上の正しい作業が互に特異な干渉をなす事によつて説明されるのである。斯く兩方の現象が符合一致する事から一つの重要な結論を引出す事が出來る。即ち吾人が夢の内容に於て最も顯著に認め得るこの特異な作業を決して精神生活の睡眠狀態にのみ歸し得ないのである。蓋し吾人は失錯行爲に於て覺醒時の生活にそれが有效である事を示す多數の證據を持つて居るからである。この同じ關係は又精神活動の深刻なる崩壞、官能の病的狀態がなくてはこの異常な又奇異なものに見える心的過程が起り得ないものと考へる事を吾人に禁ずるのである。

＊「夢判斷」三六二頁（第七版四四九頁）參照。

失錯作業及び夢の影像を生ぜしめるこの不思議な精神作業の正しい判斷は、吾人が精神神經症の症狀特に「ヒステリー」及び强迫性神經症の心理的形成がこの同じ精神作業の主なる特徴の凡てを示す事を知る事によつて初めて可能となるのである。從つて吾人の研究の續行はこの點から始めらるべきであらう。併し吾人に向つては失錯行爲、偶然行爲並に症候行爲をこの最後の類似點から眺める事が特に興味ある事である。吾人がこれらの作業を精神神經症の製産物、神經症的症狀と同列に置くならば『「神經質なる正常狀態」と「異常狀態」との間の境界は漸進的のもの

である』云々及び「吾人は皆多少は神經質である」云々等屡々繰返される二つの主張に意味と根據が與へられるのである。吾人は凡ての醫療上の經驗に構はずこの様な輕微な神經質の種々の型――神經症の不完全型（formes frustes）――を作り上げる事が出來るのである。卽ち僅少な症狀が現はれるだけである場合、或は症狀が稀に現はれるもの、或は現はれても劇しからざる場合等、要するに病的現象の輕減を數・强さ及び時間的のひろがりによつて考へて行く事が出來るのである。併し吾人は健康と病症の間の移行型中最も多いものはどんな型であるかは云ひ當て得ないであらう。主として失錯並に症候行爲を病症の現はれとする型に於ては症狀が最も重要ならざる心的作業に移され、高い心的價値を要求する心的作業には何等の障礙がない事が特徴となつて居る事がある。これとは正反對の有様に症狀が出來て居る場合、卽ち症狀が最も重要な個人的並に社會的作業に現はれ、爲に食餌攝取・性交・職業上の仕事並に社交等を妨げる事は重症神經症に見る事であり、病症の現はれの多様なる事或は活潑なる事以上にこの神經症を特徴づけるのである。

　併し最も輕症並に重症なる症例――これには失錯並に偶然行爲も干與して居る――に共通の特**徴は現象が不完全に壓迫された心的材料に還元し得る事にあり、この心的材料は意識から遠ざけられては居るが、表現の能力の凡てを奪はれては居ないのである。**

〔終〕

（下津製本）

昭和十六年三月一日印刷
昭和十六年三月五日發行

日常生活に於ける精神病理 ★★★

定價八十錢 ㊫

譯者　丸井清泰（まるゐきよやす）

發行者　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

精興社印刷

岩波文庫
2663—2666

發行所
東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地
岩波書店
電話〇一八七・〇一八八番
九段〇一八九・〇一八〇番
一〇二二番（小賣部專用）
振替口座東京二六二四〇番

小店出版物中、萬一不完全な品（落丁・亂丁等）がありました節は、御手數乍ら洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します、たとへ御讀後でありましても早速お取替致します

讀書子に寄す

――岩波文庫發刊に際して――

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月